武神装甲インフィニット・ストラトス

宏明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
武神装甲インフィニット・ストラトス

【Ｎコード】
Ｎ７２４５Ｑ

【作者名】
宏明

【あらすじ】
史上最強の兵器インフィニットストラトス。略して『ＩＳ』女性にしか扱えないはずだったのに二人の少年が起動させてしまった。これは二人の少年のハーレム物語である（違っ）※弓弦イズル様作・ＩＳの二次創作物です。

主人公、オリジナルＩＳ設定（前書き）

オリジナルＩＳが登場した時内容が追加されます。

主人公、オリジナルＩＳ設定

主人公：西本宏範
愛称はひろ

性別：男

赤ん坊の時祖父に拾われ養子となる。祖父は小学卒業前に死去。
織斑姉弟とは１０年の付き合い。

趣味：鍛練、お菓子作り、写真撮影、機械弄り、漫画アニメ、ゲーム（特にロボットや特撮関係が好き）

専用ＩＳ：ダイナミック・ゼネラル・ガーディアン（長いので『ダイゼンガー』

基本色は紺、装甲の見た目はまんまスパロボＯＧｓのダイゼンガー

ダイレクト・モーション・リンクシステム（人機一体）ひろの反射神経を反映することで、より操作しやすいようになっている。ただし、相当の技量が必要でダメージを他のＩＳより軽減出来ない。ワン・オフ・アビリティではない。

第四世代型にしては珍しくシールドエネルギーの消費が少ない（主

に瞬時加速使用時しか消費しないため）
待機状態は刀の柄の形をしたキーホルダー（スパロボＯＧのアニメでゼンガーがコックピットで持っていたあれ）

専用武器：刀型接近ブレード（獅子王）

見た目はまんまシシオウブレード。柄部分が伸び、鍔が左右に開くと液体金属が両刀、片刃、ククリ刀に形成される（斬艦刀モード）
なお、エネルギーの消費はしない。刀身にＢＴコーティングされてるのでビーム系を斬ったり弾くことが可能。

ダイゼンガー・第二形態

ヴァルシオン戦で負けた後、セカンド・シフトした姿。首から下が装甲に覆われただけなので見た目に変化はほとんどなし。ただし、装甲はそれなりに硬い。

内蔵武器――ダイナミック・ナックル

腕に小型ブースターが付いており、飛ばして殴る。（いわゆるロケットパンチ）

ゼネラル・ブラスター

両肩辺りにある二つの非固定浮遊部位から荷電粒子砲を放つ。

ガーディアン・ソード

腰部装甲に収刀されている小太刀。刀身がＧのような形状をしている。

これらは元々一次移行で付くはずだったがなぜかなされず漸く復活した。

特殊兵器――アウセンザイター

自立機動人型兵器でカテゴリー的にはブルー・ティアーズのビットと同じ。（ガンダムＸのＧＸビットみたいなもの）

超ＡＩが組み込まれているので大雑把な命令でも状況を自己判断し、単機で戦闘も可能。

ランツェ・カノーネと呼ばれる長銃身の大出力ビームキャノンを２挺持ち、優れた砲撃戦闘能力を発揮する。

プフェールト・モードという馬型機動兵器に変形し、その背にひろを乗せ、強力なコンビネーション攻撃を繰り出すことが出来る。また、このモードは超高速機動が出来ないダイゼンガーの足でもある。ひろはなぜかトロンベと呼ぶ。

備考――ダイゼンガーのコアはＩＳの原初ともいえるＮｏ．０００。二個分のコアを使って動いていたが、セカンド・シフトした際に二つへと分裂、片方はアウセンザイターの物となった。

第三世代型ＩＳ『ヴァルシオーネ』

フェイトの専用機で見た目はスパロボのヴァルシオーネと同じ（髪と瞳の色が違うだけ）

その能力は他国の第三世代型を軽く凌駕し、製作したアリシア曰く『三・五世代型らしい。待機状態は△型のペンダント

専用武装：クロスマッシャー

手のひらから青と赤のビームを螺旋を描くように撃ち出し相手を貫く。

特殊武装：サイコブラスター

元は重力波だが詳細は不明。味方識別機能がある。

後付け武装：ハイパービームキャノン、ディバインアーム、９５０マシンガン、リープスラッシャー。これからも色々と出る予定。

ちなみにダイゼンガーは元々テスラ・ライヒ研究所で作られたが、誰にも扱えなかったのでお蔵入りし、束がごうだげふんげふん……譲り受け、改造してひろの物となった。

第三世代型『ヴァルシオン』

ヴァルシオーネの姉妹機で一号機に当たる。

見た目はスパロボＯＧｓのヴァルシオンまんま。

全身を厚い装甲で覆っているので全長３メートルもあり、更に歪曲フィールドと呼ばれるバリアによってかなり硬い。

主武装――ディバインアーム

巨大な剣。常に右手か左手に持っている。

クロスマッシャー

両手首にある発射口から赤と青のビームを螺旋状に撃ち、対象を貫く。

エナジー・ドレイン

見た目はミサイルだが、ひとたび当たればエネルギー主体のＩＳはエネルギーを奪われ一発でやられてしまう。

特殊兵器――メガグラビトンウェーブ

重力を操り相手を引き寄せ拡散砲を当てる。重力波を凝縮させて撃つことも可能（本編未使用）

備考――厚い装甲と強固なフィールド、圧倒的なパワーのため、スピードは極端に遅い。

何者かに盗まれ、今回ゲイム・システムを組み込まれた。

※ゲイム・システム――機械から強制的に操縦者へ干渉し、反射神経や反応速度などを上げる。また、闘争本能を無理矢理刺激するので調整されてない者が使えば精神が破壊されてしまう。
今回はラトゥーニの洗脳に使われていた。

プロローグ（前書き）

これはＩＳ（インフィニットストラトス）の二次創作です。
原作以外認めない！という方はブラウザバックして下さい。

プロローグ

インフィニットストラトス。略してＩＳ。

宇宙空間で活動出来る特殊なマルチフォームスーツとして開発されたがその性能は従来の兵器を軽く凌駕し、またたくまに世界へ広まった。

だがそんな兵器にもある欠点がある。それは……

『女性にしか扱えない』

そのおかげで男女の関係は逆転。女性が地球上で最も偉い存在となってしまった。

しかし、いつだって世界にはイレギュラーが存在する。

なんと男でありながらＩＳを起動させた者達が現われたのだ。

僅か１５歳の少年二人がＩＳ専門の学園に来たところから物語が始まる。

プロローグ（後書き）

どうも宏明です

私もアニメを見てはまったので気分転換に書き始めました。

他の作品共々よろしくお願いします。

クラスメイトは女の子がいっぱい（前書き）

※設定

原作やアニメを基準に進めます。

主人公は魔法少女リリカルなのは　パラダイムシフトのひろと同名。

もしもひろが赤ん坊の時跳ばされたのがＩＳの世界だったらというＩＦストーリー。

専用機はタイトル通りダイナミック・ゼネラル・ガーディアン（ダイゼンガー）

ヒロインはセシリア、シャルロット、ラウラの予定。

クラスメイトは女の子がいっぱい

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲ（ショートホームルーム）を始めます」

黒板の前でニッコリと微笑む女性は山田真耶（やまだまや）先生。

身長は低め、しかも服のサイズがあってないのかだぼっとしており尚更小さく見える。あと黒縁の眼鏡も大きいからずり落ちそうだ。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……」

山田先生が元気良く言うが教室全体は緊張感に包まれていて誰も反応してない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。え～っと、出席番号順で」

少しうろたえる先生に何かしら反応をしてあげたいが謎の緊張感をぶち殺すものを持ってないので諦めた。

謎の緊張感……それは俺と山田先生の前に座る男子生徒に集まる女子生徒達の視線。

何故たった二人だけの表現か。簡単だ。俺と男子生徒以外のクラスメイトが全員女子だからだ。

俺もあいつも１５歳になり今日高校生となった。新しい出逢いの始まり、その初日。

それは大いに結構。とても嬉しい。

だがしかし、問題は男がたった二人と言うことだ。

かなりきついが幸い視線の八割はもう一人の男子生徒に集まってるからこっちは幾分まし。時折「彼に比べてちょっと地味ねぇ」と聴こえ、俺のガラスなハートは砕ける。

ちっくしょうあのリア充め！　氏ね！

「織斑一夏くんっ」

「はっ、はい！」

ぼけっとしてたのだろう。いきなり大声で呼ばれた一夏の声が裏返る。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？　怒ってるかな？　ゴメンね、ゴメンね！　でも自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからゴメンね、ご、ゴメンね？　自己紹介してくれるかな？　だ、ダメかな？」

山田先生はペコペコと謝る。少し引きつった表情をした一夏が窓側の席に居る女子を見るが顔を反らされ今度は俺の方に助けてと視線を送ってきた。

（とりあえず、自己紹介しろ）

とサインを出すと伝わったのか一夏は頷く。

「えー……えっと、織斑（おりむら）一夏（いちか）です。よろしくお願いします」

行儀良くお辞儀したが一夏はたじろいだ。何人かの女子が「これで終わりじゃないよね？」と無言の圧力を掛ける。

またまたこちらに視線を向けたので（ガ・ン・バ・レ　オ・マ・エ・ハデ・キ・ル・コ・ダ）とモールス信号を送ってまる投げだ。

紹介が遅れた。俺は西本（にしもと）宏範（ひろのり）

何？　どこかでみた名前？　気にするな。

何故俺と幼なじみの織斑一夏がここにいるか説明すると非常に面倒いのでざっくりとしておく。

藍越（あいえつ）学園の受験会場に来た俺と一夏は間違えてＩＳ学園の試験会場

に入り女性にしか動かせないＩＳ（インフィニット・ストラトス）を動かしてしまってここに来た（強制的に入学させられたとも言う）

因みにＩＳとは……正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。

しかし『制作者』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、スペックを持てあまし『兵器』に変わったが各国の思想により『スポーツ』にと落ち着いた。所謂飛行パワードスーツだ。

しかしこの『ＩＳ』は女性にしか使えないという欠陥があり男である俺らには何の意味もなさない……はずだった。

興味本位で触れた瞬間膨大な情報が脳に流れ込み、まるで初めっから知ってるように理解し結果、世界に二人だけ『ＩＳ』を使える男が誕生した。

で、意識をＩＳ学園の教室に戻そう。

いつの間にか黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているがけして過肉厚ではないボディライン。狼を思わせる鋭い吊り目をした女性が教室におり、一夏を睨んでいる。

「以上です」

一夏は空気破壊の天才だ。

がたたっと思わずずっこける女子が数名おり、首を傾げる一夏。

ため息を吐いた男よりも漢らしい女性が彼の背後に忍び寄り、黒くて薄いしかし硬い本を振りかぶる。

パァンッ！

「いっ――――！？」

とてもいい音が鳴り響き一夏は叩かれた頭を手で触れながら後ろを向く。

「げえっ、関羽！？」

パァンッ！

二度めの音が鳴り響く。あれ、とっても痛いんだよねぇ。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

トーン低めの声。

一夏は鳩が豆鉄砲を食らったような表情をして呆ける。

彼女は織斑千冬。一夏の実姉で俺にとっては憧れの存在でありいつ

か超えるべき人。
職業不明で月一、二回ほどしか家に帰って来ない人が何故ここに？

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「あぁ、山田先生。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

どうやら先生になっていたらしい。
山田先生は泣きそうな表情から一変して千冬さんに熱い視線を送りはにかむ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

流石千冬さん。めちゃくちゃ暴力宣言だ。
しかし、教室には恐怖に怯えたり困惑の騒めきはなく、黄色い声援が響いた。

「きゃ――！　千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！　南半球から！」

別に全世界からこの学園に未来の操縦者が来るのだからどこだろうとどうでもいいが。

きゃあきゃあと騒ぐ女子達を千冬さんはかなりうっとうしそうな顔で見ている。

「……全く、毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。呆れを通りすぎて感心させられる。それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

クラスどころか学園全員がその馬鹿者です。と教えてあげたいが出席簿チョップを食らいたくないので言わない。

「きゃあああっ！　お姉様！　もっと叱って！　罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように調×して～！」

元気ですねぇ～。担任が千冬さんだったことにビックリしたが再び千冬さんの視線が鋭くなり口を開く。

「で？　挨拶も満足にできんのか、お前は」

千冬さんは一夏に対してとてつもなく厳しい。

「いや、千冬姉、俺は――」

パァンッ！　本日三度目。一夏の頭は出席簿の形に凹んでいるに違いない。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

だが一夏は地雷を踏んずけてしまった。

「え……？　織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で『ＩＳ』が使えるってのもそれが関係して……」

「いいなぁっ。代わってほしいなぁっ」

最後のはスルー。更に俺の方にも視線が集まる。「あなたも千冬様の弟？」と。

違うとジェスチャーすると落胆する人が続出。何これ？　苛め？

「ついでだ。西本も自己紹介しろ」

「へっ？　あの、俺の番はまだ先のはずですが」

出席番号順だからまだ『か』～『な』ありますよ？

「男では二番目だ。さっさとしろ」

千冬さんの睨みは怖いです。

深呼吸してから営業スマイルをする。

「西本宏範です。織斑一夏とは幼なじみで、彼共々至らないところが沢山あると思いますが一年間よろしくお願いします」

我ながらいい感じだ。お辞儀終えると拍手喝采。
特に山田先生が「感動しました！」と感涙しながら拍手している。
クラスメイトの九割が面白がって拍手。一夏も混ざっていたから殺意湧いた。
千冬さんは気付かれないよう笑いを堪えている。

（苛めだあああああっ！）

俺の高校デビューは何とも悲惨なものだろうか。一夏、てめえはぶっ飛ばす！　と心に決めた。

クラスメイトは女の子がいっぱい（後書き）

どうも宏明です

第一話どうだったでしょうか？

感想待ってます。

波乱の始まり（前書き）

どうも、宏明です。

少しかかりましたが第二話になります。長いかもしれませんがお楽しみください。

波乱の始まり

ＩＳ学園はＩＳ関連について徹底的に教育をするため、入学式当日から普通に授業がある。

「あー……」

現在一時間目のＩＳ基礎理論授業が終わり休み時間。
俺は一夏の席に寄ってため息を吐く。

「きついな、これは」

「全くだ。動物園のパンダじゃあるまいし」

クラスメイト以外の女子生徒達が廊下にもうじゃうじゃと現れ俺達を見ている。

目が合うと逸らされ「でも話し掛けて！」という雰囲気がほぼ全員から放たれていた。

おそらく初めて日本に来たパンダも今の俺達と同じ心境だったんだな、と思う。

「……ちょっといいか」

少しでも視線を遮断しようとしたら長い黒髪を白いリボンでポニーテールにした女子生徒が一夏に話し掛けた。

「え……箒？」

一夏を鋭く睨んでいる彼女は篠ノ之箒（しののの ほうき）

俺と一夏が小学四年生までよく遊んだ幼なじみだ。

何で小四までだと？　簡単だ。彼女はある出来事により転校したからな。約六年ぶりの再会となるが髪型と少し吊り目なところは昔と変わらないからすぐに分かった。

それは今睨まれている一夏も同様だ。

「廊下でいいか？」

箒は一夏の了承を確認することなくすたすたと歩き出す。

つまり、『つべこべ言わず付いてこい』ということ。

「早くしろ。あとお前も来い」

「へいへい」

俺にもひと睨み。ついでとは酷いぜ。

箒が廊下へ行くとそこに集まっていた女子がざあっと道を空け、さながらモーゼの海渡りだ。

「……」

廊下に出た俺達の周りは女子生徒達が囲んでいるため落ち着いての対話は絶望的だな。

「そういえば」

「何だ？」

痺れを切らした一夏が話しを切り出す。

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

箒は口をへの字にして顔を赤らめた。

おそらく一夏は怒ったと思っているがそれは違う。彼女は照れているんだ。箒は昔から一夏に惚れている。

しかし、箒は素直になれないから一夏に辛く当たってしまいその恋心はキング・オブ・朴念人には届かない。

空気を読んで話し終わるまで待っていると授業開始のベルが鳴ってしまう。

教室に戻る箒の隣に並び一夏には聴こえないよう話す。

「久しぶり。相変わらずみたいだな」

「ふんっ、一夏が相変わらず私の気持ちに気付かないのが悪い」

箒は後ろの一夏をギロリと睨む。
マ○オさんのように萎縮する一夏。

「ひろは前よりも逞しくなったな。一夏も見習えばいいのだが」

「そうか？　今のままでもいいと思うけど」

「あいつは軟弱だ。男子たる者、逞しくなければな」

そう言いつつ箒は一夏に髪のことで分かってもらえたことが嬉しい

らしく弄っていた。

「まぁ、こうやって再会したんだ。また上手くいくよう応援するから頑張れよ、箒」

「う、うむ」

教室に着いて席に着くと未だに戻ってなかった一夏は織斑家、伝家の宝刀『出席簿』を食らっていた。

「――であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せられ――」

山田先生がすらすらと教科書を読んでいく。

入学前に渡された電話帳みたいな参考書を読んだおかげでギリギリだが分かる。

一夏は全くわからないのか大量の脂汗をだらだらと流していた。

因みに今の部分を簡単に説明すると、ＩＳは危険な玩具でもあるのでルールとマナーを守らないと銃殺刑です（はーと）って感じ。

ちらりと隣の女子を見たが彼女は時々頷きノートを取る。

俺と一夏は入学直前になって初めてＩＳについて勉強を始めたが、この学園に入る生徒達は事前に学習をしてるから余裕なのだ。

近年では小学からＩＳの授業を取り入れようとしてるらしい。ただし、女子専用学校のみ。

「あ、あの……」

無意識に見つめていたのかその視線に気付かれ彼女は驚いたような緊張しているようなその上なにか期待しているような、引きつった作り笑顔で聞いてきた。

「あ～その、何でもないんだ。ゴメン」

「そ、そうなんだ。あの……分からないところがあったら聞いてね？　私でよければ力になるから」

おお……！　今まで俺、こんなに親切にされたの初めてだ。この前なんか街中で貴族っぽい女子が「お飲み物を買ってきなさいな」と命令してきたので「あぁ？　三枚におろすぞゴラァ！」とガン飛ばしたんだ。

そしたらその女子は腰を抜かした。

「ありがとう。気持ちだけでも嬉しいよ」

お礼を言うと彼女の顔が瞬時にボッと赤くなりノート記入に戻る。

はて？　俺は一夏と違って平凡なんだが……もしかして男子に免疫が少ないから彼女達には少しイケメンに見えるのかな？

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

一夏が山田先生に質問されて困りだす。教科書に視線を落とし……ガクリとした。わからないよねぇ。

「わからないところがあったら言ってね。なにせ私は先生ですから」

えっへんという感じに胸を張る山田先生。意外にも頼れる人なのかも。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

夢とか希望とかいろいろと満ちあふれた返事と瞳。

「ほとんどわかりません」

しかし、一夏が素直に自分の弱さを吐露した瞬間山田先生の顔が困り度百パーセントで引きつる。

「え……。ぜ、全部、ですか……？」

そして涙目の山田先生は俺を見た。

「西本くんは、どうですか？」

なんですかその捨てられた仔犬のような懇願は。

アイフル～に行きたくなるじゃないですか。

「す、少しは理解してます」

「少し……なんですか」

一夏ほどではないにしろ落胆している。

「あぁ！　でも山田先生の授業、とってもわかりやすいから今教えてもらった範囲は大丈夫です！」

「うう、よかったぁ。私……ちゃんと先生できているんですねぇ」

めちゃくちゃ喜んでいるけど山田先生って新人なのかな？

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

教室の端で控えていた千冬さんが質問。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パァンッ！

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

もう数えるのも面倒だ、一夏の頭が凹む。

「西本、この馬鹿に一週間で覚えさせろ」

どんだけ無茶ぶり！

「いや、千冬さ」

バシーン！

「織斑先生だ。やれ」

「……はい。全身全霊で任務を遂行します」

久しぶりの制裁はめちゃくちゃ痛かった。

「ちょっと、よろしくて？」

「は？」

二時間目の休み時間、女子達の視線を忘れるために一夏とあの分厚い参考書を読んでいるといきなり声をかけられた。

話しかけてきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女の子。白人特有の

透き通ったブルーの瞳が、ややつり上がった状態で俺達を見ている。
わずかにロールがかった髪はいかにも高貴なオーラを出していて、
俺はその手の女が嫌いだ。

「……それでな一夏、ここは」

無視することにして勉強を再開させる。

「無視しないでくださる！　このわたくしに声をかけられるのはとても光栄なのよ。あなた、正気ですの？」

っち、ＩＳが使える女は＝偉いという構図のせいで目の前の女は完全に俺達を見下していた。

力を粗暴っていうなら、目の前の女のような態度はただの暴力で下品だ。

「お前がどこの誰かは知らないが自慢話なら余所でやれ。俺達はお前にかまっているほど暇じゃない」

俺の対応にかなり気に入らなかったのだろう、吊り目を細めて俺を睨む。

「わたくしを知らない？　このセシリア・オルコットを？　イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「あ、質問いいか？」

一夏が少し落ち着けよとアイコンタクトをこちらに送りながら質問した。

「ふん。下々のものの要求に答えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

がたたっ。俺と聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっこけた。

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

セシリアはすごい剣幕だった。マンガだったら血管マークが三つは

ありそう。

「おう。知らん」

わからないことを素直に言うことは悪くないがさすがの俺もため息を吐く。

「一般常識くらいは身につけておけ、馬鹿者」

チョップを叩き込む。

「いってっ！　ひろ、お前だんだん千冬姉に似てきてないか？」

「気のせいだろ。いいか、一夏。代表候補生というのは国家代表ＩＳ操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことだ。単語から想像したらわかるだろ？」

「そういわれればそうだ」

ぽんっと手を叩き納得する。去年頑張った勉強漬けの日々は無駄だったのかな？

「そう！　エリートなのですわ！」

先程ぶつぶつと頭を抱えていたセシリアが復活。

びしっと人差し指がなぜか俺に向けられ鼻に当たりそうに近い。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくするだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「わーラッキーだ。末代まで語り継ごう（棒読み）」

めちゃくちゃ馬鹿にした態度にセシリアの顔が鬼のような形相となり、ギリギリで怒りを飲み込んで耐える。

「まあ、わたくしは優秀ですから、あなた方のような人間にも優しくしてあげますわよ」

その態度は優しさとは言わない。偽善だ。

「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一ってところがやたらと強調されてる。

「入試って、あれか？　ＩＳを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？　俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

一夏の発言にセシリアは相当ショックなのか間抜けな声を出して目を驚きに見開き、クラスメイト達も騒めきだす。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

ピシッ。と何か氷にヒビが走ったような音が聞こえた。

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」

「あなた！　あなたも教官を倒したって言うの！？」

急にこちらを向いて俺を睨む。一夏に噛み付けよなぁ。

入試の時に記憶をさかのぼってみる。

確か教官がいきなり突っ込んできて思わず背負い投げげで投げ飛ばしたな。

自分でもビックリするほど綺麗に決まりその教官は目を回した。

「倒したな」

俺の答えに信じられないと驚く一同。

キーンコーンカーンコーン。

セシリアがこちらに食ってかかろうとした瞬間チャイムが鳴る。

「っ……！　またあとで来ますわ！　逃げないことね！　よくって！？」

ゴメンこうむりたいが面倒なのでうなずいておく。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

三時間目は千冬さんの授業。かなり重要なのか山田先生までノートを取る準備をしている。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、思い出したように千冬さんが言う。

クラス委員長みたいなものだ。誰かに押し付ければいいな。

「クラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。
昔からこういうものは誰もやりたがらないので立候補はない。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

そうなれば誰かが生け贄に選ばれることになり、案の定一夏に白羽の矢がたった。

「私もそれが良いと思います！」

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

一夏は立ち上がり女子達の注目を集める。彼女達の視線には「彼ならきっとなんとかしてくれる」とか、「面白そうだし」という無責任かつ勝手な期待が込められていた。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないなら無投票当選だぞ」

「ちょっ、ちょっと待った！　俺はそんなのやらな――」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦された者に拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

遮るように言われてたじろぐ一夏は俺を見る。

「な、なら俺はひろを……西本を推薦します！」

苦しまぎれの反抗にクラスメイト達の視線が俺に集まり俺は立つ。

一夏にはスケープゴーストをプレゼントしよう。

「織斑一夏くんがクラス代表にふさわしいと思う人は挙手をしてください」

候補者が複数なら投票は当たり前。

「はーい！」

「織斑くんがなるべきよ！」

「私は西本くんが……」

約七割のクラスメイトが手を上げた。

一夏が睨んでいるが民主主義は偉大なのだよ。

「では投票結果――」

千冬さんが締めようとした声を、突然甲高い声が遮った。

「待ってください！　納得がいきませんわ！」

バンッと机を叩いて立ち上がったのは、セシリア・オルコット。

「そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！　わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

それからも怒涛の勢いで俺達を猿と貶し侮辱の嵐が吹く。

「ごちゃごちゃうるせぇよ、三下が。そんなにクラス代表になりたいならお前がなればいい。譲ってやるよ」

一夏が反論する前にドスを含んだ声で言い、しーんと静まる。
そしてセシリアの顔が真っ赤に染まり怒りを示していた。

「あっ、あなたのような人から譲られたなんて末代までの恥ですわ！
あなたに決闘を申し込みしますわ！」

バンッと机を叩くセシリア。

「いいぜ。売られた喧嘩は買う主義だ」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い
――いえ、奴隷にしますわよ」

「舐めすぎだ三下が。誰だろうと全力全壊でぶった斬る」

「そう？　何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこ
のわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会で
すわね！」

女子達がクスクスと笑う。
勝てるわけがないと。

今の時代、男が圧倒的に弱い。
だけど目の前で天狗になった三下ごときに負けるほど俺は弱くないがな。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。西本とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

ぱんっと手を打って千冬さんが話を締める。
俺と一夏は席に着き、授業が始まった。

「はぁ～」

放課後、俺と一夏は机にグタ～っと倒れる。
昼食時や今も女子達は俺らを囲みキャイキャイと騒ぐ。
はっきり言ってキツいぜ。

「あ、二人ともまだいたんですね、よかった」

机から頭を上げると副担任の山田先生が書類を片手に立っていた。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って部屋番号の書かれた紙とキーを俺達によこす山田先生。

ＩＳ学園は全寮制だ。生徒は全て寮で生活を送ることが義務づけられている。これは将来有望なＩＳ操縦者たちを保護する目的でもある。

「俺たちの部屋、決まってないんじゃなかったですか？　前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらうって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです」

一夏の質問に山田先生は申し訳なさそうに答えた。

俺達は世界中の的だからな。いろんなものから保護するためと監視するための処置だろう。

「部屋はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと――」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

扉の方から馴染みの声が聞こえた。勿論千冬さんだよ。

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと携帯電話の充電器があればいいだろう。西本の分は用意しなくても大丈夫だな？」

「ええ。どうせそうなるだろうと思って持ってきてありますから」

机の横に掛けておいたバックを持ち上げ見せる。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕飯は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、織斑くんと西本くんは今のところ使えません」

一夏が不満をぶちまける。

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

千冬さんの呆れ声にようやく一夏はしまったと気付く。

「おっ、織斑くんっ、女子とお風呂入りたいんですか!?　だっ、ダメですよ!」

「い、いや、入りたくないです」

即答したのが悪かった。山田先生は「女の子に興味ないのか!?」と騒ぎ出し、廊下にいる人達が婦女子談義を始めてしまう。

「織斑くん×西本くん……じゅるり」

「ご飯三杯はいけそうね!」

ぎゃあああ!?　恐ろしい想像されてる。

「ここが１０２６室か。んじゃ一夏、また明日な」

「おう」

さっそく寮にやってきた俺達は今日から住む部屋の前に来た。
ちなみに一夏は隣の１０２５室。

ガチャ。

鍵を差し込み開いていたことにいささか疑問に思いつつ入る。

「「……え？」」

俺は目の前にいた人物と同時に間抜けな声を出す。

部屋の中はそれなりに広く大きめのベットが二つある。

確か山田先生が相部屋で我慢してくださいと言っていたから目の前の女子生徒はルームメイトなのだろう。

問題なのは、その女子生徒が下着（しかも下のみ）の姿。おそらくシャワーを終えて着替えてたと思う。

「きっ」

１０秒間見つめ合い、彼女の全身が真っ赤に染まり

「きゃあああああああ！！！」

「しっ、失礼しましたーーー！！」

かわいらしい悲鳴を合図に部屋から飛び出る。

「どわあぁぁっ！？」

隣の部屋から一夏が飛び出してきた。

ズガン！

突然一夏の部屋の扉から木刀が生え、一夏は間一髪で避ける。

ズズズ……と木刀の切っ先がドアの中に沈んでいき、ホッとするが嫌な予感が走り叫ぶ。

「しゃがめ！　一夏ぁ！」

ズドン！

直後、数秒前まで一夏の頭があった場所に再び木刀が突き生える。

「本気で殺す気か！　今のかわさなかったら死んでるぞ！」

騒ぎを聞きつけて女子生徒達がぞろぞろと出てきた。
困ったことに全員がラフなルームウェアで、まったく男の目を気にしない格好をしている。中には男のロマン、Ｙシャツのみな娘がいて一夏共々焦った。

「なになに？」

「あっ、織斑くんに西本くんだ」

「へ～、あそこが二人の部屋なんだ！　いい情報ゲット～！」

ガチャ！

「おわっ！？」

一夏が土下座せんばかりに「箒さん、部屋に入れてください」と頭の上で合掌してる最中に背を預けていたドアが開き引っ張られる。

バタンとドアが閉まりカチャリと施錠音が響く。

「ふぅ……」

「あの……」

ドアの前に立っているルームメイトを改めて見ると、彼女は隣席の女子だった。

ツインテールだった金髪は下ろされジャージを着ており、赤い瞳が俺を見つめている。

「……」

「……」

俺は手前、彼女は窓側のベットに腰掛け長い沈黙。

「あの、どうしてこの部屋に？」

先に口を開いたのは彼女。山田先生が言っていたことを全て伝え彼女はわかってくれた。

山田先生、ちゃんと伝えておいてくださいよ。一夏なんか死にそうでしたよ？

「ゴメンな、着替え中に入っちゃって」

「だ、大丈夫。事故だから、その、忘れてくれれば」

正直に言えば忘れるなんて無理。せめて黒歴史として奥深く封印しておこう。

「えっと、改めまして、西本宏範だ。キミの名前は？」

「フェイト。フェイト・テスタロッサです」

隣がドッタンバッタンとうるさくなりドゴスッ！　っと爆音が最後に静かになる。

「これからよろしくな、テスタロッサさん」

「う、うん。よろしくお願いします」

顔を真っ赤にしたテスタロッサさんと握手をした。

波乱の始まり（後書き）

再びどうも、宏明です。

は「ヤッホー、八神はやてや」

ちょっ、お前は別作品のキャラでしょうが。

は「ええやんそれくらい。フェイトちゃんも出たんやしうちも登場するんやろ？」

出ません。

は「なんやて？　もういっぺん言うてな」

だから、お前は出ないの。それにフェイトはリリなのとは関係ありません。ぶっちゃけ背景キャラだ。

は「……」

返事がない。ただの抜け殻のようだ。

原作基準なんで他の方と被ってますが次回からは少しずつオリジナル展開やストーリーを予定にしてます。できれば感想が欲しいなぁっと宏明はさりげなく要求してみます。

ダダダダッ！

ぎゃあああ！！！

ミサカ「なに気持ち悪いことをしてやがるんですかとミサカ１００３２号は軽蔑の視線を向けて立ち去ります」

……とりあえず、次回はようやくセシリアとの決闘、刮目してやってください。ついでに一夏とも戦うよ。

ダイゼンガー顕現（前書き）

注意事項……このサイトでは英数字が使えないのでその部分は数字になってます。

ダイゼンガー顕現

「ところで西本、織斑、お前らのＩＳだが準備まで時間がかかる」

「はい？」

翌日、テスタロッサさんに少し避けられつつ（朝食誘ったら逃げられた）二時間目の授業の初め、千冬さんからとんでもないニュースが入る。

「予備機がない。だから、少しまて。学園で専用機を用意するそうだ」

「せ、専用機!？　一年の、しかもこの時期に!？」

「つまりそれって政府からの支援が出てるってことで……」

「いいなぁ……私も早く専用機欲しいなぁ」

教室中のざわめきに俺と一夏がまったく意味がわからないという顔をしていると、千冬さんがため息混じりにつぶやく。

「西本、教科書六ページ。音読しろ」

「あ、はい。えーと……『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているＩＳですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるＩＳは４６７機、そのすべてのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引きすることはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』……」

「つまりそういうことだ。本来ならＩＳ専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前らの場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「はい」

つまり、俺達が前代未聞の実験体なので研究のためにわざわざ専用機をやるよって意味。

ちなみに篠ノ之博士というのは――本名・篠ノ之束（しののの たばね）。ＩＳをたった一人で作成、完成させた稀代の天才。千冬さんの同級生で、箒の実姉だ。

小さいころよく研究ラボに行ってはいろんな発明品で遊んだなぁ。

束さんの影響で機械弄り好きになったし、今はどこで何をしてるやら。

思い出に浸っていた間に箒が妹だとばれて彼女は「あの人は関係ない！」と声をあげた。

束さんがＩＳを作って行方をくらませたせいで箒と両親は転校を余儀なくされ、そのせいで箒は束さんを恨んでいると思う。

いつか和解することを願っておくか。

それから一週間。放課後は何故か一夏に無理矢理同行させられ箒と一緒に剣の鍛練をし、部屋ではルームメイトのテスタロッサさんと名前で呼び合うほどになり彼女にはＩＳについてわからないところを教えてもらった。

ちなみにフェイトはアメリカの代表候補生らしい。

専用機の調整が遅れているらしく、現在は普通の生徒としてここにいる。

そしてセシリアとの決闘の日を迎え、俺と一夏は第三アリーナのＡピットに来てまだ到着してない俺達のＩＳを待つ。

ちなみに決闘に勝利した方が一夏と戦うことになっている。

「来ました！　西本くんと織斑くんの専用ＩＳ！」

山田先生が走って現れ言うとごごんっ、と鈍い音がして、ピットの搬入口が開く。

斜めに噛み合うタイプの防壁扉は、重い駆動音を響かせながらゆっくりとその向こう側を晒す。

――そこに『紺』と『白』が、いた。

飾り気のない無の色。俺は武骨な紺色のＩＳから目が離せず近づく。

一夏は隣の白を見つめる。

「これが……」

「はい！　白いのは織斑くんの専用ＩＳ『白式（びゃくしき）！』　紺は西本くん専用ＩＳ『ダイナミック・ゼネラル・ガーディアン』です！」

武骨なそれはまるで出陣を待ち構える将軍のように鎮座し、待っていた。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。西本は時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」

せかされて、俺は紺色のＩＳに触れる。

「ん……？」

試験の時に感じたものと違う感じだ。もっと前、『束さんが作った宇宙服を着て空を初めて飛んだ』あれと同じ、とても懐かしい。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化をする」

千冬さんの指示に従い装甲を開いているＩＳ――ダイナミック・ゼネラル・ガーディアン……なんか言いづらいな。

「千冬さん。こいつの名前、少し変えていいですか？」

「お前専用のものだ好きにしろ」

俺が好きなスーパーロボット風にしよう……こいつの名は

「……ダイゼンガー」

シーン。

なんか周りから微妙な視線を感じる。

「……ぷっ」

「あっはっはっはっ！」

千冬さんには大笑いされた。山田先生や一夏、箒はビックリしている。

「あっはっはっはっ、ひろらしい名前だな。久しぶりに笑ったぞ」

酷いやつらだ。かっこいいのになぁ。

装甲が俺の体に合わせるよう閉じ、かしゅっ、かしゅっ、という空気を抜く音が響く。一夏も同じように白式をまとい、クリアーな感覚が視界を中心に広がって、全身に行き渡るが少し身体に違和感を感じる。

「ん……？」

――戦闘待機状態のＩＳを感知。操縦者セシリア・オルコット。ＩＳネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り――。

「ＩＳのハイパーセンサーは問題なく動いているな。ひろ、急ピッチで仕上げたものだから今のダイゼンガーには専用の武器がない。代わりに打鉄の接近ブレードが装備されている」

左腰には大太刀が一振り差してあり左手で鞘を握る。

ＩＳは基本的に自分の背丈よりもある武器を使う。そのため重さというものを感じない。

だけど俺の手にはずっしりと重さを感じた。

「勝てよ。ひろ」

「あぁ！」

隣に立つ一夏が右手を出す。左手で軽く叩き俺はピット・ゲートに進む。

かすかに体を傾けるとダイゼンガーはふわりと浮かび上がり前へと動く。

ちきちきちきちきちきちきちきちきちき。

クリアーな意識の、その裏側ではダイゼンガーが膨大な情報量を処理していた。

俺の体に合わせて最適化処理（フィッティング）を行う、その前段階の初期化（フォーマット）を行っているのだ。

もしかしたらそのせいで少し体が重く感じるのかもしれない。

ともあれ、今は目の前のことに集中しよう。『敵』がゲートの向こうにいるのだから。

「あら、逃げずに来ましたのね」

アリーナに飛び立ちセシリアがふふんと鼻を鳴らす。腰に手を当てたポーズがこれでもかというくらいに似合っていた。

セシリアは青色の機体『ブルー・ティアーズ』をまとっておりその外見は、特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従え、どこか王国騎士の気高さを感じさせる。

それを駆るセシリアの手には二メートルを超す長大な銃――検索、六七経口特殊レーザーライフル『スターライトｍｋ３』と一致――が握られていた。

「最後のチャンスをあげますわ」

腰に当てた手を俺の方に、びっと人差し指を突き出した状態で向けてくる。左手の銃は、余裕ありまくりらしく砲口が下がったままだ。

「チャンス？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですからボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくってよ」

そう言って目を笑みに細める。

――警戒、敵ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティーのロック解除を確認。

ＩＳが告げた瞬間左親指で接近ブレードの鯉口を切る。

「俺もお前も互いに譲れない意地とプライドがあるんだ。そりゃ無理だな」

「確かに、それなら――」

――警告！　敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわね！」

キュインッ！

耳をつんざくような独特の音が鳴り、セシリアが放った閃光は客席のバリアに当たった。

「なっ！？」

彼女は驚愕の表情を浮かべ俺を睨む。

さて、ＩＳバトルについて説明しよう。ＩＳバトルは相手のシールドエネルギーを０にすれば勝ちだ。ダメージを受けるとそれは数値化されエネルギーが減っていく。もちろん装甲に当たればその部分は破損する。

ＩＳには『絶対防御』という能力が必ず備わっているらしい。あらゆる攻撃を受け止めるが、ただし、これはシールドエネルギーを極端に消耗する――と教科書に書いてあった。

「くっ、今のはまぐれですわ！　踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

射撃、射撃射撃射撃。

まさに弾雨のごとき攻撃が降り注ぐ。

ジグザグに動き回避行動をとるがセシリアはこちらの動きを的確にとらえ左肩に食らった。

――バリア貫通、ダメージ３８。シールドエネルギー残量、５５２。実体ダメージ、レベル低。

「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備で挑もうだなんて…　…笑止ですわ！」

すぐさまセシリアの射撃。身をひねってかわすがやっぱり体が重い。

だからといって引くわけにもいかないしな。激戦が、はじまった。

「――二十七分。持った方ですわね。褒めて差し上げますわ」

「そうかい……」

シールドエネルギーの残量１０２。実体ダメージ中破。武器はなんとか使えるが完全にじり貧だ。

「このブルー・ティアーズを前にして、初見でこうまで耐えたのはあなたが初めてですわね」

そう言ってセシリアは自分の周りに浮いている四つの自立機動兵器を、まるでフリスビーを取ってきた犬を褒めるかのように撫でる。

フィン状のパーツに直接特殊レーザーの銃口が開いている。ガンダムに出てくるビットと同じものだ。ちなみに名前は『ブルー・ティアーズ』セシリアが得意気に説明してくれた。

「では、閉幕（フィナーレ）と参りましょう」

セシリアは笑みとともに右腕を横にかざす。すぐさま、命令を受けたビットが二機多角的な直線機動で接近してきた。

「そう何度もくらうか！」

急降下してアリーナに着地して走る。

空中と違って地上では『下から』攻撃はこない。

上空からのレーザーを転がるように避け後ろに壁があった。

「ふふ、もう逃げられませんわよ？」

セシリアがライフルでこちらに狙いを定め、その瞬間に俺は壁を蹴って跳ぶ。

「はあぁぁっ！！」

ついでに背中のスラスターを噴かせて加速し一閃。

ガギンッ！　派手な音と一瞬の火花がちり、ライフルの砲口を逸らす。

「くっ……なんて速さ、けれど、無駄な足掻きっ！」

セシリアは距離を取り、空いている方の左手を横に振る。すると、それまで周囲の空間に待機していたビットがこちらに向かって飛んできた。

穿たれるレーザーを鞘で防ぎながら肉迫し一閃。

重い金属を切り裂く感触が伝わり、真っ二つにしたビットは爆散する。

「そらっ、今度はお前が踊りなっ！」

左手で持っていた鞘をセシリアに投げ、彼女は左側へ回避。

「電光石火！」

突然のことで驚いているセシリアに向かって刺突の構えで突っ込む。

「かかりましたわね！」

ニヤリ、と。セシリアが笑うのが見えた。ビットは俺の後ろにいるが射線上にはセシリアもいる。

ヴンッ――。

セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマー。その突起が外れて、動く。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

回避は間に合わない。しかも他のやつとは違ってこれは『弾道型（ミサイル）』だ。

ドカァァァンッ！！

俺は白い、その爆発と光りに包まれた。

★

「ふんっ」

ハイパーセンサーで自ら突っ込んだひろを見てセシリアは鼻で笑う。

所詮は猿か、と思いブルー・ティアーズを自身のそばに戻し黒煙を見つめる。

――警告！　敵ＩＳ操縦者からのロックを確認。

「え……？」

パートナーからの警告にセシリアは戸惑う。あれを食らって無事なはずがない。

ボヒュッ！

未だ止まぬ黒煙から影が踊り出てきて、ボロボロになりながらも獣のような鋭い瞳をしたひろはセシリアとの距離を詰めて接近ブレードを左から右横に一閃。

「きゃあっ！？」

接近ブレードはセシリアの腹を切り裂くがＩＳの絶対防御が操縦者へのダメージを相殺する。

――バリア貫通、２７４。ダメージレベル強、シールドエネルギー残量３０５。

（接近ブレードにそこまでの威力はなかったはずですわ）

なら目の前の少年が数値以上の性能を引き出したというのか。

吹き飛ばされ体勢を整えるセシリアはいつの間にか消えたひろを探し、地面に立っていたひろを見つける。

★

――フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

（なんだ……？）

あまりのダメージに飛べなくなり地上に降り立つと意識に直接データが送られてくる。と同時に、目の前に現れるウインドウ。その真ん中には「確認」と書かれたボタンがある。

よくわからないがそれを押すと、さらなる膨大なデータが流れ込んできた。

――いや、正確には整理されている――。

そして、変化は劇的に訪れた。

キィィィン……。

高周波な金属音。けれどそれは優しいものに感じた。

すると俺の全身を包んでいた鎧が光りの粒子に弾けて消え、そしてまた形を成す。

「これは……」

新しく形成されたＩＳ装甲さっきまでの実体ダメージが全て消え、日本の鎧を思わせるデザインへと変わり太陽の光りで一瞬輝く。

「ま、まさか……一次移行（ファースト・シフト）!?　あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの!?」

さっきのウインドウに書かれていた『初期化』と『最適化』が終わったというのは、つまりそういうことらしい。

ようやくこの機体は俺専用になった。

改めて見ると肩の部分が大きく変化している。普通の鎧は四角に対し、ダイゼンガーは丸。検索してみたが特に武装が追加されたわけではなく、ただの飾りのようだ。

――人機一体――

あれほど感じていた違和感は消え失せ一瞬ＩＳを解除したのかと錯覚した。

いける。今のダイゼンガーなら俺は……俺達はどこまでも飛べる。

「もう虫の息なあなたにとどめをさしてあげますわ！」

セシリアの命令で三機のビットが俺を囲む。

回転斬り。

巻き起こった剣風が全てのビットを吹き飛ばした。

「刮目しろ！　これが俺の太刀筋だ！」

接近ブレードを上段に構え、背中と脚部の装甲が展開し瞬間加速（イグニッション・ブースト）。

一瞬でセシリアに詰め寄り接近ブレードを唐竹に振った。

――斬っ！！――

接近ブレードはセシリアの装甲を切り裂く。

『試合終了。勝者――西本宏範』

千冬さんのアナウンスが俺の勝利を告げ、セシリアのＩＳが解除された。

「おっと」

彼女を抱き止め状態を確認すると、気絶しているが怪我はしてない様子。

安堵の息を吐き、お姫様抱っこの状態でセシリアをピットに運んだ。

ダイゼンガー顕現（後書き）

どうも宏明です

な「高町なのはだよ」

またか！　リリカルなのははクロスさせるつもりはないんだけど。

な「でもフェイトちゃん出したでしょ？　私を出さないなんてあり得ないなの」

まぁ、このまま背景になるのはもったいない。という意見をもらいまして、なので設定を追加し、準ヒロイン候補にしました。本格参戦は個人別トーナメント辺りの予定。

な「さっすが宏明、わかってるなの。で？　私はいつ登場するのかな？」

どうしようか考え中。戦い方がセシリアと被るから難しいんだよね。中学生としてなら出せるかも。

な「ふうん。妹キャラなんだね」

それはそうとようやく専用機登場しました。参式斬艦刀はもう少し後。

な「そういえは一夏さんとの戦いは？」

長くなりそうだったので次回に持ち越し。

な「それじゃあまた次回！　絶対にみてね、みないとスターライトブレイカーだよ！」

武者ＶＳ騎士（前書き）

ようやく原作一巻の半分まできました。

それではお楽しみください。

武者ＶＳ騎士

「加減をせんか馬鹿者」

セシリアをお姫様抱っこしたままピットに戻るとさっそくお叱りを食らった。

まぁ、しかたないわな。ＩＳの絶対防御によって護られていても衝撃までは防げないし、ＩＳは致命的なダメージを負うと最終保護機能が働き、操縦者の意識を失わせるのだ。

さっき放った一撃は確実にセシリアを殺してしまうほど危険なものだった。

「それではシールドエネルギー補給後、すぐに織斑と西本の試合を始める。織斑は先にアリーナで待機しろ」

一夏がカタパルトに行こうとして箒に呼び止められ、少し話したあと一夏はちらりとこちらを見てピットの向こうへ行った。

セシリアは山田先生に頼み背中にケーブルが接続される。

――補給完了。出撃体勢に入ります。

「ひろ、体は大丈夫か？」

珍しく千冬さんの声が心配そうだった。もっともハイパーセンサーでようやく分かる程だけど。

「大丈夫ですよ、千冬さん。んじゃ、ちょっと調子に乗っている親友に喝入れてきます」

モニターに映っている一夏は軽く動き回り、時折左手を握ったり開いたりしていた。

あれは一夏の悪い癖。大抵ポカミスをするのだ。

「無茶はするなよ」

「はい」

ケーブルが完全に外れカタパルトへ向かう。

――戦闘体勢の敵ＩＳ確認。ＩＳネーム『白式』戦闘タイプ近距離戦闘特化型。操縦者名、織斑一夏。特殊装備有り―。

「待ってたぜ、ひろ」

待っていた一夏の前に停止。互いに見つめ合う。

白式は既に一次移行（ファーストシフト）を終えており、武骨だった装甲はシャープになっている。なんとなく西洋の騎士に見えた。

「今までの借りを返してやるよ！」

一夏は右手に接近ブレードを展開。溝部分から光りが漏れ出ている。

「こいっ！」

こちらも接近ブレードを抜刀した状態で展開し八相の構えで迎え討つ。

「うおぉぉぉっ」

背中のスラスターを噴かし一夏は突撃してくる。

大振りの攻撃に接近ブレードを左薙で弾き、がら空きの腹に回し蹴りを叩き込む。

一夏はギリギリ左腕で受け止めバランスを崩した。

「はあぁぁっ」

追撃に出て唐竹に振り下ろす。

ガギンッ！

鈍い金属音が響き鍔迫り合い。
俺の全力を込めた斬撃を受け止めた一夏の表情が歪む。

★

「一夏ぁっ！　俺の流派を忘れてないよな？」

ひろの楽しそうな声に俺は押し切られないよう踏張るのが精一杯だった。

（くそっ、相変わらずめちゃくちゃ重いな）

ひろの剣の師匠である祖父は二の太刀いらずで有名な示現流を元にした古流剣術を極めた人。

昔千冬姉が居合いを習いに行っていたのに俺が連れて行かれたのがひろとの出会いだった。

まあ、そのことはまた今度でいいだろ。

「ぜやあぁぁぁっ！！」

スラスターを全力で噴かし力任せに弾く。

なんとか距離を取ることが出来た。何か有効な武器は？

―接近ブレード・『雪片弐型（ゆきひらにがた）』。

どこかで見たことあるな、と思ったのはそういうことか。

―雪片。それは、かつて千冬姉が振るっていた専用ＩＳ装備の名称。刀に型成（かたな）した形名（かたな）。それが雪片。

……ああ、まったく。つくづく思い知らされる。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

三年前も、六年前も、そしておそらく十五年前も。あの人はいつでも俺の姉だ。それに、ひろもずっと親友でいてくれた。だからそろそろ、守られるだけの関係は終わりにしよう。これからは――

「俺も、俺の家族を守る」

「ほぅ……」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

元日本代表の、その弟。それが不出来では、格好が付かない。そう、あの格好いい千冬姉が格好付かないなんて、冗談もいいところだ。千冬姉をいつか超えると言ったひろにも申し訳ねぇよ。まったく笑えない。

「むしろ笑われるだろ」

「ふっ、そうだなっ」

微笑んだひろは高速の刺突を放つ。

（見える……）

今まで見えなかったものが見え、左右にかわしながら右手を握りしめる。応えるように、低い機械音を鳴らす『雪片』。使い方ならわかっている。
千冬姉にばれないようひろの家で何度も見た試合の映像。そこでどう使っていたかを覚えている。

★

二回の電光石火が避けられ、すれ違いざまに右肩を白刀に変わった雪片弐型に持っていかれた。

―バリア消失。ダメージ、２１９。残り２６７。

やはり千冬さんのと同じ能力か、厄介なものを。

縦横無尽に駆る一夏の攻撃を何とかしのぐ。

（ここにきて、セシリア戦とのダメージがくるとはな）

―人機一体……ダイレクト・モーション・リンクシステムがダイゼンガーには備わっており、これのおかげで俺はＩＳを自分の手足のように扱える。だが、これにはとんでもない欠点があった。

ＩＳのダメージを受け易い。

ある程度絶対防御によって緩和されるが他のＩＳよりもダメージがダイレクトに伝わる。

「もらった！」

背後を取った一夏が雪片弐型を振るう。

ガキィン！

「なっ！？」

鞘を左手で順手に持ち、後ろを見ないで雪片弐型を受け止める。

回転すると一夏は上に飛翔し、距離を取る。

「一夏、そろそろ終わりにするぞ。俺は連戦でもうくたくただ」

「そうだな。なら次で決める！」

接近ブレードを鞘に納刀して抜刀の構えを取った。

「本気ってわけか……いくぜ！　ひろ！」

雪片弐型の白刀がより一層輝く。

「「うおぉぉぉっ！！」」

同時に駆け出す。

★

「はぁぁ……。すごいですねぇ、織斑くんと西本くん」

ピットでリアルタイムモニターを見ていた山田真耶がため息まじりにつぶやく。確かに二人ともＩＳの起動が今日で二回目（ひろは三回）とは思えないほどの健闘ぶりだった。

しかし、千冬はやれやれとため息を吐く。

「織斑の馬鹿者が。せっかくのチャンスをこぼしたな」

「えっ？　どう見ても今は織斑くんが押してますが」

右肩をやられてからのひろの動きは明らかに落ちている。そうかからないうちにひろは敗北すると誰もが思っていた。

「うそっ！？　鞘で受け止めた」

ハイパーセンサーにより３６０°見えるので理論上可能だが、本当にやった人間を初めてみた山田は驚く。

ひろの次の行動で会場はさらにどよめいた。

「あっ、あの、あの構えって！」

今のひろはかつて日本代表だった織斑千冬が第一回目のＩＳ操縦者世界一決定戦、モンド・グロッソ大会で使った抜刀の構えそのものだったのだから。

「あれは元々あいつの流派。使えてあたりまえだ」

千冬の表情は鬼教官と呼ばれている彼女にしては珍しく優しさに満ちていた。

★

試合は俺達が思い描いたどちらでもないものだった。
雪片弐型の光りが突然消え失せ、俺は寸止めをしている。

「……あれ？」

一夏は「なんで？」という顔をしていた。それは第三アリーナに詰めかけていたギャラリーとピットで試合を見守っていた箒と山田先生もだ。

チン。

静かになったアリーナに納刀した音が響く。それを合図に俺の勝利アナウンスが入って時は動き出した。

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

試合が終わって、一夏は馬鹿者から大馬鹿者にランクアップしていた。嬉しくない表情だな。

「武器の特性を考えずに使うからああなるのだ。身をもってわかっただろう。明日からは訓練に励め。暇があればＩＳを起動しろ。いいな」

「……はい」

「笑っている西本もだ。所詮たまごから孵ったひよこ程度なのだから調子に乗らずにしっかり練習しろ」

ぎゃーっ、矛先がこちらに向いた。

「了解です。大佐殿！」

バシーン！

「だれが某正義の秘密組織の艦長か。そういうのはオルコットが似合っている」

なんでそこでセシリアが？

「えっと、ＩＳは今待機状態になっていますけど、呼び出せばすぐ

に展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね。はい、これ」

どさっ。どさっていったな、俺も全部覚えてないから先生に頼んで一夏の分を再発行してもらい山田先生から渡された。

ＩＳ起動におけるルールブックと書いてあるが『あなたの街の電話帳』にしか見えない。ページ数は……六法全書なみかもしれない。

「何にしても今日はこれでおしまいだ。帰って休め。特に西本はな」

一夏は俺に対する優しさが足りない！　と嘆いたが軽〜く無視された。

空気を読んで一夏と箒を二人で帰らせ、俺は保健室へと向かう。

「あれ……ここは？」

保健室に到着と同時にセシリアが目覚めた。何故か保険医が「おいたはダメよ」と、謎の言葉を残して去る。

「あなたは西本さん。どうしてここに？」

「心配だったからね」

「え！？」

来た理由を言うと鳩が豆鉄砲を食らったような表情になるセシリア。
そんなに意外なのだろうか。

「決闘の時、加減をまったくしないで斬っちゃったから心配になってね。痛い所はない？」

「え、ええ。大丈夫ですわ」

「良かった。綺麗な体に傷が残らなくて安心した」

さすがに責任とれと言われても困るしな。良かった良かった。

「きっ、綺麗っ！？」

ん？　急に顔が赤くなったような。風邪か？

「それと悪かったな。いろいろと酷いこと言ったし」

いくら気にくわないといっても一年間は同じクラスなんだ。やっぱり仲良くならないとな。

「そんなっ、むしろ謝るのはわたくしですわ。わたくしも大人気なかったですし、すみませんでした」

意外と素直な娘みたいだ。

「それじゃあ、これからよろしくな。オルコットさん」

握手しようと右手を伸ばす。

セシリアはクスリと笑い、右手を伸ばし俺の手を握った。

「セシリアでかまいませんわ」

「なら俺はひろでいいよ。よろしくな」

「はいっ！」

セシリアはニッコリと微笑む。その笑顔に一瞬ドキッと不覚にもし

てしまった。

「それじゃ、また明日」

「あっ」

急に恥ずかしくなって逃げるように保健室から去る。

「……ふわ。安心したら急に眠たくなったな。早く休もう」

★

サァァァ……

シャワーノズルから熱めのお湯が噴き出す。水滴は肌に当たって弾け、ボディラインをなぞるように流れていく。白人にしては珍しく均整の取れた体と、そこから生まれる流線美はちょっとしたセシリアの自慢だ。その体にシャワーを浴びながら、セシリアは物思いに耽っていた。

（今日の試合――）

正直ひろが自分の懐に入った瞬間意識がブラックアウトしたので何が起きたのか分からなかった。ただ、たった二回目の操縦をしたばかりのひろに負けたことだけはっきりとわかる。

いつもなら負けた時は己の弱さに怒り、次こそは勝つ。と、闘志を燃やすが今はそんなことはどうでもいい。

（―西本、宏範―）

あの男子のことを思い出す。あの、強い意志と信念が籠もった瞳を。他者に媚びることのない眼差し。そして自分を心配して来てくれた時は一瞬別人かと思ったほどに優しいものだった。
安堵した時の笑顔は不覚にもときめいた。

「西本、宏範……」

その名前を口にしてみる。不思議と、胸が熱くなるのが自分でもわかった。

どうしようもなくドキドキとして、セシリアは胸元でひろと握手した右手を握る。

その感触はすぐに思い出せる。自分のより大きくて、少しゴツゴツしてて、それに温かかった。

「……」

離れた時は切なくなった。もっとあなたの温もりを感じたい。

――なんだろう、この気持ちは。

意識をすると途端に胸をいっぱいにする、この感情の奔流は。

――知りたい。

その正体を。その向こう側にあるものを。

――知りたい。ひろの、ことを。

浴室にはただただ水の流れる音だけが響いていた。

★

翌日、一夏が暗くなっていた。まぁ、わからんでもないが諦めろ。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

山田先生は嬉々として喋っている。そしてクラスの女子も大いに盛り上がっていた。

「おい、ひろ。これはどういうことだ！　昨日の試合に全勝したお前がなんでクラス代表じゃないんだよ？」

こらこら一夏、山田先生が無視されて軽くショックを受けているぞ。

「忘れたのか？　一夏。先週お前と俺が候補に選ばれた時、クラスの半分以上がお前を選んだんだ。その時点で一夏に決まっていたんだぞ」

女子達がそうそうと頷く。

「いや、だけどな？　俺みたいにやる気のないやつよりオルコットさんのほうが――」

「心配なさらなくても大丈夫ですわ。わたくしは辞退しましたから」

すっと立ち上がったセシリアは早速腰に手を当てるポーズ。様になっているなぁ。

セシリアが一夏にも謝り一夏が鳩が豆鉄砲を食らったように驚く。

「そ、それでひろさん」

コホンと咳払いをして、あごに手を当てるセシリア。若干顔が赤いな、昨日の熱が下がらなかったのだろうか？

「わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がＩＳ操縦を教えて差し上げれば、今よりも成長を遂げ――」

「残念だけどひろの先生役は間に合っているよ。私が既になってるから」

俺とセシリアの間にフェイトが急に割り込んだ。セシリアを見つめる目が少し濁っていた気がする。

――しかし、セシリアは怯むことなく正面から受け止めて、視線を返す。何故か自信満々だ。

「あら、あなたはアメリカ代表候補生でありながら専用機をお持ちでないテスタロッサさん。専用機持ちであるわたくしになにかご用かしら？」

「い、今は調整に遅れてるだけですぐに専用機持ちになるよ！　ひ

ろが私に教えてって頼ってくれたんだから」

確かにそうだけど。

「ま、まあまあ二人とも。知識はフェイト、実戦はセシリアじゃ駄目かな？」

「駄目だよ！」

「駄目ですわ！」

怒鳴られた。二人の間にデフォルメされた二人が銃で撃ちあっている幻覚が見える。

「いつのまに仲良くなったんだ？」

「昨日ちょっとな」

おろおろとしてる山田先生は無視され、千冬さんが出席簿アタックを二人に叩き込むまでにらみ合いは続いた。

「あの二人は何で先生役にこだわるんだろう……。もしかして教えるのが好きなのか？」

そうつぶやくと一夏は呆れた表情になって、「ひろって昔から鈍いよな」と言われた。

お前には言われたくねえよ！

ともかくクラス代表は一夏に決まった。

武者ＶＳ騎士（後書き）

どうも宏明です

セ「セシリア・オルコットですわ」

な、なぜここに！？

セ「なにやら宏明がとんでもない相談をするとの情報を入手しまして、その暴挙を防ぎに来ましたの」

いったいだれが……まあいいや。

実は次回からセカンド幼なじみこと凰鈴音（ファン・リンイン）が登場しますが、このまま一夏にいくのはいいのかと思いまして。基本的にひろ視点が多いので箒みたいに空気になる可能性があるのです。

そこで、アンケートをします。

１・このまま鈴は一夏が好き

２・やっぱりひろにいくべきだ！

3・一夏よりだけど、両方好きで未だに決められない。（あたしは乙女ゲーの主人公か！）

の三つ。感想と一緒に意見をいただけると嬉しいです。

セ「ぜえったいに1ですわ！　これ以上ライバルを増やさないでいただける？」

いやいや、それだと鈴の魅力が半分も表現できないよ。

期限は明後日までです。ご協力お願いします。

セ「とにかく次回も読んでくださいな。読みませんとあなたのハートを撃ち抜きますわ。ばーん」

セカンド幼なじみの揺れる乙女心（前書き）

アンケートにご協力してくださった皆様、ありがとうございました。

結果は３の一夏寄りだけど両方好きでいまだにどちらも選べない。

（あたしは乙女ゲーの主人公か！）が圧倒的でした。

最終的にどちらを選ぶかは決めてません。

それではどうぞ！

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行訓練を実践してもらう。西本、織斑、オルコット。試しに飛んでみせろ」

四月も下旬、遅咲きの桜の花びらがちょうど全部なくなった頃。俺達は今日もこうして鬼教官こと千冬さんの授業を真面目に受けていた。

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

せかされて俺と一夏はあわてて意識を集中する。

ＩＳは一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。セシリアは左耳のイヤーカフス。一夏は右腕のガントレット。俺のは刀の柄部分がキーホルダーサイズになっている。普段は紐に通し、ペンダントのように首から下げているのだ。……しかし、何故に柄？　アクセサリーじゃないだろ。

とにかく叩かれるのは嫌なので右手で胸元のキーホルダーを掴む。

（来い、ダイゼンガー）

そう心の中でつぶやきＩＳが展開されるのをイメージした。

刹那、胸元から全身に薄い膜が広がっていくのがわかる。約０・５秒の展開時間。俺の体から青い光の粒子が解放されるように溢れて、そして再集結するようにまとまり、ＩＳ本体として形成される。

各種センサーが意識に接続され、世界の解像度が上がる。この前一夏に破壊された右肩は修復されていた。

一夏の白式は俺より０・２秒遅れて展開完了し、セシリアは言わずもがな、とっくに『ブルー・ティアーズ』を展開し終え浮かんでいる。

「よし、飛べ」

言われて、セシリアはすぐに動く。

俺も後を追うように飛び上がり、視界が一瞬で空色に染まった。

力加減がまだ上手くいかないようで、あっという間にセシリアを追い抜き、目標の地上二百メートルを軽く超えてしまった。

「行きすぎだ、馬鹿者」

通信回線から早速おしかりの言葉を受ける。一夏は遅いと怒られてしまう。

「うーん、大体空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよな。なんで浮いてるんだ、これ」

同じ高度に合流してふと、一夏が疑問をもらす。

「説明しても構いませんが、長いですわよ？　反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

「さすがに俺も理解するのは難しいな」

「そう、残念ですわ。ふふっ」

楽しそうに微笑むセシリア。

あの試合以降、何かと理由を付けては俺のコーチを買って出てくる。一夏と箒の邪魔をしたくない俺としては非常にありがたい。

まあ、箒の教え方が独特というか、感覚的過ぎて一夏は理解できず、結局二人でセシリアに習うことになる。

ちなみにどんなものかというと『ぐっ、とする感じだ』『どんっ、

という感覚だ』『ずかーん、という具合だ』など擬音。
箒には悪いが剣術のみに専念してもらった。

「織斑、西本、オルコット、急降下と完全停止をやってみせろ。目標は地表から十センチだ」

「了解です。ではひろさん、一夏さん、お先に」

お喋りタイムが終わりセシリアは地上に向かう。ぐんぐんと小さくなって行き華麗に成功させた。

「うまいもんだなぁ」

「ああ、んじゃ、俺からいかせてもらうぜ」

一夏より先に地上へ向かって加速。

ギュンッ――――――ダンッ！！

地上に着く前に脚のスラスターを噴かし減速したが、地面を僅かに凹ませ着地してしまった。

「あれ？」

「ここが海上だったら溺れているぞ、馬鹿者」

どうやら課題失敗のようだ。

――ズドォォンッ！！

一夏は隕石のように墜落し、グランドには巨大なクレーターができる。

俺も一夏もまだまだだな。

「惜しかったですわね」

「うん、ダイゼンガーの出力が高いからなかなか上手くいかないな。今度の放課後、練習に付き合ってもらってもいいか？」

「もちろん構いませんわ！　わたくしでよろしければ」

最初の頃の態度が嘘のように優しいセシリア。それにしてもなんでそんなに嬉しそうなのか。やっぱり教えるのが好きなのかもしれない。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はぁ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし、でははじめろ」

言われて一夏は右腕を前に出して集中。

手のひらに光りが集まり『雪片弐型』が握られていた。

「遅い。０・五秒で出せるようになれ」

さすが千冬さん、相変わらず厳しい人だ。

「次、西本」

「はい」

左手に鞘を持つイメージ。右手で柄を握り抜刀する。

右腕が前に出た頃にはしっかりと抜刀状態の接近ブレードがあった。

ついでに鞘も展開されていた。

「二つ同時展開か、まあまあだな。次からはもう少し早くしろ」

展開まで約０・三秒なんだけど。実戦では遅いんだろう。最後にセシリアの番。

左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。一瞬爆発的に光り、その手には狙撃銃『スターライトｍｋ３』が握られていた。

俺達より圧倒的に速い。しかも、銃器にはすでにマガジンが接続されていて、セシリアが視線を送るだけでセーフティーが外れる。一秒と経たずに展開、射撃可能まで完了していた。

「さすがだな、代表候補生。――ただし、そのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な―

―」

「直せ。いいな」

「――、……はい」

不満たらたらな表情をしていたセシリアだったが、千冬さんの一睨みで話が終わる。

「セシリア、接近用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ」

おそらく頭の中で文句を言っていたのだろう。いきなり振られた会話にびっくりして反応が鈍るセシリアだった。

銃器を光の粒子に変換―『収納（クローズ）』というらしい―、そして新たに接近用の武装を『展開』。

けれど、手の中の光はなかなか像は結ばず、くるくると空中をさまよっている。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。――ああ、もうっ！　『インター・セプター』！」

武器の名前をやけくそ気味に叫ぶ。それによってイメージはまとまり、光は武器として構成された。

ちなみにこれは『初心者』向けの手段であるらしい。それを使わないと武装を展開できないというのは代表候補生のセシリアにとってはかなり屈辱的なことらしかった。

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実戦では接近の間合いに入らせません！　ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。西本との対戦で初心者に簡単に懐を許し負けた気がするが？」

「あ、あれは、その……」

ごにょごにょとまごついて、セシリアの言葉は歯切れが悪い。俺と目が合うと、キッと睨まれた。

刹那、送られてくる個人秘匿通信（プライベート・チャンネル）。

『あなたのせいですわよ！』

なんでだよ。

『あ、あなたが、わたくしに飛び込んでくるから……』

いやいや、接近用の武装しかないＩＳならそうなるだろ。

『せ、責任をとっていただきますわ！』

なんの責任だよ。

ちなみに、俺は通信の返事はしていない。一方的に送られてくるだけだ。残念ながらプライベート・チャンネルは未習得なんでね。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グランドを片付けておけよ」

一夏を放ってみんな更衣室へ向かう。箒は手伝わないらしい。駄目

だぞ、ここで手伝わないとフラグ立たないのに。今度一夏攻略方をアドバイスしておくか。

「ひろっ！　お前は手伝ってくれるよな？」

「はぁ……しょうがないな。今度なんか奢れよ」

やれやれ、俺は甘い人間のようだ。

「サンキュー。愛してるぜ！」

ドゲシッ！！

一夏をクレーターに蹴り落とす。頭から落ちたが、ＩＳのおかげで無事だろ。

「一夏（バカ）、ここに眠ると書いておくか」

後ろの方で女子達が「やっぱりあの二人って……」と話してたのは気のせいだ。

「というわけでっ！　織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと～！」

ぱん、ぱんぱーん。クラッカーが乱射される。

一夏の頭に紙テープが乗り、こころなしか沈んでいるように見えた。

今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のメンバーは全員揃っていて、各自飲み物を手にやいのやいのと盛り上がっている。

「……」

「どうした？　一夏。主役がそんな暗い顔してたら開いてくれた人たちに失礼だぞ」

「いや、なんだこのパーティーは」

壁にかかっている紙を指す。

それを見た一夏はガクリとうだなれる。

そこには『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれてあった。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねぇ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

先ほどから相づちを打っている女子は二組のような。というか、明らかに一クラス分以上の生徒がいた。

「人気者だな、一夏」

「……本当にそう思うか？」

箒のじと目に一夏はうんざりした表情で返す。

「ふん」

一夏のせいで箒の機嫌が悪くなる。これで嫌われないのだから一夏のリア充補正はチートだ。爆ぜればいいのに。

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君と西本宏範君に特別インタビューをしに来ました～！」

彼女は二年の黛薫子（まゆずみかおるこ）。新聞部の副部長らしい。渡された名刺に書いてある。

インタビューを苦笑いしながら答える一夏とじと目で彼を見つめる箒を持ってきたデジカメで撮影。うん、綺麗に撮れたな。

「おおっと！　西本君？　撮影は私の存在理由だよ。取らないで欲しいなぁ」

一夏のインタビューを終え、先輩がズズイッとこちらに詰めよりボイスレコーダーを鼻に突き付ける。

「うおっ！？　存在理由って大げさな」

「私の出番はこういう時しかないんだから！」

はいはい、メタ発言はやめような。

「それじゃあ、セシリアちゃんと戦った感想を一つ！」

「そうだなぁ……強敵だったな。さすが代表候補生だと思った」

「ほうほう、なかなか殊勝な発言だね。今回はまぐれだと？」

「織斑先生いわく、ひよこがたまごから孵った程度ですからね」

セシリアと目が合い彼女は顔を逸らす。なんかいつもよりも髪のセットに気合いが入っている気がする。

「コホン。ではわたくしからひろさんの評価ですが――」

「ああ、長そうだからいいや。とりあえず三人並んでね。写真撮るから」

「えっ？」

「俺も！？」

意外そうなセシリアの声。しかしどこか喜色を含んでいるようにも聞こえる。一夏は解放されてなかったことに驚いていた。

「注目の専用機持ちだからねー。スリーショットもらうよ。あ。握手とかしてるといいかもね」

「そ、そうですか……。そう、ですわね」

なぜかモジモジとし始めたセシリアは、ちらちらと俺を見てくる。
なんだろうか、この『チャンス到来、ただし安く見られないように気をつけなくては』的な雰囲気。

「あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて――」

「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

黛先輩は俺とセシリアを一夏の隣に並ばせさらにセシリアの手を引いて、そのまま握手まで持って行く。

「……」

「？　なに？」

「べ、別に、何でもありませんわ」

こっちをじろじろ見てくるので何か用でもあったのかと思ったが、違ったらしい。一夏も箒にじろじろ以下同文。

「……」

フォークを順手で握りしめたフェイトがその他大勢の女子に混じって羨ましそうにこちらを見ていた。もしかしてテーブルにあるカステラが欲しいのか？

「それじゃあ撮るよー。まそっぷ」

「「ぶっ！！」」

「？」

なぜにまそっぷ。一夏と一緒に笑っちゃったじゃないか。セシリアは首を可愛らしくかしげるし。

パシャッとデジカメのシャッターが切られる。……って、おい。

「なんで全員入っているんだ？」

恐るべき行動力をもって、一組の全メンバーが撮影の瞬間にセシリア、俺、一夏の周りに集結していた。あ、箒やフェイトまでいる。こいつらは一体何がしたいのだろうか。

「あ、あなたたちねぇっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

口々にセシリアを丸め込むようなことを言っている。

まあ、俺とはともかく一夏と写真撮りたい娘はいっぱいいるしね。

「う、ぐ……」

苦虫をかみつぶしたような顔をしているセシリアを、クラスメイト

はにやにやとした顔で眺めていた。……おや？

今食堂の入り口に見覚えのある人物がいたような。

「それじゃ、後は主役の一夏に任せて脇役は退場させてもらうよ」

「お、おいっ、どこに行くんだよ、ひろ」

廊下に出ようとした歩みを止め、呼び止めようとした一夏に笑いかける。

「一夏、いくら男同士でも周りに女の子がいるんだから気をつかえ。デリカシーのない奴だな」

「え……？　あー、悪い」

何を言いたいのか伝わりバツの悪そうな顔をする一夏。

「それじゃあ淑女諸君。織斑君に何でも質問するといいよ」

「待ってましたー！」

「これで千冬様の私生活が！」

わっと女子たちが一夏を瞬時に囲み見えなくなる。

「謀ったな！　ひろーっ！」

ひらひらと手を振りながら食堂から出た。

「……あ」

入り口から出てすぐに黒髪を金色の留め具で左右に結んだ少女と遭遇。彼女はびっくりしていた。

「久しぶりだな、鈴」

約一年ぶりだけど相変わらず小さい胸と可愛らしいツインテールですぐにわかった。彼女は凰鈴音（ファン・リンイン）。俺と一夏の幼なじみで悪友。親しみを込めて俺たちは鈴と呼んでいる。

「おりやぁぁぁっ！」

ぐほぉっ！？　いきなり鳩尾に右ストレートが打ち込まれた。

★

「なにやってんだろ、あたし……」

小柄な体、艶やかな黒髪を金色の留め具で左右に結んだ少女―凰鈴音はＩＳ学園に先程転校して来た。

「あいつら、デレデレして……ムカつく」

今彼女は食堂の入り口から少し頭を出して中を覗き込んでいる。彼女の幼なじみ、織斑一夏、西本宏範が沢山の女子生徒に囲まれて本人達は困っているのだが、恋する十代乙女にはデレデレしているように見えるらしい。

なぜ彼女はストーカー紛いのことをしているのか？　それは学園に着いた頃、偶然にも想いを寄せる一夏に再会しそうになったが一夏の隣には親しそうに話す女子がいて無理だった。

ひどく冷たい感情と苛立ちを抱え込んだまま受付を終えて寮に向かう途中、ここの生徒の誰かが『織斑くんのクラス代表就任パーティー』をすると言っていたのを聞き、やって来たのだ。

（ひろの隣にいる金髪ロール、あの眼差しは絶対にひろに恋してる。あいつの良さを知ってるのはあたしだけだったのに……）

はっきり言えばひろはイケメンではない。

ひろの強い瞳や優しさや心意気は男女関係なく不思議と人を惹き付けていた。まあ、本人は自覚してないが。

――って、なんであたしはこんなにモヤモヤしてるのよ！

顔を激しく横に振り、ひろにも湧き上がった嫉妬を振り払う。心に強く二人ともつぶす二人ともつぶすと強く思い、モヤモヤを追い出す。

――よしっ、もっかいだけ見て明日劇的な再会を演出しよう。

既に先程まであった嫉妬は消え失せ、イタズラを思いついたようにほくそ笑み食堂を覗く。

「！」

二人は写真を撮られていて、ほんの一瞬ひろと目が合う。

（ヤバッ）

ここでばれたらせっかくの再会計画がおじゃんになる。

そう思って頭を引っ込め立ち去ろうとしたが足は動かなかった。

「久しぶりだな、鈴」

食堂から出て来たひろに声をかけられ胸が高鳴る。

ドコォッ！

「ぐはぁっ！？」

鈴は照れ隠し半分、貧乳と言われた気がしてひろの鳩尾に拳を打ち込んだ。

「いきなり何すんだよ。一瞬胃の中にあるもの吐き出すかと思ったわ！」

「ふ、ふんっ、あんたが失礼なことを思ったのが悪い！」

ひろは腹を押さえながらも立ち上がり鈴は少し頬を赤らめ顔を逸らす。

「「……ぷっ、あはははははっ」」

数秒のにらみ合い。二人は突然笑いあった。

「相変わらず元気だなぁ、鈴は」

「そっちこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「怪我は勘弁願いたいね」

二人は立ち話もなんだと思い近くの自販機まで行き、ジュースを買うとベンチに腰を下ろした。

★

鈴との再会に驚いたがやっぱり知り合いと会うのは嬉しいね。

俺はスポーツ飲料ア○エリ、鈴はな○ちゃんオレンジ味を飲む。

「それにしても鈴、よくＩＳ学園に編入出来たなぁ。ここ、けっこう厳しいって言われてるのに」

「簡単よ。あたしは中国の代表候補生になったしね」

あぁ、なるほどな。ＩＳ学園は他国に対して無条件で門を開けとアラスカ条約で決められてる。

「ふぅん。やっぱり一夏が入学したから追いかけてきたのか？」

「ぶっ、な、なんでそこで一夏が出てくるのよ！　別にあいつのことなんて何とも思ってないんだから！」

鈴は図星指されたようで咳き込む。昔から何回もアプローチしてスルーされたもんなぁ。

一夏もげてしまえ！

「そ、それに、ひろもいたし……」

ん？　途中からゴニョゴニョと声が小さくなって聞き取れない。

「ま、フォローは頑張るからしっかり捕まえろよ？」

「……そうね」

あれ？　急にぶすっと不機嫌になったな。

「それよりも！　一夏の隣にいたあの女は誰？」

感情の上下が激しいところも変わらないやつだ。

「あいつは篠ノ之箒。俺と一夏の幼なじみさ」

「幼なじみ？」

「あー、話してなかったっけ。箒は小四の時に引っ越したんだよ。鈴が小五の時来たから入れ代わりだな」

「ふぅん。じゃあ、ひろの隣にいた金髪ロールとはどんな関係なわけ？」

どうして俺のこともきくんだ？

なんか「付き合っているの？」って感じで不安そうに俺を見つめてるし。

「セシリアとはこの前決闘して、それから仲良くなった友達さ」

鈴は俺の答えにホッと安心した。そんなに危惧しなくても俺たちが友達なのは変わらないのにな。

「くしゅっ！」

やれやれ、まだ夜は肌寒いんだからもう少し暖かい格好しろよ。鈴はよく薄着をする。

少し体を震わせる鈴に制服の上着を被せた。

「今日はもう遅いし、部屋に戻れ。上着は明日返してくれればいいから」

「う、うん。ありがと」

鈴は少し頬を赤くさせて寮の部屋へ向かう。ん？　こちらに振り向いたな。

「今日会ったことは一夏には黙っててね、明日びっくりさせたいから」

「おう、わかった。おやすみ鈴」

「うんっ、おやすみ！」

今度こそ鈴は走って行く。なんかにやけてたなぁ。

ああ。明日一夏がびっくりする顔を想像したのか。

「さて、そろそろパーティーもお開きだろうから戻るか」

「いえーい！　のってるかーい！」

『のってる～！』

なんと、もう夜の九時なのに食堂ではまだパーティーが続いていた。

「ひろ……やっと戻ってきたか。―って、あれ？　上着はどうした？」

げっそりした一夏の隣に座る。

「んー、寒がりな猫に貸した」

「なんだそれ」

「明日になったらわかるさ」

パーティーは夜の十時まで続いた。

セカンド幼なじみの揺れる乙女心（後書き）

どうも宏明です

鈴「凰鈴音よ」

もう、何も言わないよ？　どうせ毎回違う娘が入れ代わりで来るだろうし。

鈴「遂にあたしが登場したわけだけど……これ、ひろ寄りになってない？」

まあ、ひろと絡んだ時はこんな感じで鈴は心が高鳴り、ひろ寄りへと進む。でも、そうじゃない時は一夏寄りに進んでいるのさ。

鈴「なんか言い訳くさー」

後は両方に嫉妬攻撃をするんじゃないかな？

鈴「大変な役割を与えられたわね。後さ、いつになったら斬艦刀出るわけ？　このままじゃタイトル詐欺よ」

慌てなさんなって、かっこよく斬艦刀を手にする予定だから。おそらく皆さんが予想してるあれな感じで出すから。

鈴「まあ、早く進めなよ？　今回ほとんど進んでないんだから」

頑張ります。

鈴「それじゃ次回も読んでね。読まないと龍砲ぶっ放すから」

毎回これで締めるつもりなのか？

ライバル

「ねぇ、転校生の噂聞いた？」

朝。席に着くなりクラスメイトが俺と一夏に話しかけてきた。

おそらく鈴のことだろう。もうすぐ来るだろうから知らない振りしとこ。

「転校生？　今の時期に？」

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

しかし、女子は噂をどこで仕入れてくるんだ？

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

一組のイギリス代表候補生、セシリア・オルコット。今朝もまた、腰に手を当てたポーズが似合う。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？　騒ぐほどの

ことでもあるまい」

窓側の最前列にある席に行ったはずの箒が、いつの間にか一夏の側にいた。さすがに箒も女子、噂には興味あるんだろう。

一夏たちの話しを聞き流し、窓側に顔を向けるとフェイトが俺を見ていた。

「ん？　俺の顔に何かついてる？」

「えっ！？　う、ううん、なんでもないよ！　それよりひろは転校生気にならないの？」

少し頬を赤らめ両手を振るフェイト。一夏たちの話しに参加しないことを疑問に思ったのだろう。きいてきた。

「まあ、俺はその転校生知ってるからな」

「――その情報、古いよ」

フェイトがびっくりして固まると同時に教室の入り口から声が聞こえた。ようやくご登場か。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝で

きないから」

肩に俺の上着を掛け、片膝を立ててドアにもたれている鈴。

「鈴……？　お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

一夏は少しびっくりして立ち上がり、鈴はふっと小さく笑みを漏らす。トレードマークのツインテールが軽く左右に揺れた。

「何格好付けてるんだ？　すげえ似合わないぞ」

「んなっ……！？　なんてこと言うのよ、アンタは！」

気取ったしゃべり方からいつも通りに戻る。しかし、再会計画失敗だな。一夏、軽く引いていたし。

「あ、ひろ、昨日はありがとね。はいこれ」

「おう」

鈴は俺の上着を投げ渡す。まだ着て1ヶ月も経ってないんだぞ？丁重に扱えよな。

「んだよ、昨日会ったんなら教えてくれてもよかったのに」

「悪いな。鈴がお前をびっくりさせたいって言ったから黙ってたんだよ」

「相変わらずだなー鈴は、びっくりしたぞ？」

「フフン、これで三人揃ったわね」

周りのざわめきを忘れ懐かしむ俺たちだが――。

「おい」

「なに？」

バシンッ！　一夏の呼び掛けに聞き返した鈴の頭に強烈な出席簿打撃が入った。――鬼教官登場である。

「もうＳＨＲ（ショートホームルーム）の時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

すごすごとドアからどく鈴。その態度は１００％千冬さんにビビっている。

「またあとで来るからね！　逃げないでよ、一夏、ひろ！」

いやいや、なんで俺たちが逃げるんだよ。

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

二組へ向かって猛ダッシュ。一夏はいつもと違うあいつに首を傾げる。

「ひろはアイツがＩＳ操縦者だったの知ってたのか？」

「いや、俺も昨日初めて知ったよ」

口に出して話してたのがまずかった。

「……ひろ、今の誰？　知り合い？　すごく親しそうだったけど？」

「ひ、ひろさん!?　あの子とはどういう関係で――」

箒は一夏にフェイトと同じような質問をぶつけ、それ以外のクラスメイトが流れに乗って質問の集中砲火。そして黒い閃光が閃く。

バシンバシンバシンバシン！

「席に着け、馬鹿ども」

千冬さんの出席簿が火を噴いた。

★

（さっきの女の子は何なのだろう……ひろとずいぶん親しそうに見えたけど……）

朝の一件が気になって、フェイトはなかなか授業に集中できなかった。

（ううん、私もあんな風に仲良くなりたいな……）

フェイトは少し内気な女の子だ。同性なら問題はないが、異性とはほとんど話す機会もなかったので、挨拶や短いやり取りしかできないでいる。

隣にいるひろをチラチラと見るが、ひろは全く気付かず真面目にノートを取っていた。

（はぁ……せっかくルームメイトになれて、オルコットさんよりも有利なのになぁ）

マリアナ海溝よりも深いため息。

入学前に起きたある事件のせいで自分のパートナーが傷ついた。そのせいで自分には専用機がない。

フェイトは首を横に振る。パートナーが傷ついたのは自分が弱いからだ。

（しっかりしろ私！　と、とりあえずお姉ちゃんがくれたアドバイス『既成事実』とかいうのを実戦すればいいよね？――あれ？　キセイジジツってどんなことなんだろう？）

フェイトは顔を渋らせては落ち込み、顔を赤く染める。

「テスタロッサ、今私は何と言った？」

「え？　は、はいっ？」

突然名前を呼ばれて、フェイトは素っ頓狂な声を上げてしまう。――そうだ、今は授業中。しかも山田先生ではなく織斑先生の時間なのだ。

「何と言った？」

「……き、聞いていませんでした……」

バシーン！　と小気味のいい打撃音が響いた。相変わらず頑丈な出席簿である。

★

「……」

教室の後ろの方では、セシリアがノートにシャーペンを走らせていた。しかし、書かれているのはおよそ意味のない線で、言葉にすらなっていない。

（なんなんですの、さっきの方は！）

最初は一夏と親しそうだったから等には悪いが敵じゃなくて安心したが、そうじゃなかった。ひろとも親しげな様子をみせて気になってしまう。

今のところひろの倍率は一夏と比べて低いのでライバルも少なく、唯一恋敵なフェイトは自分より奥手だからさほど警戒してない。

同じ代表候補生だが彼女は専用機を持っていない。おかげで一夏というお邪魔虫さえいなければ自分の独走だったのだ。

（それに、ひろさんのぬくもりに満ちた上着を着せてもらったなんて羨ましいですわ！）

セシリアは心の中で血涙が出そうなほど「きぃーっ！」とハンカチを噛む。

花も恥じらう十代乙女、少女漫画でやるような行為にものすごく憧れているのだ。

（わたくしのバカバカ。ひろさんに負けてからもう慢心しないと決めましたのに）

現状で満足気味だった自分をしかり、なんとかイニシアチブを取ろうと考える。これからライバルが増えるかもしれない。

ならどうすればいいのか？　簡単だ。フェイトや鈴を大きく突き放すほどの関係になればいい。それなら途中参戦されても問題はないから。

（ＩＳの模擬戦だけでは足りませんわ。もっとなにか、こう決定打になるような――）

「オルコット」

「……例えばデートに誘うとか。いえ、もっと効果的な……」

「……」

ばしーん！

ふんわりとしたブロンドの髪が、出席簿によって圧縮された。

★

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

「ひろのせいだよ！」

昼休み、開口一番箒とセシリアとフェイトが文句を言ってきた。

「「なんでだよ……」」

思わず一夏とハモってしまった。しかも俺は二人分だからなお辛い。

この三人、午前中だけで山田先生に注意五回、千冬さんに三回叩かれている。学習しようぜ。

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「そうそう。昼飯抜きは嫌だ」

「む……ま、まあ一夏がそう言うのなら、いいだろう」

「そ、そうですわね。行って差し上げないこともなくってよ」

「絶対教えてね？」

質問責めにあって昼飯抜きになることだけは免れた。
それにしても今日のフェイトは活動的だな。いつもは一歩下がった位置にいる感じなのに。

学食に着いて俺は券売機でチャーハンと青椒肉絲（チンジャオロース）を買う。
なにげにこの学食では世界中の料理が食べられるのだ。世界中から来る生徒達のためにそうなっている。
ちなみに一夏は日替わりランチ、箒はきつねうどん、セシリアは洋食ランチ、フェイトはハンバーガーセットを買っていた。
みんな、もっと色々メニュー試せよ。美味しいんだからさ。

「待ってたわよ、一夏、ひろ！」

どーん、と俺たちの前に立ちふさがったのは噂の転入生、凰鈴音だった。

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

一夏と鈴のせいで後がつかえ、後ろから早く進め。という念がひしひしと背中に感じる。

ようやく俺が頼んだチャーハンと青椒肉絲がきた。

「アンタはこっちに座りなさい」

うおっ！？　せっかく空気をよんで二人っきりにしようとしたら鈴の左側に座らせられる。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？　おばさん元気か？　いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタたちこそ、なにＩＳ使ってるのよ。

ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

一夏と鈴は楽しそうに話、俺は参加せずに黙々と青椒肉絲とチャーハンを食べてちらりと隣の席を見る。

「……」

箸がとてつもないくらい不機嫌な顔で鈴を睨む。

「ひろ、食べてばかりいないで加わりなさいよ」

「俺は食事中喋らない人間だけど」

じいちゃんが食事中喋らない人だったので俺も自然とそうなったのだ。

じー。

「アンタの青椒肉絲美味しそうね」

「ん？　欲しいなら少しやるぞ？」

鈴の表情がパァっと嬉しそうに変わる。実家が中華料理店だったからな、中華料理を好んで食べていた。

「ありがと。じゃあもらうわね」

鈴は自分の箸で俺の箸に挟まれた青椒肉絲を奪って食う。ハゲタカか、お前は。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですわ！　ひろさん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」

疎外感を感じてか、箒とセシリアが多少とげのある声できいてくる。他のクラスメイトも、興味津々とばかりに頷いていた。

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「そうだな。鈴は俺たちの幼なじみだよ」

「……」

「？　何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！」

いきなり鈴が怒った。一夏が変な誤解をしないよう気を使ったのに……変なやつ。

「幼なじみ……？」

怪訝そうな声で聞き返してきたのは箒だった。

「あー、えっとだな――」

一夏が説明を始め、その間に俺はチャーハンを平らげる。

「ふうん、そうなんだ」

鈴はじろじろと箒を見る。箒は負けじと鈴を見返していた。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

そう言って挨拶を交わすふたりの間で、火花が散る。久しぶりに修羅場をみたな。まあ、頑張れよ一夏。

「ンンンッ！　わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」

「……誰？」

「なっ！？　わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？　まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ……！？」

セシリアが怒りで顔を赤くさせる。

「い、い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

ふふんといった調子の鈴。相変わらずだな、妙に確信じみてるし、しかも嫌味ではない言い方をする。素で、そう思っているからな、こいつは。

箒は無言で箸を止める。セシリアは怒りでわなわなと震えながら拳を握りしめた。

それに対して、鈴は何食わぬ顔でラーメンをすする。

「一夏、ひろ」

青椒肉絲を食べ終え、お茶を飲んでいると声をかけられた。

「ふたりともＩＳ初心者でしょ？　だ、だからＩＳの操縦、見てあげてもいいけど？」

「それは助か――」

ダンッ！　一夏が答えようとして、テーブルが叩かれた×2。箒とセシリアがその勢いのまま立ち上がる。

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

「ひろさんにはわたくしが教えることになってますの！　後から出てきて何を図々しいことを――」

「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合いは長いんだし」

「ぬぬぬ……」

「くっ……」

ふたりは悔しそうに拳を強く握りしめ、鈴はどんぶりを持ってごくごくとスープを飲む。

「それよりさ、今日の放課後って時間ある？　あるよね。久しぶりだし三人でどこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

「あー、あそこ去年潰れたな」

「そ、そう……じゃ、じゃあさ、学食でもいいから。積もる話もあるでしょ？」

そうだな、俺は昨日話たし一夏と二人っきりにするチャンスだ。箒には悪いけど鈴の応援もしたいしなぁ……ああ、鈴も箒と同じく一夏に惚れてるんだよ。

「――あいにくだか、一夏は私とＩＳの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」

箒さんがそんなことを言うから一夏がびっくりしてる。

「そうですわ。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですもの。ひろさんも一緒にすると言ってましたから、専用機持ちのわたくしはひろさん、ついでに一夏さんの特訓に箒さんは欠かせない存在なのです」

さっきまでの劣勢（？）はどこへやら、一転攻勢に転じたふたりはここぞとばかりに俺らの特訓を持ち出す。

ていうかいつの間にか名前で呼び合うほどの中になったんだ？　あのふたりは。

「じゃあそれが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、一夏、ひろ」

ごくんとラーメンのスープを飲み干して、俺たちの答えも待たずに鈴は片付けに行ってしまう。そのまま戻ってくることもなく学食を出て行った。

（一夏だけならともかく、俺まで名指しされたら待つしかないじゃないか……）

「一夏、当然特訓が優先だぞ」

「ひろさん、わたくしたちの有意義な時間も使っているという事実をお忘れなく」

そしてこっちも断れる状況ではなかった。難儀だな、俺たち。一夏と一緒に深いため息を吐く。

★

「「え？」」

放課後の第三アリーナ。今日も一夏と一緒にセシリアからＩＳ操縦を教わる予定だったが、予想外のニューカマー×２にまたまた同時に間抜けな声を出してしまう。

「な、なにかな？　その、おかしい？」

「いや、その、おかしくはないけど……」

「テスタロッサさん!?　ど、どうしてここにいますの!?」

俺と一夏とセシリアの前にいるのは箒とフェイト。

しかも箒はＩＳ『打鉄（うちがね）』をフェイトはＩＳ『ラファールリヴァイブ』を装着、展開している。

打鉄は純国産ＩＳとして定評がある第二世代の量産型。ラファールリヴァイヴはフランスで開発された第二世代の量産型で、打鉄同様安定した性能を誇る機体だ。

そのことから多くの企業並び国家、当ＩＳ学園においても訓練機として一般的に使われている……以上、教科書の引用。

「どうしてもなにも、ひろの先生は私が先だよ」

まぁ、確かに。箒は一夏と既に特訓を始めたので救援は期待できそうにもない。

「私も代表候補生。例え量産機でもＩＳの操縦は得意だよ。それに、実弾兵器との訓練が足りてないでしょ？　私の出番だと思うな」

ラファールリヴァイブの機体デザインは兵士という感じで、色はモスグリーン。基本武装はハンドガンやライフルなどを装備している。

「それじゃぁ始めようか」

フェイトの右手にアサルトライフルが瞬時に展開されて顔付きが熟練の兵士に変わった。

こちらもダイゼンガーを展開し、鈍く光る銃口に備えると俺たちの間に閃光が横切る。

「お待ちなさい！　ひろさんのお相手をするのはこのわたくし、セシリア・オルコットでしてよ！？」

セシリアは『スターライトｍｋ３』でフェイトをロックオンしていた。

「あなたを先に倒すのが先決かな」

「訓練機ごときに遅れを取るほど、優しくはなくってよ！」

素早くトリガーを引いて超高速の弾丸を射出。

フェイトは急上昇で初弾をかわしアサルトライフルを撃つ。

――いきなりドッグファイトを始めやがった。はぁ……俺との訓練は中止かな。

「当たらないよっ！」

「ちょこまかと！」

……終わるまで待っていよう。なにか、鬼気迫るものを感じる。横やりを入れると瞬時に蜂の巣にされそうだ。

「ひろ！」

「何を黙って見ていますの！？」

「はぁっ！？　何を黙ってって……どちらかに味方したらお前ら怒るだろうが」

「当然だよ！」

「当然ですわ！」

じゃあどうしろと？　セシリアとフェイトの息ぴったりだし。

「……これじゃあらちがあかないね」

「なら先にひろさんを撃墜した方が正式な講師になりましょう」

「それ、いい考えだね！」

よくねえよ！？

って、ふたりともこちらをロックオンしてるし！

ぎゃあぁぁぁぁっ！？

数分間俺は地獄を見た。

★

「はぁ、疲れた」

セシリアとフェイトのリンチが終わり、一夏と箒が戻ったピットとは反対側に行った。

確かことわざで『一難去ってまた一難』というのがあるよな。

いや、なぜこんな話になるかと言うと……フェイトがルームメイトであることを秘密にしてたんだが、そのフェイトが「シャワー先に使っていいよ」って言った。

←

そこにセシリアが食い付いて同室なのがばれる。

←

ＩＳを再び展開したセシリアに追いかけ回され、最強の寮長（千冬さん）に捕まり説教と拳骨をもらう。

←

今部屋に戻るとこ。

になる訳だ。ちなみにセシリアは有名なお仕置き部屋に連れて行かれました。

「千冬さんの説教長いし」

おかげで夕飯食べ損ねた。とりあえず部屋にあるクッキーでも食おう。

「最っっっ低！　女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！　犬に噛まれて死ね！」

一夏と箒の部屋から涙目の鈴が出てきた。

「あ、ひろ……」

「どうしたんだ？　廊下まで響いてたけど」

「うっ、ひっく」

ちょっ、大粒の涙を流す鈴に焦る。

騒ぎに気付いた女子が出てきて、はたから見ると俺が鈴を泣かせたように見えるじゃないか。

「とりあえずこっちにこい」

俺の部屋に鈴を連れ込むことにした。

★

温かいホットミルクと甘さを少し抑えたサクサクのクッキー。

相変わらずひろの作るお菓子は美味しいわね。

ひろの部屋に連れて行かれクッキーを食べていた。

「落ち着いたか？」

「……うん。ありがと」

まだ一夏に約束を忘れられたことのショックが残っているけど少しましになった。

「何があったのか大体予想できるけど一夏とケンカしたんだろ？」

「そうよ。あのバカ、あたしとの約束ちゃんと覚えてなかったんだから」

小学の時、一夏とある約束をした。あたしは忘れたことなんか一度もなかったのに。

『料理が上達したら毎日あたしの酢豚を食べてくれる？』

つまり……将来はけっ、結婚しようという意味で言って、一夏は「ああ、食べてやるぜ」と言ってくれた。なのに……。

「モグモグ。なのにあのバカ、勘違いして『おごってくれる』って言ったのよ。ごくごく、ぷはぁ。だからビンタしてやったのよ」

愚痴をひろに吐き出したら少し楽になったかな？　そういえば前も

一夏とケンカした時や辛い事があるとこうやって相談にのってくれたなぁ。

「あーそういえばその頃一夏が嬉しそうに鈴が酢豚をおごってくれると話してたな」

は？　今なんつった？

「一夏がおごってくれるって言ったの？」

「ああ、多分一夏のことだから『毎日味噌汁を～』と思ったけど、んな訳ないか。と勘違いしてたんだな」

あ、ありえる。あのバカ一夏、『付き合って』を買い物に行くと勘違いしたことあったから。

「はぁ……なんかアホらしくなってきた」

しっかり反省して謝りに来たら許してやろう。皿に残ったクッキーを全部食べる。

そういえば今二人っきりよね。

ヤバイ。なんか急にドキドキしてきた。

「鈴」

「ひゃっ、ひゃい！？」

声がうわずっちゃった、恥ずかしい。

「ミルクのおかわりいるか？」

マグカップのホットミルクは空になっていた。

「あ……その、クッキーごちそうさま。また明日ねっ」

ボストンバックを掴んで部屋から出た。

★

何で鈴は顔を少し赤くさせていたのだろう？

「……まぁいっか。元気になったし」

結局作っておいたクッキー全部食べられたし今日は何も食わずに寝るか。

「ただいま」

フェイトが帰ってきたみたいだ。その手にはバスケットがある。

「織斑先生に捕まって夕飯食べてないと思ってサンドイッチ作ってきたんだ」

「本当か！　助かるよ」

サンドイッチが入っているバスケットを受け取りハンカチをどかす。

美味しそうなサンドイッチがあり、タマゴサンドを食べる。

「美味い！」

「良かった。口にあって」

フェイトは嬉しそうにはにかんでいた。

翌朝。人が集まっている場所があった。

「なんだ？　校内新聞にとんでもないニュースでもあったのか？」

人を掻き分け問題の場所に行くと一夏と箒もいる。

「ひろ、クラス対抗戦の予定表なんだが……」

そこにはこう書かれてあった。

『5月〇日にクラス対抗戦（リーグマッチ）を行う。〇回戦・織斑一夏対凰鈴音……』

まぁ、一組と二組が戦うのは別にいい。問題なのは少しでかく書かれている文字だ。

『なお、今回は特別に特別戦（エキシビションマッチ）を最初に行う。対戦表は以下の通りで

ある。

西本宏範
対
凰鈴音……』

ライバル（後書き）

どうも宏明です

箒「篠ノ之箒だ」

おや？　珍しいね、ここに来るなんて。

箒「私の出番が少ないからだ。幼なじみだぞ」

箒さんは一夏のヒロインだからね。ひろ中心のここじゃあまり出ない。

箒「そ、そうかそうか。私が一夏のヒロインかぁ……。悪くないな」

それで今回は各ヒロインたちが主に奮闘する話でした。

箒「鈴はどっちが好きなんだ？　私としてはライバルは少ない方がいい」

今のところは一夏寄り。だから部屋に押し掛けたり約束を持ち出したりしたのさ。

箒「そうか。私より長い付き合いだから強敵だ」

箒さんはひろのことはどう思ってるの？

箒「友達だ。まぁ……一夏より先に出会っていたらわからないが……うん。ひろは同じ剣の道を進む戦友だな」

ちなみに私は一夏×箒派です。

箒「そうかそうか、お似合いか。えへへ……っと、そんなことより次回はクラス対抗戦だな。何やら特別戦をするようだが」

今のひろじゃアリーナのバリア斬れないし、やっぱり主人公だから戦わせたいと思いまして。

箒「ひろなら鈴といいところまで戦えるだろう。一夏よりは強いし」

さらにあの人も登場予定。ヒントは『一人不思議の国のアリス』

箒「……もう答え言っているようなものだろ。私はあの人が嫌いだ」

あの人は箒のこと大好きなんですけどねー。それでは今回はここまで。

箒「次回も読んでくれ。私はあまり出ないがな。読まなければ篠ノ之流剣術の錆にしてやろう」

怖い人ばっかりだ。

特別戦！（エキシビションマッチ）

クラス対抗戦当日になった。

本来ならクラス代表じゃない俺がいるのはおかしいのだが、セシリアに勝ったのがまずかったらしい。

イギリスを始め各国が俺の戦いを観たいと言った。

それでこの特別戦なのだ。相手は鈴。

噂の新入生同士の戦いとあって、アリーナは全席満員。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされていた。会場入りできなかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞するらしい。

（やれやれ。せっかく一夏に代表譲ったのに俺が鈴と戦うことになるとはな）

俺の視線の先では、鈴とそのＩＳ『甲龍（シェンロン）』が試合開始のときを静かに待っている。

ブルー・ティアーズ同様、非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が特徴的だ。肩の横に浮いたスパイク・アーマーが、やたら攻撃的な自己主張をしている。

ちなみにダイゼンガーの肩部分も非固定浮遊部位であるが、こちら

はただの飾り。見た目で相手にプレッシャーをかける以外役に立ちそうもない。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促されて、俺と鈴は空中で向き合う。その距離は五メートル。俺と鈴は開放回線（オープン・チャンネル）で言葉を交わす。

「ひろ、あんたと戦う日がくるなんて思わなかったわ」

「そうだな。鈴でも容赦はしないから……全力で来い」

左腰にある接近ブレードの鯉口を切る。

「一応言っておくけど、ＩＳの絶対防御も完璧じゃないのよ。『シールドエネルギーを突破する攻撃力』があれば、本体にダメージを貫通させられる」

知ってる。この前も危うくセシリア本人を傷つけてしまうような攻撃をしたからな。

簡単に言うと、スパロボ伝統『力押しでのバリア貫通』がＩＳにもあって、俺の斬撃はこれに当てはまる。

「なら鈴、俺も言っておこう。俺に断てないものはない」

鈴が唾をごくりと飲む。表情は今まで見たことがない戦士の顔。ＩＳ操縦者……代表候補生は軍隊での訓練も経験済みだからな。一夏よりも骨が折れそうだ。

「ふんっ、ＩＳの操縦はあたしの方が強いんだから格の違いをみせてあげる」

鈴の挑発的な笑み。

上等だ。数週間ぶりに本気の一撃を出せそうだ。

『それでは両者、試合を開始してください』

ビーッと鳴り響くブザー、それが切れる瞬間に俺と鈴は動いた。

ガギィンッ！！

抜刀した接近ブレードで鈴が持つ異形の青竜刀――と呼ぶにはあまりにもかけ離れた形状――ごと後ろへ弾き飛ばす。

鈴は三次元躍動旋回（クロス・グリッド・ターン）を使い体勢を立て直す。

「まさかあたしが初撃で弾かれるなんて、けど――」

青竜刀――検索、『双天牙月（そうてんがげつ）』をもう一本展開し、柄部分を組み合わせてバトンのように回す。

「くっ、なかなかやるな」

しかも縦横斜めと鈴の手によって自在に角度を変えつつ、高速回転させながら斬り込んでくるのでこちらの得物を弾かれないよう捌くのに苦労した。

（ここは一度距離を取った方がいいか）

「――甘いっ！！」

ばかっと鈴の肩アーマーがスライドして開き、中心の球体が光る。

ぞくりと背筋に寒気が走った瞬間、とっさに接近ブレードを盾のように出して俺は目に見えない衝撃に『殴り』とばされた。

直撃は防いだものの、衝撃の余波で少し痺れる。

「今のはジャブだからね」

にやりと不敵な笑みを浮かべて、再び肩の中心部分が光る――！

ドンッ！！

「ぐっ――！？」

これもなんとか防いだが、見えない拳に殴られた接近ブレードからミシミシと嫌な音がした。

★

「なんだ？　ひろが急に後ろへとばされたように見えたけど」

俺と箒、セシリアはピットからリアルタイムモニターを見ていた。俺の疑問にセシリアが答えてくれる。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す――」

なんつうものを持ってんだよ。俺だったら間違いなく食らってた。

「ひろさん……」

セシリアが心配そうにモニターを見て、胸元で手を合わせている。

「ひろなら大丈夫だって。俺よりも強いし、さっきから衝撃砲防いでるしさ」

少しでも安心させようと声をかけたが、セシリアの耳には届いてなかった。

★

「よくかわすじゃない。衝撃砲《龍咆（りゅうほう）》は砲身も砲弾も目には見えないのが特徴なのに」

そう、その通りだった。砲弾が目に見えなくて、砲身までも見えないのは避けるのに一苦労だ。

あの肩アーマーを中心に真上真下はもちろん、真後ろまで展開して撃ってくる。

直線しか撃てないのが幸いだな。

ダイゼンガーのおかげで空気の流れを感じれるから撃つタイミングさえ分かれば避けるのは容易い。

だけど二度目を防いだ時、接近ブレードにひびが入った。もう刀としての役割は果たさないだろう。

「ふっ」

もう詰み間近だというのに自然と笑いが込み上げてくる。

「な、なによ急に笑い出して、遂に頭おかしくなったの？」

「いや、鈴とこうやって全力で戦えるのがなんか楽しくってさ。そういえば前にも似たような状況があったよな」

鈴はその時のことを思い出したのか悔しそうな表情をした。

「そうね。主人公みたいなチートドローでカード引きまくってあたしの究極竜騎士（マスターオブ・ドラゴンナイト）を倒し逆転した。だけどあの時のような奇跡、二度も起きないんだからね！」

鈴はバトンのように双天牙月を一回転させて構え直す。

ちなみに先ほどの会話はデュエルモンスターズというカードゲーム

の話。

俺は衝撃砲が火を吹く前に距離を詰めようと加速体勢に入った。

ダイゼンガーの武器は接近ブレードだけじゃない。『瞬間加速（イグニッション・ブースト）』が本当の武器だ。

これのおかげでセシリアに勝てたし、白式の『バリア無効化攻撃』がなくてもバリアを打ち破るほどの一撃をくり出せる。

「はあぁぁぁぁっ！」

残像が生まれるほどの速さで加速し、接近ブレードの鞘を振り下ろそうとした。

ズドオオオンッ！！

「！？」

鈴に鞘が届く一歩手前、突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

鈴の衝撃砲――ではない。範囲も威力も桁違いだ。

しかもステージの中央からはもくもくと煙が上がっている。どうや

らさっきのは『それ』がアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきた衝撃波らしい。

『ひろ、試合は中止よ！　すぐにピットに戻って！』

鈴からプライベート・チャンネルが飛んできた。

しかし、俺たちが後退を始める前にＩＳのハイパーセンサーが緊急通告を行う。

――ステージ中央に熱源。所属不明のＩＳと断定。ロックされています。

「どうやらあちらさんは俺たちを見逃してくれないようだ」

アリーナの遮断シールドはＩＳと同じもので作られている。『それ』を貫通するだけの攻撃力を持った機体が乱入、こちらをロックしている』

つまり、ピンチというやつだな。

『ひろ、早く！』

「鈴は先に逃げろ。ヤツは俺が足止めしておく」

初めての相手との回線の開き方がわからないから普通にオープン・

チャンネルで話す。

「馬鹿！　あたしはもうあの時とは違う。今はアンタより強いんだから！」

まぁ……たしかに今はＩＳがあるけど、それでもこういう事態は俺の専門分野だ。

「それにこんな異常事態、すぐに学園の先生たちがやってきて収拾――」

「ちっ！」

接近ブレードを一瞬光った場所に投げつけ鈴の体を抱き抱えてさらう。

その直後にさっきまでいた空間が熱線で砲撃された。

投げた接近ブレードは一瞬だけビームを切り裂き消滅。これで完全にシールドを打ち破る手段がなくなった。

「ビーム兵器か……。セシリアのＩＳより出力が上だな」

ハイパーセンサーの簡易解析でその熱量を知った俺は冷や汗をかく。

「ちょっ、ちょっと、馬鹿！　離しなさいよ！」

「こらっ、暴れるな。――いていて！」

「う、うるさいうるさいうるさいっ！」

ダイゼンガーのバリアが普通より弱いから少し痛い。なので速射砲のごときパンチが地味に効く。

「だ、大体、どこ触って――」

「！　来るぞ！」

煙を晴らすようにビームの連射が放たれる。

それをかわすと、その射手たるＩＳがふわりと浮かび上がり姿を現す。

「ロボット……？」

深い灰色をしたそのＩＳは手が異常に長く、つま先よりも下まで伸

びている。しかも首が無い。肩と頭が一体化しており、全身が装甲に覆われていた。

通常、ＩＳは部分的にしか装甲を形成しない。なぜか。必要ないからだ。防御はほとんどがシールドエネルギーによって行われる。まぁ、ダイゼンガーにはなぜか飾りの装甲があるがな。

それにしても肌が一ミリも露出してないＩＳは見たことない。

しかもヤツは異様にでかい。腕を入れると二メートルを超えるほどの巨体で、姿勢を維持するためなのか全身にスラスター口が見て取れる。頭部には剥き出しのセンサーレンズが不規則に並び、腕には先ほどのビーム口が左右合計四つあった。

「……」

何も喋らず、ハイパーセンサーでもヤツの息づかいが確認できない。本当に人間が動かしているのか？

『西本くん！　凰さん！　今すぐアリーナから脱出してください！　すぐに先生たちがＩＳで制圧に行きます！』

割り込んできたのは山田先生だった。心なしか、いつもより威厳がある。

「――いや、先生たちが来るまで俺たちで食い止めます」

ヤツは遮断シールドを突破してきた。ということはつまり、今ここで誰かが相手をしなくては観客席にいる人間に被害が及ぶ。幸いヤツは今のところ俺たち以外に興味を示してなかった。

「いいか？　鈴」

「だ、誰に言ってんのよ。そ、それより離しなさいってば！　動けないじゃない！」

「と、悪い」

俺が腕を離すと、鈴は自分の体を抱くような格好で離れる。一夏じゃないからって、露骨にイヤそうにされると傷つくな。

『西本くん！？　だ、ダメですよ！　生徒さんにもしものことがあったら――』

言葉はそこまでしか聞けなかった。敵ＩＳが体を傾けて突進してきたのをかわす。

「ふん、向こうはやる気満々みたいね」

「みたいだな」

鈴は俺の横に並び得物を構えた。

「ひろ、武器はどうしたのよ?」

「あー、さっきのビームでお亡くなりになった」

「はぁっ!?　まったく、ドジね。あたしの貸してあげるから前衛は譲ってあげる」

「助かるよ」

分離させた双天牙月の一つを受け取る。

「んじゃ、いくぞ」

キンッと武器の切っ先を当てる。それを合図に俺と鈴は即席コンビネーションで飛び出した。

★

「もしもし！？　西本くん聞いてます！？　凰さんも！　聞いてますー！？」

山田先生が大声を出して焦っていた。はたから見ると危ない人に間違えられそうだ。

「千冬姉！　すぐにひろと鈴を助けないと！」

「わたくしと一夏さんにＩＳ使用許可を！　すぐに出撃できますわ！」

そうだ。いくら二人が強くても、アリーナのバリアを破壊できるヤツなんて危険すぎる。

「そうしたいところだが、――これを見ろ」

千冬姉がブック型端末の画面を数回叩き、表示される情報を切り替える。それには第二アリーナのステータスを出していた。

「遮断シールドがレベル４に設定……？　しかも、扉がすべてロックされて――あのＩＳの仕業ですの！？」

「そのようだ。これでは避難することも救援に向かうこともできないな」

落ち着いた調子で話す千冬姉だが、よく見るとその手は苛立ちを抑えきれないばかりにせわしなく画面を叩いている。

まてよ……、アリーナのバリアはＩＳのと同じはずだ。なら、白式の『零落白夜』でバリアを無効化出来る。それに――。

リアルタイムモニターに映るひろが鈴の青竜刀で斬りかかる。だけどあのＩＳのバリアは強固で全くダメージを与えられないでいた。

（俺ならあのＩＳのバリアも無効化出来る）

もしかしたらアリーナのバリアで尽き果てるかもしれないけど、それでも二人を助ける手助けにはなるはずだ。

「一夏」

セシリアが千冬姉と話してるうちに行こうとしたら箒の手が俺の腕を掴む。

「箒……俺は」

「わかっている。必ず……必ず無事に帰ってこい。私は」

「大丈夫だ。二人を連れてくる。信じろ」

頭を軽く撫でると箒は頷き手を離す。

「織斑くん!?　どこに行くんですか！」

山田先生に見つかったけどその声を無視して第二アリーナへ走る。

（俺は……千冬姉を、箒を、鈴を、ひろも、関わる人すべてを――守るって決めたんだ！）

★

「まったく、あの大馬鹿者が」

走り去った一夏を見て深いため息を吐く千冬。

「オルコット」

「は、はいっ！？」

自分もこっそりと一夏の後を追おうとして呼び止められたセシリアはビクッと止まる。

「あの馬鹿が無茶しないよう監視に行け」

「え？……あ、はい。お任せくださいな！」

数秒の間キョトンとしたが、千冬が何を言っているのか理解して第二アリーナへ向かう。

「……そのにやけた顔はなんだ？」

先ほどまであわてていた山田真耶がいつの間にか落ち着きを取り戻しニヤニヤと千冬を見ていた。

「ふふ、弟さんのことが心配なんですね。だからオルコットさんを――」

「……」

イヤな沈黙。イヤな沈黙だった。何かまずいことが起きる気がして、真耶は話を逸らそうと試みる。

「あ、あのですねっ――」

「山田先生は甘ーいコーヒーがお好きでしたよね？」

千冬はテーブルに置いてあったカップを手に取り、『塩』と書かれた白い粉をズサササーと一気にそそぐ。

「あ、あの……それ塩なんですけど」

何故塩があるのかわからないが真耶の顔は真っ青に変わり、千冬はスプーンで掻き回してから涙目の真耶にコーヒー（超塩）を渡す。

「どうぞ」

「い、いただきます……」

「熱いので一気に飲むといい」

悪魔がいた。

★

「ちっ！」

謎のＩＳに袈裟斬りを叩き込むが、腕を斬り落とすことも出来なかった。

思った以上にヤツのバリアは硬い。

瞬間加速の勢いを付ければ何とかなりそうだがヤツは見た目に反して素早いので隙が大きい攻撃は当てるのが難しかった。

「ひろっ、離脱！」

「またかっ！」

敵は攻撃を避ける、もしくは防ぐと反撃に転じてくる。

しかもその方法が無茶苦茶だ。長い腕をぶんぶんとコマのように振り回しながら接近して来たり、高速回転状態からビーム砲撃を撃つのだから手に負えない。

「あああもうっ、めんどくさいわねコイツ！」

鈴が焦れたように衝撃砲を展開、砲撃を行う。――がしかし、敵の腕はその見えない衝撃を叩き落とす。

もう七回目のトライだ。

なんとか俺は鈴の支援があって敵の射程距離から抜け出した。

（それにしてもなんでアイツはさっきから同じ動きしかしない？まるでそう動くようプログラムされたみたいに正確無比な動きだ）

こんな化け物じみたＩＳを作ったのはどこのどいつだ？

「そういえば一人だけ心当たりあるな」

『呼んだ？　ひーくん』

いきなりどこかからプライベート・チャンネルが接続された。

「え？　その声、もしかして……束さん！？」

六年前に失踪して以来聞いてないけど、当時と変わらない篠ノ之束の声が聞こえる。

『そうだよー。ひーくんの現地妻一号の束さんだよ♪』

意味わかって言ってます!?

『どうやらピンチみたいだねぇ。なんなら束さんが悪い子をおっぱらってあげるよ?』

エスパーなのか？　それとも某怪盗みたいに変装してるんじゃ。

『ひーくんのことは３６５日二十四時間ずーーーっと見てるからなんでもお見通しなのさ』

まさかのストーカー宣言。ってのんきに話してる場合じゃない。こちらにきたビームを避ける。

「すみませんがお気持ちだけで十分です。あれは俺が倒す」

あの程度の中ボスに勝てないんじゃ、千冬さんを超えるなんて夢のまた夢だ。

『フフフ、そういうところは全然変わらないね。そんなひーくんに

は私からプレゼントだよ♪　ひーくん専用の絶対に折れない剣、全てを断ち斬る斬艦刀を』

刹那、謎の乱入者と同じように何かがバリアを突き抜けて俺の前に落ちてきた。

「今度は何!?　また敵襲!?」

突然の出来事に乱入者は動きを止めて俺の方を観察。

砂煙が流れ過ぎて、目の前には一振りの刀が地面に突き刺さっていた。

「俺の……剣」

柄を握り引き抜く。

どことなくじいちゃんが昔持っていた刀に似ている。じいちゃんはある人に預けたと言っていたな。

『今度はお城みたいなホテルで一夜を過ごしたいな。それじゃぁまったね～!』

ちょ、不吉な言葉を置いて行かないでくださいよ!

どんだけ呼びかけても束さんからの応答は帰ってこなかった。

――特殊接近ブレード・『獅子王』登録。斬艦刀モードを発動しますか？

「よくわからないが発動」

刀の鍔部分が左右に開き、液体状の金属が流れ出て刀身を中心に両刃を形成。大剣に変わった。

なるほど、これならアイツだろうが戦艦だろうが真っ二つに出来そうだ。

「なによそのばかでかい剣は」

鈴と合流して双天牙月を返す。

「俺とダイゼンガーの魂さ」

「よくわかんないけど凄そうね。で、アイツを倒せるわけ？」

痺れを切らし撃ち込まれたビームを獅子王で切り払う。

「ああ。次でヤツを仕留める」

さぁ、幕引きといこうか。

特別戦！（エキシビションマッチ）（後書き）

どうも宏明です

フ「フェイト・テスタロッサです。あの、私はリリカルなんとかとは違いますから」

ほとんど同じですけどねー。

フ「私、今回全く出番なかったよ？　どこにいたのかな？」

観客席のどこか。
それで、ようやくクラス対抗戦の話ですよ。

フ「篠ノ之博士が出たよね。なにかなあれ？　フラグ立っているの？　現地妻ってなに？　むっころしていいかな？」

落ち着けー！　フォークを順手で持つな、怖いから。

束はひろにフラグ立てられた記念すべき一人目（笑）

フ「よし、明日からシャワー浴びたらバスタオル一枚で出よう」

フェイトさんは妄想の世界へと逝ってしまった。
ま、ようやく専用武器が登場！
次回、ひろが斬艦刀振り回します。
フ「それより私の専用機はどんなものなの？　やっぱりリリカルなんとか風？」
戻ってきた！　いや、スパロボの機体にしようと思う。候補は以下の通りだ。
ヴァルシオーネ
ズィーガーリオン
ヒュッケバイン
フ「どれも強そうだね」
どれに決まるかは学年別トーナメントまでのお楽しみってことで。
フ「次回も読んでね？　読んでくれないとさみしいな」

いや、だからフォークを順手で持つなよ。

届け！　雲燿の速さまで！（前書き）

ようやく原作一巻分が終わります。

ひろ「なになに？　このカンペを読めばいいのか？
それじゃ言うぞ。

我が名は西本宏範。悪を断つ剣なり！」

そう言って斬艦刀を持つひろは八相の構えを取った。

それではお楽しみください。

届け！　雲燿の速さまで！

「……鈴、あとエネルギーはどのくらい残ってる？」

「１８０ってところね」

これは攻撃分を考えないエネルギー……つまり、ゲームでいうＨＰのことだ。

俺は１００くらいあるがこのままでは先にこちらのエネルギーが尽きる。

少しでもヤツの動きを完全に止められれば獅子王でシールドごと真っ二つに出来るけど、今の俺らでは無理だな。

「ところでさ、アイツの動きって機械じみてないか？」

「ＩＳは機械よ」

「そうじゃなくてだな。んーと……あれって本当に人が乗ってるのか？」

「は？　人が乗らなきゃＩＳは動かな――」

とそこまで言って鈴の言葉が止まる。

「――そういえばアレ、さっきからあたしたちが会話してるときってあんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるみたいに聞いてるような……」

思い返すように鈴が今までの戦闘を振り返る。その顔はいつになく真剣だ。

「ううん、でも『無人機なんてあり得ない。ＩＳは人が乗らないと絶対に動かない』そういうものだもの」

たしかに教科書ではそう書かれていた。ＩＳは人が乗らないと動かない。

だが、この世に絶対は無い。なんせ女しか動かせないはずのＩＳを俺と一夏は動かしたのだから。

それに人工頭脳で動くロボットはＩＳが登場する前から存在している。

「仮に、仮にだ。無人機だったらどうだ？」

「なに？　無人機なら勝てるっていうの？」

「ああ。『人が乗ってないなら容赦なく全力で攻撃しても大丈夫』だしな」

いくら絶対防御があるといっても、俺の攻撃は一夏と違ってシールドごと相手を斬るものだ。下手すると操縦者ごと真っ二つにする危険がある。

だから今まで頭や首、心臓など急所になる箇所は外していた。

だけど無人機なら最悪の事態を想定しなくてもいい。

「そんなバカでかい剣、当てられるの？」

「当てるさ、必ず」

獅子王にはビームを切り裂く力がある。それにヤツがビームを撃ち終えた後、五秒間隙が生まれる。そこを突けば……。

「うおぉぉぉっ！！」

突如アリーナに知った声が響く。

ピットがある場所のシールドバリアに切れ目が入っており、そこから白式を装着した一夏が飛び出して敵ＩＳに雪片弐型を振り下ろす。
もちろん零落白夜が発動している。

「あの馬鹿っ！」

ダイゼンガーの背中と脚部装甲を展開して瞬時加速。
敵ＩＳは右側のスラスターを吹かし時計回りに回転することで雪片弐型を避け、そのまま裏拳を一夏に叩き込もうとする。

ガギンッ！！

ギリギリ獅子王で敵ＩＳの腕を受け止めた。

「ひろ……」

一夏が飛び出して来た場所から四つのビームが敵ＩＳに迫る。
敵ＩＳは持ち前の機動性で全てかわす。

「ひろさんっ！　ご無事ですか！　怪我などはしてませんか！」

ブルー・ティアーズを装着したセシリアが一夏を蹴り飛ばし左手を掴む。

「ご無事でなによりですわ。わたくしが来たからにはもう大丈夫。あの程度の敵など一捻りですわ」

「ははは。まあ、来てくれて良かったよ。これでヤツに勝てるピースは揃った」

一夏の雪片弐型とセシリアのブルー・ティアーズがあれば確実にヤツの動きを止めてバリアを消せる。

「いつまで手握ってんのよ！」

うおっ！？　鈴が俺たちの間に双天牙月を割り込ませた。セシリアはびっくりして手を離す。

「凰さん！　いきなりなにをなさいますの！」

「うっさい！　まだ戦いの途中なのよ。時と場所を考えなさい！」

「まあまあ、落ち着けって」

一夏が鈴をなだめてケンカにはならずに済んだ。

「それでひろさん。あのＩＳに勝てるとおっしゃいましたけど」

「ああ、お前ら少し耳を貸せ」

敵ＩＳが興味深そうにこちらを観察してる間に思いついた作戦を小声で話す。

「……ひろにしちゃ中々の作戦じゃない」

「ですが、一夏さんが危険ですわよ」

「大丈夫だって、丈夫なのが俺のとりえだから」

セシリアが若干渋るものの、俺の作戦でいくことに決まった。

★

「それじゃ、いくぞ！」

「了解ですわ！」

ひろが敵ＩＳに突っ込む。

「電光石火！」

身の丈以上あった大剣を大太刀に変えて鋭い突きを放つ。

剣先から見えない何かが出て、敵ＩＳがふらつく。

「逃がしませんわ！」

セシリアはブルー・ティアーズで四方を囲み掃射。

ひろとの連携で完全に敵ＩＳの逃げ道を塞ぎ釘付けにした。

「一夏、次はあたしたちの番よ。しっかり決めなさい。失敗したら駅前のおいしいパフェを奢ってもらうから」

「それは意地でも当てないとな。俺の懐は寂しいんだ」

鈴は両腕を下げ、肩を押し出すような格好で衝撃砲を構える。

最大出力砲撃を行うため、補佐用の力場展開翼が後部に広がった。

そして俺は、その射線上に躍り出る。

作戦はまず、ひろとセシリアが敵ＩＳの動きを止めてその間に鈴が衝撃砲を撃ち出し、それを背中に受けた俺が『零落白夜』を全力で使用。ヤツを守っているシールドバリアを消す。最後にバリアを失った敵ＩＳをフルボッコという簡単なものだ。

「あたしの力、受け取れぇ！」

ドンッ！　と背中に巨大なエネルギーの塊がぶつかるのを感じる。衝撃砲の弾丸だ。みしみしと体がきしむ音を聞きながら、俺は――加速した。

「――オオォッ！」

右手の『雪片弐型』が強く光を放つ。中心の溝から外側に展開したそれは、一回り大きいエネルギー状の刃を形成していた。

――【零落白夜】を使用可能。エネルギー転換率９０％オーバー。

その情報を聞くではなく理解していた。ＩＳに初めて触れた時にも感じた一体感。世界自体を把握できるようなクリアーな五感。集中力が数十倍にも跳ね上がったかのような高解像度の意識。そしてなにより、全身から湧き立つような力を感じる。

目の前にいたひろが一瞬で空に消えて、必殺の一撃は敵ＩＳの右腕を切り落とした。

しかし、その反撃で俺は左拳をモロに受ける。さらに接触面から熱源反応。ゼロ距離でビームをたたき込むつもりらしい。

だが敵ＩＳは急に標的を俺から上に変えた。

★

一夏が瞬時加速で来るの見て空へ跳ぶ。

一瞬で地上２００メートルまで上がり獅子王を再び斬艦刀モードに展開する。肩に担ぎ敵ＩＳに向かって瞬時加速。

――警告！　ロックされています！

敵ＩＳが最大出力形態（バースト・モード）に変形させた左手で俺を狙う。

「チェストオオォッ――！！」

――斬！！

ヤツが俺を撃つよりも速く獅子王を唐竹に振り下ろし頭から縦に断つ。ビームは空の彼方へ消えた。

「我が斬艦刀に……断てぬものなし」

真っ二つになった敵ＩＳが火花を散らしながらゆっくりと左右に分かれて倒れる。

「やったなひろ！　すげぇ一撃、だった……ぜ」

少し離れた場所に尻餅を着いていた一夏が倒れた。

「「一夏！！」」

★

私、フェイト・テスタロッサは無力だ。

想い人が死闘を繰り広げてるというのに私は……ただ客席から見守ることしかできなかった。

（私最低だ。セシリアや凰さんがいなくなればいいなんて思ってる）

無人の第三アリーナに立つ私の髪を風が優しくなびかせる。

「私にも力があれは彼の隣に立てるのかな？」

彼はそんなこと気にしない。優しいから。だけど今の私じゃセシリアと凰さんにはかなわない。

――♪

携帯電話に着信が入る。

通信相手はアメリカのラボにいる姉さんからだ。

「もしもし？」

『ヤッホーフェイト、久しぶり。元気にしてたかな？』

私の姉さん、アリシア・テスタロッサ。１０歳も年上の姉はアメリカのＩＳ科学者。

「うん……元気、だよ」

『……やっぱり何かあったんだね』

どうしてわかるのだろう。

『クス、だって私はお姉ちゃんだから』

そういえば織斑先生も一夏のこと顔を見るだけで何考えているかわかってたなぁ。

『気になる男の子を狙うライバルに負けてるとみた』

「うっ！」

プライバシーなんか関係無しに全て見透かされてる。

『そんなフェイトに朗報だよ。あの子の修理が終わったの。前よりパワーアップさせたから調整が必要だけどね』

空いてる左手をぎゅっと握る。またあの子と空を飛べると思うとすごく嬉しい。

『もう飛行機の手配はしてるから今夜には出発してね。それじゃ待ってるよ～』

「えっ！？　今日！？　そんないきなりっ、姉さーん！」

通信は既に切られており、私の声がアリーナに響いた。

★

学園の地下５０メートル。そこにはレベル４権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。

機能停止したＩＳはすぐさまそこへと運び込まれ、解析が開始された。それから二時間、千冬は何度もアリーナでの戦闘映像を繰り返し見ている。

「……」

室内は薄暗く、ディスプレイの光で照らされた千冬の顔は、ひどく冷たいものだった。

「織斑先生？」

ディスプレイに割り込みでウインドウが開く。ドアのカメラから送られてきたそれには、ブック型の端末を持った真耶が映っている。

「どうぞ」

許可をもらってドアが開くと、真耶はいつもよりも幾分きびきびとした動作で入室した。

「あのＩＳの解析結果が出ました」

「どうだった？」

「はい。あれは――無人機です。まあ……西本くんが見事に真っ二つにしましたから調べることなく分かりましたけど」

真耶が苦笑しながらそう口にすると千冬も苦笑した。内部構造をスキャンする必要がないくらい綺麗に切断されていたからだ。もし人が乗っていたらと思うと真耶は体を震わせる。

「どのような方法で動いていたかは不明です。修復は無理かと」

「コアはどうだった？」

「……それが、登録されていないコアでした」

「そうか」

やはりな、と続ける。どこか確信じみた発言をする千冬に、真耶は怪訝そうな顔をする。

「何か心当たりがあるんですか？」

「いや、ない。今はまだ――な」

そう言って千冬はまたディスプレイの映像に視線を戻す。それは教師の顔ではなく、戦士の顔に近かった。

かつて世界最高位の座にあった、伝説の操縦者。その現役時代を思わせる鋭い瞳は、ただただ映像を見つめ続けていた。

★

保健室で良い雰囲気の一夏と鈴の邪魔をしないよう先に部屋へ戻る。

「ただいま」

部屋には荷物をまとめているフェイトがいた。

「あ、お帰りなさい。一夏のお見舞いには行かなくていいの？」

「あいつがあの程度でくたばるわけないのは知ってるからな。それに人の恋路を邪魔して馬に蹴られたくないし」

フェイトはクスリと笑う。「二人は凄い仲良しなんだね。焼けちゃうなぁ……」とつぶやく。俺にＢＬの趣味はない。

「それよりどうしたんだ？　荷物まとめて」

まるでこの部屋から去るみたいな感じだ。

「うん、本国にある私の専用機がようやく修理終わって取りに行くことになったんだ。今日出発なの」

「急だな。寂しくなるな」

なにげにこの部屋、一人だと広く感じるんだよなぁ。

「来月の学年別個人トーナメントまでには帰ってくるよ」

「そっか、どんなＩＳがフェイトのパートナーか楽しみにしてる」

フェイトを学園の入り口まで見送り、途中で会ったセシリアと夕飯を食べてから部屋へ戻る。

時刻は夜の９時。一夏の部屋に俺はいた。同居人の箒は別室へ引っ越した。

山田先生に俺たちを同室にしないのかと質問したら、今度転校生がくるらしい。

もしかしたら俺か一夏のどちらかがまた女子との同室になるかもしれないとのこと。

「なぁひろ……」

「何？」

ユニコーンガンダムの小説を読むのを中断して一夏に視線を移す。

「鈴の両親……離婚したんだってさ」

「……そうか」

俺は知ってる。中2の終わり頃、偶然鈴の中華料理店を通りすがり、おばさんと親父さんがケンカしてるのを見た。

泣いていた鈴を元気付けていたからよく覚えている。鈴は黙っていてと言ったので一夏には知らせなかった。

「家族ってなんだろうな……」

一夏の心に暗い影が差している。俺も一夏もあの夫婦とはそれなりの付き合いだったからショックを受けた。

「さぁ……な。俺には血の繋がった家族なんて居ないからわからん」

俺はいつ、どこで、誰の子として産まれたか知らない。時々、両親に捨てられた一夏と千冬さんを羨ましく思う。だって……俺と違い唯一の家族が居て、自分の産まれを知ってるから。

「あ、悪い」

ばつの悪い顔をした一夏に軽くチョップ。

「いたっ、何するんだよ？」

「今の俺にとってじいちゃんと一夏と千冬さんが家族だ」

じいちゃんはもうこの世に居ないけど、俺にとって目の前の馬鹿は大切な親友兼家族。血の繋がりなんてどうでもいいさ。

「……サンキュ」

コンコン。

疲れたしそろそろ寝ようと思った頃にノックが響く。

「はい、どちらさまで――」

一夏の代わりにドアを開くと、びっくりした顔の箒がいた。

「ひろ？　何で一夏の部屋に……？」

「何でって、遊びにきてたんだよ。一夏ならすぐに呼んでくるよ」

「あ、ああ」

布団に入っていた一夏を引きずり出す。

「ちょっ、いきなりなんだよ？」

「箒が来たんだよ。お前に用があるらしい」

一夏は首を傾げながらも箒の前に行く。邪魔しちゃ悪いので自分の部屋へ帰ることにする。

（もしかして箒、いよいよ告白するのか？）

入ってすぐにドアを少し開けて様子を伺う。覗きなんて趣味悪いが、箒の恋路を応援した俺としては気になるのだ。

「……」

「……」

ドアの前で見つめ合う。箒の顔が赤くなっており、対する一夏はさっさと言ってほしいという顔をしていた。

「……箒、用がないなら俺は寝るぞ」

「よ、用ならある！」

いきなり大声を出すから一夏はびっくりしてしまう。

箒が覚悟を決めて口を開く。

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……」

さっきフェイトも言ってたが六月末に行うらしいそれは、クラス対抗戦とは違い完全に自主参加の個人戦らしい。学年別で区切られている以外は特に制限もないそうだ。しかし、専用機持ちが圧倒的に有利だろう。

「わ、私が優勝したら――」

頬を紅潮させ、箒は言葉を続ける。

「つ、付き合ってもらう！」

びしっと指を差す。

「……はい？」

箒は宣戦布告すると走って行き、一夏は何がなんやらわからず、ポカーンとしていた。

届け！　雲燿の速さまで！（後書き）

どうも宏明です

千「織斑千冬だ」

まさか千冬さまが来られるとは。

スパーンッ！

千「織斑先生と呼べ」

……はい。気を取り直してようやく斬艦刀を振り回せました。

千「中々の太刀筋だったな。これからの成長が楽しみだ」

今回使ったのはご存知雲燿の太刀！　格好良さが皆さんに伝われば嬉しいです。

そしてしばらくフェイトはお休みになります。まだ専用機決まってません。

千「次回からはあいつらが来るわけか」

正確には次の次ですがね。次回はオリジナル展開の予定。

千「ふむ、私が活躍するのだな」

いえ、まったく出ません。

千「……」

さ、最後に読者さんたちに向けてお願いします（ガタガタ）。

千「諸君、次回も読むように。忘れた者はグランド１００周だ」

一周五キロだからめちゃくちゃキツいっす！

決められぬ想い（前書き）

今回はいつもよりも短めです。

決められぬ想い

「あのバカども、一体どこに行ったのよ」

あたしは凰鈴音（ファン・リンイン）。一夏とひろの幼なじみで、今は中国の代表候補生。

今日は日曜だから暇そうな一夏とひろを誘って遊ぼうと思ったけど、二人はいなかった。

「あら？　凰さん、ひろさんの部屋の前で何をしてますの？」

今日はどう過ごそうか考えていたらセシリアに声をかけられる。オシャレをしてるからデートにでも誘おうとしてたのね。

「残念だけどひろは居ないわよ？」

「そんなっ、イギリスから有名な茶葉が届いたのでひろさんに煎れていただこうと思いましたのに」

そういえばひろのヤツ、やたら紅茶やコーヒー煎れるの得意だったな。しかももめちゃくちゃレベルが高いし。

「居ないのなら仕方ありません。凰さん、いい機会ですし今日は少しあなたのことを聞かせてくださいな」

「あたしのこと？」

大体のことは教えたはずだけど。

「ええ、箒さんも呼んで食堂で話ましょう」

いつもより真剣な顔ね。まあ暇だしいいか。

★

何これ？　あたし何かしたの？

寮にある食堂に連れて来られ、一夏いわくファースト幼なじみの篠ノ之箒（しののの ほうき）とイギリスの代表候補生セシリア・オルコットがあたしの前に座って睨んでいた。

「それで、話って何よ？」

「率直にききます。凰さんはどっちがお好きなんですの？」

「どっちって？」

「もちろんひろさんか一夏さんのどちらを狙っているかということですわ」

あー……やっぱりそういうことか。周りには両方狙っているように見えるのかな。

「……わかんない」

「はい？」

「わからないのよ！　一夏はあたしの初恋だし、小学生の頃から好きだけど、ひろのことも好きなの！」

自分でも最低なことを言ってると思う。だけど振り切れない。

「お前も女ならきっぱりと一人に決めろ」

「その通りですわ！　二股なんて最低です」

予想通り二人は怒る。

「じゃあ、あんたたちは一夏とひろのどこが好きになったわけ？」

話を逸らすように質問すると二人は顔を赤くさせた。

「べ、別に私は一夏のことなんか……そう、情けないヤツだからほっとけないだけだ」

「ふ～ん。ならあたしがもらっても良いよね。一夏のこと好きだし」

「駄目だっ！」

篠ノ之がダンッとテーブルを叩く。

「こほんこほん。と、とにかく、一夏は貴様には渡さん」

そう言って篠ノ之は食堂から立ち去る。

「それであんたはどうなの？」

「わ、わたくしは、その……強くて、だけど優しい瞳に惹かれましたの」

この娘は本当に惚れてるんだな。ぽつりぽつりと話す彼女は何か可愛かった。

「でもひろは誰にでも優しいわよ？　朴念人だし、周りのことだと鋭いのにいざ自分のことになると超鈍感になるんだから」

「たしかに、わたくしやフェイトさんのアプローチに全く気付きませんし、クラス対抗戦からは一夏さん同様にファンクラブ何かも出来てましたもの」

それから数分間、セシリアと愚痴を言い合って親交を深めた。これが宿敵と書いて『とも』という関係なのかな。

「ところでセシリア、フェイトって誰？」

「フェイトさんはアメリカの代表候補生で今は専用機を取りに帰ってますの。それと先月までひろさんのルームメイトだったのですわ」

それでひろはまたフラグ立てた訳ね？　よし、次会ったら殴ろう。

★

ゾクッ！？

い、今何か理不尽な怒りを傍受した気がする。

六月頭、日曜日。久々にＩＳ学園の外に出た俺はじいちゃんの墓参りをした。

その後暇潰しにゲーセンでバーニングＰＴをやりに行き、伊達流星（だてりゅうせい）という同い年の男と友達になり、同じスーパーロボット好き同士、色々と白熱していつの間にか夕方になっていた。楽しい時間は経つのが早いというのは本当のことらしい。

「それじゃ流星、またな」

「ああ、今度は負けないぜ」

また会う約束をしてＩＳ学園へと戻って来た。

丁度入り口のところで一夏に会う。

「よ、今戻って来たんだな」

「ああ、久しぶりに弾や蘭に会って来たんだ。ひろは何やっていたんだ？」

「墓参りの後ゲーセンで知り合ったヤツと遊んでたんだよ」

「お前ってすぐに誰とでも友達になるよな」

今日あったことを話しながら部屋に行く。ちなみに弾と蘭は一夏や鈴、俺が中学の時に知り合った友人だ。

しまった。蘭ちゃんに一夏の制服姿やその他諸々の写真をくれって頼まれてたのをすっかり忘れていた。

今度郵便で送っておこう。

★

「やっぱりハズキ社製のがいいなぁ」

「え？　そう？　ハズキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイのがいいかなぁ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

月曜日の朝。クラス中の女子がわいわいと賑やかに談笑をしていた。みんな手にカタログを持って、あれやこれやと意見を交換している。

何でそんなことをしてるかというと、今月にある学年別個人トーナメントのためだ。

学年別個人トーナメント――。

文字通り学年別のＩＳ対決トーナメント戦。これを一週間かけて行うらしい。一週間もかかるのは全員強制参加だから。

一学年が大体１２０名。これをトーナメントでやるものだから、規模も相当なものらしい。一年は浅い訓練段階での先天的才能評価、二年はそこから訓練した状態での成長能力評価、そして三年はより具体的な実戦能力評価となっている。

特に三年生の試合は大がかりで、ＩＳ関連の企業のスカウトマンはもちろんのこと、各国のお偉いさんが見に来ることもあるらしい。つくづくすごい学園に来てしまったものだ。

説明が逸れたな。

ＩＳスーツというのは文字通りＩＳ展開時に体に着ている特殊なフィットスーツのこと。このスーツなしでもＩＳを動かすこと自体は可能なんだが、反応速度がどうしても鈍ってしまうらしい。

まあ、俺の相棒ＩＳ『ダイゼンガー』には関係ないが一般的に……。

「ＩＳスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ＩＳはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃程度なら完全に受け止めることができます。あ、衝撃は消えませんのであしからず」

すらすらと説明をしながら現れたのは山田先生だった。

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから。……って、や、山ちゃん？」

「山ぴー見直した！」

「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん。……って、や、山ぴー？」

入学から大体二ヶ月。山田先生には８つくらい愛称がついていた。慕われている証拠だと思う。

「あのー、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと……」

「えー、いいじゃん」

「まーやんは真面目っ子だなぁ」

「まーやんって……」

「あれ？　マヤママヤの方が良かった？　マヤママヤ」

「そ、それもちょっと……」

「もー、じゃあ前のヤママヤに戻す？」

「あ、あれはやめてください！」

珍しく語尾を強くして山田先生が拒絶の意志を示す。何かトラウマがあるらしい。

「と、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください。わかりましたか？　わかりましたね？」

はーいとクラス中から返事が来るが、ぶっちゃけ言ってるだけの返事なのは間違いなかった。山田先生は今後もあだ名が増えていくのだろう。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

それまでざわざわしていた教室が一瞬で静まる。一組担任織斑千冬先生の登場だ。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着でも構わんだろう」

いや、構いますって！　おそらく俺と一夏以外も絶対多くの女子は心の中で突っ込んだと思う。

ちなみにＩＳ学園の指定水着は大きなお友達が喜ぶスクール水着である。紺色のアレ。

更に体操服も絶滅危惧種と言われるブルマーだった。

当たり前だが俺と一夏は短パンだ。変な想像はしないように。

ちなみに、学校指定のＩＳスーツはタンクトップとスパッツをくっつけたような感じの、至ってシンプルなものだ。なんでわざわざ学校指定のものがあるのに各人で用意するかというと、ＩＳは百人通りの仕様へと変化するものなので、早いうちから自分のスタイルを確立しておくらしい。

まあ、たいして変わらないと思うがそこはそれ。花も恥じらう十代の乙女の感性を優先させてくれてるんだろう。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

連絡事項を言い終えた千冬さんが山田先生にバトンタッチする。ちょうど眼鏡を拭いていたらしく、慌てて直す姿がわたわたとしている子犬のようだった。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！　しかも二名です！」

「え……」

『えええええっ！？』

俺は前に転校生が来ることを聞いていたので驚かないが、女子たちがざわつく。

「失礼します」

「……」

教室のドアが開き、クラスに入ってきたふたりの転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まる。

そりゃそうだ。

なんせ、そのうちのひとりが――男子だったのだから。

決められぬ想い（後書き）

どうも宏明です

山田「山田真耶です」

前回に続き、副担任のやまちゃんが来てくれたぞ。

山田「あの、芸人の方と被るのでその呼び方はやめてください」

さて、今回は鈴の話＋月曜日のホームルームまででした。数少ない山田先生の活躍がありました。

山田「ちゃ、ちゃんと次回も活躍します！」

山田先生はひろのこと少し苦手意識があるんだよね？

山田「え、ええ。入学試験の時、投げられたので……」

リュウセイ……じゃなかった流星は藍越学園に通うただの男子高校生です（笑）

山田「すぐに友達になれるなんて、西本くんは素敵な特技を持っているんですね」

ひろは男女関係なく友達になるが、大抵の女子はフラグが立つ。しかも本人は自覚無いので尚更たちが悪い。

山田「うふふ、みんな青春を満喫してますね。少し羨ましいです」

山田先生も一夏にメロメロなんじゃないの～？（ニヤニヤ）

山田「メッ、メロメロなんかじゃありません！　私は教師ですよ！　生徒との背徳恋愛は少し憧れますがしません！」

憧れてるんかい。とにかく次回から人気高いシャルルとラウラが登場。山田先生、いつものお願いします。

山田「へ？　あ、ああ、アレですね。えー……と、じ、次回も読んでください。絶対ですよ？　絶対に読んでくださいね？（ウルウル）」

そんな捨てられた子犬みたいに懇願されると逆に困るな。本当に大人か？

ルームメイトはブロンド貴公子（前書き）

今回は少し長めです。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する。
あっけにとられたのは俺を含めてクラス全員がそうだった。

「お、男……？」

誰かがそうつぶやく。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方々がいると聞いて本国より転入を――」

人なつっこそうな顔。礼儀正しい立ち振舞いと女に見えるほど中性的に整った顔立ち。髪はフェイトと同じく濃い金髪。黄金色のそれを首の後ろで束ねている。
体形はスマートで、しゅっと伸びた脚が格好いい。

印象は、貴公子といった感じで特に嫌みがない笑顔が眩しい。何かシャボン玉とキラキラの背景が見えた。

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああああ――――っ！」

ソニックウェーブというやつに近い衝撃がクラスを中心に大音量で響き、女子たちの歓喜の叫びはあっという間に伝播する。

「男子！　三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！　守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった～～～！」

元気だな。うちのクラスの女子一同は。一夏と俺はじんじんと痛む耳を押さえていた。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに千冬さんがぼやく。昔から漢（おとこ）らしい人だからな。こういう十代女子の反応が鬱陶しいのだろう。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

もう一人の転校生は、見た目がかなり異端であった。

輝くような銀髪。ともすれば白に近いそれを、腰近くまで長く下ろしている。綺麗ではあるが整えている風はなく、ただ伸ばしっぱなしという感じ。

そして左目に眼帯。医療用のものではなくガチな黒眼帯。２０世紀の戦争映画に出てくる大佐がしていそうな、アレ。そして開いている方の右目は赤色を宿しているがその瞳に暖かさは無い。

印象はいうまでもなく軍人。身長はシャルルと比べて明らかに小さいが、その全身から放つ冷たく鋭い気配がシャルル以上に存在感を感じさせる。

「……」

当の本人は未だに口を開かず、腕組みをした状態で教室の女子達を下らなそうに見ている。だけどそれはほんの五秒程度のことで、今は千冬さんだけを見つめていた。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

いきなり佇まいを直して素直に返事をする転校生――ラウラに、クラス一同がぽかんとする。対して、千冬さんはさっきよりも面倒くさそうな顔をした。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう答えるラウラはぴっと伸ばした手を体の真横につけ、足のかかとで合わせて背筋を伸ばしている。

千冬さんを『教官』と呼んでいるのでおそらく彼女はドイツの軍人だ。

――とある事情で千冬さんは一年ほどドイツで軍隊教官として働いていたことがある。そのあとは一年くらいの空白期を置いて、現在のＩＳ学園教員になったらしい。

らしいというのは、一夏が山田先生や他の学園関係者に聞いたのを教えてもらったからだ。本人からは聞いてない。まあ、あの人のことだから色々と事情があるんだろう。

（せめて一夏にはどこで何をしているかくらいは教えておいてほしかったな）

一夏のやつ、たまに寂しそうな顔で「千冬姉……何をしてんだろうな……」とつぶやいていた時があった。

二人ともかなりのシスコン、ブラコンなのだがそれを口に出すと修正されるので黙っておく。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……」

クラスメイトたちの沈黙。続く言葉を待っているのだが、名前を口にしたらもう話すことなど無いと言いたげに口を閉ざす。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

山田先生が出来る限りの笑顔でラウラにきくが、返ってきたのは無慈悲な即答。やれやれ、泣きそうな顔をしてるじゃないか。

ラウラはそんなことなど構わず一夏を見て無表情だった顔が怒りのものに変わる。

「貴様が――」

つかつかと一夏に近づき、俺はボールペンを投擲。

パキンッ！

「へ？」

一夏とラウラの真ん中、つまり一夏の机にボールペンが衝突するが、全力で投げたので砕け散る。

ラウラは視線を俺に変えた。その顔に友好なんてものはまったくない。あるのは――殺気。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、そして――」

一度一夏に視線を戻してからまたこちらを向く。

「あの人に認められた貴様は……絶対に許さない！」

ラウラはそう宣言して空いてる席に座る。一夏は未だにぽかんとしていた。

「あー……ごほんごほん！　ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

ぱんぱんと手を叩いて千冬さんが行動を促す。とりあえずラウラのことはどうでもいい。何故ならこのままクラスにいると女子と一緒に着替えなくてはならないからだ。

一夏もようやく再起動して立つ。確か今日は第二アリーナ更衣室が空いていたはず。

「おい西本。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子、織斑よりは頼りになる」

いや、そんなはっきりと言われると一夏が……。

「君達が織斑君と西本君？　初めまして。僕は――」

「悪い、自己紹介は後だ。今は移動を優先しなければならない。女子が着替え始めるからな。一夏、いつまでいじけてる。さっさと行

くぞ」

説明すると同時に動く。俺は左手でシャルルの手を取り、右手は床に『の』を書いていた一夏を掴んで教室を出た。

「ちょっ、ひろ！　俺は猫か！」

右手を離し一夏は首を擦りながら歩く。襟首を掴んでいたらしい。

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから早めに慣れてくれ」

「う、うん……」

なんだ？　さっさまでとは違って妙に落ち着かなそうだな。

「トイレか？」

「トイ……っ違うよ！」

同じく思っていたらしい一夏がきくがシャルルは少し赤らめて否定した。

「ああっ！　転校生発見！」

「しかも二人と一緒！」

HRが終わったので早速各学年各クラスから情報先取のための尖兵が駆けだして来ている。この波にのまれたら最後、質問攻めのあげく授業に遅刻、鬼教師の特別カリキュラムが待っているのだ。絶対に捕まるわけにはいかない。

「いたっ！　こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

おいおい、いつからここは武家屋敷になったんだ。

「織斑君と西本君の黒髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃあっ！　見て見て！　西本君と手！　手繋いでる！」

「日本に生まれて良かった！　ありがとうお母さん！　今年の母の日は庭に生えてる花以外のをあげるね！」

せめて買ったのをプレゼントしろよ。

「な、なに？　何でみんな騒いでいるの？」

「そりゃ男子が俺たちだけだからだろ」

「……？」

状況が飲み込めないらしいシャルルが困惑顔できいて一夏が教えた。

それでもいまいちぴんとこないのか首を傾げ続けている。

「はぁ……ＩＳを操縦できる男は今のところ俺たちしかいないんだ。みんな珍しがっているんだよ」

「あっ！　――ああ、うん。そうだね」

俺が補足するとようやく事態を察したらしい。

「しまった！　囲まれた」

いつの間にか俺たちは囲まれてしまう。

「さぁ、さあさあ！　私に全てをさらけだしなさい！」

ジリジリと隙間を狭めていく。

「よし、ミッションＯＯＳ（織斑囮作戦）に変更だ。一夏、頼んだぜ」

「おう！　って、わかるかぁ！　てめえ、何平然と俺を犠牲にしようとしてんだよ！」

「ちっ、仕方ない。これで道を切り開く！」

懐から数枚の写真を取出しばらまく。

「きゃああっ！　織斑君の寝顔写真よ！」

「こっちは半裸！」

女子たちは一夏の写真を巡って醜い奪い合いを始め、道が開いた。

「行くぞ！」

手を離さないようしっかり握り、再び一夏の襟首を掴んで包囲網を突破。いつもより三倍の速さで駆け抜ける。

「到着っと」

圧縮空気が抜ける音を響かせドアが斜めにスライドして開く。第二アリーナ更衣室、無事到着だ。

「大丈夫か？　えーっと、デュノア」

目を回していた金髪の貴公子に声をかける。一夏？　あいつなら大丈夫だろ。

「うん、なんとか。あ、僕のことはシャルルでいいよ。西本君」

「あー、俺たちの名前は知ってるんだっけ？　俺のことはひろって呼んでくれ。今日からよろしくな、シャルル」

「うん。よろしくね、ひろ」

ニッコリ笑うシャルルに一瞬ドキリとしてしまう。本当に男か？

「ひろ！　お前なに俺の写真をばらまいてんだよ！」

なにげに一夏は弾と同じく復活が早い。丈夫な分、弾よりワンランク上になる。

「まあまあ織斑君、時間もないしそのことについては後でしよ？ね？」

「うっ、仕方ない。後でとっちめてやるからな。ああそれと、俺のことは一夏でいいよ」

シャルルになだめられた一夏は文句を言いながら上着とシャツを脱いで上半身をあらわにした。

俺は既にＩＳスーツを下に着てるから制服を脱ぐ。

「わあっ！？」

「？」

奇怪な声を出したシャルルを見るとまだ着替えてなかった。

「どうした？　早く着替えないと遅れるぜ？」

「う、うんっ？　き、着替えるよ？　でも、その、あっち向いてて……ね？」

「？？？　まぁ、別に着替えをジロジロ見る気はないけど」

俺と同じくシャルルを不思議そうに見てた一夏もロッカー側に向いて一度裸になってからスキューバダイビングのような全身水着タイプのＩＳスーツを着る。
なんでもデータ取りのために俺たちのはそうなっているらしい。

「ていうかひろは最初っから着てるのかよ」

「一限目から千冬さんの実戦訓練だからな」

シャルルの着替えは超早かった。もしかしたら俺と同じく下に着てたのかもな。

一夏がもたついたせいで俺たちはグラウンドに向かって全力疾走する。

「遅い！」

第二グラウンドに到着したが、鬼が腕を組んで待っていた。

★

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

一組と二組の合同実習なので人数はいつもの倍。出てくる返事も妙に気合いが入っていた。

「今日は戦闘実演をしてもらおう。――凰、オルコット手本を見せてやれ」

「「はい！」」

返事をした二人は即ＩＳを展開。ちらりとこちらを見た。

（なんだ？　妙に張り切った感じなんだが）

うーん……！　そうか。鈴が一夏を見てるからおそらく良いところを見せようとしてるんだな。セシリアは……自分をしっかり見て、勉強してください。だろうか？　相変わらず先生役が好きだなぁ。

「それで、相手はどちらに？　わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は――」

キィィィン……。

ん？　空気を裂く音が聴こえ、直感的にその場から逃げた。

「あああああ！　ど、どいてください～っ！」

ドカーン！

刹那、ネイビーカラーの何かが髪を擦りボケっとつっ立っていた一夏を巻き込みゴロゴロと地面を転がった。

「やれやれ」

千冬さんが呆れた顔でため息を吐く。ダイゼンガーのハイパーセンサーを作動させて土埃が舞う場所を見る。

そこにはＩＳを装着した山田先生の上に白式を展開した一夏が押し倒したように乗っていた。

むにゅ。

しかも、普段はサイズが合ってない服を着ているからわからなかったが、山田先生の巨乳を一夏はおもいっきり掴んで揉んだ。

「いちっ……かあぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

鈴が突然怒りに満ちた叫びをあげながら『双天牙月』をガシーンと組み合わせて投擲。

「うおおおっ！？」

身の危険を感じたらしい一夏は山田先生から離れ間一髪で避ける。

しかし、仰向けに避けたのはダメだね。ブーメランのように返ってきた『双天牙月』は完全に一夏を捉えていた。

「はっ！」

ドンッドンッ！

短く二発、火薬銃の音が響く。弾丸は的確に『双天牙月』の両端を叩き、その軌道を変える。

キンッキンッと地面に薬莢（やっきょう）が跳ねる音を聞きながら凄腕のガンナーに視線を向ける。それはなんと山田先生だった。

両手でしっかりとマウントしてるのは五十一口径アサルトライフル『レッドバレット』。アメリカのクラウス社製実弾銃器で、その実用性と信頼性の高さから多くの国で正式採用されているメジャー・モデルだ。

しかし驚いたのは山田先生の姿で、倒れたままの体勢から上体だけをわずかに起こして射撃を行ってあの命中精度なのだ。雰囲気も、いつもバタバタした子犬のようなものとは違い、落ち着き払っている。

「……」

俺だけではなく、そばにいる一夏と鈴はもちろん、セシリアや他の女子も唖然としたままであった。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

ぱっと雰囲気がいつもの山田先生に戻り、起き上がると肩部武装コンテナに銃を預ける。それからずれた眼鏡を両手で直す。千冬さんが言った言葉にちょっと照れているらしく頬が赤かった。

「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさとはじめるぞ」

「え？　あの、二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける」

負ける、と言われたのが気に障ったのか、セシリアと鈴はその瞳に闘志をたぎらせる。

「では、はじめ！」

号令と同時にセシリアと鈴が飛翔する。それを目で一度確認してから、山田先生も空中へと躍り出た。

「手加減はしませんわ！」

「さっきのは本気じゃなかったしね！」

「い、行きます！」

言葉こそいつもの山田先生だったが、その目はさっきと同じく鋭く冷静なものへと変わっている。先制攻撃したのはセシリア鈴組だったが、それは簡単に回避された。

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているＩＳの解説をしてみせろ」

「あ、はい」

空中での戦闘をみながら、シャルルがしっかりとした声で説明をはじめた。

「山田先生の使用されてるＩＳはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代開発最後期の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付け武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ＩＳの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七ヶ国でライセンス生産、十二ヵ国で正式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替え（マルチロール・チェンジ）を両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サードパーティーが多いことでも知られています」

「ああ、いったんそこまででいい。……終わるぞ」

シャルルの説明が終わる頃には戦闘が終わりを迎えていた。

山田先生の射撃がセシリアを誘導、鈴とぶつかって動きが止まったところにグレネードを投擲。爆発が起こって、煙の中からふたつの影が地面に落下した。

「くっ、うう……。まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねぇ……何面白いように回避先読まれてんのよ……」

「り、鈴さんこそ！　無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「こっちの台詞よ！　なんですぐにビットを出すのよ！　しかもエネルギー切れるの早いし！」

「ぐぐぐぐっ……！」

「ぎぎぎぎっ……！」

相変わらず仲悪いなぁ。どっちの主張もそこそこあっているけど今回はチームワーク皆無だったのが敗因だ。むしろ互いに足を引っ張っていたともいえる。

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

ぱんぱんと手を叩いて千冬さんがみんなの意識を切り替える。

「専用機持ちは織斑、西本、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰だな。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？　では分かれろ」

出席番号順に分かれてＩＳの装着と起動、そして歩行を一人ずつ行う。

「ああっ、ずるい！」

俺の班の二人目が終わった頃、一夏の班でちょっとしたトラブルが起きた。

それはＩＳ……量産型の打鉄に乗っていた女子が立ったまま降りたのだ。そのせいで次の人が乗れず、一夏がお姫様抱っこで運ぶ羽目となる。

他の班や俺の所も羨ましそうに眺め、立ったまま降りようとするのを止めた。

「……」

抗議するよう見てきたので後ろを指すと、その女子は分かってくれた。

「……」

千冬さんが睨んでいるのだ。特に一夏と俺の班を。

一夏班は全員抱っこしてもらっていて千冬さんの視線には気付いてない。

「オ　マ　エ　ハ　チャ　ン　ト　ヤ　レ　ヨ？」

そう言っているような気がした。特にトラブルもなく、スムーズに今日の実習を終えた。

★

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を

行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

俺の班は一番早く終わったので余裕でＩＳを格納庫に運んでいた。

ちなみに俺一人で運んださ。女子たちは手伝うって言ったが、

「俺はこう見えて力持ちだから気にしなくてもいいよ。それに斬艦刀に比べたら軽いしね」

と言って運んだら泣かれた。なんで？

「クス、ひろって優しいんだね」

「そうか？　俺はただ、筋トレになるからやっただけなんだけど。……まあ、いいか。シャルル、一夏も戻って来たし着替えに行こうぜ。俺たちはまたアリーナの更衣室まで行かないとならないしさ」

「え、ええっと……僕はちょっと機体の微調整をしてからいくから、先に行っててよ。時間かかるかもしれないから、待ってなくていいからね」

一緒に行こうと誘ったが断られてしまう。

「そう。じゃあ昼は一緒に食おうぜ？　ここの学食は結構うまいからさ」

「うん。なるべく早く行くね」

ひらひらと手を振るシャルルに見送られながら俺と一夏は更衣室へ向かった。

★

「……どういうことだ」

「ん？」

昼休み、俺たちは屋上にいた。

ＩＳ学園の屋上は美しく配置された花壇に季節の花々が咲き誇り、欧州を思わせる石畳が落ち着いている。

俺はシャルルと学食に行こうとしたが一夏に誘われてパンやおにぎりを買ってから向かう。

さらにセシリアや鈴とも合流して屋上に来たら箒がいて、絶句して

た。

「天気がいいから屋上で食べるって話だっただろ？」

「そうではなくてだな……！」

ちらりと箒が俺に視線を向ける。すまん。知ってたら断ったけど今からじゃ学食では無理そうなんだ。

おそらくシャルル目当ての女子で埋め尽くされているだろう。

「……はあ、一夏の馬鹿者が」

「なあ、早く食べようぜ」

箒の暗い心とは違い、空は憎たらしほど清々しい青空だった。

――で、今日の箒は一夏に弁当を作ってきたらしい。

そして鈴も対抗して一夏にタッパーを放る。

「おお、酢豚だ！」

「そ。今朝作ったのよ。アンタ前に食べたいって言ってたでしょ」

タッパーの中は酢豚オンリー。鈴らしいな。とりあえず一夏は爆ぜればいいよ。

「はい、ひろの分も作ってきたから」

こちらにもタッパーを放る。開けるとやっぱり酢豚オンリー。

「あ、アンタには色々と世話になったし、そのお礼よっ、勘違いしないでよね」

何で巷で有名なツンデレ風に言うんだ？

「おおー、ついでででも嬉しいぞ。ありがとな」

まさか俺にもくれるなんて。どういう心境の変化だ？　まあいいか。

「……ついでじゃないわよ。バカ……」

「コホンコホン。――ひろさん、わたくしも今朝はたまたま偶然何かの因果か早く目が覚めまして、こういうのを用意してみましたの。

よろしければおひとつどうぞ」

バスケットを開くセシリア。そこにはサンドイッチが綺麗に並んでいる。

「うまそうなサンドイッチだな。どれどれ……」

ＢＬＴサンドを取り一口ほおばる。

「！　……！？」

ぐはあぁぁぁっ……。

な、何だこれは？　見た目はうまそうなのに滅茶苦茶甘い。俺の舌がたしかなら間違いなくバニラエッセンスが入っていると思う。

「どう……かしら？」

何と答えてやればいいのだろう。いや、まずいと言えばいいが不安そうなセシリアにはっきり言うのもなぁ。

「はっきり言っていただいて構いません」

セシリアの声が若干震えている気がした。もしかして表情でばれたか？　ええい、ここは心を鬼にする。

「……はっきり言おう。まずい」

「そ、そう……ですか……」

ずーんっと沈む。俺は隣のサンドイッチを食べた。

「ぐっ！？」

今度は辛い！　しかも鼻につーんってくるし、わさびか！？　せめてマスタードにしてくれよ。

「すっぱーっ！？」

その次には梅干しがまるごと入っており、種が硬かった。

「あ、あの、無理をしなくてもわたくしが責任を持って捨てておきますから……」

「まずいけど、セシリアが頑張って作ってくれたものだ。捨てるのはもったいないから俺が処理しておく」

残りも平らげ烏龍茶を飲む。市販の烏龍茶がこんなにもうまいとは。こんな気持ちは鈴の殺人料理を毒味した時以来だな。

「ふー……。まあ、あれだ。見た目は良かったから味付けさえしっかりやればすぐにおいしいの作れるよ。なんなら今度一緒に料理するか？　一夏ほどうまくないけど俺もできるし――」

「それは本当ですの！」

元気付けようとしたら急に瞳をキラキラさせて迫ってきた。

「あ、ああ。セシリアさえよければ」

「是非ともお願い致しますわ！　その時はふたりっきりで！」

「お、おお」

やたらふたりっきりの部分を強調。あまりの勢いにこくこくと頷く。

「ウフフ、ひろさんとふたりっきり……ああっ、ダメですわ！」

セシリアはなぜか白昼夢の世界へ逝ってしまう。おーい、帰ってこーい。

「ひろっ！　あたしにも料理教えなさいよ！　ふたりっきりで！」

いやいや、なんで鈴も？　お前の酢豚、うまいぜ？

「だったら一夏に教えてもらったら？」

「嫌よ！　一夏と一緒だと女として立ち直れなくなるじゃない！」

えぇ～。という顔になってしまう。

「ひでぇ」

ほら、一夏がショック受けているじゃないか。

「あははっ」

シャルルがめちゃくちゃ笑っている。だけど少し俺たちを羨ましそうに見てたのは気になったな。

★

「じゃあ、改めてよろしくな」

「うん。よろしく、ひろ」

夜。夕食を終えて俺とシャルルは部屋に戻ってきた。

シャルルは俺と同室になり、今は食後の休憩をかねて俺が入れた日本茶を飲んでいる。

「紅茶とはずいぶん違うんだね。不思議な感じ。でもおいしいよ」

「気に入ってもらえたようで何よりだ。紅茶やコーヒーも入れるのは得意だから欲しいときは気軽に言ってくれ」

なぜ得意かというと、とある町にある喫茶店のマスターに習ったから。

「本当？　嬉しいなぁ。ありがとう、ひろ」

柔らかな笑みを浮かべるシャルルに、男だとわかっていても一瞬ドキッとしてしまう。

「ねえひろ」

「ん？」

「朝、ボーデヴィッヒさんと一夏の間に割り入ったよね？　どうしてかな？」

「あー、あれか」

あの砕けたボールペンの破片は箒が片付けてくれたらしい。

「あのままだと一夏が殴られてただろうしね」

「そうは思えなかったけど？」

いや、前にも一夏はラウラと同じ憎悪を持った女に殴られた。千冬

さんがらみでな。

「あいつ、千冬さんの熱狂的ファンだからな。一夏を疎ましいと、あの目からわかった」

「そっか」

シャルルは察しがいい。すぐに納得してくれた。

「それでシャワーなんだけど順番とかはどうする？　その日その日で決めてもいいけど」

「あ、僕が後でいいよ。ひろが先に使って」

「わかった。ありがたく使わせてもらうよ。それと、遠慮とかしなくてもいいぞ。俺たちはもう友達だからな」

「え！？」

何でそこで驚く？

「えーっと、迷惑だったか？」

「そっ、そんなことないよ。すごく嬉しい。ありがとう」

とても嬉しそうに笑う。もしかしたら友人といえる人間がいなかったのかもな。ならこれから一夏と俺、シャルルの三人で友情を深めよう。この学園で男は俺たち三人だけなのだから。

ルームメイトはブロンド貴公子（後書き）

どうも宏明です

シャ「シャルル・デュノアです」

ようやく登場ですよ。しばらくはシャルルのターンだね。

シャ「えっと、頑張るよ」

原作と違ってセシリアの料理はましになります。

……うーん。もう特に語ることはないな。

シャ「あはは……半分以上がコピペみたいだしね」

自分の文才なさに呆れてる。

シャ「ま、まあまあ。その分戦闘シーンで頑張ろう！　あ、次回も読んでくださいよろしくね」

おお、さすがＩＳ内で比較的まともなヒロイン。攻撃的じゃない。

シャ「僕は男だよ？」

え？　何で天使のような笑みで左腕を前に――！？

ズガンッ！！

シャ「またね♪」

自分の在り方（前書き）

今回も長め、シャルルパワーとでもいうのだろうか？

「ひろ、ちょっと僕と模擬戦いいかな？」

「ああ、いいぜ」

シャルルが転校してきて五日経ち、土曜日。午後からは自由時間なので俺たちはいつも通りＩＳの特訓に来た。

「こう、ずばーっとやってから、がぎんっ！　どかんっ！　という感じだ」

「なんとなくわかるでしょ？　感覚よ感覚。……はあ？　なんでわかんないのよバカ」

「防御の時は右半身を斜め五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ」

後ろの方で一夏がコーチ役の三人に教えてもらっているが、相変わらずわかりにくい。

「一夏。これからシャルルと一勝負するから見とけ」

「おう」

俺たち以外にも練習に来てる生徒たちが俺とシャルルの模擬戦に注目する。

シャルルのＩＳは『ラファール・リヴァイヴ・カスタム２』カラーはオレンジ色、背中に背負った一対の推進翼が中央部分から二つの翼に分かれるようになっていて、従来のリヴァイヴより全体のフォルムがスリムになっており、マルチウェポンラックとして大きなリアスカートがついている。そこにも小型の推進翼がついていて、主に姿勢制御に使っているようだ。

大きなシールドと一体化した左腕部装甲が特徴的。

「いくよ！」

シャルルがハンドガンを喚び出し撃つ。

俺は銃が出現したのと同時に右へ瞬時加速を行い銃弾を回避。

シャルルを囲むよう動き、狙いをつけさせないようにする。

だが、さすが代表候補生。すぐさま武器を５５口径アサルトライフル『ヴェント』に替えて掃射。

上へ飛ぶが、それはシャルルの狙い通りらしく、バズーカに切り替

えて撃ってきた。

「はぁっ！」

刀モードの獅子王を袈裟に振り下ろし斬り払う。

「えっ！？」

シャルルは斬り払われたことに驚き動きが止まった。

「大車輪！」

その隙を突いて獅子王の刀身をククリ刀に変えて投擲。シャルルはギリギリでかわす。

「武器を投げるなんて軽率だよ！」

今度は二丁のライフルを喚び出し撃とうとする。

「シャルルこそ後ろががら空きだぜ？」

「え？　……あっ！？」

ブーメランのように戻ってきた獅子王の刃を受けてバランスを崩す。

「一文字斬り！」

掴んだ獅子王を瞬時に両刃へ変えて瞬時加速。すれ違いざまに腹を斬ってシャルルのシールドエネルギーを０にして俺が勝った。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫。でも驚いたよ。まさかあんなかわし方するなんて」

「そうか？　避けられないなら斬ればいいと思ってるんだが」

シャルルに手を貸して立つのを手伝い一夏たちの下へ行く。

「時々あいつを人間かと疑いそうだぜ」

「同感」

「はぁ……何度見ても素敵ですわ」

「私も負けてられないな」

一夏と鈴は呆れ、セシリアは熱い眼差し。箒は瞳に闘志をたぎらせる。

「しかし、何でひろはあんなにひょいひょい避けられるんだ？　俺は全く近付けなかったのに」

俺と模擬戦の前にシャルル対一夏をやったが一夏のぼろ負け。どうやら全然理解してないらしい。

「一夏が僕やオルコットさん、凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「そ、そうなのか？　一応わかっているつもりだったんだが……」

まあ、一夏は知識だけ、という感じだからな。

「でも、ひろは避けてたろ？　何でだ？」

「簡単だ。常に動いて狙いをつけさせないようにして、相手の動きを先読みすればお前でも避けられる」

「そんなのできるのはひろだけだ！」

そんなことないぞ。俺の知り合いに銃より速く動ける人達がいるから。しかも生身で。

「一夏の動きは直線的だからね。射撃武器の把握は絶対に必要だよ」

「……そうか。シャルルの説明はわかりやすいな」

「ふん。私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だというのかしら」

後ろの方で三人がぶつくさと言っているが無視しておこう。

「とりあえず撃ってみようか。はい、これ」

一夏が渡されたのはさっきまでシャルルが使っていた５５口径アサルトライフル『ヴェント』

「え？　他のやつの装備って使えないんじゃないのか？」

「普通はね。でも所有者が使用許可を出せば、登録してある人全員が使えるんだよ。――うん、今一夏と白式に使用許可を発行したから、試しに撃ってみて」

「お、おう」

一夏は初めての銃器に戸惑いながらも構える。シャルルが後ろに立ち、手取り足取り教えて的を狙い撃つ。

バンッ！！

弾は中心から一マスずれた場所に命中。続けて残りも狙い撃ち、シャルルのおかげで全ての的に命中した。

「どう？」

「お、おう。なんかアレだな。とりあえず『速い』っていう感想だ」

「そう。速いんだよ。一夏の瞬時加速も速いけど、弾丸はその面積が小さい分より速い。だから、軌道予測さえあっていれば簡単に命

中させられるし、外れても牽制になる」

シャルルのわかりやすい解説にふんふんと一夏は頷く。

元々理解と吸収が早いやつだからな。すぐに追い付かれそうだ。俺も頑張らないとな。

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」

急にアリーナ内がざわつきはじめて、みんなが見ている方に視線を移した。

「……」

そこにいたのはもう一人の転校生、ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィッヒ。

転校初日以来、クラスの誰とも会話をせず、たまに俺と一夏を睨んでいた女子だ。

「おい」

ＩＳの開放回線で声を一夏に飛ばす。

「……なんだよ」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

面倒そうに返事した一夏にラウラは戦いを申し込む。

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある」

どうやら一夏に向けられた憎悪は三年前にきた女と同じらしい。――ドイツ、千冬さん、と来れば思いつくのは一つしかない。第二回ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』の決勝戦でのことだ。

俺にとって一生忘れたくない記憶。

――決勝戦のその日に一夏は誘拐された。謎の組織に。

俺は一夏の誘拐現場にいて、一夏を守ろうと黒服達を倒すが、突然背中を何者かに斬られて重症を負った。

気を失い目を覚ますと病院にいて、誘拐された一夏を千冬さんが決勝戦を捨ててまで助けたのを知る。一夏は自分のせいだと泣いていた。

俺は、一夏や千冬さんに泣いて欲しくなかったから鍛えていたのに守れなかった。

だから俺は剣士にとって恥である背中の傷を今でも抱えている。

一夏の誘拐は世間に公表されてないが、事件発生時に独自の情報網から一夏の居場所を突きとめていたドイツ軍関係者は知っている。そして一夏を助けた『借り』があったため、千冬さんは大会終了後に一年ちょっとドイツ軍ＩＳ部隊で教官をしていた。

ちなみに一夏を殴った女性は偶然そのことを知った千冬さんの後輩だ。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を――貴様の存在を認めない」

これまたあの時の女と同じ台詞だな。千冬さんの経歴を傷付けた一夏が憎い、と。

「また今度な」

一夏はそれでも戦う気はないようだ。

「ふん。ならば――戦わざるを得ないようにしてやる！」

言うが早いか、ラウラはその漆黒のＩＳを戦闘状態へとシフトさせて、右肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

「！」

ゴガギンッ！

「……下らない。そんな当の昔に過ぎたことを今更持ち出すなよ」

「貴様……」

俺は一夏の前に割り込み斬艦刀で実弾を弾く。

「調子に乗ってんじゃねえぞ小娘が。そんなに戦いたきゃ、俺がてめえをぶった斬ってやるよ」

俺の放つ殺気に怯むことなくラウラは笑う。

「ふん。そんななまくら刀で私を倒す？　東洋の猿は実力差も計れないほど馬鹿らしいな」

いつでもやれるよう獅子王を構える。

『そこの生徒！　何をやっている！　学年とクラス、出席番号を言え！』

突然アリーナにスピーカーからの声が響く。騒ぎを聞きつけてきた担当の教師だろう。

「……ふん。今日は引こう」

横やりを入れられて興が削がれたのか、ラウラはあっさりと戦闘態勢を解除してアリーナゲートから去った。

「……はぁ」

「ひ、ひろ？」

「ん？　あ、悪い、恐がらせちゃったか？」

よく見ると一夏以外の女子たちが若干青い顔をしていた。

「ううん。ちょっとびっくりしちゃっただけだから大丈夫。今日はもうあがろっか。四時を過ぎたし、どのみちもうアリーナの閉館時間だしね」

「そうだな。じゃあ、一夏と先に着替えて行くよ」

シャルルと互いににこりと笑い空気がやわらぐ。

「え？　そんなこと言わずシャルルも一緒に着替えようぜ」

「いいから行くぞ」

何故か嫌がるシャルルと一夏は着替えたがり、無理矢理連れて更衣室へ向かう。

★

「なあ、何でシャルルは男同士なのに着替えるの嫌がるんだ？」

一夏の疑問にため息が出る。こいつは乙女心以前に人の気持ちにすら鈍感らしい。

「あのな、シャルルには見られたくない傷が残っているとか思わないのか？」

「あっ！」

よくもまあこいつの親友でいられるなあ俺は。上着を羽織り着替え終了っと。

「あのー、織斑君と西本君とデュノア君はいますかー？」

「はい？　えーと、織斑、西本がいます」

ドア越しに呼ぶ声が聞こえる。声の主は山田先生のようだ。

「入っても大丈夫ですかー？　まだ着替え中だったりしますー？」

何の用だろう？　俺も一夏も着替え終わっている。

「大丈夫ですよ。着替えは済んでいます」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

バシュッとドアが開き山田先生が入ってきた。

「デュノア君は一緒ではないんですか？　今日は織斑君たちと実習しているって聞いていましたけど」

「まだアリーナの方にいます。大事なことなら呼んできますけど」

「ああ、いえ、そんな大事な話でもないですから、西本君から伝えておいてください。ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。結局時間帯別にすると問題が起きそうだったので、男子は週に二回の使用日を設けることにしました」

「本当ですか！」

一夏が感激のあまりに山田先生の手を取っていた。まあ、一夏ほどじゃないけど俺も風呂は好きだし嬉しいけどさ。

「……一夏？　何してるの」

タイミングが良いのか悪いのかシャルルが更衣室に戻ってきていた。無表情ってのが逆に怖い。

「ひろ、先に戻っているって言ったよね？」

「すまん」

俺の本能が言っている。逆らうなと。一応大浴場が使えることを伝えたが、シャルルはあんまり嬉しそうではなかった。外人は風呂が苦手なのか？

「ああ、そういえば織斑君と西本君にはもう一件用事があるんです。ちょっと書いて欲しい書類があるんで、職員室まで来てもらえますか？　白式とダブルGの正式な登録に関する書類なのでちょっと枚数が多いんですけど」

ダブルGとはダイゼンガーのことである。なんでみんなダブルGって呼ぶかなぁ。

「わかりました。――じゃあシャルル、ちょっと長くなりそうだから今日は先にシャワーを使ってくれよ」

「うん。わかった」

「じゃ山田先生、行きましょう」

興奮気味の一夏を連れて職員室へ向かう。

「……一夏、山田先生を食っちゃダメだぜ」

「ええ!?　お、織斑君！　わ、私は教師ですよ！」

「ばっ、何でそうなるんだよ！　誤解だぁー！」

★

「ふー、終わったな」

「ああ、思ったより早く終わってよかった」

書類の枚数は多かったが、名前を書くだけのものばかりでそんなにかからなかった。

部屋の前で別れてドアを開く。

「ただい……ま」

自分の部屋に入ってまず目にしたのは金髪の美少女がバスタオル一枚というもの。

「ひ、ひ、ひ……ろ……」

そういえば昨日ボディーソープが切れていたな。もしかしてそれを探しに？　あと何で美少女とわかったのか。簡単だ。バスタオルで隠れていてもそれなりの大きさがある胸が見えたから。アレだろうか、俺は金髪美少女と同室になるとこんなイベントが高確率で発生するのか？　ヤバイ、せっかくフェイトとの衝撃的な出会いを封印してたのにぶり返した。

「あ、ええと……」

とりあえずクローゼットからボディーソープを取出し謎の美少女に渡す。

「あ、ありが……と」

固まっていた美少女は受け取りシャワールームへ逃げ込む。

（俺の記憶が確かなら今の美少女はシャルルだよな？）

ということはだな、シャルルはシャルルちゃんということになる。
もしかして水を浴びると男になって、お湯を浴びると元の女に戻るのか？

いやいや、それはどこのら〇ま1／2だ。

ベットに寝転がり必死に忘れようとするが網膜に焼き付いていて無理そうだ。俺も健全な青少年。無理だって。そういえば一夏もバスタオル姿の箒と遭遇したらしい。

ガチャ……。

「！？」

気持ち控えめに響いた脱衣所のドアが開く音。しかし俺にはなにより大きく聞こえて、思わず体がこわばってしまう。

「あ、上がったよ……」

「お、おう」

背中越しに聞く声は、やはりシャルルのものだった。俺はばくばくと鳴る心臓をなるべく意識しないようにしながら振り向いた。

「――――」

女子が、そこにいた。

★

「……」

「……」

かれこれ一時間はこの沈黙が続いていた。ラノベでも読んで気を紛らわそうとするが、よりによってけ○ぷファーしかなかった。いまにも「ひろさんのラッキーすけべですねえ。はっ、はっ、はっ、はっ」という旧しずかちゃんの声が聞こえそう。

「……ひろ」

「な、なんだ!?」

「その本、逆さまだよ?」

うお!?　なんか読みにくいと思ったらそういうわけか。

「クスクス、ひろって面白いね」

とりあえず緊張がほぐれたのかいつも通りの雰囲気に戻る。

「まあ、あれだ。シャルルにも事情があるんだろ?　無理にきく気はないから」

「え?　でも……」

「俺は無理矢理きくような無神経じゃない。それでもシャルルが話したいなら俺は真剣にお前の話を聞く」

しっかりとシャルルの瞳を見る。

彼女は一度目を閉じ、深呼吸すると開いてエメラルドの瞳で真っ直ぐに俺を見てから口を開く。

「僕は父、デュノア社の社長から直接命令されてここに来たんだ」

「命令？　親なのにか？」

シャルルの顔は辛そうなものだった。

「僕はね、ひろ。愛人の子なんだよ」

――。それだけで大体わかった。

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でＩＳ適応が高いことがわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

シャルルは、言いたくないであろう話を健気に喋ってくれた。だから俺は黙ってしっかりと聞く。

「父にあったのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活しているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あの時はひどかったなぁ。本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんもちょっとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑

わなかったのにね」

あはは、と愛想笑いを繋げるシャルルだったが、その声は乾いていてちっとも笑ってはいなかった。俺の中で沸々と湧いてくる怒りをなんとか抑え込む。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「だろうな」

いくらデュノア社の量産機ＩＳのシェアが世界第三位でも所詮第二世代型。今世界中では第三世代型を求められているのだからデュノア社のは時代遅れ。世界は常に新しい物がものをいう。

シャルルは俺が理解してたのを意外そうにしてた。その後に何を言いだすかも大体予想出来る。だから泣きそうな彼女にこれ以上言わせたくなくて俺が思っていることを言いだす。

「だから注目を浴びるための広告塔に仕立て上げられ――」

苛立ちを吐き捨てるように視線を逸らしながら続ける。

「一夏と俺に接触し、可能であれば白式とダイゼンガー、それに俺

たちのデータを盗むためだろ」

その父親はシャルルを道具にしか思ってない。ただ利用価値があった。それだけしか感じてないのだろう。

だからシャルルは他人として話していた。

「……うん。ひろって鋭いんだね。まさしくその通りだよ。でもひろにばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」

「……」

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今までウソをついていてゴメン」

深々と頭を下げるシャルルはどこか疲れて何もかも諦めている感じだった。

俺は気がついたら肩を掴んで顔を上げさせていた。

「お前はそれでいいのかよ」

「え……？」

「いいわけないだろ。親が何だ、例え親だろうと子供の自由を奪う権利はない！　そんなものはいらないんだよ！」

「ひ、ひろ……？」

シャルルが戸惑いと怯えの表情をしている。だけど一度火がついたこの感情は止められそうもない。

「親がいなければ子供は生まれない。それは絶対だ。でもな、親が子供に何をしてもいいなんて誰が決めた！　生き方を選ぶ権利は誰にでもある。それを下らないエゴなんかに邪魔されるいわれなんて無い！」

頭にちらつくのは一夏と千冬さんのこと。特に千冬さんはそのことで苦労していた。じいちゃんから養子の誘いがあっても断りずっと一夏を守り育てたあの人のことを思ってしまう。

「ど、どうしたの？　ひろ、変だよ？」

「悪い。つい熱くなってしまって」

「いいけど……本当にどうしたの？」

「俺は――親に名前すら与えてもらえず捨てられた」

「え……？」

おそらく資料では息子夫婦が死んで俺をじいちゃんが育てたと書いてあったのだろう。戸籍上はそうなっているからな。

だからシャルルはびっくりしたまま俺を見る。

「だから本当の家族がどういうものなんか知らない。むしろお前や一夏たちを羨ましいとさえ思う。ああ、悪い。こんなことどうでもいいよな。しかもさっきと全然話が繋がらないし」

いや本当に何を言ってるのだろう。

「話しが逸れたけど、シャルルはこれからどうするんだ？」

「どうって……時間の問題じゃないかな。フランス政府もことの真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」

「それでいいのか？」

「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方がないよ」

そう言って見せたシャルルの微笑みは、痛々しいものだった。

「……だったら、ここにいろ」

「え？」

「特記事項第２１、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家、組織、団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

まさか一夏と一緒に暗記したことがここで役立つとはな。

「――つまり、この学園にいれば、少なくとも三年間は大丈夫だ。それに牢屋行きはないさ。いくらフランス政府が馬鹿の集まりでも優秀なＩＳ操縦者を持て余すなんてしないよ」

「ひろ」

「なんだ？」

「よく覚えられたね。特記事項って５５個もあるのに」

「……文武両道を目指してる俺には３時のおやつ前さ」

「ふふっ、微妙な時間だね」

シャルルが笑った。その表情には屈託が無くて、十五歳の女の子そのものだった。

（ヤバイ、なんかドキドキするな……）

改めて見ると、シャルルはその顔立ちの良さもあるが、何より優しい雰囲気がある。そのせいなのかよけい可愛く見えて、その無防備さに心臓の鼓動が早くなる。

「まあ、決めるのはシャルルだから、考えてみてくれ。もし、お前の邪魔をしてくる奴が現れたら俺がそいつらを斬艦刀で薙払ってやるよ」

「うん。そうするよ」

目を逸らしていたがいつの間にかシャルルが俺に近づき顔をのぞきこんでいた。

「な、なんだよ？」

「なんで僕と目を合わせてくれないの？　僕はひろの目、もっとみたいなぁ」

ちらりとシャルルを見ると天使のような微笑みに、ジャージの襟元から胸の谷間が少し見えて……。

「と、とりあえず、離れてくれないか？」

「？」

「あー、その、胸元が……」

指摘されて、シャルルはかぁっと頬を赤らめ隠すよう腕を組む。

「ひ、ひろ、もしかして僕の胸……見たいの？」

「はい！？」

「……ひろのえっち」

「なんでそうなるんだよ！」

そりゃ、俺も思春期の男。見たくないと言えば嘘だ。

コンコン。

「「！？」」

「ひろさん、いらっしゃいます？　夕食をまだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか？」

いきなりのノックと呼び声に俺とシャルルはふたり揃って身をすくませる。

「ひろさん？　入りますわよ？」

まずい。非常にまずい。めがっさまずい。今のシャルルの姿をみた

ら一夏でも女だとわかってしまう。

「ど、どうしよう？」

「と、とりあえずベットに入れ。風邪で誤魔化そう」

「わ、わかった」

ばたばたとあわだたしく動く俺とシャルル。――ガチャ。ドアが開く音が響いた。

「よ、よおセシリア！　なんだ？　どうした？」

「……何をしていますの？」

「い、いや、シャルルがなんだか風邪っぽいらしいから、布団をかけてやってたんだ。ははは……だから夕食はいらないみたいだし、仕方ないから俺一人で行こうって話してたんだよ」

こちらをいぶかしげな表情で見るセシリアに笑いかけながら布団をぽんぽんと叩く。

「ご、ごほっごほっ」

おいおい、なんというわざとらしさ。さすがにこれは無理があるような……？

「あ、あら、そうですの？　では、わたくしもちょうど夕飯はまだですし、ご一緒しましょう。ええ、ええ。珍しい偶然もあったものです」

どうやらだませたらしい。セシリアと一緒に夕飯を取ることになる。シャルルには後で何かもらってこよう。

「ごほっごほっ。そ、それじゃあごゆっくり」

「お、おう」

「デュノアさん、お大事に。さあひろさん、参りましょう」

するっと腕を取られた。さすがイギリス人、日本人が不得手とする行為にも躊躇がないらしい。いきなり体を密着されて正直困るが、とりあえず今はここから出るためにもされるがままになっておく。

部屋を出て廊下へ。食堂に向かうために階段を下りると、そこで叫び声と出会った。

「なっ、なっ、何をしてんのよ！？」

廊下の端からずんずんと早足でやってくる。それが誰かは見なくてもわかる。……鈴だ。

「あら、鈴さん。これからわたくしたち一緒に夕飯ですの」

一緒に、を妙に強調してたような。何か特別な意味でもあるのか？

「それと腕を組むのとどう関係あんのよ！？」

「あら、殿方がレディをエスコートするのは当然のことです」

この場合、俺がエスコートされてると思うが……うわ～。鈴がこっちを睨んでいる。俺のせいなのか？　解せぬ。

「ひろっ、アンタもアンタよ！　あたしが食堂で待っていたっていうのに、何してたの！？」

「何してたって……」

言えるわけないだろうが。っていうか一夏と一緒だったんだろ？
なんでこっちにもつっかかるんだ？

「とにかく、わたくしたちはこれから夕食ですので失礼しますわね」

「ま、待ちなさい！　それならあたしも一緒に行くから。ちょうど夕飯だったのよ」

いや、さっき食堂で待っていたって。

「あらあら鈴さん、一日四食は体重を加速させますわよ？」

「ぐっ、モーマンタイよ！　あたしの体は常に三倍の早さでカロリーを消費してるから」

おのれは赤い彗星か！

それに昨日寒天ダイエットするから寒天作れと命令してきただろ。

「それじゃあ、行きましょ」

あれ？　なんで鈴は俺の横に来るんだ？　――って、おわ！？　な

んでお前まで腕を絡めてくるんだ!?

「……鈴さん、何をしてらっしゃるのかしら?」

「男がレディをエスコートするのが当然なんでしょ?」

エスコートって……お前らなぁ、寮の食堂に行くだけなんだぞ。

ちなみに左腕をセシリア、右腕を鈴に取られている。

「ああっ、いいなぁ……」

「両手に花ってやつね」

「幼なじみってずるい」

「専用機持ちってずるい」

うん? なんでみんな鈴とセシリアに羨ましそうな視線を向けているんだ? しかも、ふたりとも心なしかその羨望の眼差しを心地よさそうにしてる。一夏ならともかく俺にエスコートさせてもいいものじゃないと思うけど。

「あのさあ」

「なに？」

「なんですの？」

「歩きづらい」

ぎりっ！　と腕をつねられた×２。な、なにをするんだお前ら！

「この状況で他に言うことないわけ……？」

「自らの幸福を自覚しないものは犬にも劣りますわね」

左右から同時につねられることが幸福だと？　悪いが俺にそっちの趣味はないぞ。

「それにしても……」

「今日の五目チャーハンはなかなかだったわよ」

ぺたーん。

「洋定食は半熟卵のカルボナーラと聞いていますわ。ひろさんもどうかしら？」

むにゅ。

「ああ、うん、どっちもうまそうだな」

両腕に女子のアレが当たって、考えないようにしても意識してしまう。

「どうしたのひろ？」

「どうかしましたのひろさん？」

ぺたむにゅぅ。ふたり揃って俺の顔をのぞき込んできて、それでまた密着度が上がる。

その体に感じるふたりの感触に差がありすぎてなんだか右側がすごく可哀想に思った。

★

暗い。暗い闇の中にそれはいた。

「……」

いつ頃からこうなのかはもう覚えていない。ただ、生まれた時にはもう闇の暗さを知っていた。人は生まれて初めて光を見るというが、この少女は違う。闇の中で育まれ、影の中で生まれた。そしてそれは今も変わりがない。

光のない部屋で影を抱いて闇に潜み、その赤い右目は鈍く光を放っている。

ラウラ・ボーデヴィッヒ。

それが自分の名前だとは知っているが、同時にそれが何の意味も持たないことを理解している。

けれど、唯一例外はある。教官に――織斑千冬に呼ばれるときだけは、その響きが特別な意味を持っている気がして、そのたびにわずかな心の高揚を感じていた。

（あの人の存在が……その強さが、私の目標であり、存在理由……）

それは一条の光のようであった。
出会ったときに一日でその強さに震えた。恐怖と感動と、歓喜に。
心が揺れた。体が熱くなった。そして願った。

ああ、こうなりたい――と。

これに、私はなりたいと。

空っぽだった場所が急激に埋まり、そしてそれが全てとなった。

自らの師であり、絶対的な力であり、理想の姿。

唯一自らを重ね合わせてみたいと感じた存在。

ならばそれが完全な状態でないことを許せはしない。

――織斑一夏。教官に汚点を残させた張本人……。

だが、それ以上に許せない存在がいた。

（西本宏範――。教官がいつか自分を超えると楽しそうに語った。
唯一あの人に認められた存在）

超えるなどあり得ない。あの人の強さは絶対。

あの男の戦う姿が時々あの人と重なり、その度に胸の奥から暗いド
ロドロとした何かが溢れ出て恐怖する。

あの男がいると私の全てを否定されてるようで心が凍てつく。

（排除する。どのような手段を使ってでも……）

暗い闘志に火を付け、ラウラは静かにまぶたを閉じる。闇と一体になりながら少女は夢のない眠りへと沈んでいった。

自分の在り方（後書き）

どうも宏明です

シャ「シャルル・デュノア（女）です。ウソをついてすみませんでした」

まあ、アニメや原作ですでに知ってる人が大半だけどね。それとうちのシャルルはそうやすやすと裸を見せないのさ。

シャ「ううん、もう少し早くこられていたら全部見られてたよ（恥）」

今回使った技は『大車輪』とダイゼンガーじゃないけど『一文字斬り』

シャ「あれはちょっとした恐怖だよ。巨大なブーメランが襲ってきたし、ひろの瞬時加速は白式より上だよね？」

ダイゼンガーは白式と同じ超攻撃型にみえるけど、本当は超機動型なんだよね。瞬時加速だけなら白式、紅椿すら超える。

シャ「簡単にいうと、短距離走がとっても速いんだよね」

そ、そうだけどなんかランクダウンしすぎ。

シャ「最後の締めはラウラだったね。これは何か意味あるの？」

まあ、学年別トーナメントに向けての伏線だね。本当に手段を選ばないようにしてもらおうと思ってるし。

シャ「それまでのお楽しみってやつだね。それじゃあ次回もお楽しみに」

「そ、それは本当ですの！？」

「う、ウソついてないでしょうね！？」

月曜の朝、教室に向かっていた俺は廊下にまで聞こえる声に目をしばたたかせた。

「なんだ？」

「さあ？」

隣にいる一夏とシャルルも頭に疑問符を浮かべている。

「本当だってば！　この噂、学園中で持ちきりなのよ？　月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君か西本君と交際でき――」

「俺たちがどうしたって？」

「「きゃああっ！？」」

うおっ！？　一夏が空気読まずに声をかけると、鈴とセシリアが悲鳴をあげた。

「廊下まで聞こえていたぞ？　交際とか」

「そ、そうだっけ？」

「光学迷彩の間違いなのでは？　ホホホホ」

なんでステルスの話？　どこかに忍び込むつもりなのか？　だったら段ボールを推奨するぜ。

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですわね！　わたくしも自分の席につきませんと」

どこかよそよそしい様子でふたりはその場を離れていく。その流れに乗ってなのか、何人か集まっていた他の女子達も同じように自分のクラス・席へと戻っていった。

「……なんなんだ？」

「さあ……？」

★

（な、なぜこのようなことに）

教室の窓側列で箒は表面上平静を装いつつも、心の中では頭を抱えていた。

近頃なにか月末の学年別トーナメントに関する噂が流れていることは知っていた。

しかし、問題はその内容である。

『学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏か西本宏範と交際できる』

（そ、それは私と一夏だけの話だろうっ！　それになんでひろまで巻き込まれているんだ）

一夏やひろが言いふらしたとは考えられないので、どこかから情報が漏れたのだろう。今にして考えると、あの時の声はやや大きかっ

たかもしれない。そういえばひろのやつ、何かと厄介事に巻き込まれやすい体質だったな。と箒は昔のことを思い出していた。

いやいや、現実逃避をしてる場合ではない。

（まずい、これは非常にまずい……）

もちろん自分以外の女子が一夏と付き合うことに激しい抵抗感があるのは言うまでもないが、これでは自分が一夏と付き合いだした時もあっという間に学園中に広まってしまう。

正直に言うと、箒は『ふたりだけの秘密の関係』というものに年相応＋αの魅力を感じているし、夢想も抱いている。

『普段はちょっとそっけないアイツ、でもふたりっきりのときは……』みたいな感じがいいらしい。

（と、とにかく、優勝だ。優勝すれば問題ない。今回はあのときのようには――）

ふと、思い出したくない記憶が浮かび箒は頭を振った。

（あのときとは違う。大丈夫。大丈夫……なはずだ）

★

「ひろと一夏は今日も放課後特訓するんだよね？」

「もちろんだ。今日使えるのは確か第三アリーナだな」

放課後、一夏とシャルルと箒を連れてアリーナへ向かっていた。

ん？　近づくにつれなにやら慌ただしい様子が伝わってくる。どうやら騒ぎは第三アリーナで起こっているようだ。

「何かあったのかな？　こっちで先に様子を見ていく？」

シャルルが観客席へのゲートを指す。確かにピットに入るよりも早く様子を見ることが出来る。俺と一夏はうなずいた。

ドゴォンッ！

「「「「！？」」」」

爆発した方に視線を向けると、その煙を切り裂くように影が飛び出

してくる。

「鈴！　セシリア！」

一夏が二人を呼ぶが、特殊なエネルギーバリアに阻まれ声は届かない。

二人は苦い表情のまま、爆発の中心部へと視線を向ける。そこにいたのは漆黒のＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』を駆るラウラ・ボーデヴィッヒ。

鈴とセシリアの甲龍（シェンロン）ブルー・ティアーズはかなりダメージを受けている。ラウラは軽微。

二対一の模擬戦をやっているみたいだが、鈴とセシリアはラウラに追い込まれていた。

「くらえっ！！」

ジャカッ！　と鈴の甲龍の両肩が開く。空間圧縮兵器・衝撃砲『龍咆』が放たれる。

しかしラウラは回避をしようとはせずに右手を前に突き出す。

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

衝撃砲の不可視の弾丸は見えない壁に阻まれ届くことは無かった。

「くっ！　まさかこうまで相性が悪いだなんて……！」

シュヴァルツェア・レーゲンの肩に搭載された刃が左右一対で射出され、鈴のＩＳへと飛翔する。それは本体とワイヤーで接続されているようで複雑な軌道を描き、鈴の右足を捕らえた。

「そうそう何度もさせるものですかっ！」

鈴の援護のため射撃を行うセシリア。同時にビットを射出、ラウラへと向かわせる。

「ふん……。理論値最大稼動のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度の仕上がりで第三世代型兵器とは笑わせる」

セシリアの精密な狙撃とビットによる視界外攻撃。その両方をかわしながら、ラウラはまたさっきと同様に腕を突き出す。

今度は左右同時、交差させた腕の先では目に見えない何かに掴まえられたようにビットがその動きを停止させていた。

「動きが止まりましたわね！」

「貴様もな」

セシリアの狙撃はラウラの大型カノンによる砲撃で相殺される。

すぐさま連続射撃を行おうとするセシリアにラウラは先程捕まえた鈴をぶつけて阻害した。

「「きゃああっ！！」」

二人は地面に叩きつけられ鈴は衝撃砲を展開、放とうとする。

「甘いな。この状況でウェイトのある空間圧縮兵器を使うとは」

衝撃砲が火を吹く前にラウラの実弾砲撃によって右肩のアーマーが爆散した。

「させませんわ！」

追撃をかけようとしたラウラにセシリアは腰部に装着されたミサイルビットを放つ。

ドガァァァンッ！

「無茶するわね、アンタ……」

「苦情は後で。けれど、これなら確実にダメージが――」

セシリアの言葉は途中で止まる。

「……」

無傷ではなかったが、ラウラは健在。

「終わりか？　ならば――私の番だ」

言うと同時に瞬時加速で地上へと移動、鈴を蹴り飛ばし、セシリアに近距離からの砲撃を当てる。

さらにワイヤーブレードが飛ばされた二人の首を締めあげ、ラウラの元にたぐり寄せる。そこからはただただ一方的な暴虐が始まった。

「ああっ！」

その腕に、脚に、体に、ラウラの拳が叩き込まれる。シールドエネルギーはあっという間に減って機体維持警告域（レッドゾーン）を超え、操縦者生命危険域（デッドゾーン）へと到達する。

これ以上の攻撃は二人の生命に関わるほど危険なことなのにラウラは攻撃の手を止めない。ただ淡々と鈴とセシリアを殴り、蹴り、ＩＳアーマーを破壊していく。

ラウラはちらりと俺たちの方を見て、無表情だったものが残虐な笑みへと変わる。

それを見た瞬間、俺と一夏は同時にダイゼンガーと白式を展開。

「おおおおおっ！」

一夏は『雪片弐型』を構築、全エネルギーを集約させ『零落白夜』を発動。アリーナを取り囲んでいるバリアーへ叩き付け切り裂く。

すぐさまバリアーの間にできた切れ目を抜けてラウラに瞬時加速を使い突っ込む。

俺は一夏の背にぴったりとくっつき存在を隠す。

「その手を離せ！！」

「ふん……。感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

一夏が謎の壁に捕らわれ空中で止まる。

「勝利を確信した瞬間に舌なめずりか？　ど三流が」

一夏の肩を踏み台にして上を取り、ラウラに獅子王を唐竹に振り下ろす。

「なっ！？」

これは予想外だったのかラウラは慌ててワイヤーブレードを二人から外し後ろに下がって避けた。

「悪い、助かった」

どうやら不可視の壁は消えたらしい。解放された一夏は少し落ち着きを取り戻す。

「一夏は鈴とセシリアを頼む」

「わかった！」

鈴とセシリアを一夏はアリーナの端へと運ぶ。

「やはり貴様は邪魔だな」

「お前はもう喋るな」

ラウラはプラズマ手刀を展開。俺は八相の構えを取って、獅子王を斬艦刀モードに変える。

「……面白い。この前の決着をつけよう。あの人に認められるべき者は私だけだ」

空気が張り詰め俺とラウラの殺気が互いの動きを抑制し、隙を伺う。

「行くぞ……！」

先に動きだしたのはラウラ。その瞬間、俺たちの間に影が割り入ってきた。

ガギンッ！

金属同士が激しくぶつかり合う音が響き、ラウラはその影に加速を中断させられる。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬さん」

その影は織斑千冬。しかし驚いたのはその姿。普段のと同じスーツ姿で、ＩＳ用接近ブレードを軽々と扱っていた。

「模擬戦をやるのは構わん。――が、アリーナのバリアーまで破壊する事態にならられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

素直に頷いて、ラウラはＩＳの装着状態を解除する。アーマーが光の粒子へと変換され、弾けて消えた。

「西本、織斑、お前たちもそれでいいな？」

「あ、ああ……」

一夏は惚けていたのか素で答えてしまう。

「教師には『はい』と答えろ。馬鹿者」

「は、はい！」

「……了解」

ダイゼンガーの装着状態を解除して答えると千冬さんは改めてアリーナ内すべての生徒に向けて言った。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

パンッ！　と千冬さんが強く手を叩く。それはまるで銃声のように鋭く響いた。

★

場所は保健室。時間は第三アリーナの一件から一時間は経過し、べ

ットの上では打撲の治療を受けて包帯の巻かれた鈴とセシリアがむっすーとした顔で視線をあらぬ方向へと向けていた。

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

一夏と一緒にやれやれと苦笑。別に助けるためではなく、俺たちがムカついて乱入しただけだから感謝はいらないけど。

「ともあれ、怪我がたいしたことなくて良かったよ」

「こんなの怪我のうちに入らな――いたたたっ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味――つううっ！」

……やれやれ。

「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「ん？」

シャルルが二人にお茶を渡しながら何か言った。残念ながら俺と一夏には聞こえなかったが、鈴とセシリアにはしっかりと聞こえたようで、かぁぁっと顔を真っ赤にして怒り出す。

「なななな何を言ってるのか、全っ然っわかんないわね！　こここれだから欧州人って困るのよねえっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！　そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

二人ともまくし立てながらさらに顔を赤くさせ、落ち着かせるためにお茶をごくごくと飲む。

「しかし、お前ら何だってラウラとバトルすることになったんだ？」

「「ぶうぅぅっ！！」」

気になったことをきくといきなりお茶を吹きやがった。汚いなあ。

「げほっ、げほっ、いや、それは……」

「こほっ、こほっ、ま、まあ、なんと言いますか……女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

二人は言いにくそうにしている。まあ、何かしら挑発行為があったのだろう。だけど各国の代表候補生なのだからそうほいほいと挑発に乗るなよな。

「ああ。もしかして一夏とひろのことを――」

「あああっ！　デュノアは一言多いわねえ！」

「そ、そうですわ！　まったくです！　おほほほほ！」

何かピンとひらめいたらしいシャルルを、二人が超特急の勢いで取り押さえた。二人から口を覆われて、シャルルは苦しそうにもがく。

「こらこら、やめろって。シャルルが困ってるだろうが。けが人のくせに体を動かしすぎだぞ」

一夏はシャルルを助けるために鈴とセシリアの肩を指でつついた。

「「ぴぐっ！」」

案の定痛みが走ったらしい。二人とも甲高い声を上げて一夏を睨む。

「……すまん。そんなに痛いとは思わなかった。悪い」

さすがの一夏もやりすぎたと思いすぐさま謝る。

「い、い、いちかぁ……あんたねぇ……」

「あ、あと、で……おぼえてらっしゃい……」

これは一夏が悪い。フォローは無理だな。

ドドドドドドッ……！

「なんだっ？」

地鳴りが聞こえる。廊下から響いてきているようで、しかもだんだんこちらに近づいてきているようだ。

ドカーン！　と保健室のドアが吹き飛び、女子生徒たちが雪崩込んできた。

「織斑君！」

「西本君！」

「デュノア君！」

それなりに広いはずの保健室があっという間に人で埋めつくされ、しかも俺と一夏とシャルルを見つけるなり一斉に取り囲む。

「ど、どうした？　俺たちを食ってもまずいぞ」

「み、みんな、ちょっと落ち着いて」

『これ！』

状況が飲み込めない俺たちに、バン！　と女子生徒一同が突き出してきたのは学内の緊急告知文が書かれた申込書。

「な、なになに……？」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』――」

「ああ、そこまででいいから！　とにかく！」

彼女たちの手が俺たちを掴もうと伸びる。怖っ！

「私と組もう、織斑君！」

「ウチと組んで、西本君！」

「私と組んで下さい。デュノア君！」

なぜいきなり学年別トーナメントの仕様が変更されたかは知らないが、女子生徒たちは学園内で三人しかいない男子と組もうとしてるのはわかった。しかし――

「え、えっと……」

そう、シャルルは実は女子なのだから、誰かと組むのは非常にまずい。それに一夏と組むのもだ。いつどこで正体がバレてしまうかわからない。

シャルルを見ると、少しだけ困り果てた顔でこっちを見ていたが助けを求めるのは悪いと思ったらしく視線を逸らす。

相変わらず遠慮深いやつだな。似たような表情を浮かべてわあわあと騒ぐ女子全員に聞こえるようきっぱりと大きな声で宣言した。

「悪いな。俺はシャルルと組む。それと、一夏は篠ノ之と組むって決めているんだ。諦めてくれ」

しーん……。いきなりの沈黙。

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「すでに予約済みだなんて……絶望した！」

「男同士っていうのも中々……デュノア君×西本君……ごほんごほん」

とりあえず納得してくれたらしい。一人変なことをつぶやいたが女子達は仕方ないかと口にしながらとぼとぼと保健室から去っていく。

「ふう……」

「助かった」

「あ、あのひろ――」

「一夏っ！」

「ひろさんっ！」

安堵のため息をついた俺にシャルルが声をかけようとして、鈴とセシリアが俺と一夏に迫る。

「あ、あたしと組なさいよ！　幼なじみでしょ！　それにひろ、アンタどっちの味方なわけ！？」

「わたくしと前にペアを組んだのですからわたくしにするべきです！」

俺たちを締め上げるような勢いだ。説得には一苦労しそうだな……はぁ。

「ダメですよ」

うわっ！？　いきなり声をかけてきたのは山田先生。みんな驚いている。

「おふたりのＩＳの状態をさっき確認しましたけど、ダメージレベルがＣを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ＩＳを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

「うっ、ぐっ……！　わ、わかりました……」

「不本意ですが……非常に、非常にっ！　不本意ですが！　トーナメント参加は辞退します……」

燃え上がっていた代表候補生×２は山田先生の説得により納得した。

ま、当然だな。ＩＳの蓄積経験には戦闘による損傷時も含まれ、ＩＳのダメージレベルがＣを超えた状態で起動させると、その状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまう。それらは平常時での稼働に悪影響を及ぼすことがあるのだ。以上『ＩＳ基礎理論の蓄積経験についての注意事項第三』より。

まあ、簡単に言えば無理すると二度と使えなくなるということ。

鈴とセシリアからよくわからない激励をもらい、俺たちは保健室を出て部屋へ戻る。

その途中で箒にめちゃくちゃ感謝されたのは余談だ。

★

「あ、あのね、ひろっ」

「ん？」

夕食後、部屋に戻るなり、シャルルが口を開いた。心なしかその語調には勢いがある。

「あの、遅くなっちゃったけど……助けてくれてありがとう」

「ん？　何かしたっけ？」

「ほら、保健室でトーナメントのペアを言い出してくれたでしょ？すごく嬉しかった」

「あー、アレか。まあ気にするな。事情を知ってるのは俺だけだし、友達を助けるのは当然だろ？」

別に特別なことではないと思うが、シャルルにとっては違うらしい。
熱心に俺への感謝の意を示そうとしてくる。

「そんなことないよ。それが自然と出来るのは、ひろが優しいからだよ。誰かのために自分から名乗り出られるなんて、すごく素敵なことだと思う。僕はすごく嬉しかったよ」

……うーん、そんなに褒められるとなんか背中がかゆいな。

「俺より一夏の方が優しいと思うけど……まあ、一応受けとっておくよ」

「うんっ」

★

夜。僕は中々寝付けなくて、隣のベットで気持ちよさそうに寝るひろの寝顔を見る。

「意外とかわいい寝顔だね」

じーっと眺めてると胸の鼓動がどんどん早くなっていく。

「……」

ふと、この前ひろが言ってくれたことを思い出す。

『ここにいればいい』

初めて、そんなことを言われた。

母が死んでから僕の居場所なんてなかった。血が繋がっているだけの父親には絶望した。なんで母は再婚をしなかったんだってちょっと恨んだ。

いつしか自分が必要とされることさえ止めて、冷たい灰色の生活にも慣れていた。

そして、あの男の命令で日本に行くことが決まったときも、別段何も感じなかった。

それなのに――

（どうしてひろはこんなに僕の心を揺り動かすんだろうね）

――出会ってしまった。目の前の少年に。

あの男には恨みしかないけど、ひろと出会うきっかけをくれたことは感謝かな？

ひろは不思議な人だ。太陽のように暖かいときもあれば、氷のような冷たさを持っている。どっちが本当の彼なんだろう？

ううん、きっと両方なんだろうね。

「君に出会えて僕は幸せだよ。ライバルがいっぱいだけど……友達以上の関係になりたいな」

もう一度感謝の気持ちを込めてひろの額にキスをする。

「えへへっ。おやすみ、ひろ」

今更ながら自分の行動に体がより熱く火照り、僕は長い長い夜を過ごす。

強くなる想い（後書き）

どうも宏明です

一「織斑一夏です」

え!?　なんでおりむーがここに!

一「いや、味方キャラが一通り出たから呼んだんだろ?」

ラウラはまだ敵ですもんねー。

一「ところでさ宏明、ひろは何であんなに戦えるんだ?」

んー?　まあ、三年前の事件からある人経由で知り合った人たちに色々と鍛えてもらったからね。現時点では拳銃の弾丸を刀で斬り払うことが出来るよ。

一「ひろに追い付ける自信がないな。千冬姉といい、なんで俺の知り合いは化け物じみているんだ」

いつか番外編としてその時のことを書こうかな?

一「ともあれ、次回からは学年別トーナメント開始だ。俺と箒の相手はいったい誰らになるんだ？」

よくある二次創作では主人公ペア対一夏ペアだけど、ここは違うものにしようと思っている。

一「それは次回のお楽しみってやつか。次回も読んでくれよ？　忘れると千冬姉や箒たちが襲ってくるかもしれないから（ガクガクぶるぶる）」

おりむー！　超逃げてー！（彼の背後に出席簿や日本刀など武器を持った方々が……）

鋼鉄の天使（前書き）

今回は短め。そしてついにあの娘が再登場だ！

学年別トーナメント前日。ＩＳ学園の正面ゲート前に金髪ツインテール、赤い瞳をした少女が立っていた。

「ようやく戻ってこれた」

彼女はフェイト・テスタロッサ。アメリカの代表候補生であり、テスラ・ライヒ研究所のテストパイロット。

胸元にある△型のペンダントを握りしめる。

（やっと私も同じ舞台に立てる。力を貸してね）

フェイトは決意を新たにゲートをくぐった。

★

六月も最終週に入り、ＩＳ学園は月曜から学年別トーナメント一色にと変わる。その慌ただしさは予想よりも遥かにすごく、今こうして第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導を行っていた。

「しかし、すごいなこりゃ……」

それらから解放され、更衣室で着替え終わった俺と一夏とシャルルは更衣室のモニターから観客席の様子を見る。そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会していた。

「そろそろ対戦表が決まるはずだよね」

なんでか知らないが、突然ペア対戦へ変更がなされてから従来まで使っていたシステムが正しく機能しなかったらしい。なのでくじ引きで抽選を行うようだ。

俺とシャルルペアは一回戦一戦目、一夏と箒ペアは二戦目となっている。上手く進めば二回戦で当たるな。

そういえばフェイトはどうしてるかな？　学年別トーナメントまでには戻ってくると言っていたから既にいるとは思うが。

「あ、対戦相手が決まったみたい」

モニターがトーナメント表へと切り替わった。

「――まさかいきなりとはな」

一回戦の対戦相手は知らない女子と――フェイトだった。

「ひろはあの二人を知ってるの？」

モニターを凝視していたらしい。シャルルがきいてきた。

「片方は知らないけどもう一人はフェイト・テスタロッサ。俺たちのクラスメイトでシャルルが来る前にアメリカへ一時帰国してたんだ」

「ふ～ん。あの子とどういう関係なのかな？」

「どういうって、ＩＳ学園で最初にできた友達だけど？」

「……そう」

なんだ？　急にシャルルが不機嫌になった。

「フェイトは代表候補生で専用機持ちだ。警戒した方がいい」

「……そうだね」

代表候補生と聞いて、シャルルの表情は真剣なものに変わる。

「ひろ、負けるんじゃねえぞ」

「一夏こそ、熱くなり過ぎるなよ？　相手はお前より格上だ」

「わかってるって」

二戦目の対戦カードは一夏、箒ペア対ラウラ、モブキャラペアだ。

「ラウラを倒してひろも倒してやるからよ」

「ふ……楽しみにしてる」

「ちょっと、僕を忘れないで欲しいな」

ははははと笑い合い、俺とシャルルはアリーナへ向かう。

★

「お帰り、フェイト」

「ただいま。この時を楽しみにしてた」

アリーナでフェイトと再会した。今の彼女は白い装甲を纏い、シャルルと同じ黄金の髪をいつものツインテールではなく下ろしていた。

――『ヴァルシオーネ』第三世代型ＩＳ。特殊兵装あり。

本来ＩＳの両手両脚は大きいものだが、フェイトが駆る『ヴァルシオーネ』の装甲は全てスッキリとしていた。

細く薄い装甲が顔以外を包み、背中には天使の翼、元の美しさもあってか女神みたいだ。

だけど見惚れてる場合ではない。これから戦う相手なのだから。

『シャルル、作戦通りいくぞ。フェイトはただの量産機でセシリアと引き分けたやつだからな、きついと思うけど頑張ってくれ』

『うん。彼女には負けられない。絶対に僕は勝つ！』

プライベート・チャネルで話すとシャルルからものすごい気迫を感じる。フェイトも似たようなものを出してるし、少し圧倒された。

試合開始まであと五秒。四、三、二、一、開始。

「う、うわっ！？」

試合開始と同時に俺は瞬時加速を行い、ラファール・リヴァイヴを装着している女子生徒に肉迫。彼女は慌ててマシンガンを撃つ。

少し体を傾け弾丸をかわし、左薙に獅子王を振るう。

「きゃっ！？」

女子生徒のマシンガンを弾き飛ばし、逆袈裟、右斬り上げと体にＶ字を描くよう斬り付ける。

「え……？　もう終わり？」

絶対防御が発生し、彼女のシールドエネルギーは０を表示していた。

★

開始と同時に６１口径アサルトカノン『ガルム』を撃つシャルル、フェイトは右手に呼び出した『ハイパービームキャノン』で相殺。続けてエネルギー弾を放つ。

シャルルは右側に飛んで両手にアサルトライフルを呼び出す。光りの糸が虚空で集まり、一秒とかからず銃を形成した。

これこそがシャルルの得意とする技能『高速切替（ラピッド・スイッチ）』である。事前呼び出しを必要としない、戦闘と平行して行えるリアルタイムの武装呼び出し。それはシャルルの器用さと瞬時の判断力があってこそ光る。

「中々やるね！」

「そちらこそ！」

互いに砲口を向けながら円を描くように動き、銃弾をかわしながら撃ち合う。

これでは連射性に優れた銃を大量に持つシャルルが有利。フェイトは左手に閃光弾を呼んで中心に投げた。

「！？」

眩しい閃光が両者の間で煌めき、撃ち合いが終わる。

――敵機、背後に確認。

リヴァイヴからの警告にシャルルはハンドガンに持ち替えた右腕を後ろへ向けて撃つ。

「わっ！？」

背後へ回っていたフェイトは予想外の行動に驚きつつ、左手に持った接近ブレード『ディバイン・アーム』で弾く。

（あ、危なかった）

ヴァルシオーネの翼をはばたかせ突撃。

ガギンッ！

「俺を忘れてんじゃねえ……っよ！」

しかし、シャルルとの間にひろが割り込み獅子王でフェイトの突撃は止められた。

★

突撃を止められたフェイトは右手の銃を向ける。

「そうはさせない！」

後ろにいるシャルルが６２口径連装ショットガン『レイン・オブ・サタディ』二丁を握りフェイトを狙う。

ふっとフェイトが消えて上空からビームが降ってきた。

「速い！」

直撃はしなかったのでダメージは軽微。

「ちいっ！」

フェイトはアサルトライフルに持ち替え撃ってきた。

固まっていると全滅するので散開し、左側からシャルルがアサルトライフルで応戦するもひらりとかわされてしまう。

「リープスラッシャー！」

フェイトの前に半円状の機械が現れ合体。円盤になった『リープスラッシャー』なる物はエネルギー刃を円盤の外側に展開し、シャルルへ向かう。

「斬艦刀――」

攻撃直後の隙を狙い獅子王を斬艦刀に変えて、瞬時加速を使いフェイトに近付く。

ヴンッ！

「何!?」

刃が当たった瞬間、フェイトは二、三人に増えて消える。

その直後、背中に痛みが走った。

――バリア貫通、ダメージレベル低。

反時計回りに回転して追撃をかわす。

「まさか……分身か?」

分身とは目視出来ないほどの速さで動いた時に見える残像。フェイトは俺たちより速いらしい。直線だけなら俺も残像が出来るほど速く行けるが、フェイトのは背後を取れる。

シャルルを確認すると、彼女は『リープスラッシャー』の自動追尾から逃げながら撃ち落とす。

そこを狙ってフェイトがシャルルに肉迫し『ディバイン・アーム』を振り下ろした。

ガギンッ！

お得意のラピッド・スイッチで右手を銃から接近ブレード『ブラッド・スライサー』に替えて受け流すシャルル。

左手のショットガンが火を噴いた瞬間にまたフェイトは分身を行いシャルルの背後を取って一閃。

吹き飛ばされたシャルルを受け止める。

「大丈夫かシャルル」

「なんとかね」

合流して空にいるフェイトから目を離さないよう注意しながら作戦会議。

「フェイトのスピードは俺の瞬時加速と同等かそれ以上……いや、背後に回り込めるから上だな」

「そうだね。おそらく現在の第三世代型とは比べ物にならないほど速い。どうするの？　このままじゃ僕たちの攻撃は避けられちゃうよ」

ダブルガトリングガン、６連ミサイルを撃ちまくるシャルルの弾幕をフェイトはひらり、ひらりと余裕でかわす。

「ああ、だからちょっと分の悪い賭けに乗ってくれないか？」

「賭けごとは好きじゃないけど……わかった。僕はひろを信じるよ」

「ありがとな。フェイトが俺の前から分身して消えた瞬間、俺の背中を撃て」

「えっ！？」

弾切れを起こし弾幕が止む。

「頼むぞ、シャルル！」

困惑するシャルルの返事を聞かずにフェイトの下へ突っ込む。銃弾を斬艦刀の刃で防ぎながら距離を詰めて唐竹に振り下ろす。

ヴンッ！

残像が真っ二つになり背後で小規模の爆発が起きた。

「え……？」

何が起きたのかわからないと困惑するフェイト。どうやら賭けに勝ったらしい。

「斬艦刀――」

雷の如き速さで胴を切り裂き、続けて唐竹に振り下ろす。

「――雷光斬り！」

フェイトの装甲に十字傷が刻まれ地面へ墜ちてゆく。

「ま、まだ……私、は」

フェイトは地面に激突する直前に姿勢を整え着地。

「ゴメン。僕たちは負けられないんだ」

シャルルに胸元を撃たれヴァルシオーネのシールドエネルギーが０となる。

『試合終了。西本、デュノアペアの勝利』

試合終了のアナウンスが入り俺たちはピットへ戻った。

★

「負けちゃった」

私、フェイト・テスタロッサの復帰戦は黒星に終わった。まあ、２対１だったのだからあの二人によく善戦した方かな。

「ごめんなさい。私があっさりやられたせいで……」

「私こそゴメン。パートナーなのに自分のことでいっぱいだったから」

今日パートナーになった子と互いに謝って、次はもっと頑張ろうと思った。

「はぁ～～。これで織斑君との交際の夢は崩れ去ったかー」

「交際？　優勝特典はデザート1ヶ月無料券じゃないの？」

「そっか、テスタロッサさんは本国に戻ってたから知らないんだっけ。実はね――」

まさか私が居ないうちに学年別トーナメント優勝者には一夏かひろと交際出来る特典があったなんて……それで更衣室にいるみんなはギラギラと闘志を燃やしていたのか。

「うー、こうなったら西本君たちに勝ってもらわないとね。それに男同士ってのも……」

アミィ（今日組んだパートナー）が妄想の世界に逝ってしまう。

「でも、なんでデュノア君に負けたくないって思ったんだろ？」

女の勘？　っていうのが彼をライバルだと言っていた。一夏とはまた違う仲良さがあって、黒い何かがどろどろと私を支配していく。

でもダメ。こんな気持ち悪いものを抱えていたら私が私でなくなっちゃう。ひろにも酷いことしちゃうかもしれない。だからこの黒いのは心の奥底へ追いやる。

「よしっ！」

軽く頬を叩いて気合いを入れる。次は一夏と箒の試合だからね。応援しなくちゃ。

「ひろっ、俺は……ばか、やめろって。そして二人は……」

……。えーっと、いっこうに現実世界へ戻って来ないアミィは放っておこう。

鋼鉄の天使（後書き）

どうも宏明です

フ「フェイト・テスタロッサです」

というわけでようやくフェイトの専用機『ヴァルシオーネ』が登場しました！　いやー、めちゃくちゃ悩みましたよ。ズィーガーリオンと接戦だった。

フ「どうしてヴァルシオーネになったの？」

ズィーガーリオンは『青』だからね、セシリアと被るんだよ。

フ「……金髪で赤い瞳でツインテールだもんね。ううん、けっこう被ってるなぁ」

被ってないのはヤンデレなとこ？

フ「ヤンデレじゃないよ！」

どうどう。それと『雷光斬り』が出ました。これは十字に斬る技で

す。アニメだと疾風怒涛と同じ動きだったけど。

フ「あれは痛かった。ひろってあまり手加減してくれないし」

さて、次回は一夏が少し頑張る回だ。

フ「だ、大丈夫かな？　すごく強い人みたいだし」

主人公補正がかかるから大丈夫だろう。死にはしないさ。

フ「……意外といい加減な人だな。次回も読んで下さい。いくよ！
クロスマッシャー！」

え！？　なんでクロスマッシャーが――。

暴走する悪意（前書き）

少しキャラが崩壊してます。ラウラっ党の方々は注意してください。

暴走する悪意

学年別タッグトーナメント一回戦・二戦目。

俺と箒の前にラウラ・ボーデヴィッヒとパートナーであるルヴィア・ハミルトンがいる。

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そりゃあなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

試合開始まで五秒を切る。三、二、一、開始。

「「叩きのめす」」

試合開始と同時に瞬時加速を行う。結局俺もひろと同じように突っ込むことしか出来ない。

「おおおっ！」

「ふん……」

ラウラが右手を突き出す。――来る。

俺はラウラと直接戦った鈴とセシリアの意見をひろと一緒に聞いていたときのことを思い浮かべた。

『ＡＩＣ？　なんだそれ？』

『シュヴァルツェア・レーゲンの第三世代型兵器よ。アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略。慣性停止能力』

『ふーん』

『ちなみに一夏さん、ＰＩＣはご存じですわよね？』

『……知らん』

『アホ、授業で山田先生が言っていただろうが。全てのＩＳはパッシブ・イナーシャル・キャンセラーによって浮遊、加速、停止をしている。基本だぞ』

『おお、どこかで聞いたことがあると思ったらそれか』

『あんたねぇ……』

『とにかく対策を考えますわよ。……正直、わたくしも実物を見るのは初めてでしたが、あそこまでの完成度を誇っているとは思ってもみませんでした』

『あー、それはあたしも同意見。あそこまで衝撃砲と相性が悪いとはね……』

『ところで、理屈としては衝撃砲と同じなのか？　エネルギーで空間に作用を与えるっていう』

『ああ、そうね。大体同じだと思うわ。厳密には違うんでしょうけど、空間圧作用兵器と似たようなエネルギーで制御してるはずよ』

『っていうことは、零落白夜なら切り裂けるわけだな？』

『理屈の上ではそうですが、実際には止められましたわね？』

『そこなんだよなぁ。なんで止められたんだ？』

『簡単だ。零落白夜に触れなければいいのだからお前の腕を直接止めたんだろう。篠ノ之流古武術にもあるだろ？　武器を持った相手を無力化するのに敵の肩や腕を狙う技が』

『そういえばあったな……だけどあんなに速く動いているのに、そんなことができるのか？』

『できるのでしょうね。ただ、一つ申し上げるなら、一夏さんの動きは――』

『ぶっちゃけ読みやすいのよ』

『ぐっ……』

『特に腕って線の動きじゃない？　こう、縦か横かにラインが動くわけでしょう？　だから――』

『交差するようにＡＩＣのエネルギー波を同じく線で投げれば、簡単にひっかけられるということですわね』

『なるほどなぁ。ひろならどうするんだ？』

『決まっている。ヤツに捕まる前に斬艦刀でぶった斬る』

『……相変わらず究極の力押しだ』

結局、確実な手段で慣性停止能力を破る方法は思いつかなかった。
それなら、手段は一つ。――意外性で攻める。

「くっ……」

しかし、その程度の戦略など読んでいたのだろう、俺の体は腕を始めに、胴、足とＡＩＣの網に捕まえられる。見えない腕に掴まれたように、身動き一つ取れなくなってしまった。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「……そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば私が次にどうするかもわかるだろう」

わかりたくはないけどな、想像はつく。ガギンッ！　と巨大なリボルバーの回転音が轟き、白式のハイパーセンサーが警告を発する。

『敵ＩＳの大型レールカノンの安全装置解除を確認、初弾装填――警告！　ロックオンを確認――警告！』

一対一ならもう詰みだろう。だけど今は違う。――ほら。

「はあああああっ！」

箒が俺の後ろから飛び出てラウラの懐に入り接近ブレードを一閃。

肩のカノンは斬撃によって逸らされ、俺に向けて放った砲弾は空を切る。

「ちっ……！」

さらに踏み込み逆風に振り上げる箒の攻撃にラウラは急後退でかわす。

「逃がすか！」

ガギンッ！

追撃をかけようとする箒。そこへ箒と同じく打鉄を纏ったハミルトンが接近ブレードで遮る。

「貴様……邪魔をするな！」

「そうもいかないの。これはタッグ戦以前に私たちの力量を測るためのトーナメントだから」

互いの接近ブレードがぶつかり合って、火花を散らす。刀を何回も打ち合いながらも箒が徐々に後方へと押していく。

「くっ！　全国大会優勝者なだけあってなかなかね」

「箒！」

声をかけると箒は押すのを止めて後ろへ下がる。

急に箒が力を抜いたせいで力の均衡が崩れ、ハミルトンはバランスを崩したたらを踏む。

「そこだあっ！」

がら空きとなった胴に『雪片弐型』を叩き込もうとした。

「！？」

だが、俺の一撃は空を切る。――なんだ？　急に消えたぞ。

「邪魔だ」

入れ替わりにラウラが急接近してくる。そのワイヤーブレードの一つがハミルトンの脚へと伸びていて、アリーナ脇まで遠心力で投げ飛ばす。どうやらさっきの緊急回避はこのワイヤーブレードによる牽引らしい。

「きゃあっ！」

その行動は味方を助ける訳ではないようだ。壁に叩き付けられた彼女は接近ブレードを杖代わりにして立ち上がる。

「ラウラ！　彼女はお前のパートナーだろうが！」

プラズマ手刀を展開したラウラが左右から連続で斬りかかってくる。斬撃と突撃を混ぜた正確無比な攻撃に、すぐさま押されだした。

「ふん、役立たずを排除しただけだ」

湧き上がる怒りを何とか抑えてラウラの猛攻を受け流す。ラウラ・ボーデヴィッヒの実力は確かに化け物じみてやがる。今現在こうして俺と接近戦を繰り広げながら、同時にワイヤーブレードを駆使し

て箒を牽制、俺から引き離している。さすがに六つ同時には操ってないものの、上手く順番に射出と回収を行って連射による多角攻撃を繰り広げていた。

『箒、無事か？』

『ああ、何とかな。すぐにサポートに入る』

『いや、このまま例の作戦で行こう』

『……わかった』

プライベート・チャネルで短くやりとりを交わして、俺たちはあらかじめ決めていた作戦へと移る。それは『パートナーを先に倒そう』作戦だ。――まあ、ひろたちと同じ戦法だけど。

単純に二対一の方が敵を倒しやすい。一人の力が弱くても二人合わせればなんとやらってやつだ。一足す一の答えは二とは限らない。

「この先へは行かせん」

「そう。ならあなたを倒すだけ」

ラウラの射程圏内から離脱した箒はすぐさまハミルトンへと間合い

を詰める。

彼女も中々の使い手なのか一度斬り結び離れると両者共に攻めあぐねていた。

「よそ見とは随分舐められたものだ」

両手のプラズマ手刀＋ワイヤーブレードの波状攻撃がくる。これらを捌ききるのは容易いことではない。けれど、少しでも油断すればつい距離を取ってしまいそうになるのを必死にこらえ、俺は接近戦を維持し続けた。

「おおおおっ！」

『雪片弐型』を右手に任せて、左手はラウラのプラズマ手刀――その手自体を払い、複雑に動くワイヤーブレードの側面を両足で蹴り飛ばす。

自分でも驚くほど集中力が増して感覚が鋭敏になる。

「……やはり貴様も有象無象の一つか。――失せろ」

なんだ？　何か違和感が……六つのワイヤーブレードの内五つが俺に向かって射出され、残り一つは――。

「一夏！　避けてくれ！」

離れた場所で戦っていた箒の脚に巻き付いたワイヤーブレードが箒を俺に向けて投げ飛ばす。

慌てて離脱しようとするが、ビシッ！　と凍り付いたかのように俺の体が動かない。――まずい、ＡＩＣに捕まったか。

「がはっ！？」

箒が俺にぶつかり地面へ叩き付けられる。

相殺しきれなかった衝撃が背中から突き抜け、呼吸が一瞬詰まる。

箒は俺がクッション代わりとなったので無事だ。

「そんなに仲間が大事なら二人まとめて消えるがいい」

ラウラの大型レールカノンがこちらへ照準を合わせ終えていた。

ドンッ――！

やけにゆっくりと見える。砲口から瞬間的にあふれ出た炎を纏い、そしてそれを突き破りながら進んでくる砲弾。しかもそれは対ＩＳアーマー用特殊徹甲弾だ。当たり所が悪ければ一発で勝負がつくほどのシロモノ。

（せめて箒だけでも！）

背中から抱きしめるようにしていた箒を突き飛ばし右肩の装甲が吹き飛ぶ。

「がああああっ！？」

白式の装甲が意外と硬かったおかげで骨に異常はないがすごく痛い。

「今のはわざと外した。織斑一夏。教官に汚点を残させた貴様は……完膚なきまで叩き壊す」

ドゴッ！

ワイヤーブレードによって俺はラウラの下へ引っ張られ鳩尾に拳を叩き込まれる。

「ごぼっ！？」

うぇ……朝食べた鯖味噌が逆流して気持ち悪い。

バキッ！

今度は顔を殴られた。絶対防御のおかげで致命傷にはならないが、めちゃくちゃ痛てぇ。

わりぃ。……俺じゃラウラに勝てなかった。ちくしょう……ひろ、俺は弱ぇな……。

★

殴る。殴る殴る殴る殴る殴る。

顔を、腹を、脚を、吹き飛んではワイヤーブレードで引き寄せ私の中で燃え上がった怒りを拳に乗せて殴る。

篠ノ之束の妹が泣きながら私に止めろと言う。邪魔だからレールカノンを撃って黙らせた。

ははっ、私は教官……織斑千冬に汚点を残した愚か者に鉄槌を下した。

「私の勝ちだ！　あはははははははははははっ！」

まるであの人と一緒にいたあの頃と同じ胸の高揚を感じる。だけどまだ足りない。そう、私を不快にさせるヤツが……西本宏範が残っている。

ヤツを倒せば私はあの人に成れる。最強のあの人に！

★

ドゴォッ！

ロッカーをおもいっきり殴り、拳の形をした凹みが出来る。ちなみにダイゼンガーを展開させてはいない。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……！」

力に溺れ、俺の大切な親友達を傷付けた。

一夏と箒は保健室へ運ばれたが怪我は大したことなく、今日一日安静にしていれば問題ないらしい。

さっき鈴がプライベート・チャネルで教えてくれた。

「ひろ、熱くなり過ぎたらダメだよ」

「……大丈夫だ。今ので余計なものは全て吐き出した」

俺に色々と戦い方を教えてくれた人が言っていた。『常に平常であれ』と。

「あ、血が出ているよ！」

どうやらロッカーを殴った時に少し切ったらしい。人差し指から血が流れ出ていた。

「この程度なら水で洗ってばんそうこ付ければ大丈――」

ちゅ。

「ん……」

え……？　何でシャルルは俺の指にキスして舐めているんだ？

（シャルルの唇柔らかい）

「……これで大丈夫、だよっ」

「お、おう。ありがと」

シャルルの唾液で消毒？　されてばんそうこをぺたんと貼られた。

「たしか日本ではこうやって治療するんだよね？」

いや、確かにそういう治療法もあるけど衛生上あまりよろしくはないんですが。

「……」

「……」

俺の顔真っ赤になっているかもしれん。シャルルはあさっての方向に向いているからどんな顔をしてるかわからない。

俺とシャルルしかいない更衣室。

モニターの音声よりも心臓の鼓動の方がでかい気がした。

「入るぞ」

プシューと更衣室のドアが開いて千冬さんが入って来る。

「千冬さん！？」

バシンッ！

「織斑先生だ。女子更衣室から後ろの部屋でものすごい音がしたと聞いたから来たが……」

千冬さんの視線の先には先程破壊したロッカーがある。

「ロッカーを破壊したのは西本だな？」

「……はい」

ゴスッ！

千冬さんから拳骨をもらった。

「弁償金はお前の口座から引いておく」

「了解です」

まあ、バイトで稼いだものがたんまりあるから問題ないけど。

「それと少し話しがある。来い」

俺に拒否権など無いですからね。おとなしく付いて行く。

★

（キキキ、キスしちゃった！　指舐めちゃった！）

シャルルは顔どころか全身を真っ赤にさせていた。

唇をなぞる。指の感触、温度、味を思い出し、顔がかーっと湯気が出そうなほと熱くなった。

（シャ、シャワー浴びて頭冷やそう！）

シャルルはＩＳスーツを脱いでシャワールームに向かう。

「熱っ！？」

間違えて熱湯を被った。

★

「それで織斑先生、話しとは？」

前を歩く千冬さんが立ち止まりこちらへ向く。

「ああ、ラウラのことなんだが」

いつもの凛としたものではなく、一夏を心配する時の顔だ。

「あいつは今、闇に囚われ力に振り回されている。おそらく私の声も届かないだろうな」

「まるで……かつての俺みたいにか」

俺が小六の頃、じいちゃんは何者かに殺された。

世界最強だったじいちゃんならそこら辺の達人だろうがＩＳが相手でも勝ってしまうだろう。

だけどそんなじいちゃんでも勝てないものがいた。それは『病気』

病に犯されたところに何者かがじいちゃんを襲い、世界最強の男―

―西本竜真（にしもと　りゅうま）はこの世から去った。

この事を知ってるのは俺と千冬さん、じいちゃんの弟子とその友人だけだ。表向きには事故死とされているから他にもいそうだが。

その頃の俺はやり場のない怒りを周りにぶつけて荒れた。まあ、千冬さんにフルボッコにされて目が覚めたがな。

「頼まれなくても俺はアイツを止めるよ。かつて千冬さんが俺を叱ってくれたときのように」

「……そうか」

ふっと笑う千冬さん。その顔には優しさがある。

（久しぶりに見たな、千冬さんの優しい笑み）

ちなみに一夏の前では絶対に出さない表情だ。照れ臭いらしい。

「だから安心して愛しの弟に会いに行けば？」

ゴチンッ！

「私は身内のネタでいじられるのが嫌いだ」

「知ってるよ。いつもの1．5倍程威力が上がるから」

10年来の付き合いは伊達じゃない。

「ふんっ、せいぜい足下をすくわれるなよ？」

ツカツカと歩いて行きまた立ち止まった。

「それとな、ひろ。お前も大事な義弟だ」

それだけ言って今度は止まらずに行ってしまう。

「ありがと……千冬……姉さん」

暴走する悪意（後書き）

どうも宏明です

ひ「ようやく来れたな。西本宏範だ」

ラウラっ党の皆さんすみませんでした！（土下座）

ひ「いくら俺と戦わせるためとはいえ、原作と比べて悪者になってるしな」

その分、デレ期はシャル同様優遇しますよ。

ひ「シャルルは優遇しすぎじゃないか？　今回なんて色々ヤバイだろ。どこのエロゲーだ」

ふふふ、まだまだシャルのターンは続くのさ。

ひ「あと、じいちゃんについても色々明らかになったな。何者なんだよ」

一言で言うなら『ＳＡＭＵＲＡＩ』だ。

ひ「は？」

だから『ＳＡＭＵＲＡＩ』戦場を刀だけで駆け抜け、銃弾よりも速く動き、戦艦を三隻沈め戦闘機を十機落とした第二次世界大戦の英雄。

ひ「……じいちゃんは人間なのか？　実は未来からきた戦闘用ロボットなんじゃ」

生物学上は人間。ちなみに白騎士事件の時、アメリカは損害０だった。何故ならアメリカの高官達が「ＳＡＭＵＲＡＩの再来だ！」と恐れたので戦闘に参加しなかったのさ。

ひ「すげぇ人だったんだな」

次回で学年別トーナメントもクライマックス。ひろは爆発した方がいいよ。

ひ「酷！　てめえのせいだろうが」

それでは次回も読んで下さい。

ひ「斬艦刀、疾風怒涛！」

ギャアアア――！

一夏「今回俺が主役だろ？　なんで俺について触れないんだよ……」

闇を断つ剣

「……」

「……」

一回戦が全て終わり、二回戦の最初。アリーナに立つ俺とラウラに言葉はない。

殺伐とした空気が流れ異様な静けさに包まれる。観客の人たちも息を潜めるように俺たちを見ていた。

試合開始までのカウントが流れ始めて八相の構えを取る。

『試合開始！』

獅子王の鍔が左右に開き両刃の巨剣へと変わる。そしてバカ正直にラウラへ突っ込む。

「……貴様には学習能力というものが無いのか？」

ラウラは右手を前に突き出す。

ＡＩＣの効果範囲に入る前に急停止をかけ、斬艦刀を地面に向けて振り下ろした。

――轟！

「なっ！？」

地面に大きな亀裂を作り剣風がラウラの髪を乱暴に撫でる。

「はあああああっ！」

続けて袈裟斬り。

ラウラは後ろへ下がったのでダメージは与えられなかった。

射出されるワイヤーブレード。

最小限の動きでかわし、一つのワイヤーを掴む。

「おりやあああああっ」

獅子王を収納してから両手で持ち、ハンマー投げの要領でラウラを

振り回す。

「くっ！？」

ラウラはすぐさま掴まれているワイヤーをパージして遠心力から逃れるが、シャルルの銃弾が雨のように襲いかかりダメージを負う。

「き、貴様ら」

ＡＩＣを展開して銃弾を止め、更にワイヤーブレードでシャルルの右腕を捕らえる。

「大・車・りぃぃぃん！」

シャルルを捕らえているワイヤーを獅子王が断ち、そのままラウラへ向かう。

レールカノンによって弾き飛ばされるが、一度粒子に戻り一秒後には俺の手に再び展開される。

シャルルが追撃をかけようとするが、ラウラのパートナーに阻まれた。

『ひろ、この人は僕が相手をするから』

『ラウラはまかせろ。巻き込まれないようにな』

相手の子は前回みたいに巻き込まれるのを危惧してか、アリーナの端へシャルルを押して行く。

「ちっ」

レールカノンの弾丸が迫り獅子王で上に弾く。ラウラがプラズマ手刀を展開し、瞬時加速で一気に間合いを詰めて来る。

さすがにアレを斬艦刀で防ぐのは難しい。刀モードに戻してプラズマ手刀を捌く。

「貴様の武器はそのブレードのみ。それでは私に勝てはしないぞ」

フェイントを混ぜつつプラズマ手刀の乱打とワイヤーブレードで徐々にシールドエネルギーが減っていく。

（さて……どうやってラウラを倒すか）

ワイヤーブレードを紙一重でかわし、手刀を弾いていると俺は笑っていた。

戦いでは力に叩き潰されるよりも心が負けを認めた時が本当の敗北だ。

『とりあえず笑う』

じいちゃんに教わった数少ない教え。ピンチの時、とりあえず笑っていれば何とかなるだとさ。いい加減だなぁ……まあ、効果はあったがな。

ラウラは余裕の表情をする俺に怪訝そうな顔をする。

「何を笑っている？」

「ん？　ああ、刀だけでは勝てないんだっけ？　もし本当にそう思っているならお前はＡＩＣの致命的な欠陥に気付いてないってことになるからな」

「何だと！？」

ちなみにこれはブラフ。まだ確証はないからただの揺さぶりなんだが……ラウラの瞳が少し揺れた。

「ふ、面白い。ならば聞かせてもらおうか……ドイツが誇るＡＩＣの弱点を」

ラウラはプラズマ手刀を解き、右手をかざす。俺は抵抗もせずにわざと捕まる。

「その前に言っておく。これは――『タッグ戦』だぜ？」

「！？」

慌ててラウラが視線を動かす。俺の後ろに来ていたシャルルが素早く踊り出てショットガンの六連射を叩き込む。次の瞬間、ラウラの大口径レールカノンは轟音とともに爆散した。

「くっ……！」

どうやら俺の推測は当たりのようだ。ＡＩＣの弱点、それは『停止させる対象物に意識を集中させていないと効果を維持できない』こと。現に俺への拘束は解除されている。

「歯ぁ食いしばれよ。俺の拳は効くぜ？」

獅子王を左手に持ち替え、ラウラの懐に入り込み右拳を振り上げる。

「！？」

アッパーを放った右拳はラウラのあごを打ち上げた。絶対防御によって砕けたりはしないが衝撃は伝わり脳を揺らす。

「こいつは愛する弟を傷付けられた千冬さんの分だ」

「グッ……がァ！」

流石軍人。恐るべき執念を持っているのか倒れない。

「これが僕のジョーカーだ！　威力はその身で味わってね！」

ラウラにとどめをさそうとシャルルが瞬時加速で詰め寄って、左腕にある盾の装甲がはじけ飛び中からリボルバーと杭が融合した装備が露出する。６９口径パイルバンカー『灰色の鱗殻（グレー・スケール）』通称――

「『盾殺し（シールド・ピアース）』……」

焦点が合ってなかった瞳が正常に戻り、ラウラの表情が凍る。もう避けることも防ぐことも出来ない。

一瞬、ほんの一瞬だけシャルルの顔が笑みを浮かべる。それはさながら死を宣告する天使の様相であった。

ズガンッ！！！

「ぐううっ……！」

ラウラの腹部にパイルバンカーの一撃が叩き込まれる。エネルギーがごっそりと持っていかれ、相殺しきれなかった衝撃によってラウラの表情は苦悶に歪む。

しかし、これで終わりではない。『灰色の鱗殻』はリボルバー機構により高速で次弾炸薬を装填する。――つまり、連射が可能なのだ。

ズガンッ！　ズガンッ！　ズガンッ！

続けざまに三発撃ち込まれ、ラウラの体が大きく傾く。その機体にも紫電が走り、ＩＳが強制解除の兆候を見せ始める。

――だが次の瞬間、異変が起きた。

★

（こんなところで負けるのか、私は……）

確かに相手の力量を見誤った。それは間違えようのないミス。しかし、それでも――

（私は負けられない！　負けたくない……！）

ラウラ・ボーデヴィッヒ。それが私の名前。識別上の記号。

一番最初につけられた記号は――遺伝子強化試験体Ｃ－００３７。

人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた。

――暗い。暗い闇の中に私はいた。

ただ戦いのために作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。知っているのはいかにして人体を攻撃するかという知識。わかっているのはどうすれば敵軍に打撃を与えられるかという戦略。

格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法を体得した。

私は優秀であった。性能面において、最高レベルを記録し続けた。

それがある時、世界最強の兵器――ＩＳが現れたことで世界は一変した。

その適合性向上のために行われた処置『ヴォーダン・オージェ』によって異変が生まれたのだ。

『ヴォーダン・オージェ』――擬似ハイパーセンサーとも呼ぶべきそれは、脳への視覚信号伝達の爆発的な速度向上と、超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン移植処理のことを指す。そしてまた、その処置を施した目のことを『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』と呼ぶ。

危険性はまったくない。理論上では、不適合もない――はず、だった。

しかし、この処置によって私の左目は金色へと変質し、常に稼働状態のままカットできない制御不能へと陥った。

この『事故』により私は部隊の中でもＩＳ訓練において後れを取ることとなる。

『出来損ない』の烙印をつけられ私の世界は更に深い闇のものへと落ちていった。

そんな私が、初めて目にした光。それが教官との……織斑千冬との出会いだった。

「ここ最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。１ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ、私が教えるのだからな」

その言葉に偽りはなかった。特別私にだけに訓練を課したということはなかったが、あの人の教えを忠実に実行するだけで、私はＩＳ専門へと変わった部隊の中で再び最強の座に君臨した。

自分を疎んでいた部隊員の声も、もう気にならない。

それよりもずっと、強烈に、深く、あの人に――憧れた。

その強さに。その凛々しさに。その堂々とした様に。自らを信じる姿に、焦がれた。

――ああ、こうなりたい。この人のようになりたい。

そう思って教官が帰国する前にきいてみた。

「どうしてそこまで強いのですか？　どうすれば強くなれますか？」

その時――ああ、その時だ。あの人が、鬼のような厳しさを持つ教官が、わずかに優しい笑みを浮かべた。

「私には二人の弟がいる」

「弟……ですか」

「まあ、一人は義理の弟だがな。あいつらを見ていると、わかると

きがある。強さとはどういうものなのか、その先に何があるのかをな」

「……よくわかりません」

「今はそれでいいさ。そうだな。いつか日本に来ることがあったら会ってみるといい。……ああ、だが一つ忠告しておくぞ。あいつら、特にひろに――」

優しい笑み、どこか気恥ずかしそうな表情、それは――

（それは、違う。私が憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに）

だから――許せない。教官にそんな表情をさせる存在が。

そんな風に教官を変えてしまう弟たち、それを認められない。認めるわけにはいかない。だから――

（敗北させると決めたのだ。あれを、あの男たちを私の力で、完膚無きまでに叩き伏せると！）

一人は叩き伏せた。だがもう一人――あの男は、あれは私よりも強

い力で私を叩き潰してきた。教官と同じ何かを持つヤツには負けたくない。だから――

（力が、欲しい）

ドクン……と、私の奥底で何かがうごめく。

そして、そいつは言った。

『――願うか……？　汝、自らの変革を望むか……？　より強い力を欲するか……？』

言うまでもない。力があるのなら、それを得られるのなら、私など――空っぽの私など、何から何までくれてやる！

だから、力を……比類無き最強を、唯一無二の絶対を――私によこせ！

ＤａｍａｇｅＬｅｖｅｌ……Ｄ．
Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｄｉｔｉｍｎ……Ｕｐｌｉｆｔ．
Ｃｅｒｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ……Ｃｌｅａｒ．

『Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｃｅ　Ｓｙｓｔｅｍ』……ｂｏｏｔ．

★

「あああああっ！！！」

突然、ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発する。と同時にシュヴァルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれ、シャルルの体が吹き飛ばされた。

「ぐっ！　一体何が……――――！？」

「なに！？」

俺もシャルルも目を疑った。その視線の先にいるラウラが……そのＩＳが変形していた。

いや、『再構築』と言った方がしっくりくる。

装甲は全てぐにゃりと溶け、どろどろのものになって、ラウラの全身を包み込んでいく。

黒い、深く濁った闇が、ラウラを飲み込んでいった。

「まるでどっかの映画みたいだな……」

ＩＳはその原則として、変形をしない。厳密にはできないと言った方が正しい。

ＩＳがその形状を変えるのは『初期操縦者適応（スタートアップ・フィッティング）』と『形態移行（フォーム・シフト）』の二つ。

パッケージ装備による部分変化はあっても、ガンダムや勇者ロボみたいに変形はできない。ましてやスライムのように形そのものが変わるなんてあり得ない。

だが――それが、あり得ないことが、今目の前で起こっている。

シュヴァルツェア・レーゲンだったものはラウラの全身を包み込むと、その表面を流動させながらまるで心臓の鼓動のように脈動を繰り返し、ゆっくりと地面へと降りていく。

それが大地に着地すると、早送りを見ているかのように全身が変化、形成させていく。

そしてそれは黒い全身装甲のＩＳに似た『何か』になった。

ボディラインはラウラのそれを表面化した少女のそれであり、最小限のアーマーが腕と脚につけられている。頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ、目の箇所には装甲の下にあるラインアイ・センサーが赤い光を漏らしていた。

一番気になったのは手に持っている武器。

それは――

「『雪片』……」

千冬さんがかつて振るった刀。それとまったく同じ物。

俺は獅子王を握りしめ、中段に構えた。

「――！」

刹那、黒いＩＳが俺の懐に向かって飛ぶ。居合いに見立てた刀を中腰に引いて構え、横へ一閃。

それは昔何度も見た千冬さんの太刀筋だった。

ガギィィンッ！！！

鋭い斬撃を鍔で受け止める。黒いＩＳは刀を引いて上段に構え縦一直線に振り下ろす。

「それが……それがお前の求めた力なのかよ！　ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

俺は黒いＩＳに踏み込みながら斬撃をかわし、獅子王を逆手に持ち変え右拳でフルフェイスアーマーによって隠れたラウラの左目辺りを殴る。

吹き飛ばされた黒いＩＳの左目辺りの装甲が砕け、普段眼帯で隠されていた左目が見えた。

『金色の瞳』はひどく弱っており、捨てられた子犬みたいな眼差しで、助けを求めているように見えた。

「ひろっ！　下がって！」

シャルルがショットガンを発砲し、黒いＩＳは弾を刀で弾きながら下がる。

「大丈夫？」

「ああ。シャルルは隅にいるあの子を連れて逃げろ」

「えっ？　ま、待って！　ひろはどうするの！」

黒いＩＳに向かおうとしたがシャルルが腕を掴んでいて進めない。

「ラウラを助けにいく」

最初は千冬さんの力をコピーしたことに腹を立て、一夏の代わりに

ボコボコにしてやろうと思った。だけど、さっきの左目を見たらそんな気は失せてしまい、助けたくなってしまったんだ。

力は、強さは、攻撃力じゃない。そんなものはただの暴力。

『非常事態発令！　トーナメントの全試合は中止！　状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！　来賓、生徒はすぐに避難すること！　繰り返す！』

「ほら、もうすぐ先生たちがなんとかしてくれるよ、ね？」

危ないことはしないで欲しいと必死になるシャルル。

今回は先月みたいな状況ではない。なら教師部隊に任せるのが正しいだろう。だけど、俺は――自分の信念にそむくのは嫌だ。シャルルの手を腕から離す。

「ゴメン。俺は助けを求める人をほっとけない甘い男なんだ。悲しいことも怖いことも、誰かの未来を奪う暴力は全て断つと誓った。もし、ここでラウラを見捨てたら俺は一生後悔する」

「それはただの自己満足だよ？」

「別にいいじゃないか。人間なんてちっぽけで、弱くて、欲望や自

己満足だらけの生き物だ。だったら俺は自分のやりたいことをやる」

他の誰が何と言おうと知るか。立ち塞がるなら全て斬り伏せるのみだ。

「……わかったよ。けど！」

びしっとシャルルが俺に指を指して言う。珍しく、その言葉は強く、有無を言わせぬものだった。

「けど、約束して。絶対に負けないって」

「負けるつもりなんてはなっからねえよ。俺の進むべき道は勝利だけだ」

「じゃあ、負けたら明日からひろは女子の制服で通ってね」

「それは死んでも負けられないな！」

軽いジョークを交えた会話に緊張がほぐれる。

「んじゃ、あのバカを救ってくる」

ぼけっとつっ立っている黒いＩＳに獅子王の切っ先を向け、斬艦刀へと変えた。

黒いＩＳは武器に反応して動くらしい。こちらに向かって飛ぶ。

「我が名は西本宏範。信念を貫く剣なり。……参る！」

瞬時加速を使い、俺と黒いＩＳの距離は一瞬で必殺の間合いに入る。

『よいか、刀は己の分身、自らの一部と思って扱うのじゃ。そして斬ろうと思って斬れぬものはない。何を斬り断ちたいのか……。決して忘れてはならんぞ』

ふと、じいちゃんの言葉が浮かぶ。

黒いＩＳが刀を振り下ろす。千冬さんのと同じで速く鋭い袈裟斬り。けれど、そこに千冬さんの意志はない。

横一閃に振り抜いた斬艦刀と偽物がぶつかる。偽物の刃が力に耐え切れず折れた。

「斬艦刀――」

黒いＩＳが柄だけになった雪片を捨て、俺は獅子王を上段に構える。

俺が今、斬り断ちたいもの。それは――

「ラウラを縛り付ける……その悪意だ！」

――斬っ！！！

真っ直ぐに振り下ろした斬艦刀が相手を断ち斬る。

「我に断てぬものなし……」

「ぎ、ぎ……ガ……」

ジジッ……と紫電が走り、黒いＩＳが真っ二つに割れる。

斬艦刀を地面に突き刺し崩れ落ちるラウラを優しく抱きかかえた。

★

「一つ忠告しておくぞ。あいつらに会うことがあれば、心は強く持て。あれらは未熟者のくせにどうしてか、妙に女を刺激するのだ。

特にひろは愚弟以上。油断してると惚れてしまうぞ？」

そんな風に言う教官はひどく嬉しそうで、それでいてどこか照れくさそうで、なんだかモヤモヤとした。

今ならわかる。あれはそう、ちょっとしたヤキモチだったのだ。それでつい、きいてしまった。

「教官も惚れているのですか？」

「姉が弟に惚れるものか、馬鹿者め。まあ、ひろがガキでなかったら惚れてたかもしれんな」

ニヤリとした顔で言われて、私はますます落ち着かなくなる。教官にこんな顔をさせる、男達が――羨ましい。

そして、出会ってわかった。戦って理解した。

強さとは――なんなのか。

その答えは無数にあるのだろう。

けれど、その答えの一つに、強烈に出会ってしまった。

『強さってのは自分が決めた信念を貫き通すことだと俺は思うな』

……そう、なのか？

『あくまで持論だよ。ようは何をしたいのかってこと。どうしたいのかわからないやつは強くも弱くもない』

……。

『自分の人生だ。好きなようにやらないなんてもったいないぜ？』

――では、お前が貫きたい信念とはなんだ？　どうして強い？

『強くねえよ。本当に強い人達からみたら俺なんてまだまだだ』

あれほどまでの力を持ってなお、強くないと言う。それが理解できない。

『悲しいことも怖いことも誰かの未来を奪おうとする理不尽な暴力も、それら全てを断つ剣になる。これが俺の信念……かな』

――それは、まるで……あの人のようでそれとは違う強い輝き。

『だから、これからはお前の未来も守るよ。ラウラ・ボーデヴィッヒ』

言われて、私の胸は初めての衝撃に強く揺さぶられる。

『守るよ』

そう言われて、私は――ああ、そうか。これが……そうなのか。

ときめいて、しまったのだ。

そして、早鐘を打つ心臓が言っている。こいつの前では、私はただの15歳なのだと、ただの『女』なのだと。

――西本、宏範。

ああ、これは、確かに。

惚れてしまいそうだ。

闇を断つ剣（後書き）

どうも宏明です

ラ「ラウラ・ボーデヴィッヒだ。おい、作者、なぜこんなに遅れた？」

すみません。執筆が難航しまして。色々あるんですよ。

ラ「ふん、まあいい。これでひろは私の嫁になるのだな」

あ、やっぱりそうなるんだ。

ラ「クラリッサが言っていたからな。気に入った相手を嫁と呼ぶと」

一般的ではないけどね。

ラ「とにかく、次回は私と嫁が夫婦の契りをする話だ。読むように」

違うからね！　もう少しシャルのターンだから。

ラ「ほう……。なかなか愉快なことを言ってくれるな」

か、体が動かない！

ラ「ひろは私の嫁だ。答えは聞いてない」

それは別のキャラが言う台詞（兎耳のようなハイパーセンサーがかわいいなって、思ったところで私の意識は途切れた）

僕の（私の）新しい未来（じかん）

「う、ぁ……」

ぼやっとした光が天井から降りているのを感じて、ラウラは目を覚ました。

「気がついたか」

その声に聞き覚えがある。自らが敬愛してやまない教官こと織斑千冬だ。

「私……は……？」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらくは動けないだろう。無理をするな」

千冬はそれとなくはぐらかしたつもりだったが、そこはさすがにかつての教え子。簡単に誘導はさせてはくれなかった。

「何が……起きたのですか……？」

無理に上半身を起こしたラウラは、全身に走る痛みにその顔を歪める。けれど、瞳だけはまっすぐに千冬を見つめていた。治療のため眼帯が外されている左目は、右目の赤色とは全く違う金色をしている。そのオッドアイがただまっすぐに問かける。

「ふう……。一応、重要案件である上に機密事項なのだがな」

しかし、そう言っても引き下がる相手ではないこともわかっている。千冬はここだけの話であることを沈黙で伝えると、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「ＶＴシステムは知っているな？」

「はい……。正式名称はヴァルキリー・トレース・システム……過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステムで、確かあれは……」

「そう、ＩＳ条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・開発・使用すべてが禁止されている。それがお前のＩＳに積まれていた」

「……」

「巧妙に隠されていたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメー

ジ、そして何より操縦者の意志……いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。現在学園はドイツ軍に問合わせている。近く、委員会からの強制捜査がはいるだろう」

千冬の言葉を聞きながら、ラウラはぎゅうっとシーツを握りしめつむく。

「私が……望んだからですね」

あなたに、なることを。

その言葉は口にはしなかったが、千冬には伝わった。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「は、はいっ！」

いきなり名前を呼ばれ、ラウラは驚きも合わせて顔を上げる。

「お前は誰だ？」

「わ、私は……。私……は、……」

その続きが出てこない。自分がラウラであると、どうしても今の状態では言えなかった。

「誰でもないのなら、ちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィッヒになるがいい。何、時間は山のようにあるぞ。なにせ三年はこの学園に在籍しなければいけないからな。その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

「あ……」

千冬の言葉が意外だった。まさか、自分を励ましてくれるとは思ってなかったラウラは、何を言うべきかわからない。ただぽかんと口を開けていた。

千冬は席を立ってベットから離れる。もう言うべきことは言ったのだろう。教師の仕事に戻るようだった。

「ああ、それから」

そして、ドアに手をかけたところで、振り向くことなく再度言葉を投げかけた。

「お前は私にはなれないぞ。アイツらの姉は、こう見えて心労が絶えないのさ」

きっと、ニヤリと笑って言ったのだろう。それがどうしてかラウラにはわかった。そして、千冬が部屋を去ってから数分経ち、急にお

かしくなった。

「ふ、ふふ……ははっ」

ああ、なんてずるい姉弟だろう。ふたり揃って言いたいことだけ言い逃げた。

あそこまで言っておいて結局は自分で考えろなんだから、ズルいことこの上ない。

（自分で考えて、自分で行動しろ、か……）

笑いが漏れるたびに全身が痛むが、それさえもどこか嬉しいと感じた。

完敗。完膚無きまでの敗北。けれどそれが今はたまらなく心地いい。

ラウラは携帯電話を掴みドイツにいる自分の副官に繋げる。

「ラウラだ。すまないな、こんな時間に。それでな、クラリッサに相談がある。……いや、私的なことだ。あ、ある男のことがす、好きになってしまった。どう攻略したらいい？」

ラウラ・ボーデヴィッヒの時間はこれからはじまるのだ。

★

『トーナメントは事故により中止となりました。幸い一回戦は全て終わっているので明日から通常授業を行います』

ピ、と誰かが学食のテレビを消す。俺は醤油ラーメンをすすっていた。隣にはシャルルと一夏がいて違う味のラーメンを食べている。

「一夏は動いて大丈夫なの？」

「ああ、頑丈なのが取り柄だからな」

のんきにラーメンをすする俺たち。先程まで教師陣から事情聴取されてたが、やっと解放されて食堂終了ギリギリの時間。なにやら重大な告知があるということでテレビに帯が入り、そしてさっきの内容となるわけだ。

「ごちそうさま。この学園は料理がうまいな……ん？」

なぜか食堂に来ていた女子たちがひどく落胆している。

「……優勝……チャンス……消え……」

「交際……無効……」

「……うわあああああんっ！」

バタバターっと数十名が泣きながら走り去って行く。何があったのだろうか？

「どうしたんだろうね？」

「さあ……？」

俺たち三人だけがはてなマークを浮かばせていた。

「……」

女子が去った後に、一人呆然と立ちつくしている姿を見つける。それは黒髪をポニーテールにした少女箒。いつもの凛としたものはなく、口から魂が抜けているような姿で、そんな箒に一夏が近づく。

「そういえば箒。先月の約束だが――」

「ぴくっ」

ちょっと反応した。とりあえず死んではいないようだ。

「付き合ってもいいぞ」

「――。――――、なに？」

「だから、付き合ってもいいって……おわっ！？」

気力を取り戻した箒は一夏を締め上げる。

ちなみに先月の約束とは、箒が『学年別トーナメントで優勝したら付き合ってもらう』と一夏に宣言したこと。箒にしちゃなかなかの告白だったが……。

「ほ、ほ、本当、か？　本当に、本当に、本当なのだな！？」

「お、おう」

「な、なぜだ？　り、理由を聞こうではないか……」

ぱっと一夏を離し、腕組みをしてコホンコホンと咳払いをする箒。

俺は南無と冥福を祈る。

「そりゃ幼なじみの頼みだからな。付き合うさ」

「そ、そうか！」

「買い物くらい」

「……」

びきぃっ！　と箒の表情がこわばる。いい加減一夏の病気的なまでの唐変木を学習して欲しい。

「……だろうと……」

「お、おう？」

箒の怒りはＭＡＸ。背中には赤い炎が立ち上り修羅が降臨した。

「そんなことだろうと思ったわ！」

どげしっ！！！

「ぐはぁっ！」

腰のひねりを加えた正拳が一夏を殴る。

「ふん！」

どごぉっ！　と、うめく一夏のみぞおちにつま先がささって乙女の敵は沈む。

「ぐ、ぐ、ぐっ……」

箒はずかずかと去っていった。

「ねえひろ、一夏ってわざとやってるの？」

「いや、本人はいたって真面目だ」

「馬に蹴られて死ぬべきだね」

シャルルの言葉は冷ややかだった。

お茶を飲みながらぼーっと、ラウラとの会話を思い出す。

まるでアムロとララアみたいな感じで話してたよなぁ。いつの間にニュータイプになった？

たしかＩＳにはＩＳ同士の情報交換ネットワークがあって、それにより操縦者同士の波長が合うと特殊な意識干渉を起こすらしい。ＩＳにはまだまだ秘密がありそうだ。

「……ひろ、今女の子のこと考えてない？」

「え？　いや、そ、ソンナコトナイヨ？」

「ふーん」

なんでもないことのように言って食器を片付けに行くシャルル。ここ最近の特訓のおかげか、はたまたコンビネーションから生まれた以心伝心か、途端に不機嫌になったのがわかる。

本人はなるべく表面上は出さないようにしてるので見た目ではほとんどわからないが、語尾が少しだけ強くなっていた。

しかし、なんで急に不機嫌になったのだろうか。謎である。

「ううん、ひどい目にあった」

ようやく一夏が復活。そこへ山田先生が食堂にやって来た。

「西本君にデュノア君、それに織斑君もいましたか」

「お疲れさまです山田先生」

「西本君こそお疲れさまでした。それよりも朗報です！」

グッと山田先生が両拳を握りしめてのガッツポーズ。胸の膨らみがブルンと揺れて一夏の鼻下が伸びる。

いつの間にか戻ってきていたシャルルが一夏を軽蔑の眼差しで見ていたのは気のせいだと思おう。

「なんとですね！　ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「おお！　そうなんですか！？　てっきり来月からになるものとば

かり」

「それがですねー。今日は大浴場のボイラー点検があったので、もともと生徒たちが使えない日なんです。でも点検自体はもう終わったので、それなら男子三人に使ってもらおうって計らいなんですよー」

最近……というよりいつもだが、面倒ごとに巻き込まれる身として風呂に入れるのは嬉しいなぁ。

「ありがとうございます、山田先生！」

俺以上に感激している一夏が山田先生の両手を握りしめて見つめる。その瞳はキラキラとしていて少し引いた。

「あ、あのっ、そんなに近づかれると、先生ちょっと困りますというか、その……」

山田先生は恥ずかしそうに視線をさまよわせ、一夏はその様子に気付いてない。まあ、山田先生もまんざらでもないようだから別にいいけど一つ大変なことに気付いた。

『シャルルは男ではなく女で、今は男装している』

つまり、色々とまずいのだ。

「一夏、一番風呂はくれてやるからさっさと行け！」

どげしっと一夏を山田先生から剥がして蹴り飛ばす。

「いってぇ！　俺は怪我人だぞ」

「山田先生に迫るほど元気があるなら問題ないだろ」

「別に迫ってねえよ。まあいい、今の俺は天国に行きたくて仕方ないんだ。お言葉に甘えさせてもらうぜ！」

一夏はひゃっほーい！　と言いながら走っていった。数秒後に究極兵器（出席簿）が響く音が聴こえた。

「それじゃあ山田先生。俺とシャルルはゆっくりと準備してから行きますから」

「あ、はいっ、大浴場の鍵は私が持ってるので脱衣場の前で待ってますね」

そう言って山田先生は顔を真っ赤にさせたまま歩いて行く。さて、どうするか……。

「……シャルル」

「う、うん。困った……ね。どうしよう。と、とりあえず、着替えを取りに戻ろうか」

「そうだな……」

以心伝心――というか伝わって当たり前か。部屋に戻ってお互いに着替えを取り出してもいい案は思いつかず、ゆっくりと脱衣場に向かった。そして――

「あ、来ましたね」

「遅かったな。スゲー気持ち良かったぜ！」

テンション高めの山田先生と一夏に見送られ、「ごゆっくり～」という言葉と共に脱衣場のドアが閉まる。

「……」

「……」

そして沈黙タイムの始まりだ。

風呂には入りたいけどさすがにシャルルと一緒は駄目だしな。

「えーと……シャルル？」

「はっ、はいっ！？」

なぜ敬語？　まあいいか。

「シャルルも今日は疲れたろ？　風呂入ってこい。俺は脱衣場のマッサージチェアを堪能したら部屋に戻るから」

なぜ学園にマッサージチェアがあるのか気にしてはいけない。

「え？　でもひろに悪いよ。僕よりもいっぱい頑張ったんだから」

「一緒に入るわけにもいかないし、まあ、レディファーストってやつだ。シャルルはゆっくりしてきてくれ。俺は部屋のシャワーで我慢する」

男は黙って我慢だ。シャルルは大切な友達だからな。苦にならない。

「い、いいよ。それなら僕が脱衣場で待ってる。その……お風呂ってそんなに好きじゃないし。ひろは好きなんだよね？」

「一夏ほどじゃないが好きだ」

あいつなら食事と風呂ならギリで風呂に軍配があがると言うだろう。

――って、なんでシャルルは真っ赤になっている？

「どうした？」

「ど、どうも！？　と、とにかくっ、ひろはお風呂どうぞ！　僕のことは気にしないでいいから、ね？」

「……いいのか？」

「う、うん」

「んじゃ入るか。シャルル、ありがとな」

こうまで言ってくれているのに断るというのも無粋というもの。とりあえずシャルルの視界に入らない場所まで移動して服をぱぱっと脱ぐ。

「じゃあ、入ってくる」

「う、うんっ。ごゆっくりっ」

大浴場に入る前にシャルルに声をかけたが、なぜかおっかなびっくりの返事が返ってきた。――ま、別にいいか。

「おお！」

広い！　とにかく広かった！

大浴場は湯船大が一つにジェットとバブルのついた湯船中が二つ、加えて檜風呂が一つ。さらにはサウナ、全方位シャワー、打たせ滝までついている。
なんという贅沢。

まずは体を洗ってから湯船大に浸かる。

「ふぁぁぁ～～～……」

全身の疲労が溶けていく。本当に命が洗われていくようだ。とにかく気持ちいい～。

（あー……なんか眠たくなってきた……）

カラカラカラ……。

（……？　今脱衣場の扉が開いたような……）

あまりの気持ち良さに頭が回らずぼへーっとしていた。

ぴたぴたぴた。

なんかきれいな足が歩く音が聞こえる。一夏じゃないのは確かだ。

「お、お邪魔します……」

「！？」

半ば湯船に沈みかけていた顔を飛び上がらせる。湯気の向こうから

現れたのは、一糸まとわぬ姿のシャルルだった。その体には当然タオルを当てているが、所詮薄手のスポーツタオル。肌がうっすらと透けて見えていた。さらにボディラインは逆光のせいもあって、はっきりくっきりと見えている。

「な、なっ、なぁっ！？」

「……あ、あんまり見ないで。ひろのえっち……」

「！　す、すまん！」

すぐさま回れ右。ＩＳ並みに動けるなんて凄いな俺。

「ど、ど、どうした？　確かに入浴を勧めたけど、それは俺が入らない場合であってだな――なぜにやってきたシャルルさん？」

「ぼ、僕が一緒だと、イヤ……？」

「いやけしてそういうわけじゃないけど！」

俺も健全な男。正直に言えば嬉しいが――困る。もし、間違いが起これば即死刑だ。

「やっぱり、その、お風呂に入ってみようかなって。――め、迷惑なら上がるよ？」

「い、いやいや、上がるなら俺が上がる。もう堪能したからな」

「ま、待って！」

急に呼び止められ、俺は驚きもあって言葉と動作を止めた。

「そ、その、話しがあるんだ。大事なことだから、ひろにも聞いて欲しい」

「わ、わかった……」

大事な話しなら聞かない訳にはいかない。一度浮かした腰を再度湯船に沈める。

さすがにシャルルを見るわけにもいかないので俺は背中を向けていた。

「その……前に言っていたこと、なんだけど」

「前って言うと……学園に残るって話しか？」

「そ、そう。それ。僕ね、ここにいようと思う。僕はまだここだって思える居場所を見つけられてないし、それに……」

「それに？」

「……」

なぜか沈黙。自分の心臓だけがうるさかった。

ちゃぷ……。

「？　シャルル」

湯船の中を動く水音が聞こえる。

「こ、こっち見ちゃダメだからね」

「あ、ああ」

ゆっくりとこちらに近づいてきて、ぴとっと、俺の背中にシャルルの手が触れてきた。

「しゃ、シャルル――」

そのまま、手は俺を後ろから抱きしめる。背中に華奢な体が密着して、俺の心臓は口からドキーンっと飛び出しそうになった。

「ひろが、ここにいろって言ってくれたから。そんなひろがいるから、僕はここにいたいと思えるんだよ」

「そ、そうか……」

あんなことでシャルルの助けになったというのなら嬉しいことだ。

俺も最初は一人ぼっちだったからな。じいちゃんや千冬さん、束さんに一夏と箒と鈴。みんな俺に優しくしてくれたから俺も誰かに優しくしたいと思った。そして守りたい。

「それに、ね。もう一つ決めたんだ」

「もう一つ……？」

「そう。僕のあり方。ひろが教えてくれたんだよ？」

「そ、そうだっけ？」

「そうだよ。ふふっ、ひろも一夏と同じで自分に関することは鈍感なんだから。憎たらしいくらい」

「うっ、否定は……できないな。すまん」

「いいよ。許してあげる。ただし、僕のことはこれからシャルロットって呼んでくれる？　ふたりっきりのときだけでいいから」

「それが本当の……？」

「そう、僕の名前。お母さんがくれた、本当の名前」

「わかった――シャルロット」

「ん」

嬉しそうにシャルロットが返事をした。それはまるで子供のような無邪気さで、いつもの屈託のない表情がすぐに浮かぶ。

「あー、ところでだな、シャルロットさん。さすがにこの体勢は色々とまずいと思うんだけど……」

さっきから意識しないようにはしてたが、背中に触れている確かな膨らみが気になって仕方がない。

大きさは普通くらいなんだが、張りのある形のいい――って駄目ダメ！　心頭滅却だ！

「あ、ああっ、うんっ！　そうだねっ！　ぼ、僕、先に体と髪と洗っちゃうね！」

シャルロットもやっと自分の状態を自覚したのか、ばしゃばしゃと慌てて水音を立てながら俺から離れ、そのまま湯船を上がる。

「こ、こっち覗いちゃダメだよ？」

「の、覗かないって……」

「……。覗いてもいいのに……」

何かつぶやいたような気がしたけど水音にかき消されてよく聞こえなかった。

それから俺とシャルロットはのんびりと風呂を満喫して風呂場を出た。

――もちろん、着替えは別々。シャルロットが先に上がって着替え、俺を待っていた。

特製コルセットで男になりきっていたが、濡れた後ろ髪が妙に色っぽくて俺をドキドキとさせる。

疲れていたのかぐっすりと寝ることが出来た。それに懐かしい夢を見たな。

★

翌日。朝のホームルームにはシャルロットの姿がなかった。

「み、みなさん、おはようございます……」

教室に入ってきた山田先生はなぜだかふらふらとしている。朝っぱらからどんなダメージを受けたのだろうか。

「織斑君、何を考えているかはわかりませんが、私を子供扱いしようとしているのはわかりますよ。先生、怒ります。はぁ……」

ついに一夏の何考えているのかわかる顔が山田先生にも理解された。おそらく一夏の顔には目玉焼きが半熟じゃなくてテンション上がりません、とか考えていたのだろう。それにしても怒っている割にまったく覇気がない。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますか、すでに紹介は済んでいるといいますか、ええと……」

山田先生の説明はよくわからないが、クラスのみんなも転校生に反応したらしく、一斉に騒がしくなる。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

ん？　この声は――

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めましてよろしくお願いします」

ぺこり、スカート姿のシャルロットが礼をする。俺を含めクラス全員、一夏なんか口をあんぐりと開けてぽかんとしていた。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということです。はぁぁ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業が始まります……」

山田先生の憂いはそのせいか。

……て、待・て・よ？

「え？　デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！　美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って西本君、同室だから知らないってことは――」

「ちょっと待って！　昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

ザワザワザワッ！

教室が一斉に喧噪に包まれ、あっという間に溢れかえる。

――まずい。非常にまずい気がする。

バシーン！　教室のドアが蹴り破られたかのような勢いで開く。

「ひろっ！　一夏ぁっ！！！」

どどんと登場、凰・鈴音。その顔は烈火の如く怒り一色。背後には昇竜……いや、赤いギャ○ドス。

「お、俺は昨日一人で入ったから実質的にシャル、ロット？　さんと入ったのはひろだけだ。俺は悪くない！」

一夏！　てめえ俺を身代わりにするつもりか！？

「死ね！！！」

ＩＳアーマー展開、それと同時に両肩の衝撃砲がフルパワーで開放される。

――これは、死んだなぁ。

ズドドドオンッ！

「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」

怒りのあまり肩で息をしている鈴。その姿は毛を逆立てて怒る猫のように見えてちょっとかわいい。――って、あれ？　俺……生きてる……？　生きてるぞ！？

「……」

間一髪かは知らんが、俺と鈴の間に割って入ったのは――なんとあのラウラだった。

その体には黒いＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』を纏っている。おそらく衝撃砲をＡＩＣで相殺したのだろう。しかし、よく見るとあの大型レールカノンがない。

「織斑一夏。昨日はすまなかった」

「お、おう？　ま、まあ気にしてねえよ」

「そうか……ありがとう」

突然頭を下げて謝ったラウラに一夏は戸惑いながらも許す。

「そ、それとな、西本宏範」

今度はこちらに向いて右手を俺に伸ばしてきた。

「どうし――むぐっ！？」

いきなり。である。

いきなり、俺はぐいっと胸ぐらを掴まれ、ラウラに引き寄せられ、そして――唇を奪われた。

「！？！？！？」

驚天動地。何が起こった？　鈴を始め、その場の全員があんぐりとしている。

「お、お前は私の嫁にする！　決定事項だ！　異論は認めん！」

「……嫁？　俺は男だぞ？」

いや、そのツッコミはどうよと思った。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

いやいやいや、それは大きなお友達な方々でのデフォであり、一般的じゃないよ。誰だそんなデタラメを言ったやつは。今度神の指を食らわせてやる――ん？

「あ、あっ、あ……！」

ぱくぱくと口を動かして、声にならない声をあげている鈴。なんだろう……危険な予感が。

「アンタねえええええっ！！！」

ジャキン！　再び衝撃砲が開く。

「待て！　俺は悪くない！　どちらかというと被害者サイドだ！」

「アンタが悪いに決まってんでしょうが！　この、天然フラグメーカーが！！！」

ちょっ、それは一夏の専売特許だろうが！　俺はフラグなんか立ててねえよ！

話し合いは無理そうなのでともかく教室の後ろ側出口から脱出を試みる。

ビシュンッ――！

鼻先をレーザーがかすめる。おそるおそるそちらへ顔を向けた。

「あらあら、ひろさん？　どこかにおでかけですか？　わたくし、実はどうしてもお話しなくてはならないことがありまして。ええ、突然ですが急を要しますの。おほほほほ……」

ひい！　血管マークが五つかな。浮かべたセシリアがゆらりと立ち上がった。その手に握るのは『スターライトｍｋ３』背中には今まさにビットが光の粒子から形成されているところであった。遅れてＩＳアーマーが全身を包み込む。

本能が逃げろと言う。窓からなら何とかなるだろうと向かうが。

スカカカカッ！！！

足下に手裏剣の如くフォークが刺さる――フォーク！？

「……ひろ、どういうことか説明してホシイナァ……」

逃げ道を塞ぐように立ちはだかるフェイト。瞳の光は消え失せ、両手にはフォーク。髪がメデューサよろしくうねうねと動いていた。鈴やセシリアよりも怖い！

「説明って、それは俺よりラウラにっていねえ!?」

ラウラはすでにいない。

ジリジリとこちらへ向かっくる奴らから逃げるために身をかがめて動く。

ぼすっ。

「ほへ？」

何か――もとい、誰かとぶつかった。顔を上げると……

「……」

シャルロットだった。

「にこっ」

「あわわわっ」

天使の笑顔に見えなくもないが、目は笑ってない。

「ひろって他の女の子の前でキスしちゃうんだね。僕、びっくりしたな」

「シャルロットさん？　俺はされたのであって、したわけじゃない。そしてなぜＩＳを起動させているのでせうか！？」

「なんでだろうね」

シャルロットの体がＩＳアーマーに包まれ左腕を俺に向けている。武器を展開する必要はない。なぜならすでにされているのだから。

パンッ！　と軽く炸薬の弾ける音が響き左腕の盾がパージされて６９口径パイルバンカー『灰色の鱗殻（グレー・スケール）』通称『盾殺し（シールド・ピアース）』が現れる。

ドカアアアアンッ！！！

「ふ、不幸だぁーーー！！！」

まさか某幻想殺しと同じ台詞を言う日がくるなんて思わなかった。

★

「んー……」

機械の部品が所狭しと散らばる部屋。その中央に銀色の椅子があり、そこには空のように真っ青なブルーのワンピースを着て、頭に白ウサギの耳を模したカチューシャを付けた女性……篠ノ之束が体育座りをして空中に浮いたパネルを叩き何か作業をしていた。その速度は普通の人間を遥かに凌ぐ速さで、いくつもの画面が消えては現れる。

ちゃらら～♪　ちゃらら～♪　あんたら全員、覚悟しいや。バキューンバキューン！　ぐあああっ！　ああっ！　兄貴っ兄貴ぃ！　おっだらぁ、タマぁとったらんかぁ！

突然の携帯電話着信――しかし、ものすごい着信音である。ちなみに束は別に『極○の妻たち』のファンではない。

「こ、この着信音はぁ！」

折れたウサ耳がビーンと真っ直ぐに立ち、束は嬉しそうに携帯電話を耳に当てた。

「もすもす？　ひねもす？　はあーい、みんなのアイドル・篠ノ之束だよ！」

「……」

夜。アリーナへ来て姉に初めて電話をかけた篠ノ之箒は無性に腹が立ち、切ろうとする。

「わー、待って待って！　切らないで箒ちゃん！」

箒としては切りたいが、恥を忍んでまでかけたのだ。用件だけ言ってさっさと切ろうと思った。

「――。……姉さん」

「うんうん。用件はわかっているよ。欲しいんだよね？　君だけのオンリーワン、代用無きもの（オルタナティヴ・ゼロ）箒の専用機が。モチロン用意してあるよ。最高性能（ハイエンド）にして規格外仕様（オーバースペック）そして、白と並び立つもの。その機体の名前は

『紅椿』――」

束が視線を向けたその先に『紅』がスポットライトを浴びて鎮座していた。

僕の（私の）新しい未来（じかん）（後書き）

どうも宏明です

今回は珍しく一人で進めます。いつぶりだろうか。

さて、ようやく原作2巻までの話が終わりました。次回からは3巻……ではなくオリジナルストーリーを少々やろうと思ってます。活躍の少ない彼女達が頑張るのさ。

それでは次回も読んでください。

とある三人娘の1日（前書き）

今回は第三者視点のオリジナルストーリーです。

とある三人娘の1日

「う……ん……」

早朝六時。フェイトは二度寝したい衝動を抑えてベットから体を起こす。

「んーっ……」

腕を伸ばしてようやく目が覚める。

フェイト・テスタロッサ。アメリカの代表候補生でひろに一目惚れした乙女。

「ウフフ……ひろさん、遂にわたくしの魅力に気付いてくれましたのね」

隣の豪華なベットからルームメイトの寝言が聞こえた。彼女はセシリア・オルコット。

イギリスの代表候補生で名門貴族。

最初の頃は高飛車だったが、ひろとの決闘以来物腰が柔らかくなり今ではひろに恋する乙女だ。

「よし」

ジャージに着替えたフェイトは寮の外に出て走る。
２０分ほど走り体をほぐしてから第三アリーナへ向かう。

「はっ！」

第三アリーナには先客がいた。西本宏範だ。ＩＳの腕部分だけを展開し巨大な刀を振るっている。
フォームを確認するように一つ一つゆっくりと振り下ろす。
フェイトがこうやって眺めるようになったのはひろがＩＳを手に入れた頃からだ。
早朝に出かけるひろの後を付けたのが始まり。
陰から眺めるのがフェイトの日課になっていた。

（はぁ～～。かっこいい……）

そして約１ヶ月ぶりに見たフェイトはひろの修得スピードが異常に早いと思った。

（才能……なのかな）

じーっと見ているとひろが動きを止める。

「おはよう。フェイト」

「お、おはよう」

なぜかすぐにばれてしまう。これもいつものことだ。ＩＳの背中と腕部分だけ展開してアリーナへ降り立つ。

「今日からまたよろしくね」

「ああ」

二人は毎朝素振りをしていた。

フェイトにとっては今日からＩＳを展開してのものになる。

ちなみにＩＳの補助を切っているのでかなり辛いがフェイトにとって意中の彼と二人っきりになれるこの時間が大好きだった。

★

「ふんふ～ん♪」

現在朝の7時。目が覚めたセシリアはメイド服を着ていた。

「遂にこの日がきましたわ。ひろさんと料理する日が！」

学年別トーナメントの準備で出来なかった料理の練習を今日するらしい。

「これならひろさんもメロメロになりますわ！」

鏡の前でくるりと回る。前から一度着てみたかったらしく楽しそうだ。

イギリスにいる専属メイド、チェルシー・ブランケットに料理をすると言った時、彼女は顔を青ざめたがセシリア一人ではなく意中の彼と一緒にすると聞いてチェルシーはホッと安堵したそうな。そして彼女はエプロンよりメイド服でいくべきだとアドバイスした。チェルシーいわく『日本の男性はメイドに萌える』らしい。

「ああ、楽しみで仕方ありませんわ。ひろさん……いいえ、メイドらしく御主人様とお呼びしたほうがよろしいかしら？」

セシリアは体をくねくねさせて「お仕置きなんて」とか「駄目メイドのセシリアにご褒美下さいまし」などとつぶやいて妄想していた。

「ただいまーって、何やってるの？　セシリア」

「ひゃあっ！？」

早朝トレーニングから帰って来たフェイトが怪訝そうな顔できいた。

「お、おはようございますですわ。フェイトさんこそ朝早くどちらへ行ってたんですの？」

セシリアは質問を質問で返す。今度はフェイトが慌て始める。

「そっ、早朝トレーニングだよっ」

「……フェイトさん。わたくしに何か隠してませんか？」

「隠してなんかないよっ。汗かいたしシャワー浴びるねっ」

タオルと着替えを持ったフェイトはシャワー室へと逃げた。

「はぁ～。早く約束の時間にならないかしら」

フェイトの慌てように女の勘が何かを知らせようとしてたがどうでもよくなる。

「もしかしたら夜のご奉公まで……きゃあー！」

止まらない妄想特急。

「……まだやってたんだ。それより今日は特別休暇だし『剣客・独眼竜』でも見よっと」

シャワーから上がったフェイトは趣味である時代劇鑑賞を始めるのだった。

★

鈴は気が付くと今よりも体が小さくなっていた。これは夢だとわかる。目の前には自分を『リンリンってパンダの名前だよなー。笹食えよ笹』と言っていじめる男子が四人。

そこへ一夏が男子四人を一人でこらしめるのがいつものパターンなのだが今回は違った。

『へっ、へっ、へっ。このお嬢ちゃんが織斑っつーガキの女か？』

『そうなんだよ兄ちゃん！　だから織斑の前でズタボロにしてやって』

『くっ、くっ、くっ。お前も変態だなぁ』

『兄ちゃんだってこいつは好みだろ？』

あの日の翌日。一夏にやられた男子四人のうち一人が高校生の男を連れて来て鈴を囲む。

「ひっ！」

気持ち悪くて怖い。恐怖に支配された鈴は助けを呼ぶことも出来なかった。

「そこまでだ！　ショッカー！」

もう駄目だと諦めかけた時、上から少年の勇ましい声が聞こえた。

「ライダーキィィック！」

突然現れた少年は高校生を蹴り飛ばし男子四人もあっという間に倒す。

「助けてくれてありがとう、私鈴音。あんたの名前なんていうの？」

「仮面ライダー1号だ」

ぼかっ！

「イテ！　何すんだよ！」

「あ・ん・たの名前は？」

少年は叩かれた頭を押さえながらしぶしぶと名前を言う。

「西本宏範だ」

ニカッと笑ったひろの笑顔に鈴の胸の鼓動が速くなり、視界が光に包まれた。

「……ん、夢？」

辺りを見渡すと自分の部屋で、ルームメイトはいない。時計は１１時を差している。

「懐かしい夢を見たわね……」

凰・鈴音。それが彼女の名前。中国の代表候補生で織斑一夏や西本宏範の幼なじみ。

そして――。

「いい加減はっきりさせた方がいいわよねー」

二人の幼なじみに恋をする乙女。

彼らの周りにはいつも女の子がいる。特にひろの周りにはイギリス人、アメリカ人、フランス人、ドイツ人の美少女がいつの間にかいた。

中国人の自分を入れると多国籍軍の完成だ。

「何が俺はモテないよ。単に気付いてないだけでしょ？　戦ってる時はすごくかっこいいくせに普段は子供っぽいし。まあ、そのギャップがいいんだけどさって何でひろのことばかり考えてるんだろ」

鈴は頭を抱えてベットの上をゴロゴロと転がる。

中国に帰る前やここに来た頃は一夏の方が好きだった。

クラス対抗戦の前にやった特別戦からだろうか。妙にひろのことが気になって仕方ない。

「あーもうっ！　ウジウジするなんてあたしらしくないし！　女は度胸。行動あるのみよ！」

女性の着替えは時間がかかる。と誰かが言った。

しかし、ボストンバックひとつあればどこでも行ける女の鈴は顔を洗い数秒でカジュアルな服を着て、髪をトレードマークであるツインテールに結んだ。所要時間五分。

「後はひろを誘うだけね」

鈴の手にはゲームセンターの引き換え券が握られている。昨日ルームメイトのティナに「私は行かないからあげる。あと期限は明日までだから」と半ば無理矢理渡された。

「そういえばひろとデートなんて初めてだな……」

頬を薄らと赤らめ鈴はひろを探しに行くのだった。

★

「今日はよろしくお願いします。先生」

メイドらしくぺこりとお辞儀するセシリア。幼なじみ兼専属メイドを長年見てるかいがあるのか様になっていた。

「お、おう。でもなんでメイド服？」

「変……ですか？」

「い、いや似合ってるぞ！」

ひろの顔が少し赤くなっており、そんな表情を見たセシリアはかわいいと思っていた。

（掴みは上々、やってやりますわ）

何をやるつもりだろうか。ともかく寮の調理室にて調理実習が始まる。

「前回のリベンジもかねてサンドイッチを作ります」

「はい！」

「まずは野菜を洗おう」

セシリアはレタスを左手に持ち、右手には洗剤を持つ。

「ちょっとまったぁぁぁぁっ！！！」

「ひゃあっ！？　何ですの！」

ガシッ！　と手を掴まれいきなりの展開に胸が高鳴る。

「何ですのじゃねーよ！　洗剤で洗ったら食えなくなるだろうが」

「すみません……」

洗い終わり次は食パンの耳を切り取り、野菜を切り始めた。

「んっ……トマトがコロコロして切りにくいですわ」

まな板に置かれたトマトを両手で持った包丁で切ろうとするが、トマトはコロコロ転がりなんか危なげだ。

「そんなやり方じゃ怪我するぞ。いいかセシリア。包丁はこう持って」

ひろがセシリアの後ろに密着して両手を握りトマトを切る。

（ひ、ひろさんが近い！）

ベタな展開につきこの先は割愛します。

「最後にサンドイッチを切り分けて……完成だ」

（ああ、この楽しい時間も終わりですのね）

甘いひとときの終わりに寂しくなるものの、セシリアは達成感に満ちていた。料理に使っていた物を片付け試食を行う。

「もぐもぐ……」

ひろが一口ほおばり、結果を静かに待つ。

「……うん、美味しい。頑張ったなセシリア」

「あ、ありがとうございます」

ひろに美味しいと言ってもらえた幸福感。そして頭を優しく撫でられてセシリアは目を細め母に褒められた時と同じものを感じた。

「こ、子供扱いはやめてくださいな」

つい、意地っ張りな部分が撫でられるのを拒否してしまい離れた手を名残惜しそうに見る。

「どうした？　なんか寂しそうだけど」

「何でもありませんわ。それよりそちらの茶色いスティックは何ですの？」

自分がパンを挟んでいる間にひろが揚げていたもので気になっていた。

「ああ、これはサンドイッチに使った食パンの耳を揚げて砂糖をま

ぶしたおやつだよ」

「へー。美味しそうですわね」

セシリアは上流階級育ちなのでこういう庶民的なものは興味深々で一口ほおばる。

サクッとした食感に砂糖の甘さが口の中で広がり、揚げパンなどが好物のセシリアにとってカルチャーショックだった。

「美味しい」

「セシリアにしちゃまあまあね」

「へっ？」

今この空間には自分とひろしか居ないはずだ。他の女子達が数人廊下からこちらを眺めていたが入って来ないので実質二人っきり。声のした方へ向くと鈴がサンドイッチをパクパクと食べている。

「鈴さん！　それはわたくしのですわよ！　勝手に食べないで下さい！」

「抜け駆けした罰よ。というわけでここからは私のターンだから」

「お、おいっ。鈴!?」

鈴はひろの腕を取って調理室から出て行く。

「もうっ」

セシリアはぷくーっと頬を膨らませたが相手はもういないので揚げたパンの耳を食べるのであった。

★

「わっ、ととと」

ひろは腕を引っ張られバランスを崩しそうになるが何とか持ち直す。

「それで鈴、どこに行くつもりだ?」

「駅前のゲーセンよ。ティナからもらったの。あんたよく行ってるでしょ?」

鈴はポケットからゲーセンのコイン無料引き換え券を出してひらひらさせる。

「おー、あそこか。よく行ってるぞ。それにしても珍しいな、お前現代ゲーム苦手のくせに」

散々負けて悔しがる鈴を思い出し笑うひろ。ちなみにアナログゲームだと鈴は強い。

「今日は何となく行きたくなったのよ！」

引っ張られることはなくなったが腕を組まれ、ひろと鈴は孤島のＩＳ学園からモノレールで街へ向かうのだった。

じ～。

「……かわいい……」

ひろが無料引き換え券をコインに替えてもらって来ると鈴がＵＦＯキャッチャーをじ～っと眺めていた。透明ガラスの向こうには白いネコのぬいぐるみが沢山積まれている。しっぽ辺りに携帯電話用の

紐があるのでストラップらしい。

「なんだ、そのネコが欲しいのか？」

「なによ、あたしがぬいぐるみに興味あるのおかしいと思ってんの？」

「別に。じ～っとそれを眺めてる鈴がかわいいと思ってな」

「なっ！？」

かわいいと言われて真っ赤になる鈴。ひろからコインを奪いＵＦＯキャッチャーに挑むのであった。

「あっ！？」

ぽろ。

「よし……って、ああ！」

ぽて。

「今度こそ！」

スカ。

「これでどうよ！」

がー……ぽて。

「むきーっ！！！」

鈴は度重なる失敗に我を忘れていた。さらにコインを使い果し地団駄を踏む。

「これアームが弱いんじゃないの！」

「やれやれ。俺が手本を見せてやるよ」

ひろがコインを入れて馴れた手つきでアームをぬいぐるみの上に持っていく。

ウィーン……。

「お」

うまく捕まえたネコをアームが持ち上げるとしっぽにもう一匹引っ掛かっていた。

「そのままそのまま」

ゆっくりとアームは穴へ向かいそして……。

ぽと。

「でかしたひろ！」

見事ネコのぬいぐるみをゲットして鈴は取り出しぎゅーっと抱きしめる。

「お前も女の子なんだな」

幼なじみの意外な一面につい口がすべり、げしっ！

と脚を蹴られる。

「いって～っ！」

「ほらっ、次はアレやるわよ！」

若干頬を赤らめた鈴はガンシューティングの所に行ってしまう。ぴょんぴょんと片足で跳んでいたひろは涙目で後を追うのだった。

★

「あ～楽しかった！」

夕方。ゲームセンターを出て学園に戻って来た二人。前を歩いていた鈴が振り返る。

「はい。一匹あげる」

右手に持っていたネコのぬいぐるみを差し出す。

「お、おう……」

夕日に照らされ微笑む鈴。いつもとちょっと違う雰囲気に戸惑いな

がらもひろは受け取った。

「じゃ、また明日ね！」

いつもの雰囲気に戻った鈴は寮へ走って行く。

「……今日の鈴、ちょっと可愛かったな。いつもあんな感じなら一夏も落ちたかもしれないのに」

西本宏範は鈍感である。彼女達の想いはいつになったらこの朴念仁に届くのだろうか。

とある三人娘の1日（後書き）

どうも宏明です

鈴「凰鈴音よ」

フェイトがあまり活躍してないなぁ。

鈴「いいじゃない別に。これはあたしメインな話だし」

お気づきだろうと思いますが次巻に入る前に鈴が活躍する話を入れてます。これはあまりにも原作の鈴が不遇なので頑張って書きました。

鈴「フェイトは抜け駆けしてたのね。あたしも早起きしなきゃ」

無理でしょ。君は夜更かし派だし。

鈴「ぐぅ……仕方ないじゃない。眠たくならないんだから」

さて、次回からは三巻に突入。色々とてんこ盛りなものになっていく予定です。

鈴「それであたしはどっちにいくの？」

色々考えた結果……ひろハーレムに加えようと思います。いやまあ、このまま一夏にいって影薄になるのもかわいそうだし。もちろん仲間入りする話は書くよ。

鈴「そっか、ひろか……まぁ一夏には箒がお似合いかな」

この際だから原作メインヒロイン（箒と千冬以外）をひろハーレムに入れることにしました。

鈴「ちょ、ちょっと。まだ増えんの！」

あと二人増えるね。

鈴「……よし、殺そう！」

鈴はＩＳを展開し何処かへ行った。

ちなみにのほほんさんは予定通り一夏だから。

の「やた〜。遂にわたしの時代が来たんだよ〜」

いつの間にかいたー！？

の「それじゃあ次回も読んでね〜。読まないとわたしのスパナがうなるよ〜」

のほほんなのに意外と凶暴だ！

高鳴る乙女の心（前書き）

今回は今までで一番最長です。あと、少し書き方変わってます。

「ゴメンね、急に呼び出しちゃって」

「気にするなよ」

放課後の教室、赤い夕日が差し込む中シャルロットは夕日を背に立っていた。
目の前にいるひろを見ないように顔を伏せてもじもじとさせている。

「それで大事な話しって何だ？」

「う、うん……。その……」

覚悟を決めたシャルロットは顔を上げてカラカラになった喉を無理矢理つばで潤し声を出す。

「僕、ね。ひろのことが好き。大好きです。例えお母さんと同じ愛人でもいい……僕と……つ、付き合って下さい！」

鈍感なひろもさすがにどんな意味なのかわかって顔を赤らめた。
まだ数秒しか経ってないのにシャルロットには一秒がものすごく長

く感じる。

「シャルロット……」

「はっ、はい！」

急に怖くなって顔を伏せると抱きしめられた。力強いけど優しくて暖かい。

「今まで気付いてやれなくてゴメン。俺も、シャルロットが好きだ」

嬉しくて涙が溢れた。

「ひろ……」

「シャルロット……」

お互いの鼻が触れそうなほど近くで見つめ合い、オレンジ色の光景の中、ふたりの影が徐々に重なって――

「――あ、れ？」

ぼーっとした頭で状況を確認する。場所はＩＳ学園一年生寮の自室。

時刻は早朝五時。

「……」

シャルロットはまだはっきりとしない意識のままだったが、二回まばたきをしたところでやっと現状を把握した。

「夢……」

はぁぁぁぁ……っと深く深くため息が漏れる。

（ああ、せめてもう十秒くらい見ていれば……）

夢の残骸に思いを馳せ、その名残を惜しむ。だけど夢の内容がなかなか消えないのでもう一度頭の中で再生する。

「……」

ぽっ、とシャルロットが赤くなった。

（が、学校の教室で告白して……）

愛人という単語は憎いくらい嫌いなはずなのに夢の自分は平然と言っていた。それほどひろのことが好きらしい。

胸に手を当てると、ドキドキと早鐘を打っているのがわかる。

（こ、これで何度目かな……）

先月の学年別トーナメント以降、本来の性別に戻ったシャルル・デュノアことシャルロット・デュノアは、今はもうひろとは別の部屋になっている。

居ないとわかっているのに隣のベットにひろの姿を求めて視線をやるのだった。

「あれ？」

隣のベットにルームメイトの姿がない。それも、起きてどこかに行ったとかではなく、最初からそのベットは使われた形跡がない。

「……まあ、いいや」

それよりも夢の続きである。今すぐに眠りにつけば、もしかしたら

続きが見れるかもしれない。そんな淡い期待を抱いて、シャルロットはまた眠りにつこうとまぶたを閉じた。

（もし、キスをしてたらそのままエッチな展開に――）

……。

「な、何を言ってるんだろうね、僕はっ」

カーッと赤くなった顔を隠すように頭のてっぺんまで布団を被り、ドキドキと高鳴る心臓をなだめるのに苦心するシャルロットだった。

★

チュンチュン……。

「ん……」

窓の外から朝日が入り、スズメが目覚めをうながすように鳴いていた。

（なんか布団がいつもより暖かい。もう少し……）

ふに。

誰だって暖かい布団から出たくないだろ？　だからもう少し堪能しようと手を動かし何かすべすべやわらか物体に触れた。

（何だ？　この感触）

ふにふにゅっ。

「ん……」

急に人の気配を布団から感じ恐る恐る捲る。と、そこには――

「ら、ら、ラウラ！？」

ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒ。先月転校してきていきなりの宣戦布告。その後色々あって、――色々あった。

しかし、問題はそこじゃない。問題は、なぜ衣服を纏っていないのかということだ。

つまり、そのだな……全裸なのだ。身につけているのは左目の眼帯と待機形態のＩＳ――右太ももの黒いレッグバンドのみ。長い銀髪が腰のラインを撫でており、うまい具合に大事な所を隠していた。

「ん……。なんだ……？　朝か……？」

「ちょ、隠せ！」

「おかしなことを言う。夫婦とは包み隠さぬものだと聞いたぞ」

「確かにそうだが……って違うわ！　服着ろ、服！」

ラウラは一度目をこすりいつもと同じ顔立ちになる。

「日本ではこういう起こし方が一般的と聞いたぞ。将来結ばれる者同士の定番だと」

「違うからな！　誰だよお前に間違った知識を吹き込んだのは」

「そうなのか？」

可愛く首を傾げるラウラ。

もし、ラウラが聞いたことが一般的だったら今ごろギャルゲーというジャンルは全て成人指定されているだろう。

「しかし、お前は起きるのが早いな。まだ五時半だぞ」

シーツを身に纏い、一度束ねた後ろ髪をふぁさっと散らす。朝の陽光を受けて輝く銀色の髪は、綺麗だった。

「どうした？　……あ、あまりそう見つめるな。私とて恥じらいはある」

だったらまずは全裸で人の寝床に来るのを恥じてくれ。

ラウラが頬を染めて視線を逸らすのは、ちょっと……いや、だいぶ、可愛かった。

「はぁ……とにかく服を着ろよ」

「無い。私は裸でいつも寝ているからな」

なん……だと。軍ではTシャツや短パンすら配備されないのか？

「自分の部屋に戻れ」

「嫁のいるここが私たちの部屋だ」

話通じてねぇ～。

「とにかく自分の部屋に戻れ。俺はこれから朝練をするから」

ベットから離れようとしたらいきなりラウラが襲いかかってきた。

俺へ伸びてきた手を掴み投げようとするが、ラウラは足払いを仕掛けてくる。

「何のつもりだ！」

何とか足払いを避け膝立ちのまま睨んだ。

「夫婦はおはようのキスをするものと聞いた。だからおとなしく私とキスしろ」

「夫婦じゃないし！」

もしかして俺の貞操の危機なのだろうか。このままいくと、とんでもない単語が出てきそうだ。

☆

「はぁ……」

「どうしましたの？　ため息を吐くと幸せが逃げてしまいますわよ」

「そうだね……」

早朝六時。フェイトはいつも通り起きたがセシリアに捕まり早朝トレーニングのことを白状させられた。

そして第三アリーナへ向かったのだがひろはおらず、二人は彼の部屋へ向かう。

ちなみに男二人なのだからひろと一夏は同室になるはずなのだが未だ一人部屋となっている。

「んっ、んっ」

「寝癖は付いてないよね？」

髪型を確認し、声の調子を整えようと咳払いをした二人はひろの部屋のドアを叩いた。

コンコン。

「ひろ？　もう朝だよ。そろそろ起きないと朝練出来なくなっちゃうよ」

しーん。返事がない。

「ひろさん？　今日からわたくしもご一緒したいのですが起きてます？」

今度はセシリアが呼びかけたが返事は返ってこない。仕方なくドアノブに手をかける。

かちゃり。

（あれ？　鍵がかかってない……。いくらなんでも無用心だよ）

「入りますわよ、ひろさん。早く起きて訓練を――」

「へっ！？」

「む？」

びしり。セシリアとフェイトの表情が、動きが、全身が固まった。

ドアを開けて入った室内では、全裸のラウラがはぁはぁと粗い息を吐いており、ひろも同じく粗い息を吐いている。これではまるでアレをした直後に見えなくはない。実際はキスをしようと迫るラウラに抵抗してただけなのだが、そんな事情を二人が知るわけもなく。

ちゅ。

「ら、ラウラ！？」

隙を突いたラウラがひろの頬っぺたにキスをした。

「口が恥ずかしいのなら頬っぺたで我慢しよう。ほら、嫁からも私の頬っぺたにしろ。ん……」

頬っぺたと言いながら目を閉じてあごを少し上げる。

頬がうっすらと赤く染まっており、今のラウラはキスを求める少女だった。

「……いくよ、ヴァルシオーネ」

ぶちっと何かが切れる音が鳴りフェイトは自分の専用機『ヴァルシオーネ』の腕と接近ブレード『ディバインアーム』を部分展開。それをラウラに向けて唐竹に振り下ろす。

「あぶねぇ！？」

間一髪ひろがラウラを抱えて跳び避け、ずどむ！　と音がして布団がベットごと真っ二つになる。

フェイトはディバインアームをベットから引き抜き居合いの構えを取る。再び鋭い斬撃を放とうとして

――その刃は抜かれる前に止まっていた。もとい、止められていた。

「嫁の子供を産むまで死ねないのでな」

「そう……」

ラウラの右腕だけに展開したＩＳアーマー。そこから放たれた慣性停止結界（ＡＩＣ）によって、フェイトの剣は止められたのだった。

ビュン！

突然襲いかかってきたレーザーをラウラはしゃがんでかわす。

「ちっ、外しましたわ」

もちろんレーザーを放ったのはセシリア。笑顔だが血管を顔にいっぱい浮かばせレーザーライフル『スターライトｍｋ３』を向けていた。

「まてまてお前ら、ラウラを殺す気か！」

ひろがラウラを庇うように立つ。ＡＩＣから解放されたフェイトは光の失った瞳で剣を上段に構える。

「どいてひろ。そいつをコンクリ……じゃない、ドイツに送り返せない！」

「安心して下さいな。ちょっと風通しを良くするだけですし」

ちなみにセシリアの瞳も光が消え失せ、小型特殊兵装『ブルー・ティアーズ』が展開されていた。

「面白い。嫁は私のものだ。お前らには渡さん」

ラウラの闘争心に火が灯り三人はひろを中心にトライアングルを形成。

「俺を巻き込まないでもらえます！？」

一触即発。誰かが動いたら死ぬ（俺が）とひろが半ば諦めかけた時、鬼神が舞い降りた。

「貴様ら、朝っぱらから何騒いでいる」

ドアを蹴り破って現れたのは阿修羅すら凌駕する女、織斑千冬。

バシンバシンバシンッ！！！　ドゴンッ！

「へぶっ！？」

なぜか持っていた出席簿でラウラ、セシリア、フェイトを叩きひろには鉄拳を叩き込む。

「オルコット、テスタロッサ、ボーデヴィッヒ。お前ら三人はこれから説教だ」

「「「ひいっ」」」

こうして朝の騒動は鎮圧された。

ちなみに鉄拳を食らって気絶したひろが起きた頃には授業が始まっており、珍しく遅刻したシャルロットと罰掃除をする羽目になった。

★

放課後、夕暮れ色に染まる教室で俺とシャルロットはふたりで掃除をやらされていた。他の生徒はいない――というのも、このＩＳ学園、普通は生徒に掃除などさせないのである。毎日専属の業者が教室や廊下、天井にいたるまでピカピカにしてくれる。

掃除を生徒にやらせないのは『わずかな時間もＩＳ教育に回した方がいい』とのことで、今ではもっぱら生徒への軽い処分として使われている。今まさにそれを体感させられているわけだが――

「たまにこういうのも悪くないな」

「そ、そう？　ひろって変わってるね」

どうやら同意はしてくれないようだ。一夏ならそうだよなーって言ってくれるのにな。

ともかく気持ちはどうあれさすがシャルロット。掃除はしっかりと手伝ってくれる。今どきの女子は男に押し付けるのが当たり前だか

らちょっと嬉しい。

「ん、んん～！」

「っと、無理するなよ。机運びは俺がやるからさ」

今シャルロットが持っているのは確か岸里さんの机。教科書全部置きっぱにされており、本人は『フルアーマー机』と言っている。

「へ、平気だよ。一応これでも専用機持ちなんだし、体力は人並みに――」

と、言葉を続けたシャルロットが重量に負けて足を滑らす。とっさに後ろから体を支えた。

「あぶねぇな。ケガしたら元も子もないだろ。ほら、俺が代わるよ」

「う、うん……。あ、ありがとう……」

後ろ側に滑ったシャルロットを背中から支えたので、ちょうど抱きしめるかのような格好になっていた。

「っと、悪い。離れる」

「あっ……」

落ち着きがないようだったのですぐさま離れたらシャルロットは残念そうな声を出す。

「……別に、よかったのに……」

「ん？」

「な、なんでもないよっ」

「？　そうか」

何か顔が赤い気がする。夕日のせいでそう見えるのかな？

☆

（わ、わ、心臓すっごいバクバクいってる……。か、顔大丈夫かな？　変な顔になってないよね？）

罰掃除とはいえ二人っきりの状況に、シャルロットの胸は自然と高鳴りを増していく。

夕暮れに染まるオレンジの教室が、今朝見た夢と同じ光景に見えてシャルロットの顔は耳まで真っ赤になった。

（ど、どうしよ……。何か喋らないと……。うう、でも話題が思いつかない……）

「そういえばさ」

「ひゃいっ！？」

ぼーっとしてたせいで返事が裏返ってしまう。あまりにもおかしな声だったので、シャルロットは放ってからすぐに自分で口を押さえた。

「どうした？　変な声出てたけど」

「な、なんでもない。なんでもないよ？　ちょっと考え事してたから、それだけ」

少し首をかしげたがひろは机を運んでいく。全部戻し終えて掃除も終わり。そう考えると、どことなく寂しい気持ちになってしまうシ

ャルロットであった。

「それでな、先月から気になっていたんだが、前に『ふたりっきりのときはシャルロットって呼んで』って言ってただろ。しばらくは男のフリをすると思っていたけど翌朝あっさりと女子に戻ったからさ、何かあったのか？」

「あ、えっと、それは、その～」

「まあ、言いたくないなら無理しなくていいぞ。気になっていただけだから」

「き、気になってたの……？」

「まあな」

「そ、そう……。そうなんだ」

ええと……と迷いながらも言葉を探すシャルロット。何度かひろと窓の外を交互に見てから、意を決したように口を開く。

「その、ひろにはありのままの僕を見て欲しかったから……。それ

にちょっと卑怯かなって。やっぱり正々堂々と勝負するべきだと思うんだ」

そう言って、シャルロットは恥ずかしくなり顔をぷいっと窓の方に向ける。その頬は夕日のオレンジの中でもまだ際だって赤く見えた。

「そっかー。なら別の呼び名でもつけようか？」

「ふえっ。い、いいの？」

「シャルロットが良ければだけどな」

そう答えたひろに、シャルロットは慌ててぶんぶんと縦に首を振る。

「う、うんっ。全然大丈夫っ。せっかくだし、お願いしようかなっ」

動揺と興奮が入り交じって、ついつい声が半音高くなってしまう。何とか悟られないよう平静を装うシャルロットだったが、心の中では一面花畑の光景が広がっていた。

（わ～っ！　ひろったらどうしたんたろ。い、いきなりで心の準備が……ああ、でもこれって、少なからず僕のことをす、す、好きってことだよね。ねっ。ね！？）

心の中の盛り上がりがついつい口から漏れて変な声が出そうになる。
それを咳払いで誤魔化し、シャルロットは一日千秋の想いでひろの言葉を待った。

「そうだな……。シャルなんてどうだ？　呼びやすいし、親しみやすいし」

「シャル。――うん！　いいよ！　すごくいいよ！」

「そ、そうか。我ながら安直かなって思ったけど気に入ってもらえたならよかった」

「うん。シャル……シャルかぁ。うふふっ」

ただいま心の中のお花畑では三頭身のシャルロットが４人で手を繋いで踊っている。

「――でな、シャル。今度の日曜暇か？」

「うん？　暇だよ」

幸福感に浸かっていたほんわか笑顔のシャルロットは現実に戻された。

「ならさ、今度の日曜一緒に買い物に行かないか？　まだ臨海学校の準備してなくてさ」

「――え？」

シャルロットは手に持っていた箒と塵取りを落としてしまう。

「あー、もしかしてシャルはもう済ましたのか？」

「ううん！　実はまだ全然してなかったの！　ねぇ、本当に僕でいいの？」

これは夢か？　と思い手をつねってみる。――痛い。これは現実だ。まさか自分から誘おうと思ってたのに鈍感のひろから誘いがくるなんて。

「いいに決まってるだろ」

「そ、そっかー」

（こ、こ、これってデートのお誘いだよね！　なんか今日のひろ、すっごく積極的）

ひろが「みんなも誘って行こうぜ」と言っているのだが、ひろに誘われたということで再びトリップしたシャルロットは「うん！　いいね！」と答えるだけでその部分を聞いてなかった。

★

「おー、よく晴れたなぁ」

「ほんといい買い物日和だな」

週末の日曜。天気は快晴。来週から始まる臨海学校の準備をするために俺はシャル、鈴、セシリア、フェイト、ラウラ、一夏と街に繰り出していた。箒は用事あるとかで欠席だが。

「……」

なぜかシャルは仏頂面だった。

「ふたりっきりのデートだと思ったのに……」

と、何かよくわからんが、今朝からこんな調子だ。ずーんというかどよーんというか、とにかく暗雲立ちこめる表情をしている。

「どうした、シャル？　調子悪いなら部屋で休んだほうがいいぞ？」

「ううん、大丈夫」

大丈夫と言ってる割りに暗いなぁ。よし、少し強行手段を取るか。

「ほら、行くぞ」

「ひゃあっ！？」

シャルの右手を掴むとびっくりさせてしまった。まあ、いきなりだから当然か。

「ひ、ひろ？」

「どうした？」

「な、何でもないよ。えへへ♪」

シャルに笑顔が戻った。うん、やっぱりシャルは笑顔の時が一番か

わいいな。

「嫁！　私とも手を繋ぐがいい」

「はいはい」

ラウラの左手と繋ぎ両手に花状態となる。

「こ、これが手を繋ぐというものか……。良いものだな」

……。二人の手が思っていたよりずっと華奢で、そこにある女の子の体温に変にドキドキとしてしまった。

「ちょっと！　あんたら何やってんのよ！」

「そうですわ！　わたくしにも要求します！」

「ふたりだけはずるいよ！」

ギャーッ！？　前を歩いていた鈴、セシリア、フェイトが殺し屋みたいな目で睨んできた。

「にぎやかだなぁ。別に羨ましくないからな！」

一夏がそんなことをつぶやいていた。だったら鈴をエスコートしろよ。

★

「えーっと、水着売り場はここだな」

俺たちは駅前のショッピングモール、その二階にいた。交通網の中心でもあるここは電車に地下鉄、バス・タクシーとなんでもござれの揃い踏み。ちなみにモノレールがＩＳ学園とここを繋ぐ唯一の交通手段だったりする。

そして、駅舎を含み周囲の地下街すべてと繋がっている当ショッピングモール『レゾナンス』は食べ物は欧・中・和を問わずに完備、衣服も量販店から海外の一流ブランドまで網羅している。様々な店に各種レジャーもあり、子供からお年寄りまで幅広く対応可能。いわく『ここで無ければ市内のどこにも無い』と言われるほどだ。

中学の頃はたまに弾と鈴と一夏の四人で放課後繰り出したものだ。懐かしい。

「じゃあ、男の俺と一夏は向こうの売り場だからいったんここで分かれるぞ」

「「あっ……」」

ぱっと手を離したら、シャルとラウラが妙に心残りのあるような声を漏らした。その後も、じーっと俺の方を『欲しいものがあるんだけどなかなか言い出せない子供』の顔で見つめてくる。

「えっと、どうかしたか？」

「あっ、ううん。なんでもないよ」

「私はもう少しひろとつな」

「はいはい、さっさとあっちに行くわよー」

「は、離せぇ～」

ラウラは鈴に連れて行かれシャルもははは と苦笑しながら後を追って行く。

「んじゃ、俺らも自分の水着を買うか」

「おう」

俺たちは適当にシンプルな色の水着を買った。

「そういえば一夏」

「なんだ？」

「もうすぐ箒の誕生日だけど何かプレゼント用意したのか？」

箒の誕生日は7月7日。ちょうど臨海学校の2日目になる。

「あーいや、実はまだ……」

「なら約束の時間までまだ余裕あるし行くぞ」

「助かる」

なぜか隣が雑貨屋だったので箒の誕生日プレゼントを探しに向かった。

☆

俺は織斑一夏。何の因果かＩＳを動かしてしまった男。何？　知ってるだと？　まあ、テレビや新聞、ネットにいたる全ての情報機関によって報道されたからな。知らないやつはいないはずだ。そんなことはどうでもいい。今俺は非常に困っていた。隣にいる親友ひろの助けを受けているが、同年代の女の子にどんな誕生日プレゼントを渡せばいいかわからない。

「これなんかどうだ？」

試しに招き猫を進言。

すぱーん！

「アホかぁっ！　せめてこのイルカの置物にしろ」

ハリセンで叩かれてしまった。つーかそれ、店の商品なんじゃ……

あ、レジに持っていった。

「まったく、お前のせいで余計な出費だ」

なんかハリセンを持ってるひろが出席簿を持つ千冬姉そっくりだ。

「そんなに深く考える必要もないだろ。普段身に付けている物とか、箒なら湯飲みとかでもいいんじゃないか？」

「うーん……真剣……侍……すぐ怒る……ポニーテール……リボン……ん？　そういえばあいつ、小学生の頃からずっとあのリボン使ってるな。よし、リボンにするか」

ちょうど白に赤いラインというシンプルなリボンが目の前にあり購入する。

「一夏にしちゃ上出来だな。箒、すごく喜ぶぜ」

「なんか引っ掛かる言い方だけど、そうだといいな……」

まだ約束の時間まで十分あるけど、俺とひろは先に待つことにした。

★

シャルたちと別れた場所に着くと、すでにシャルがいた。

「あれ？　早いな、もう終わったのか？」

「あ、ううん。ちょっとね、ひろに選んでほしいなぁって思って」

「そうなのか。じゃあ――」

「あれ？　ひろさんに……い、一夏さん!?」

行くかと言う前に赤みがかった茶髪の女の子に遮られる。

「お、蘭に弾じゃないか」

「おーっす。ひろも久しぶりだな」

蘭ちゃんの後ろにいたのは弾。こんな所で会うなんて珍しいな。

五反田弾前にも説明したかもしれんが中学の頃の友達だ。んで、一夏の前で顔を赤くさせてるのが妹の蘭ちゃん。

「一夏さんたちは何を買いにここへ？」

「臨海学校で着る水着をな」

「き、奇遇ですねっ。わ、私も水着を買いに来たんです」

んで、弾は荷物持ちと。相変わらず妹に頭上がらないんだな。

「じゃあ一夏、せっかくだし蘭ちゃんの水着選んでやれば？　一人でここにいるよりましだろ？」

「あーたしかにな。蘭さえよければいいけど？」

一夏の言葉に蘭ちゃんの表情がぱあっと輝く。

「是非、お願いします！　やったぁ！」

「それじゃ俺たちも行くから」

「おう」

一夏たちと別れシャルに引っ張られる。みんなの所に行くのかな？　って思っていたら、俺はそのままシャルと一緒に試着室に入ることになった。……って、あれ？　シャルさん？

「ほ、ほら、水着って実際に着てみないとわからないし、ね？」

いや、あの、ね？　って言われても正直困るんだが……。

「す、すぐ着替えるから待っててっ」

「いや、それなら一回外に――」

「だ、ダメ！」

なぜに！？

「だ、大丈夫。時間はかからないから」

言うなり、いきなり上着を脱ぎ出すシャル。

俺は慌ててシャルに背を向ける。狭いボックス型の試着室には俺とシャルがふたりきり。しかも背中ごしに聞こえる衣擦れの音が否応なく胸の鼓動を早めていく。しかも狭いゆえに女の子特有のあの甘い匂い。

ヤバイ。何とか平静を保たないと。

そうだ！　こういう時は別の何かを考えればいい。よし、平成ライダーを順番に数えようか。

ぱさり、と衣服の上に何か軽いものが置かれたような音が聞こえて龍騎まで数えたのに中断してしまう。
もしかして――いや、もしかしなくても、今のは下着を脱いだ音……。

うわあああっ！　ブレイドの次ってカブトだっけ？　いや電王？　ド忘れした！

「い、いいよ……」

混乱してる間に着替え終えたらしい。シャルの方に向いて、時が止まった。

いや、実際に止まったわけではないがあまりの光景に見惚れてしまい、何も出来なくなる。

「ど……どう？　に、似合ってるかな……？」

セパレートとワンピースの中間のような水着で、上下に分かれているそれを背中でクロスして繋げるという構造になっている。色は夏

を意識した鮮やかなイエローで、正面のデザインはバランスよく膨らんだ胸のその谷間を強調するようにできた水着をシャルは着ていた。

「あ、あの、一応もう一つもあって――」

「い、いや！　似合ってるぞ！　うん、すごく可愛いぞシャル！」

シャルが一瞬悲しそうな表情になったのを見た瞬間に我を取り戻し褒める。

月並みの台詞だったがシャルの表情は輝きを取り戻し太陽のように輝く。

「可愛いっ!?　じゃ、じゃあ、これにするねっ」

「お、おう。それじゃ――」

「お客様？」

びくーん！　試着室から出ようとした矢先に店員の女性から声をかけられる。そりゃあ大声出してりゃ気付くわな。

「この声……」

ギャー！　更にとても聞いたことがありまくりの声が聞こえて試着室のカーテンは何者かに開かれる。

「に、にに西本君。デュノアさん！？」

我らが担任千冬さんと副担任の山田先生がいました。

ちーん。俺、終了のお知らせ。次回からは一夏に主役を返却します。

「まったく……。何をやっている。馬鹿者が……」

★

「はぁ、水着を買いにですか。でも、試着室にふたりで入るのは感心しませんよ。教育的にもダメです」

「す、すみません……」

俺とシャルは正座させられ山田先生の説教を受ける。

「どうしたんだ？　いくら待っても戻って来ないからきてみれば、正座させられてるし、千冬ね――織斑先生と山田先生がいるし」

そこへミスターＫＹこと一夏が現れ話題が逸れた。

「私たちも水着を買いに来たんですよ。あ、それと今は職務中ではないですから、無理に先生って呼ばなくても大丈夫ですよ」

そうは言っても、山田先生はともかく千冬さんは多少カジュアルめではあるものの、ビッとサマースーツを着ているので一夏は『千冬姉』と呼べないでいる。

そこへ柱の陰に隠れていた三つの影がタイミングをはかったように出てきた。

「ひろ！　こんな所にいたのね。あたしの水着を選んで頂戴！」

「わたくしもなかなか決められなくて、最後はひろさんに決めてほしいんですの！」

「わ、私もお願い、出来るかなっ」

鈴、セシリア、フェイトの順に俺を捕まえ引き摺って行く。ぐえっ、鈴。首にきまってるから緩めて？　死ぬ。

「あ、あー。私ちょっと買い忘れがあったので行ってきます。えーと、場所がわからないのでデュノアさん、ついてきてください」

山田先生がシャルを連れて追ってくる。もしかして千冬さんたちに気を使ったのかな？

☆

「そうだな……青、かな」

「で、ではこれにしますわ」

ひろが三人娘に詰め寄られていた。自分以外の女に囲まれているのを見て、ラウラは面白くない。

（嫁め。私というものがありながらデレデレしおって）

物陰からじーっと見ていると、ひろが誰かを探すようにキョロキョロと視線を動かす。

「どうしたの？」

「いや、ラウラを見かけないなと思って」

自分の名前を呼ばれて胸が高鳴る。呼ばれたなら出て行くかと物陰から身を乗り出すが、次の瞬間その白い肌がボッと赤く染まった。

「ラウラは可愛いからな。余程変な物でなければなんでも似合いそうだ」

いきなり、ひろがそう言った。
ひろに自分の水着を選ばせてひろ好みの女にしてもらおうと考えた矢先の不意討ちである。

「じゃあ、私は可愛いくないのかな？」

「いや、フェイトも可愛い……ぞ」

ひろとフェイトの会話も耳に入らないほど意識が混乱し、顔は熱を放って紅潮する。心臓の動悸も先程より数倍早くなった。ドキドキと、バクバクと、一向に治まらない。

ラウラは生まれてこのかた、褒められたことはなかった。千冬も出来て当たり前だと言って厳しかったのだ。まして『可愛い』と言われたこともない。そこへきて突然のこの言葉なのだから、冷静沈着・

ドイツの冷氷と呼ばれたラウラが取り乱すのは仕方ないことだった。

（か、か、可愛い……？　私が、可愛い……可愛い……）

自分を探すひろに見つからない場所を探して隠れラウラは胸に手を当ててまぶたを閉じる。それは普段なら必要としない意識の集中法で、コールする番号を何度も間違えながらラウラはＩＳのプライベート・チャネルを開いた。

☆

同時刻、ドイツ国内軍施設。そこでは現在、ＩＳ配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』――通称『黒ウサギ隊』が訓練を行っていた。

眼帯をした黒ウサギが部隊章であるこの隊は隊長のラウラをはじめ全員が肉眼へのＩＳ用補佐ナノマシン移植者である。元々、ラウラの眼帯はリミッターであったのだが、現在では全員が肉眼の保護と部隊の誇りとして眼帯を装着していた。

隊長不在の今は副隊長であるクラリッサ・ハルフォーフが指揮をとっている。年齢は２２。部隊の中では最高齢であり、十代が多い隊員たちを厳しくも面倒見よく牽引する『頼れるお姉様』

その専用機『シュヴァルツェア・ツヴァイク（黒い枝）』に緊急暗号通信と同義のプライベート・チャネルが届いた。

「――受諾。クラリッサ・ハルフォーフ大尉です」

『わ、私だ……』

本来ならば名前と階級を言わなければいけないのだが、向こうの声が妙に落ち着き無く揺れているためクラリッサは怪訝そうな顔をする。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ隊長、何か問題が起きたのですか？」

『あ、ああ……。とても、重大な問題が発生している……』

その様子からただごとではないと思ったクラリッサは、訓練中の隊員へとハンドサインで『訓練中止・緊急招集』を伝える。

「――部隊を向かわせますか？」

『い、いや、部隊は必要ない。軍事的な問題では、ない……』

「では？」

『クラリッサ。その、だな。わ、わ、私は、可愛い……らしい、ぞ』

……。

「はい？」

それまでの規律整然としたクラリッサの声が、半オクターブほど高くなる。ついでに、きりりっとした口調は突然の意味不明な事態に対して若干間の抜けたものへと変わった。

『ひ、ひ、ひろが、そう、言っていて、だな……』

と、そこまで聞いてクラリッサはＶＴ事件後の時を思い出しピンときた。

「ああ、織斑教官の義弟で、隊長が好意を寄せているという彼ですか」

『う、うむ……。クラリッサが教えてくれたいわゆる私の、嫁だ。それでこういう場合は、どうするべきなのだ？』

「そうですね……。まずは状況把握を。直接言われたのですか？」

『い、いや、向こうは私に気付いてなかった』

「――最高ですね」

『そ、そうなのか？』

「はい。本人のいない場所でされる褒め言葉にウソはありません」

『そ、そうか……！』

動揺していたラウラの声がクラリッサの言葉でぱぁっと花開くように明るいものへと変わる。

ちなみに、現在集めた隊員たちには、クラリッサがプライベート・チャネルをしながら筆談で状況を伝えている。

【隊長の片思いの相手に脈アリ】

「おおお～！」と十数名の乙女が盛り上がった声を漏らす。

――ちなみに、この部隊は人間関係に多大な問題を抱えていたが、先月のＶＴ事件後に『好きな男ができた』という相談をクラリッサに持ちかけたときから全てのわだかまりが解けて消えた。

『そ、それで、だな、今、その、水着売り場なのだが……』

「ほぅ、水着！　そういえば来週は臨海学校でしたね。隊長はどのような水着を？」

『う、うん？　学園指定の水着にしようと――』

「何を馬鹿なことを！」

『！？』

「たしか、ＩＳ学園は旧型スクール水着でしたね。それも悪くない。悪くはないでしょう。男子が少なからず持つというマニア心をくすぐるでしょう。だがしかし、それでは――」

『そ、それでは……？』

ごくり、ラウラがつばを飲む。

「色物の域を出ない！」

『なっ……！？』

「隊長は確かに豊満なボディで男を籠絡というタイプではありません。っていうかスクール水着は鼻血が出そうなほど似合いますが、そこで際物に逃げるようでは『気になるアイツ』から進まないのです！」

『な、ならば……どうする？』

「フッ。私に秘策があります」

言葉にも熱が入り出すクラリッサ。さすが伊達に日本の漫画を愛読しているわけではないな。その目がキュピーンと光った。

高鳴る乙女の心（後書き）

どうも宏明です

蘭「五反田蘭です」

ようやく三巻の内容に入り、そしてようやく五反田兄妹が初登場。

蘭「はぁ……アニメと違って一夏さんに勝負水着、ウルトラ勝負水着、超ウルトラ勝負水着選んでもらっちゃった♪」

蘭が軽くトリップしてるので無視。強力なライバルに負けないで欲しいね。

次回はアニメだと神回とも言われた水着パラダイス！　の話。文字だけなので妄想をフル稼動させて下さい。

蘭「そういえば鈴さんがひろさんのところにいったんですよね？　ならあとはあの掃除用具に勝てば一夏さんの彼女に！」

？「しかし、本当の敵はまだいるのであった～」

蘭「なにやつ！」

どどんと登場、のほほんさん。あらぶるポーズを取ってます。

蘭「次回も読んで下さい。お待ちしております（ぺこり）」

の「無視しないで～。私泣いちゃうよーしくしく」

蘭（私よりも背が小さいのに胸おっきい。でも私は負けないもん！）

以上、サブキャラたちでした。

サマーバケーション前編（前書き）

よ、ようやく書けました。長くなりそうなので前後編です。

サマーバケーション前編

「海っ！　見えたぁっ！」

揺れるバスの中で女子が声を上げる。その声で俺は目を覚ました。

臨海学校初日、天候にも恵まれて無事快晴。潮風が窓から入り女子たちのテンションはＭＡＸだ。

「よく寝てたけどあんまり寝てないの？」

「いや、実はバスとか乗り物に弱くてな。寝ることで酔うのを防いでるんだよ」

俺の右隣に座るシャルが心配そうにきいてきた。
そうなんだと言ってポケットから酔い止めの薬を出す。

「よかったらこれ飲んで」

「助かる」

噛むタイプなのでばりぼりと砕き飲み込む。よし、着くまでは持ち

そうだな。

「ふふ、ひろにも弱点があったんだね」

クスクスと笑うシャル。誰にだって弱点はある。バスや船以外だと千冬さんくらいかな。苦手なものは。……いや、千冬さんは誰だって苦手か。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

千冬さんの言葉で全員がさっとそれに従う。指導能力抜群であった。一瞬こちらを睨んだ気がしたが、気のせいだろう。

言葉通りほどなくしてバスは目的地である旅館前に到着。四台のバスからＩＳ学園一年生がわらわらと出てきて整列する。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくおねがいしまーす」」」

千冬さんの言葉の後、全員で挨拶。この旅館は毎年お世話になっているらしく、着物姿の女将さんが丁寧にお辞儀した。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

しっかりとした大人の雰囲気を漂わせている。仕事柄笑顔が絶えないからなのか、その容姿は女将という立場とは逆にすごく若々しく見えた。

「あら、こちらが噂の……？」

ふと、俺と一夏に目があった女将が千冬さんにそう尋ねる。

「ええ、まあ。今年は二人男子がいるせいで浴場分けが難しくなってしまって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子たちじゃありませんか。しっかりしてそうな感じを受けますよ」

「感じがするだけですよ。挨拶しろ」

「織斑一夏です。よろしくお願いします」

「西本宏範です。よろしくお願いします」

軽くお辞儀する。

「うふふ、ご丁寧にどうも。清洲景子（きよすけいこ）です」

そう言って女将さんはまた丁寧なお辞儀をする。その動きには気品があり、大人の女性に耐性がない一夏は緊張していた。俺？　知り合いの半分が大人なため、問題ない。

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員にきいてくださいまし」

女子一同は、はーいと返事をするとすぐさま旅館の中へと向かう。まずは荷物を置いて、そこからなんだろう。

三日間のうち、初日は終日自由時間だ。

「ね、ね、ねー。おりむ～、にっし～」

どこの部屋に泊まるか知らない俺と一夏がぼ～っとしてるとあだ名で呼ばれる。この呼び方はのほほんさんだな。

振り向くと、異様に遅い移動速度でこっちに向かって来る長い袖の少女。

彼女は布仏本音（のほとけほんね）眠たそうな顔に手が見えないほど異常に長い袖、そしてのんびりとした雰囲気が特徴的な娘。ちなみにのほほんさんというあだ名は一夏が命名した。

「おりむ～とにっし～の部屋どこ～？　一覧に書いてなかったー。遊びに行くから教えて～」

その言葉で周りにいた女子が一斉に聞き耳を立てる。きっと一夏目当てなんだろうな。

「いや、俺たちも知らない。廊下にでも寝るんじゃねえの？」

「わー、それはいいね～。私もそうしようかなー。あー、床冷たーいって～」

俺たちの部屋は女子たちが泊まる場所とは別の所に用意されるらしい。

「織斑、西本、お前たちの部屋はこっちだ。ついてこい」

どうやら千冬さんが案内してくれるようだ。

「ここだ」

「え？　ここって……」

連れてこられた部屋のドアに張られた紙には『教員室』と書かれている。

「最初は二人部屋という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押し掛けるだろうということになってだな」

はぁ、とため息をついて千冬さんが続ける。

「結果、私と同室になった訳だ。これなら、女子もおいそれとは近づかないだろう」

「まあ、たしかに……」

俺や一夏のために鬼の寝床に入る勇者はいないだろうな。数年間同じ家に住んでるし、今更変な気持ちも持たないだろう。

「一応言っておくが、あくまで私は教員だということを忘れるな」

「了解です」

「はい、織斑先生」

「それでいい」

ようやく部屋に入る許可が下りた。広々とした間取りになっており、外側の窓が一面窓になっている。そこから見える風景も素晴らしく海がバッチリ見渡せた。

さらにトイレ、洗面所は専用の個室に大きめの浴槽もある。

「一応、大浴場も使えるが男のお前たちは時間交代だ。本来ならば男女別になっているが、何せ一学年全員だからな。お前ら二人のために残りの全員が窮屈な思いをするのはおかしいだろう。よって、一部の時間のみ使用可能だ。深夜、早朝に入りたければ部屋の方を使え」

「「わかりました」」

荷物も置いたし、俺たちは軽めのリュックサックを持って、さっそ

く更衣室へ向かうのだった。

★

「……」

「……」

「……」

俺と一夏と箒は更衣室のある別館へ向かう途中でばったりと出くわした。それは別にいいのだが、問題は目の前の珍奇な光景だ。

道ばたに、ウサギの耳が生えていた。ちなみにウサギの耳と言っても本物ではない。いわゆる『ウサミミ』というやつだ。バニーさんがしてるアレ、ただし、目の前のウサミミは白色だった。

しかも『引っ張ってください』という張り紙がしてある。

「なぁ、これって――」

「知らん。私にきくな。関係ない」

一夏が言い切る前に箒は即否定。間違いなくあの人、箒の姉である篠ノ之束さんに違いない。

「えーと……抜くぞ？」

「好きにしろ。私には関係ない」

そう言ってすたすたと歩き去る箒。一夏が俺を見たのでお手上げのポーズ。こればっかりは当人たちの事情だ。俺たちに出来ることはない。

すぽっ。

「のわっ！？」

ウサミミを思いっきり引っ張った一夏は盛大にすっころぶ。まあ、地中にいるわけないわな。

「いてて……」

「何をしていますの？」

「ん？　セシリアか。いや、今ここにウサミミがあってだな」

「ウサミミ……？」

キィィィン……。

うん？　今セシリアにあったことを説明しようとしたら、何かが高速で向かってくる音――って、ぬわぁ！？

ドカ――――ン！

謎の飛行物体は盛大に地面に突き刺さった。一夏の数センチ前なので一夏はちょっと涙目だったりする。

で、その見た目というのが――

「に、にんじん……？」

俺とセシリアと一夏はトリプルでそう漏らす。しかも、いわゆるイラストチックなデフォルメにんじん。

「あっはっはっ！　引っかかったね、いっくん！」

ばかっと真っ二つに割れたにんじんの中から笑い声とともに登場したのは、不思議の国のアリスが着ているような青と白のワンピース姿の篠ノ之束さん……。

「やー、前はほら、ミサイルで飛んでたら危うくどこかの偵察機に撃墜されそうになったからね。私は学習する生き物なんだよ。ぶいぶい」

束さんは一夏の手にあるウサミミを受け取って装着。そして俺の方に視線を向けて眠たそうな瞳が輝く。

「ひーくぅ～ん！」

「うわぁっ！？」

こちらに跳んでくる。にんじんのインパクトのせいで反応が遅れ、抱きしめられた。

「はぁぁぁ、ひーくん。おひさだね。本当におひさだねえ。あの頃と変わらない抱き心地だ。クンクン……えへへ、おいしそうな匂い」

うおおおい！　何か今ヤバイ台詞なかったか？　しかもフェイトと同じくらい大きい胸が押し付けられて……平常心、平常心だ！

「お、お久しぶりです。束さん。それでどうしてここに？」

質問すると満足したのか束さんは俺から離れる。

「そうだった。ひーくん。箒ちゃんはどこかな？　さっきまで一緒だったよね？　トイレ？」

「あー先に行ってしまいました」

さすがに避けてなんて言えないので事実だけ言う。

「そっかー。まあ、この私が開発した箒ちゃん探知機ですぐ見つかるよ。じゃあねひーくん、いっくん。また後でね！」

すったったーと走り去ってしまう。しかも無茶苦茶速い。ちなみに箒ちゃん探知機とやらはあのウサミミらしく、ダウジングロッドよろしく箒の方角に向いていた。

「い、一夏さん？　今の方は一体……」

「束さん。箒の姉さんだ」

「え……えええええっ！？　い、今の方が、あの篠ノ之博士ですか！？　現在、行方不明で各国が探し続けている、あの！？」

ま、だれもあの束さんを篠ノ之博士と同一人物だなんて思えないよな。

ちなみにこの臨海学校では『ＩＳの非限定空間における稼動試験』というのが主題である。そのため、各国から代表候補生宛てに新型装備が山ほど送られてくる。しかし、一応部外者は参加できない決まりになっているため、揚陸艇で装備だけがどかっと運ばれてくるらしい。

しかし、そこは束さん。規則？　なにそれ美味しいの？　的に無視して入り込んでくるんだろう。何が目的でここに？　もしかして箒の誕生日プレゼントを用意したとか？

「まあ、いいや。さっさと海に行こ」

ガシッ！

「お待ちになって、ひろさん」

肩をセシリアに掴まれその場から動けなくなる。顔は見えないけど後ろからぞわぞわと寒気に襲われ、嫌な汗をかく。

「篠ノ之博士とずいぶん仲がよろしいんですのね？　どういう関係なのかＯＨＡＮＡＳＨＩしましょうか」

指が肩に食い込んでる。痛い。セシリアめっちゃ怖い。

一夏に助けを請おうとしたが既にその姿はない。逃げやがったなこんちくしょお！

「さぁ……あちらで」

ギャーッ！　セシリアが俺を女子更衣室に連れて行こうとしてる！

「まっ、待ってくれセシリア！　あそこはマズイ。俺が社会的に死ぬ！　そ、そうだ！　一つだけ何でもいうことをきくから！　だから離してくれ！」

「それは本当ですの？」

ようやく手が離れた。

「お、おう。男に二言はない」

「でっ、でしたら……後でわたくしのせ、背中にサンオイル塗ってください」

「ええ！？」

「嫌……なんですの？」

ぐあっ。そんな上目遣いで見ないでくれ。ああもう。

「わかった。じゃあ、また後でな」

「ええっ。また後で！」

こくんこくんと二回うなずいて、セシリアは別館へ向かって走り出す。束さんほどではないが、こちらもえらく軽快かつ迅速な足取りだった。

★

水着に薄手のジャンパーを羽織り、浜辺にやって来た。

そこには可愛いく少し露出度が高い水着を身につけた女子たちが沢山いる。

肌を焼いている子、ビーチバレーをしている子、さっそく泳いでいる子など様々だ。

で、男が俺と一夏の二人しかいないから目立つ。

「西本君だ！」

「わ、体かっこいい～。鍛えてるね～」

「ジャンパーで体の半分が見えない……」

てな感じに見られる。先に来ていた一夏も同じように周りから見られ、波打ち際で彼女たちを見ないように準備体操をしていた。

「まったく、先に行きやがって。おかげで酷い目にあったんだぞ」

一夏の隣に行き、準備体操を始める。足がつるのは嫌だからな。

「悪い。何かヤバそうだったから。それよりやっぱり隠してるんだな」

「まあ、俺は見られても大丈夫だけどみんなはあまりいい気しない

だろ？」

俺の背中には大きな斬り傷が残っている。調べによるとこれはＩＳの武器で付けられたものらしい。

ま、せっかくの海だ。湿っぽい話しはなしだ。腕を伸ばして脚を伸ばして背筋を伸ばして――

「ひろ～～っ！」

ん？　――って、のわっ！？

「あんたら真面目ねぇ。一生懸命体操しちゃって。ほらほら、終わったなら泳ぐわよ」

いきなり俺に飛び乗ってきたのは、鈴だった。小学校の頃から中学校の頃まで毎年水着になると一夏に抱きつくのだ。なぜか今は俺だがな。

「おい、一夏は隣だぞ。暑さにやられたのか？」

「んなわけないじゃない。いつも同じだと飽きるでしょ？　だから今日はひろに登りたい気分なの」

そう言いながら、俺の体をしゅるりと駆け上がって肩車の体勢になる。毎年見てて思ったが、こいつの前世は猫か猿だな。
ちなみに着ているのはスポーティーなタンニキタイプ。オレンジと白のストライプで、へそが出ているやつ。

「んーなかなか良い乗り心地ね。ちょっと肩車のバイトしない？料金はずむわよ、ひろ」

肩車するだけで稼げるなんてボディビルダー真っ青なバイトだ――ってバカ！

「こんなことしてたらどうにかなっちまう。降りろ！」

「なにー？　もしかして興奮してんの？」

「してねーし！」

「ほれほれ、女の子の生脚よ。エロゲ主人公」

ニヤリと笑って俺の頭を挟む太ももをぎゅっとしてくる。引き締まっていながら女の子特有の柔らかさと温かさが俺の精神をガリガリと削っていく。

「あっ、あっ、ああっ！？　な、何をしてますの！？」

と、そう言ってやってきたのはセシリアだ。手には簡単なビーチパラソルとシート、それにサンオイルを持っている。

こちらは鮮やかなブルーのビキニ。腰に巻かれたパレオがちょっと優雅で格好いい。

「何って、肩車。一回１００円よ」

「安！　デパートの屋上にある乗り物か」

「これは幼なじみ料金よ。他の人は一回１０００円」

「ぼったくりだあ」

「ま、あたし以外に利用させないけどね」

「わ、わたくしを無視しないでいただけます！？」

おっと、ついつい鈴と上下で会話してしまった。

せっかく会話で平気だったのにまた鈴の太ももが……。少し赤くなった顔をばれないように逸らす。――って、挟まれてるから無理だ。

「とにかく！　鈴さんはそこから降りてください！」

「ヤダ」

「な、なにを子供みたいなことを言って……！」

セシリアがザクッ！　とパラソルを砂浜に刺す。うわ、なんか怒りがこもってるぞ。

「なになに？　なんか揉め事？」

「って、あー！　に、西本君が肩車してる！」

「ええっ！　いいなぁっ、いいなぁ～！」

騒ぎを聞きつけた女子が何を勘違いしたか俺に肩車をしてもらおうと詰めかけてくる。

鈴でさえヤバイのにあれだけの女子を肩車するのは精神的にも男子的にも非常にまずい。一夏に助けを請おうにもいつの間にかのほほ

んさんたちとビーチバレーしてやがるし。一度ならず二度までも……。

「り、鈴。降りろ。誤解が広まる」

「ん。まあ、仕方ないわね」

よっ、と俺から飛び降りる鈴。ひらりと手のひらで着地して、そのまま前方返りで起立。猫みてぇ。

「鈴さん……？　今のはいささかルール違反ではないかしら……？」

セシリアはぴくぴくと引きつった笑顔を浮かべている。これはきっとご立腹だ。

ちなみに俺はというと、やってきた女子に「そういうサービスはしてない」と説明するので忙しい。ええい、一夏ならわかるけどなぜ俺にくるんだ。

「そんなこと言って、どうせセシリアだってひろに何かしてもらうんでしょ？　じゃあいいじゃん。ねえ？」

「いえ、それは……」

「え？　何もしてもらわないんだ。じゃ、あたしが――」

「し、してもらいますっ！　ひろさん、さっそくサンオイルを塗ってください！」

セシリアがシートの上でうつ伏せになり、パレオをしゅるりと脱ぐ。
その仕草は妙に色っぽくて、ついつい俺はドキッとしてしまう。

「「「え！？」」」

鈴と女子たちが固まっている間にセシリアは首の後ろで結んでいた水着の紐を解き、準備を完了させた。

「コホン。そ、それでは、お願いしますわね」

「え、えーと……背中だけだったよな？」

「ひ、ひろさんがされたいのでしたら、前も結構ですわよ？」

「いや、背中だけで頼む」

「で、では……どうぞ？」

「お、おう」

サンオイルを受け取り手にオイルを出す。手はひんやりしてるが、顔はかなり熱を帯びていた。

セシリアは無防備な背中を俺に見せている。体に潰されてむにゅりと形を歪めた乳房は、脇のしたから見えていることもあって少し――いや、かなりセクシーだ。

しっかりと発育したお尻にすらりと伸びた脚線美はこれまた素晴らしくて、ついつい無意識につばを飲む。

「じゃ、じゃあ、塗るぞ」

「ひゃっ！？　ひ、ひろさん、サンオイルは少し手で温めてから塗ってくださいな」

「わ、悪い。こういうことをするのは初めてなんで……」

「そ、そう。初めてなんですの。それでは、し、仕方ないですわね」

どことなくセシリアの声がちょっと嬉しそうに聞こえる。
ともあれ、言われた通りサンオイルを揉むように温めセシリアの背中に塗っていった。

（うわ、セシリアの肌ってすっげえすべすべしてる……）

「ん……。いい感じですわ。ひろさん、もっと下の方も」

「せ、背中だけでいいよな？」

「い、いえ、せっかくですし、手の届かないところは全部お願いします。脚と、その、お尻も」

「ウエィッ！？」

思わずオンドゥル語が。さすがにサンオイルを塗るためとはいえセシリアのお尻を触るのは――

「はいはい、あたしがやってあげる。ペタペタっと」

「きゃあっ！？　り、鈴さん、何を邪魔して――つ、冷たっ！」

意地悪な笑みを浮かべた鈴が両手いっぱいに付けたサンオイルをセシリアの脚や足の裏に塗る。

「いいじゃん。サンオイル塗れればなんでも。ほいほいっと」

「ひゃあっ!?　あああもうっ！　いい加減に――」

水着の中に手を突っ込んでお尻にも塗り、堪忍袋の緒が切れたセシリアは体を起こす。そうすると、体から離れていた水着はそのまま落ちて――

「きゃああっ!?」

「ぶるあぁぁっ!?」

間一髪、大事なところは見えなかったものの、部分展開されたブルー・ティアーズの右腕に海まで殴り飛ばされた。

「ぶはっ！　ったく、酷い目にあった」

少し飲んでしまった海水を吐き出しつつ浜辺に戻ろうとしたら鈴が

逃げてくる。

「ひろ、向こうのブイまで競争ね。負けたら駅前の『@クルーズ』でパフェおごんなさいよ。――よーい、どん！」

「なっ、待ちやがれ！」

「あははっ。今まで散々負けてきたけど、いまこそ借りを返してやるわ！」

俺を追い抜き、ものすごい速さで泳いでいく鈴。こうしてなし崩し的に追いかけるハメになった。ちなみに@クルーズのパフェは安くて１５００円。この勝負、負けられん。

☆

（セシリアには悪いことしたけど、今回は譲ってもらうわよ）

ひろと泳ぎの競争をしながら、鈴はそんなことを考えていた。

（それにしても、ひろったら顔赤くさせちゃって、可愛いかったな）

さっきの様子を思い出してニンマリとしてしまう。一夏と違ってひろは『女の子として意識してくれた』ようで嬉しいようだ。

（一夏は全然嫉妬もしてくれないし、やっぱり脈はまったくなかったわけね……）

初恋が実るどころか受粉すらしなかったことに悔しい気持ちが湧き上がる。

（あたしは凰鈴音。二度も負けたりしないわ！　絶対にひろはあたしに惚れさせてやる！）

きっぱりと初恋の苦味を克服し、気合いを入れた瞬間、思わず力いっぱい息を吸い込んでしまう。しかし、ここは水中。口の中に入ってきたのは空気ではなく海水だった。

「！？　ごぼぼっ！」

いきなりのことで軽いパニックに陥った鈴は、姿勢を崩してもがく。

（み、水っ、入っ……！　上、上に行かないとっ……）

しかし、水中で自分がどこに向いているかもわからない。遂に溺れはじめた鈴を、けれど力強い腕が引っ張り上げた。

（あ、ひろ……。ひろの腕だ、これ……）

途端に、安堵が胸にひろがる。そのたくましい腕をわずかに抱きしめて、鈴は海面へと浮上した。

★

「おい、鈴！　大丈夫か！」

「ごほっ！　けほっ！　だ、大丈夫って、顔近っ……！」

陸に戻って鈴をシートに寝かせると海水を吐き出した。

「まったく、心配かけさせるなよ。今度からちゃんと準備体操しろ」

「ち、違うわよ！　溺れたのは、その、あんたのせいで……」

後半の部分が聞き取れないな。ともかく無事でよかった。人工呼吸

しないとまずいかと思ったよ。

「ひろ！　何があったんだ！」

騒ぎを聞きつけて一夏が血相変えて来た。

「鈴が溺れたんだよ。まあ、大丈夫だ。しばらく休めば問題ない」

「そっか……よかった……」

一夏はふう～と安堵してのほほんさんたちの所へ戻って行く。

「あ、あのさぁ、ひろ……」

「ん？　念のため別館まで俺がおぶって行こうか？」

「も、もう大丈夫よ。自分で歩けるから。それより、その……」

ぼそぼそとした声だったが、最後の言葉は耳元にはっきりと届いた。

「あ、ありがと……」

そう言って鈴は顔を赤くさせ、別館の方へ向かって歩き出す。溺れたのが恥ずかしかったんだな。

サマーバケーション前編（後書き）

どうも宏明です

の「布仏本音だよ～」

ようやく始まった水着回。そしてのほほんさんが初登場。

の「なんでもっと早く登場できなかったの～？」

ま、まあ、色々とあって……。

の「あやしいー。きっと忘れてたんだー」

ぐっ、そんなことないアルよ。

それより、今回のほほんさん頑張ってたね。

の「うん。でもおりむー全然気付いてくれないんだ～。リンリンを真似て背中に張りついてもドキドキしてなかった……」

き、きっと内心ではのほほんさんって意外と……って思っているはず

ずさ。

次回は後編。シャルやラウラ、フェイトが頑張る話さ。

の「かんちゃん、勝ち目薄いかも……。ていうか出るの～？」

そこはまだ未定。だけど原作より早く出るよ。

の「そっかー。なら安心だね。それじゃあ次回も読んでね～。読まないと、私の暗器が唸るよ～」

やっぱり長い袖にヤバイ物が。

の「ポッキーにキャンディー、ポテチ、チョコレート、せんべいが入ってるよ～」

お菓子ばっか！

「あ、ひろ。ここにいたんだ」

びしょ濡れになっているジャンパーを絞り、羽織ると声をかけられた。振り向くと、そこにはシャルと――

「ん？　なんだそのバスタオルおばけは」

なんだが奇天烈な存在がいた。バスタオル数枚で全身を頭の上から膝したまで覆い隠している。なんだこいつは……。

「ほら、出てきなってば。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める……」

ん？　今の声は……ラウラ？

しかし、いつも自信に満ちたラウラにしてはずいぶん弱々しい声に聞こえた。シャルはシャルでなにやら説得を試みてる。

「ほーら、せっかく水着に着替えたんだから、ひろに見てもらわな

いと」

「ま、待て。私にも心の準備というものがあってだな……」

「もー。そんなこと言ってさっきから全然出てこないじゃない。一応僕も手伝ったんだし、見る権利はあると思うけどなぁ」

そういえばラウラとシャルは同室になったらしい。先月の一件ではライバルとして戦ったが、今は普通にルームメイトとして仲がいい。ラウラは相変わらず人付き合いが苦手みたいだけど、少しずつ変化してきてる。

「ラウラが出てこないなら僕もひろと遊びに行こうかなぁ」

「な、なに？」

「うん、そうしよ。ひろ、行こっ」

言うなり、シャルは俺の手を取る。そのまましゅるっと腕を絡ませて、シャルは波打ち際へと俺を誘う。

「ま、待てっ。わ、私も行こう」

「その格好のまんまで？」

「ええい、脱げばいいのだろう、脱げば！」

ばばばっとバスタオル数枚をかなぐり捨て、水着姿のラウラが陽光の下に現れた。しかもその水着というのが――

「わ、笑いたければ笑うがいい……！」

黒の水着、しかもレースをふんだんにあしらったもので、一見するとそれは大人の下着にも見える。さらにいつも飾り気のない伸ばしたままの髪は左右で一対のツインテールになっている。ちょっと鈴とかぶっている気がするが、正直この姿は――可愛い。もじもじと落ち着かなさそうにしているラウラが、より強くそう思わせた。

「おかしなところなんてないよね、ひろ？」

「ああ。すごく可愛いぞ」

「かっ、かわいっ……！？」

俺の言葉が予想外だったのか、ラウラは驚きに一瞬たじろいだあと

そのままカーッと赤面した。

「しゃ、社交辞令ならいらん……」

「いや、世辞じゃねえよ。カメラがあったら撮りたいくらいさ。なあ、シャル？」

「うん。僕も可愛いって褒めてるのに全然信じてくれないんだよ。あ、ちなみにラウラの髪は僕がセットしたの。せっかくだからおしゃれしなきゃってね」

「へえ、そうなんだ。うん、シャルも水着似合ってるな」

「う、うん、ありがと」

褒められて照れくさそうに髪をいじるシャル。

ちなみに今俺はカメラを持ってきてない。何故かって？　それは男だからさ。いくらやましい気持ちがまったくなくても変態にみられるからな。

「ひろー！」

「ビーチバレーしようよ！」

「にっしーとも対戦～。ばきゅんばきゅーん」

一夏と、たしか櫛灘（くしなだ）さんと、のほほんさんがこっちに来いと手を振る。しかし、のほほんさんの水着？　は独特だな。

きつねの着ぐるみだぜ。袖は相変わらず長いし、しっぽはブンブン振って……。

「おう、やろうぜ」

ま、そんな細かいことはどうでもいいか。ぼーっとしてるラウラの手を引きながら砂のコートに向かう。

俺、シャル、ラウラチーム対一夏、櫛灘さん、のほほんさんチームで対戦だ。

「んじゃ、お遊びルールでいくよ。タッチは三回まで、スパイク連発禁止、キリのいい十点先取で一セットねー」

「よっしゃ、そっちのサーブだ。どんとこい」

ビーチボールを受け取った櫛灘さんの目がキランと光った。

「ふっふっふっ。七月のサマーデビルと言われたこの私の実力を……見よ！」

いきなりのジャンピングサーブ！
しかも、スピードといい角度といい申し分ない。
ビーチボールはラウラに向かっていく。

バシーン！

「へぶっ！？」

ビーチボールは見事ラウラの顔面にぶち当たり、ぽてっと仰向けに倒れる。

「だ、大丈夫か。ラウラ！？」

ラウラの顔は少し赤くなっていたが、鼻血は出てない。

「か、かわ、可愛いと……言われると、私は……」

「もしかしてまだ照れてたの！？」

顔を覗き見ると目が合って、なぜかボッと顔をさらに赤くさせるラウラ。それから、なんと奇声をあげながら脱兎の如く海へ逃げていった。

「ど、どうしたんだ？　追いかけた方がいいか？」

「あはは……そっとしときなよ」

やれやれとジェスチャーするシャル。

「まあ、大丈夫か。後でラウラの様子を見とこ」

ゲームを再開。数の上では二対三なのだが、向こうはのほほんさん分がマイナスだろう。

「そーれっ」

身軽な動きでシャルがスパイクを打つ。それを真横で見ていた俺は、ジャンプにつられてぷるんと弾む胸の膨らみをついつい凝視してしまった。

（いかん……。それにしても、シャルって結構スタイルいいよな――って、イカンイカン！）

頭を振って雑念を追い出す。しかし、向こうのチームの女子もぴょんぴょんと跳ねてはそのたびに胸が柔らかそうに揺れていた。

「ひろ！　パス！」

のほほんさんが偶然返したボールをシャルがトスを上げる。またもや胸はぷるんと揺れて、向こうにいる一夏が凝視している。

「まっがーれスペクタクル！」

なんか赤玉超能力者が「今こそ僕の力を使う時です」と言った気がして、渾身のスパイクを放つ。

「ぼ、ボールが曲がっ！？　ぐわあっ！？」

ビーチボールは一夏の真横を通りすぎようとしたが、突如軌道が曲がり、見事顔に命中した。

「ビーチバレーですか。楽しそうですね」

俺たちがわいわいとやっていると山田先生がこちらへ来た。うん、生徒とは比べ物にならないものがぶるんと揺れる。

「先生もやりますか？」

「そうですね。私たちもまぜてもらいます。ね、織斑先生」

「ふ、そうだな私もやろう」

山田先生の後ろから千冬さんが現れた。女子一同からため息と熱い眼差しが集まる。

ラウラとは違う印象の黒い水着をばっちりと身に纏い、そのスタイルのいい鍛えられた体を惜しげもなく陽光に晒していた。

そういえば千冬さんの水着姿は初めて見たな。普段と違う姿にまじまじと見入ってしまう。

「ひろって、織斑先生が好みのタイプなの？」

「え！？　な、なんだよ、シャル。いきなり……」

「別に。ただ、ずいぶん僕たちの水着を見たときと反応が違うなぁって思っただけだよ」

なぜかシャルさんご立腹。そんなことないけどなぁ。

「はぁ、ライバル多いなぁ……。強敵ばっかりだし、そこに織斑先生まで入ってくるなんて、勝ち目薄いよ」

たしかに千冬さんは強いな。しかも一夏と同じチームだし。

「ああ、あの姉弟はやっかいだ。気合いをいれねぇとな」

「……ひろ、ものすごく勘違いしてる」

「え？　そうか？」

「そうだよ。はぁ……一番の強敵はひろ自身だね」

む、そうか？　正直球技はあまり得意じゃないんだけど。

「サーブ、いきますよ！」

山田先生が声をかけて、千冬さんがサーブを打つ。

うお、ものすごいスピードだ。櫛灘さんのとは比べ物にならない。

「こいつは俺が――」

ジャストタイミングでレシーブを上げ――れない！？

ビーチボールが手に当たった瞬間、ギュルギュルッ！　とさらに回転する。

「なっ、これはまさか！？　ツイストサーぶっ！？」

驚愕してるとボールが俺の顔めがけて跳ね上がり、痛みと共に目がチカチカした。

「さ、さすが千冬……さん。でも、競技……違くね？」

俺の意識はここでぷつりと途絶えてしまう。

★

「う……ん……」

頭に柔らかい感触を感じながら目を開ける。

「……」

俺の視界にはピンクの何かしかない。メロンのようなでかくて丸い何か。

「あ、起きた？　災難だったね、ひろ」

急に太陽光が目に入り、とっさに手で覆おうとする。

ふにょん。

柔らかいピンク色の何かを鷲掴みした。

「ひゃんっ！？　ひろ、そ、そこはっ」

目が慣れて俺の顔を覗き込む人物と目が合う。フェイトだった。

「え……？」

上から俺を見下ろすフェイト。頭には柔らかい感触。手にも柔らかい感触……これはまさか

膝枕！？

「悪い！　今すぐどいー―」

ごちん！

「「っ！！！」」

額をごつんっとぶつけてしまった。

「いってぇ。すまん、大丈夫か？」

「う、うん。大丈夫」

ようやく離れてフェイトを見れた。昨日選んであげたピンクの水着を身に纏い、髪を腰辺りで束ねている。

「まあ、その、ありがとな。それと水着似合ってるぞ」

「そ、そうかな？　えへへ」

頬を赤らめるフェイト。でも嬉しそうだ。

手を握ったり開いたりするが、未だにさっきの感触が消えない。前に一夏が山田先生のを掴んだけどまだ覚えているのか？　後できいてみよう。

ぎりっ！

「いだぁっ！？」

誰かに背中をつねられた。

「お前は私の嫁だろう。浮気は許さん」

ラウラだった。先程までの挙動不審なところはなく、いつもの雰囲気。いや、若干黒いオーラを纏っている気がする。

「その、なんだ。クラリッサに聞いたのだが、胸は揉んでもらうと大きくなるらしい。ひろが私のを、大きくしてくれないか？」

ちょっ、いきなり何言い出すんですかラウラさん。しかもさりげなく胸を腕に押し付けるな。水着ごしにぷにぷにとした触感が……。

「「ひろ……」」

前にはいつの間にかシャルもいて、フェイトと一緒にＩＳの右腕を部分展開させている。

「「えっちぃのはいけないと思うなっ！！！」」

はい、本日三度目の顔面強打。再び海へ殴り飛ばされるのだった。

★

時間はあっという間に過ぎ、現在七時半。旅館の大広間三つを繋げた大宴会場で、俺たちは夕食を取っていた。

「うん、うまい。さすが新鮮な刺身だ。それにしても豪勢だな」

「そうだね。ほんと、ＩＳ学園って羽振りがいいよ」

そう言ってうなずいたのは俺の右隣に座っているシャル。

ちなみにシャルとフェイトは日本文化にかなり適応している。セシリアはというと『お、お魚を生で！？　し、信じられませんわ……』とのこと。ラウラは『安心しろ。私は生の食材を食べられる訓練を受けている。ジャングルで孤立無援になったときにも生き延びられるようにな』と言っていた。

メニューは刺身と小鍋、それに山菜の和え物が二種類。それに赤だし味噌汁とお新香で、なんと刺身はワカハギだ。しかもキモつき。

「うまいなぁ。この本わさも良い」

「本わさ？」

「そうなんだ。はむ」

シャルは知らないようなので説明する。

興味深々なシャルはわさびの山を食べ――ええっ！？

「っ～～～～！！」

案の定、鼻を押さえて涙目になった。

「だ、大丈夫か？」

「ら、らいひょうぶ……」

鼻声で返事をしながら、にこりと笑顔を浮かべようとするシャルだったが、その笑顔は涙目に崩れていまいち決らなかった。

「ふ、風味があって、いいね……。お、おいしい……よ？」

どこまで優等生なんだよ。この子は。

「っ……ぅ……」

ちなみに俺の左隣ではセシリアがさっきからずっとこんな感じでうめいている。正座が苦手らしい。一向に食事が進んでない。

「大丈夫か？　セシリア。顔色良くないぞ」

「だ……ぃ……ょう、ぶ……ですわ……」

うん、すげえ大丈夫じゃない。まあ、外国では床に座るなんて習慣はないから仕方ないな。

次第にプルプルと震えだしたセシリアは、しかし英国人としてのプライドなのかなるべく平静を装って箸を手にした。

「い、いただき……ます……」

ず、ず……と、味噌汁を飲むのにも難儀している。

「お、おいしぃ……ですわ、ね……」

に、ニコリ……。

うーん、かなり無理をしてるように見えるな……。

「セシリア、正座が無理ならテーブル席の方に移動したらどうだ？」

ＩＳ学園には外人が多いので、多民族・多宗教を考慮し、正座ができない生徒は隣の部屋にあるテーブル席が利用できる。

膳もお盆と台が分離できるタイプになっているので、テーブル利用者は自分の分の食事を運ぶだけでＯＫなのだ。

「へ、平気ですわ……。この席を獲得するのにかかった労力に比べれば、これくらい……」

うん？　席を獲得？　一夏の隣をめぐる戦いにセシリアはいなかったはず。ちなみに一夏の隣にはのほほんさんとかなりんと呼ばれた娘がいた。

そういや今日、海で箒を見かけなかったな。どうかしたのか？　一夏を睨みながら味噌汁を飲んでいるから体調は問題ないみたいだが。

「う、ぐ……、くぅ……」

そしてセシリアよ。やっぱり正座が無理なんじゃないのか。二回も刺身を取り損なっているし。

「セシリア」

「移動は、しませんわ」

んー、言い切られてしまった。何か話題を変えて気を紛らわせるか。

……！

本わさの刺激が俺にひらめきを与えてくれた。

「セシリア。ちょっと耳をかせ」

「は……い？」

セシリアは辛そうにしながらも俺に耳を近付ける。

「後で部屋に来てくれ。いつもＩＳについて教えてもらってるし、お礼にマッサージをサービスするよ」

「マッサージ……ですか？」

「ああ、嫌なら聞かな――」

やっぱり男に触られるのは嫌かと思って撤回しようとしたが、がばっ！　といきなり俺の手をセシリアは握り、熱の入った小声で答える。

「はい！　わかりました！　じゅ、準備がありますので少々お時間をいただきますが、必ず！」

準備？　特にする必要なないと思うけどなぁ。

そんなことを考えていると、セシリアの表情が生き生きとしたものになって食事を再開した。マッサージと聞いて正座のしびれを忘れたか。よかったよかった。女性は美容効果に弱いらしいからな。

「ああ、何を食べても美味ですわ！」

て、テンション高いな。そんなにマッサージが楽しみなのだろうか？

その後、一夏がのほほんさんに『はい、あーん』をしようとしてみんなが騒ぎだし、千冬さんの雷が落ちた。

今日はのほほんさんが一夏に猛アタックしてる。あれだけわかりやすいのに何で気付かないんだ？

「ひろも人のこと言えないと思うよ」

シャルが俺を睨みながら言う。なぜかご立腹だ。

「いや、俺は鋭いぞ」

「鈍感な人は自分が鈍感だって気付かないんだよ」

そう言って機嫌の悪いシャルはふんっと顔を逸らす。その子供っぽい仕草がちょっと可愛い。

料理が美味しくて気が付けば満腹になるまで食べていた。

★

「ふ～、さっぱりした」

「やっぱ温泉は良いよなぁ」

海を一望できる露天風呂に入った俺と一夏は、かなり上機嫌で部屋へと戻ってきた。

「千冬さんも温泉かな？」

部屋にはいないので、たぶんそうだろう。――と、ちょうど千冬さんが帰ってきた。

「ん？　二人だけか？　女の一人も連れ込まんとは詰まらんやつらだ」

「後でセシリアが来ますよ？」

「何……？」

俺の発言に一夏と千冬さんが驚愕の表情で俺を凝視する。

「一応言っておきますけどマッサージしてあげようと思って呼んだだけですからね？」

なんだそんなことかと言って二人はため息を吐いた。大体、この部屋は『織斑先生』の部屋な訳だからいかがわしいこと出来るわけないって。

「やれやれ、織斑も西本くらい積極的なら私も少し安心するんだがな」

何のこと言ってるかわからないけど、人のこと言えませんよ？　千冬さんも浮いた話がないしな。

ごすっ。鋭いチョップが飛んできた。

「何か失礼なこと考えていただろう。まあいい、一夏、久しぶりにマッサージでもしてくれ」

「了解。千冬姉♪」

姉の世話が趣味の一夏は嬉しそうにマッサージを始めるのだった。

☆

「～♪」

食事の後に風呂を一回、シャワーを一回浴びたセシリアは、上機嫌で着替えていた。

身に纏うのは旅館の浴衣だが、素肌に着けているのはさっきまでとは違う下着である。

（もしかしたらと、用意していた甲斐がありましたわ）

最初は『何も着けない』という選択肢もあったが、さすがに引かれると思い止めた。

（ひろさんに体を触られるなんて……そしてその後は……）

セシリアの妄想ではただのマッサージがＲ１８方面に向かっている。

「あ～～～。せっしーがえっちぃ下着つけてる～」

いつの間にかそばにきていたのほほんさんがそう告げた。その言葉を聞いて、セシリアはギクリとしてしまう。なぜなら……

「なにっ！？　脱がせ脱がせぇ～！」

「剥け～。身ぐるみ置いてけ～！」

「きゃあああっ！？　やっ、やめっ……引っ張らないで～！」

一夏やひろと遊べない分、暇もエネルギーも持て余した女子が暴走し、セシリアの浴衣はあっという間にひん剥かれる。

「わ。本当にエロい下着つけてる……」

「えろ～、えろ～」

「なになに、勝負下着？　織斑君と西本君の部屋に行けないのにそんなの着ちゃって」

「まあまぁ～。セシリアったらおませさん★」

口々に好きなことをいいながら、最後に声を揃える女子一同。

「「「セシリアはエロいなぁ」」」

「え、エロくありません！　こ、これは、その、身だしなみ……そう、身だしなみですわ！」

セシリアはもみくちゃにされて乱れた浴衣を直しがら、真っ赤になって反論した。

☆

「うっ、うっ……ひどい目に遭いましたわ……」

その後、さらにもみくちゃにされたセシリアは、未だ傷跡癒えずの様相で廊下を歩いていた。

（でも、これでやっと――！！）

ひろの部屋へと行ける！　そう思うと、今までの疲れもダメージも吹き飛んだ。

（の、喉の調子も整えておきませんと。ん、んっ）

浮かれているのが歩調にも現れている。今にもスキップをしそうな足取りは、だんだんと早足となって目的の場所へと向かう。

――ところが。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

部屋の前、その入り口のドアに鈴、箒、ラウラ、シャル、フェイトの五人が張り付いている。

「皆さん、一体そこで何を――」

「シッ！！」

鈴がそう言うなりセシリアの口を塞ぐ。

状況がわからずにもがいていると、ふとドアの向こうから声が聞こえた。

『千冬姉、久しぶりだからちょっと緊張してる？』

『そんな訳あるか、馬鹿者。――んっ！　す、少しは加減しろ……』

『はいはい。んじゃあ、ここは……と』

『くあっ！　そ、そこは……やめっ、つぅっ！！』

『すぐに良くなるって。だいぶ溜まってたみたいだし、ね』

『あぁぁっ！』

『相変わらず上手いな、一夏は』

『そういうひろも中々だぜ？』

……。

「こ、これは、一体、何ですの……？」

ひくひくと口元を震わせ、引きつった笑みを浮かべながらそう尋ねるセシリア。しかし、返ってきたのはただただ沈黙だけだった。

五人とも、ずーんと沈んだ表情をしている。特に箒は泣きそうで、その様子はまるでお通夜さながらだった。

セシリアの脳内では３Ｐという構図が浮かぶ。と、ふと自分がここに呼ばれた意味を思い出す。

「あ、あの、皆さん。これはマッサージをしてるだけ、なのでは……？」

『えっ！？』

五人がセシリアに事情の説明を求めようとしたとき――

バンッ！！

『へぶっ！！』

思いっきり、ドアに殴られた。
打撃の刹那、反射的に漏れた声は十代女子にあるまじき響きをしていた。

「何をしているか、馬鹿者どもが」

「は、はは……」

「こ、こんばんは、織斑先生……」

「ちょっとラウラ、離してよ」

「無駄だ、鈴。おとなしく共に散ろう」

「……」

千冬の睨みに全員動けない。フェイトにいたってはプルプルと震えている。

「まったく。盗み聞きとは感心しないが、ちょうどいい。入っていけ」

『えっ？』

予想外の言葉に目を丸くする五人とセシリアはおそるおそる部屋に入った。

「お、セシリア。遅かったな。さっそく始めるからこっちにきてくれ」

ぽんぽんと布団を叩いてセシリアを呼ぶひろ。
マッサージだとわかっていても、ストレートな誘いにポッと頬を赤らめた。

「は、はい……よろしくお願いしますわ」

「ちょっとひろ！　何でセシリアなのよ。幼なじみのあたしにしなさいよ！」

「わかったわかった。みんなマッサージしてやるから睨むな」

ひろに噛み付いた鈴をなだめ、マッサージを始める。

☆

マッサージ中に千冬がセシリアのお尻を掴むというイタズラがあったが、それも終わりひろと一夏は千冬にジュースを買ってこいと命令されて部屋から出て行った。

「……」

残された女子六人は無言で座っている。

「おいおい、葬式か通夜か？　いつものバカ騒ぎはどうした」

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……」

「は、はじめてですし……」

「やれやれ……」

千冬は旅館の備え付けの冷蔵庫を開けて中から星のマークがキラリと光る缶ビールを取出し開ける。

プシュッ！　と景気のいい音を立てて飛沫と泡が飛び出す。それを唇で受け取って、そのまま千冬はゴクゴクと喉を鳴らした。

「くぅ！　さて、そろそろ肝心の話しをするか」

女子たちは普段と違う千冬に戸惑うが、千冬はかまわず話しを進める。

「お前ら、あいつらのどこがいいんだ？」

あいつら、と言うのはひろと一夏であることを全員わかっていた。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけですので」

と、ポニーテールをいじる箒。

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

人差し指同士をつついてもごもごと言う鈴。

「わ、わたくしは同じく高みを目指す者として切磋琢磨してるだけです」

先ほどの行動の反発か、ツンとした態度で答えるセシリア。

「ふむ、そうか。ではそう一夏とひろに伝えておこう」

しれっとそんなことを言う千冬に、三人はぎょっとしてから一斉に詰め寄った。

「「「言わなくていいです！」」」

その様子をはっはっはっと笑い声で一蹴して、千冬はまた缶ビールを傾ける。

「僕――あの、私は……やさしいところ、です……」

ぽつりとそう言ったのはシャルロットで、声の小ささとは裏腹にそこには真摯な響きがあった。

「ほう。しかしなぁ、あいつは誰にでもやさしいぞ」

「そ、そうですね……。そこがちょっと、悔しいかなぁ」

あははと照れ笑いをしながら、熱くなった頬をぱたぱたと扇ぐシャルロット。なんだかその様子がうらやましいのかくやしいのか、先に言った三名はじーっと押し黙ってシャルロットを見つめた。

「私は……その、初めてひろを見てからで……」

視線を落としもじもじと言うフェイト。

「一目惚れというやつか。でもひろはちょっと冴えない顔だと思うが」

「か、顔じゃありません！　何かこう……不思議なものが全身を駆け巡ったんです」

ニヤニヤと笑う千冬は二本目の缶ビールを開けた。

「で、お前は？」

さっきから一言も発してないラウラに、千冬が話しを振る。どうもそれ自体は警戒してないようで、ラウラはびくっと身をすくませながらも言葉を紡ぎはじめた。

「つ、強いところが、でしょうか……」

「たしかに三年前と比べたら格段に強くなったが、まだ弱いだろ」

何を基準にしてるかわからないが、はっきりと言う千冬に珍しくラウラは食ってかかった。

「つ、強いです。少なくとも、私よりも」

そうかねぇ……と言う千冬は、二本目のビールを飲み干す。

「まあ、強いかは別にしてだ。あいつらは役に立つぞ。家事も料理もなかなかだし、マッサージだってうまい」

そうだろ、オルコット？　と話しを振られたセシリアは、赤い顔をしてうつむくき、うなずく。

「というわけで、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

えっ！？　と全員が顔を上げる。それからおずおずと、声を合わせ

て尋ねた。

『く、くれるんですか？』

「やるかバカ」

ええ～……と心の中で突っ込む女子一同。

「女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」

三本目のビールを口にする千冬は、実に楽しそうな表情でそう言った。

サマーバケーション後編（後書き）

どうも宏明です

臨海学校1日目が終了。次回は箒の専用機が登場します。まあ、原作と同じだから面白みがないと思いますがね。

次回もお楽しみに！

紅い衝撃（前書き）

束「ヤッホー！　私が天才束さんだよ。今回は箒ちゃんがいかに可愛い妹かうーんと説明してあげるね。え？　違う？　にゃはは、ついつい我が妹を自慢しちゃった。ちなみに束さんはしょってなにをすっ――」

突然現れた鬼神織斑先生に束は連れ去られた。

箒「大変見苦しいところをお見せしました。それでは楽しんでいって下さい」

紅い衝撃

合宿二日目。今日は午前中から夜まで丸一日ＩＳの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。特に専用機持ちは大量の装備が待っているから大変だ。

「ようやく全員集まったか。――おい、遅刻者」

「は、はいっ」

千冬さんに呼ばれて身をすくませたのは、意外にもラウラだった。あのラウラが珍しく寝坊したようで、集合時間に五分遅れてやってきたのだ。

「そうだな、ＩＳのコア・ネットワークについて説明してみろ」

「は、はい。ＩＳのコアはそれぞれ相互情報交換のためのデータ通信ネットワークを持っています。これは元々広大な宇宙空間における相互位置情報交換のために設けられたもので、現在はオープン・チャネルとプライベート・チャネルによる操縦者会話など、通信に使われています。それ以外にも『非限定情報共有（シェアリング）』をコア同士が各自に行うことで、様々な情報を自己進化の糧として吸収しているということが近年の研究でわかりました。これらは制作者の篠ノ之博

士が自己発達の一環として無制限展開を許可したため、現在も進化の途中であり、全容は掴めていないとのことです」

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

そう言われて、ふうと息を吐くラウラ。心なしか、胸をなで下ろしているようにも見える。……まあ、ドイツで一緒にいた頃にイヤというほど恐ろしさを味わったのだろう。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたＩＳの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

はーい、と一同が返事をする。さすがに一学年全員がずらりと並んでいるので、かなりの人数だ。ちなみに現在位置はＩＳ試験用のビーチで、四方を切り立った崖に囲まれている。おそらく外部から盗み見されないためだろう。大海原に出るには一度水面下に潜って、水中のトンネルから行くらしい。

ここに搬入されたＩＳと新型装備のテストが今回の合宿の目的。俺や一夏はそれぞれの研究所が作った武器を試すことになっている。

一夏は倉持技研、俺はフェイトと同じテスラ研。さっきちらりと装備が入った箱を見たが、中々興味をそそる物があった。小型ブースター付きモーニングスター（鎖付き鉄球）とかな。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

打鉄の装備を運んでいた箒は、千冬さんに呼ばれてそちらへと向かう。

「お前には今日から専用――」

「ちーちゃ～～～～～ん！！！」

ずどどど……！　と砂煙を上げながら人影が走ってくる。明らかに人間が出せる速度を超えていた。たぶんＩＳっぽい何かをつけてるからだろうけど、問題はその人影が――

「……束」

だということ。立ち入り禁止もなんのその、稀代の天才・篠ノ之束さんは堂々と臨海学校に乱入してきた。

「と、見せかけてひーくんにダーイブ！」

斜面からジャンプして俺に飛びかかってくる。受けとめるか避けるかで一瞬思考し――

「さあ、またハグハグしよう！　愛を確かめ――ぶへっ」

間に割り込んだ千冬さんが片手で束さんを掴む。しかも顔面。思いっきり指が食い込んでいた。まったくもって容赦のない千冬さんだった。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ。もしかして嫉妬？　いやったー！　ついにちーちゃんがデレたぁっ！」

まったくデレてません。なのに拘束から抜け出した束さんはぴょんぴょん飛び跳ね喜ぶ。

「死ね」

どかっと本気の蹴りを食らって浜辺に顔から突っ込む束さん。だけどすぐに立ち上がり箒の方へ向く。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。おっきくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

がんっ！

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったぁ……し、しかも日本刀の鞘で叩いた！　ひどい！　箒ちゃんひどい！」

頭を押さえながら涙目になって訴える束さん。そんなふたりのやりとりを、一同はぽかんとして眺めた。

「おい、束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなぁ。私が天才の束さんだよ、はろー。あ、あとひーくんの現地妻だよ。終わり」

そう言ってくるりんと回ってみせる。ぽかんとしていた一同も、やっとそこでこの目の前の人物がＩＳの開発者にして天才科学者・篠

ノ之束だと気付いたらしく、女子の間がにわかに騒がしくなる。
ていうか、今変なこと言わなかったか？　現地妻とか。

「はぁ……。もう少しまともにできんのか、お前は。そら一年、手が止まっているぞ。こいつのことは無視してテストを続けろ」

「こいつはひどいなぁ、らぶりぃ束さんと呼んでいいよ？」

「うるさい、黙れ」

「それで、頼んでおいたものは……？」

そんな旧知の間柄であるふたりのやりとりに箒が割り込んでややためらいがちに尋ねる。それを聞いて束さんの目がキラーンと光った。

「うっふっふっ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

びしっと直上を指す束さん。その言葉に従ってその場にいる全員が空を見上げる。

ズズーンッ！

「のわっ！？」

いきなり空から金属の塊が砂浜に落下してきて、一夏は驚く。

銀色をしたそれは、次の瞬間正面らしき壁がばたりと倒れて外装は粒子になって消える。その中にあったのは――

「じゃじゃーん！　これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！　全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製ＩＳだよ！」

深紅の装甲に身を包んだその機体は、太陽の光を受けて輝く。

みんなは驚きのあまりぽかんと眺めていた。

「さあ、篠ノ之。はやく乗れ」

「はい」

箒は少し紅椿に見惚れていたが、千冬さんに呼ばれ動く。

「箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めるよ。

私が補佐するからすぐに終わるよん♪」

ぴ、とリモコンのボタンを押す束さん。刹那、紅椿の装甲が割れて、操縦者を受け入れる状態に移る。しかも自動的に膝を落として、乗り込みやすい姿勢にと変わった。

「箒ちゃんのデータはある程度先行して入れてあるから、あとは最新データに更新するだけだね。さて、ぴ、ぽ、ぱ♪」

コンソールを開いて指を滑らす束さん。さらに空中投影のディスプレイを六枚ほど呼び出すと、膨大なデータに目配りしていく。それと同時進行で、同じく六枚呼び出した空中投影のキーボードを叩いていた。

「接近戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思うよ。あとは自動支援装備もつけておいたからね！　お姉ちゃんが！」

「それは、どうも」

相変わらず箒の態度は素っ気ない。

「ん～、ふ、ふ、ふふ～♪　箒ちゃん、また剣の腕前があがったねぇ。筋肉の付き方を見ればわかるよ。やあやあ、お姉ちゃんは鼻が高いなぁ」

「……」

「えへへ、無視されちった。――はい、フィッティング終了～。超速いね。さすが私」

無駄話をしながらも束さんの手は休むことなく動き続けている。それはもうキーボードを打つというよりもピアノを弾いているかのような滑らかかつ素早い動きで、数秒単位で切り替わる画面にも全部しっかりと目を通している。

箒の方を見てみると、『紅椿』は体格を合わせるようにサイズが変わり、箒は今か今かと待ちわびていた。

それにしても――

（この機体も一夏や俺のと同じく接近特化に近いな。腰に左右一本ずつの日本刀型ブレード以外、何も装備がない）

まあ、さっき束さんが『自動支援装備がある』とか『接近戦闘を基礎にした万能型』と言っていたから、おそらくブルー・ティアーズみたいな装備があるかもな。

「よし、終わり。んじゃ、試運転もかねて飛んでみてよ。箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

「ええ。それでは試してみます」

パーソナライズも終わりプシュッ、プシュッ、と音を立てて連結されたケーブルが外れていく。それから箒がまぶたを閉じて意識を集中させる。

ＰＩＣにより浮かび、紅椿はもの凄い速度で飛翔した。２００メートルほど上空で滑空する紅椿をダイゼンガーのハイパーセンサーで捉えた。

「どうどう？　箒ちゃんが思った以上に動くでしょ？」

「え、ええ、まあ……」

束さんもＩＳを装備してるのだろうか、オープン・チャネルでの会話がこちらにも飛び込んでくる。

「じゃあ刀使ってみてよー。右のが『雨月（あまづき）』で左のが『空裂（からわれ）』ね。武器特性のデータ送るよん」

そう言って空中に指を踊らせる束さん。武器データを受け取った箒は、しゅらんと二本同時に抜刀した。

「親切丁寧な束おねーちゃんの解説つき～♪　雨月は対単一仕様の武装で打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を放出、連続して敵を蜂の巣にする武器だよ～。射程距離は、まあアサルトライフルくらいだね。スナイパーライフルの間合いでは届かないけど、紅椿の機動性なら大丈夫」

束さんの解説に合わせてかはわからないが、箒は試しとばかり突きを放つ。

周囲の空間に赤色のレーザー光がいくつもの球体として現れ、そして順番に光の弾丸となって漂っていた雲を穴だらけにした。速度は俺の電光石火の方が速いな。

「次は空裂ねー。こっちは対集団仕様の武器だよん。斬撃に合わせて帯状の攻性エネルギーをぶつけるんだよー。振った範囲に自動で展開するから超便利。そいじゃこれ打ち落としてみてね、ほいーっと」

言うなり、束さんはいきなり１６連装ミサイルを呼び出す。光の粒子が集まって形を成すと、次の瞬間一斉射撃を行った。

「――やれる！　この紅椿なら！」

その言葉通り、右脇下に構えた空裂を一回転するように振るう箒。

また赤いレーザーが、今度は帯状になって広がり、１６発のミサイルを撃墜した。

「すげぇ……」

一夏は爆煙を眺めながらポツリと嘆息。その視線の先にいる真紅のＩＳと箒は威風堂々たる姿をしていた。全員がその圧倒的な性能に驚愕し、そして魅力され、言葉を失う。そんな光景を、束さんは満足そうに眺めてうなずいた。

「……」

けれど、その束さんを千冬さんは敵を見るかのように睨んでいる。

「たっ、た、大変です！　お、おお、織斑先生っ！」

走ってくる山田先に、千冬さんは鋭い視線をやめて向き直す。いつも慌てている山田先生だが、それにしても今回は尋常じゃない。

「どうした？」

「こ、こっ、これをっ！」

渡された小型端末の画面を見て千冬さんの表情が曇る。

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……専用機持ちは？」

「ひ、ひとり欠席していますが、それ以外は」

どうやら何か起きたらしい。他の生徒たちに聞かれないよう手話でやりとりをはじめた。

「そ、そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますのでっ」

「了解した。――全員、注目！」

山田先生が走り去った後、千冬さんはパンパンと手を叩いて生徒全員を振り向かせる。

「現時刻よりＩＳ学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ＩＳを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内で待機すること。以上だ！」

不測の事態に、女子一同はざわざわと騒ぐ。しかしそれを、千冬さ

んの声が一喝した。

「とっとと戻れ！　以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束する！　いいな！！」

「「「はっ、はいっ！」」」

全員が慌てて動きはじめる。素早くテスト装備を解除、ＩＳを起動終了させてカートに乗せる。その姿は今までに見たことない怒号に怯えているかのようでもあった。

「専用機持ちは全員集合しろ！　西本、織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰、テスタロッサ！　――それと、篠ノ之も来い」

「はい！」

妙に気合いの入った返事をしたのは、一夏の隣に降りてきた箒。その顔はまるで欲しかった玩具を手に入れたばかりの子供に似ていた。

★

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間では、俺たち専用機持ち全員と教師陣が集められた。

照明を落とした薄暗い室内に、ぼうっと大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

いきなりの説明に一夏はぽかんと面食らっていた。まあ、こういうのは初めてだからな。仕方ない。俺は前に似た雰囲気を味わっているから平気だ。そのことについては今度暇な時にな。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして５０分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

淡々と続ける千冬さん。その次の言葉は思ってもみないものだった。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

暴走した軍用ＩＳを俺たちで止めろということか。いくら第三世代型に訓練機で対処は難しいといっても、俺と一夏と箒以外は国専属だぞ？
いったい何を考えているんだ。

「それでは作戦会議をはじめる。意見があるものは挙手するように」

「はい」

早速、手を挙げたのはセシリアだった。

「目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二ヶ国の最重要軍事機密だ。けして口外するな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

セシリアをはじめ代表候補生の面々と教師陣は開示されたデータを元に相談をはじめる。

「なあ、ひろ」

「なんだ？」

未だ混乱している一夏が話かけてきた。

「俺たちはみんなの話に入らなくていいのか？」

俺と一夏と箒はただ代表候補生たちと教師陣の話を聞いているだけだ。

「あの中に入ってお前はついていけるのか？　俺たちはど素人だ。福音のデータを見て、どう戦うか考えていろ」

少し冷たい言い方になったが、納得した一夏は視線を福音のデータに戻す。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのＩＳと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですわね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「そうだね。私のヴァルシオーネも同じ攻撃と機動特化だけど、広域殲滅での火力は向こうが上だ」

「この特殊武装が曲者だね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」

セシリア、鈴、フェイト、シャル、ラウラは真剣に意見を交わしている。さすがに俺でも面制圧に長けた相手と戦うのは難しいな。

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速２５０キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス……ということはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に、俺も含め全員が一夏を見た。

「え……？」

「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は――」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるＩＳでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちょっ、ちょっと待ってくれ！　お、俺が行くのか！？」

「「「「当然」」」」

鈴、セシリア、シャル、ラウラの声が重なった。

一夏の目は迷いを帯びている。無理もない。初めての実戦だ。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし、覚悟がないなら、無理強いはしない」

千冬さんがそう言うと、一夏の目に決意の光が灯った。

「やります。俺が、やってみせます」

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

その問に手を挙げたのはセシリアとフェイト。

「わたくしのブルー・ティアーズなら、ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られて来てますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

「私のヴァルシオーネは元から超高機動戦が可能なので調整すればすぐにでも出れます」

ほとんどのＩＳには『パッケージ』と呼ばれる換装装備を持っている。パッケージとは単純な武器だけではなく、追加アーマーや増設スラスターなど装備一式を指し、その種類は豊富で多岐にわたる。中には専用機だけの機能特化専用パッケージ『オートクチュール』というものが存在するらしい。

これを装備することで機体の性能と性質を大幅に変更し、様々な作戦が遂行可能になるというものだ。

ちなみに、俺の相棒『ダイゼンガー』はパッケージを換装出来ない

らしい。なんでも拠点防衛用だったんだとさ。

「テスタロッサ、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「１０時間です」

「オルコットは？」

「２０時間ですわ」

「ふむ……。オルコットのほうが適任――」

だな、と言おうとした千冬さんを、いきなり底抜けに明るい声が遮る。

「待った待ったー。その作戦はちょっと待ったなんだよ～！」

しかも、声の発生源は天井からだ。全員が見上げると、部屋のど真ん中の天井から束さんの首がさかさに生えていた。

「とうっ★」

くるりんと空中で一回転して着地。普段運動をあまりやらない人なのに相変わらずでたらめだよな、この人は……。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！」

「……出ていけ」

頭を押さえて面倒臭そうにつぶやく千冬さん。

「聞いて聞いて！　ここは断・然！　紅椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

「紅椿のスペックデータ見てみて！　パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ！　そこの白金髪のよりも速いしね！」

束さんの言葉に応えるように数枚のディスプレイが千冬さんを囲むように現れた。

白金髪と指をさされたフェイトは束さんを睨んでいる。自分の相棒をバカにされて怒っているな。

「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいっと。ホラ！　これでスピードはばっちり！」

展開装甲……？　ユニコーンガンダムみたいに開いたりするのだろうか。

俺と同じく一夏も首をひねっていると、束さんが千冬さんの隣に立って説明をはじめた。しかも、メインディスプレイも乗っ取ったらしく、先ほどまで福音のスペックデータを映していた画面は、今はもう紅椿のスペックデータへと切り替わっている。

「説明しましょ～そうしましょ～。展開装甲というのはだね、この天才の束さんが作った第四世代型ＩＳの装備なんだよー」

第四……未だ世界では第三世代型の試作機ができた段階で、さらにその上をいくものが出たか。

「はーい、ここで心優しい束さんの解説開始～。ひーくんといっくんのためにね。へへん、嬉しいかい？　まず、第一世代というのは『ＩＳの完成』を目指した機体だね。次が『後付武装による多様化』――これが第二世代。そして第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』空間圧作用兵器にＢＴ兵器、あとはＡＩＣとか色々だね。……で、第四世代というのが『パッケージ換装を必要としない万能機』という、現在絶賛机上の空論のもの。あ、白金髪のＩＳが最も第四世代に近い準第四世代だからもう空論でもなくなるかな？　どう、ひーくん。とってもわかりや

すかったよね。頭撫でてー」

「あーうん、すごいねー。さっすが束さん」

棒読みしつつ、頭を擦りつけにきた束さんの頭を撫でると気持ちよさそうに目を細めた。

「具体的には白式の『雪片弐型』とダイゼンガーの脚部に使用されてまーす。試しに私が突っ込んだ～」

「「「「えっ！？」」」」

この言葉には専用機持ちも驚いていた。零落白夜発動時に開く雪片弐型はなんとなく予想はついていたが、まさかダイゼンガーの脚部までとは。……ああ、だからたまに開いて速さが上がっていたのか。

「それで、うまくいったのでなんとなんと紅椿は全身のアーマーを展開装甲にしてありまーす。システム最大稼働時にはスペックデータはさらに倍プッシュだ★」

つまり、一言でいうと最強だということ。

千冬さん以外全員がぽかんとしている。いったい何十年先に進めば気がすむんだ？

「ちなみにダイゼンガーの脚部はプロトタイプで、紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから攻撃、防御、機動と用途に応じて切り替えが可能。これぞ第四世代型の目標である即時万能対応機ってやつだね。にゃはは、私が早くも作っちゃったよ。ぶいぶぃ」

しーん。場の一同は静まりかえって言葉もない。

まあ無理もないか。各国が多額の資金、膨大な時間、優秀な人材の全てをつぎ込んで競っている第三世代型ＩＳの開発。

それを無意味だと嘲笑っているのだから。

「――束、言ったはずだぞ。やりすぎるな、と」

「そうだっけ？　えへへ、ついつい熱中しちゃったんだよ～」

千冬さんに言われてやっと、束さんは俺たちが黙り込んでいる理由を理解したようだ。

「それにしてもアレだね～。海で暴走っていうと、十年前の白騎士事件を思い出すねー」

でもそんなの関係ねぇって感じでニコニコ笑いながら話し出す束さん。その横では、千冬さんが『しまった』という顔をしていた。

『白騎士事件』――。

これを知らない人間は世界にいないだろう。

十年前束さんが発表したＩＳは、当初その成果は認められなかった。

『現行兵器全てを凌駕する』という束さんの言を、誰も信じてはいなかったのだ。

それは同時に信じるわけにはいかなかったということでもある。

ＩＳ発表から１ヶ月後、事件は起きた。

日本を攻撃可能な各国のミサイル２３４１発。それらが一斉にハッキングされ、制御不能に陥り――発射された。

誰もが混乱と絶望のまっただ中にいた。そこへ颯爽と現れたのが、白銀のＩＳを纏った一人の女性。

顔は初期バイザー型ハイパーセンサーで隠れてわからず、中世の騎士を思わせる出で立ちをしていた。

その後の展開に世界中の人間は度肝を抜かれる。

彼女はなんと、ミサイルの約半数１２２１発をその手に持った大剣で『ぶった斬った』のだ。

さらに距離的に離れているものに対しては、当時試作型だった大型荷電粒子砲をいきなり空中に召喚して撃ち落とした。

超音速による格闘能力。大質量の物質を粒子から構成する能力。さらにビーム兵器の実用化。これらのどれをとっても、匹敵する現行兵器は存在しなかった。

しかし世界はその脅威に対して、無謀にも攻撃を仕掛ける。

結果は惨敗。ＩＳは戦闘機が出来ない旋回を軽々と行い、そして全ての戦闘機のパイロットを殺さずに撃墜した。

それでも躍起になって部隊を投入する各国だったが、白騎士は日没とともに忽然と姿を消す。レーダーでも捉えられず、目視でも確認できない完璧なステルス能力。

たった一機でミサイル２３４１発、戦闘機２７機、巡洋艦７隻、空母５隻、監視衛星８基を撃破あるいは無力化した『究極の機動兵器』としてＩＳは世界中の人々が知るところとなった。

「しかし、それにしても～ウフフフ。白騎士ってだれだろうねー？ね？　ね、ちーちゃん？」

「知らん」

……まあ、普通に考えて千冬さんが白騎士だよな。たぶん。

だけど千冬さんが現役時代に使っていたＩＳは白騎士ではなかった。なら、白騎士はどうなったんだ？　意外にも白式のコアになってたりして。

……やめとこう。世の中には知らなくていいこともある。

「話を戻すぞ。……束、紅椿の調整にはどれくらいの時間がかかる？」

「七分もあれば余裕だね★」

「よし。では本作戦では織斑・篠ノ之の両名による目標の追跡及び撃墜を目的とする。作戦開始は３０分後。各員、ただちに準備にかかれ」

ぱん、と千冬さんが手を叩く。それを皮切りに教師陣はバックアップに必要な機材の設営をはじめた。

紅い衝撃（後書き）

どうも宏明です

箒「篠ノ之箒だ」

遂に箒の紅椿登場。そして事件発生しました。

箒「うむ、私と一夏ならあの程度簡単に仕留められる」

何かテンションが高いね。激しく不安だ。

箒「姉さんは相変わらず唯我独尊な人だったな。それにひろに沢山甘えていた」

ちなみにラバーズ達がそのことについて騒がなかったのは、単に束と紅椿に驚いていたからです。今回はみんな驚いてばっかだった。

箒「次回は私と一夏が活躍するのだな。そして一夏は私に惚れるだろう」

箒さんがトリップしてしまった。

放っておきましょう。

今回は以外と文字数かかったので次回こそアイツが出る。え？　誰かって？　それは次回のお楽しみですよ。

まあ、予測ついてる人もいると思いますが……。

それでは、次回もお楽しみ！

忌むべき訪問者（前書き）

サブタイトルの元ネタはスパロボで有名な敵増援時のＢＧＭから。
今回と次回の戦闘シーンはあるＢＧＭを脳内再生しながら読むと雰囲気出ます。

忌むべき訪問者

☆

時刻は１１時半。

７月の空はこれでもかとばかりに晴れ渡り、容赦のない陽光が降り注いでいる。

準備を終わらせた俺と箒は砂浜でわずかに距離を置いて並び立ち、一度目を合わせてうなずいた。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

全身がぱぁっと光に包まれ、ＩＳアーマーが構成される。それと同時にＰＩＣによる浮遊感、パワーアシストによる力の充満感とで全身の感覚が変化した。

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

作戦の性質上、移動の全てを箒に任せるので、つまりは俺が背中に乗っかる形になるのだ。

それを聞いた箒は早速イヤそうなことを言っていたが、気のせいだろうかさっきから機嫌は妙にいい。

（大丈夫なんだろうか……？）

箒の専用機は、使いはじめてまだ1日も経っていない。いくら束さんがパーソナライズとフィッティングをしたといっても、操縦者の方はそうもいかない。

（何かあったら俺がフォローしないとな）

そう思い、気を引き締める。

「それにしても、たまたま私たちがいたことが幸いしたな。私と一夏が力を合わせればできないことなどない。そうだろう？」

「ああ、そうだな。でも箒、先生たちも言っていたけどこれは訓練じゃないんだ。実戦では何が起きるかわからない。十分に注意をして――」

「無論、わかっているさ。ふふ、どうした？　怖いのか？」

「そうじゃねえって。あのな、箒――」

「ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいいさ」

「……」

とにかく、さっきからこの調子だ。専用機が手に入って嬉しいのはわかるけど、浮かれすぎではないだろうか。どうにもすっきりとしない不安をかかえたまま、俺は箒の操る紅椿の背中へと乗った。

『織斑、篠ノ之、聞こえるか？』

ＩＳのオープン・チャネルから千冬姉の声が聞こえる。俺と箒はうなずいて返事をした。

『今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がけろ』

「了解」

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」

『そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使いはじめてからの実戦経験は皆無だ。突然、なにかしらの問題が出るとも限らない』

「わかりました。できる範囲で支援します」

箒のそれは一見落ち着いた返事のようだがやはり口調は喜色に弾んでいて、どこか浮ついた印象を受けてしまう。

そういや昔見た映画に似たような場面があったな。たしか『この戦いが終わったら彼女にプロポーズするんだ』ってやつ。ちなみにその男は真っ先に敵にやられて死んだ。

やべえな。箒は何か『死亡フラグ』を立てやすい気がする……。

『――織斑』

「は、はい」

今し方まで使っていたオープン・チャネルではなく、プライベート・チャネルで千冬姉の声が届く。俺は慌ててそちらの回線に切り替え

て、返事をした。

『どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態ではなにかをし損じるやもしれん。いざというときはサポートしてやれ』

「わかりました。ちゃんと意識しておきます」

『頼むぞ』

それからまた千冬姉の声がオープン・チャネルに切り替わり、号令をかけた。

『では、はじめ！』

――作戦、開始。

箒は俺を背に乗せたまま、一気に上空３００メートルまで飛翔した。

★

「凄い。瞬時加速の比じゃないね」

「ああ、凄まじい速さだ」

作戦が開始されてモニターを見ていた俺たちは紅椿の性能に驚いていた。

一夏を乗せているにもかかわらず、ものの数秒で目標高度５００メートルに達する。

「紅椿、福音に接触まであと３０秒」

山田先生の声と同時にＩＳのハイパーセンサーから送られてきた視覚情報が目標を映し出す。

『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』はその名にふさわしく全身が銀色をしている。

そして何より異質なのが、頭部から生えた一対の巨大な翼。本体同様銀色に輝くそれは、資料によると大型スラスターと広域射撃武器を融合させた新型システムだそうだ。

（資料にあった多方向同時射撃ってどんな攻撃なんだ？）

――考えている間に箒はスラスターと展開装甲の出力を上げてさらに加速。

一夏が零落白夜を発動させるのと同時に瞬時加速で間合いを一気に

詰める。

「……一夏」

千冬さんがぼそりとつぶやき光の刃が銀の福音に触れる、その瞬間。

『なっ！？』

福音は、最高速度のまま反転、後退の姿となって身構えた。
そして零落白夜の刃をわずか数ミリの精度でかわす。

「なんて操縦技術だ。暴走状態でこれほどの動きをするとは……」

最初で最後の奇襲が失敗に終わった。その後も一夏は何とか零落白夜を当てようとするが、ひらりと紙一重に回避されてしまう。
どんどん白式のエネルギー残量が減っていき、焦りからか一夏の攻撃が大振りになる。
その隙を福音は見逃さなかった。

銀色の翼。スラスターでもあるそれの、装甲の一部が翼を広げるように開く。

（こいつは――）

砲口、だ。

一斉に開いた砲口から幾重もの光の弾丸が撃ち出された。その弾丸は、高密度に圧縮されたエネルギーで、羽のような形をしている。それが白式の装甲に突き刺さり、次の瞬間には一斉に爆ぜた。

爆発するエネルギー弾丸。それが福音の主装備らしい。

「なんて連射速度よ……！」

鈴だけじゃない。みんな福音の桁外れな機動と弾丸の数、そして連射速度に戦慄した。

「お、織斑先生！」

「どうした、山田先生？」

海域を封鎖していた教師陣からの通信に山田先生の顔色は真っ青になっている。

「織斑くんと篠ノ之さんが戦っている海域にアンノウンが侵入したそうです。教員のＩＳ隊は全滅、そのまま織斑くんたちのところへ向かっています」

「こんな時に……。すぐにアンノウンの映像を映せ！」

「は、はいっ！」

モニターの半分が新たに起きた問題を映す。

「あ、ＩＳ……なのか……？」

それは赤いロボットに見える。

全身は赤いアーマーに包まれ、鋭利な形状をしていた。大きさは約３メートル。右手にはナイフに近い大剣を握り、背中の大きなスラスターで飛んで４つの目が恐怖心を煽るように鈍く輝く。

「そ、そんな……。何でアレが、ここに」

フェイトは顔を真っ青にして震えていた。

「大丈夫か？　フェイト」

「う……ん。ありがとう」

手を握ってあげると、フェイトの震えが治まった。何か周りの視線がチクチクと痛むけど気のせいだろう。

「テスタロッサはこのＩＳを知ってるのか？」

「はい……」

フェイトはＩＳの右腕を部分展開し、コードを繋ぐ。
そしてモニターにあのＩＳのスペックデータが映し出される。

「アレはテスラ・ライヒ研究所で作られた決戦用ＩＳ『ヴァルシオン』ヴァルシオーネの姉妹機です」

ヴァルシオンのスペックはかなり凶悪だった。

「全身を装甲で覆い防御力は従来のＩＳを遥かに上回ります。ＩＳの特徴でもあるスピードを殺して圧倒的な防御力と破壊力を持ち、さらに自身を特殊なエネルギーフィールドで包み込んでいるから生半可な攻撃は意味をなさない」

データによるとそれは『歪曲フィールド』
機体周辺に発生させた均質化力場によって、球状フィールド外縁を通過しようとする運動エネルギーを歪曲し、境界面に沿って張力拡

散させる。電磁波も波そのものを喪失するため、ビーム・実体弾問わず、あらゆる攻撃を無効化させるらしい。
ラウラのＡＩＣより強力だ。

「これはちょっと怖い感じがするね」

再び相談する代表候補生たち。シャルがポツリとつぶやく。

「そう思うのは当然かな。テスラ研の開発コンセプトは『知的生命体に視覚的恐怖心を与え、戦場を単機でひっくり返すほどの一騎当千な力』だから」

「遅いのがせめての救いか……」

一夏たちの戦いもそろそろ決着がつこうとしている。しかもそこにヴァルシオンが向かっているとなると、かなりまずいな。

「織斑先生」

「なんだ？　西本」

俺を見る千冬さんはいつもより怖い表情をしていた。一夏のことが相当心配なんだろう。

「俺を一夏と箒の救援に向かわせて下さい」

「……」

一夏たちが成功しようが失敗しようが、エネルギーの消耗した二人ではヴァルシオンから逃げるのは無理だ。

「千冬さん！」

「……織斑先生だ、馬鹿者。この中で一番攻撃力と防御力があるのはダブルGか。よかろう、許可する」

「あの！　私も行っていいですか？　ヴァルシオーネならダブルGを速く運べます」

「そうだな。ただし、織斑たちを回収次第速やかに撤退しろ」

「「はい！」」

許可は下りた。部屋から出ようとしたらみんなに引き止められる。

「ひろ、ちゃんと帰って来なさいよ」

「わたくしもご一緒できないのは心苦しいですがお気をつけて」

「無理はしないでね」

「私たちも必ず援護に向かう」

鈴、セシリア、シャル、ラウラ……。みんな、ありがとうな。

「行ってくる」

頼もしい仲間たちから激励をもらい俺とフェイトは外へ走る。

「ゆくぞ！　ダイゼンガー！」

「いくよ、ヴァルシオーネ！」

砂浜に出て、俺は紺色のＩＳアーマーを纏う。隣ではフェイトが純白のＩＳアーマーを纏い飛んだ。

☆

「くそっ……！　なんて強さだ」

俺たちが銀の福音と接触して数分。初撃を回避され、何度も斬りかかったが、ひらりひらりと紙一重に回避されてしまう。

「Ｌａ……♪」

高いマシンボイス。また避けられて福音は翼から光弾を放つ。

連射速度は速いけど狙いはそれほど高い精度ではないのでかわすことは出来た。

だけどあれは爆発弾だ。わずかでも触れれば、そこを爆発でえぐられる。

「箒、左右から同時に攻めるぞ。左は頼んだ！」

「了解した！」

俺と箒は複雑な回避運動を行いながらも連射の手を休めない福音へと、二面攻撃を仕掛ける。

――けれど、俺と箒の攻撃はかすりもしない。福音はとにかく回避に特化した動きで、その上同時に反撃までしてくる。この特殊型ウイングスラスターは、その奇抜な外見とは裏腹に実用レベルが異常に高い代物だった。

「一夏！　私が動きを止める！！」

「わかった！」

言うなり、箒は二刀流で突撃と斬撃を交互に繰り出す。しかも、腕部展開装甲が開き、そこから発生したエネルギー刃が攻撃に合わせて自動で射出、福音を狙う。

（こっちの機体も化け物だな……！）

さらに箒は紅椿の機動力と展開装甲による自在の方向転換、急加速を使って福音との間合いを詰めていく。この猛攻には、さすがの福音も防御を使いはじめた。

「はあああっ！！」

――攻撃性高エネルギーを感知。

「！？」

いけると思った瞬間、白式が何かを感知した。攻撃性高エネルギー？

福音が全面反撃をしようと砲門を全て開いたが、福音も高エネルギーを感知したらしく攻撃を中止した。

「その隙、もらったぁっ！」

「箒止まれ！！」

「なにっ？」

迫撃をしようとした箒は急停止したが、腕部展開装甲はまた自動で射出されて福音へ向かう。

――その刹那、ビットが赤と青のビームに貫かれて爆発する。

「な、なんだ！？　今のドリルみたいなビームは！」

ビームが来た方向へ向くと、そこには巨大なＩＳ？　がいた。赤い全身装甲なので、５月のクラス対抗戦に現れた深い灰色の奴と同類

かと思った。だけどその認識はすぐに破られることになった。

「目標……捕捉。攻撃開始……」

巨大ＩＳから少女の声が聞こえた。しかも俺たちより幼い。

巨大ＩＳは背中の大型スラスターを吹かし、巨体にしては速い突撃を福音へする。

「Ｌａ……♪」

福音はヘビー級タックルを余裕でかわし、全砲門を巨大ＩＳに向けて開く。その数、３６。

「……」

一斉に放たれた光弾が巨大ＩＳに命中。しかし、ダメージは皆無だった。

（一体何なんだ？　あいつは。味方……なのか？）

片や機動が化け物じみた奴、片や防御と力が化け物じみた奴。全く真逆なＩＳの戦いを俺たちは眺めていたが、巨大ＩＳはこちらにも

攻撃をしてきたので回避。どうやら味方ではないらしい。

「なっ！？」

ここは後退するべきだと判断し、実行しようとする。だけど俺は見つけてしまった。

福音の後方に船が一隻。

巨大ＩＳが左腕からあのドリルビームを福音に撃とうしている。福音は間違いなく避けるだろう。

「一夏！？」

「うおおおっ！！」

だから俺は福音の後ろへ全速力で向かった。福音は予測通り右へと大きく旋回。

瞬時加速と零落白夜。その両方を最大出力で行い、正面からくるドリルビームに雪片弐型を振り下ろす。

（ぐっ！？　なんて力だよ！　消し切れない！）

ドリルビームを左側へ逸らしてなんとか凌いだ。

「何をしている！？　死ぬ気か！」

箒の怒りはもっともだ。けどな――

「船がいるんだよ！　海上は先生たちが封鎖したはずなのに――あくそっ、密漁船か！」

見殺しにはできねえよ。

キュゥゥゥン……。

俺の手の中で、『雪片弐型』の光の刃が消え、展開装甲が閉じる。

……エネルギー切れ、だった。

「馬鹿者！　犯罪者などかばって……。そんなやつらは――！」

「箒！！」

「ッ――！？」

「箒、そんな――そんな寂しいことは言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱いヤツのことが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ」

「わ、私、は……」

明らかな動揺をその顔に浮かべ、それを隠すかのように手で覆う。その時に落とした刀が空中で光の粒子へと消えたのを見て、俺はぎくりとした。

（今のは、具現維持限界だ……！　まずい――！！）

具現維持限界（リミット・ダウン）――つまりそれは、エネルギー切れということだ。そして今は、ＩＳ学園のアリーナではない。実戦だ。

「箒ぃぃぃっ！！」

俺は刀を捨てて一直線に箒へ向かう。最後のエネルギー全てを使っての瞬時加速。

（頼む！　間に合ってくれ！！）

視線の先では福音が巨大ＩＳを飛び越え一斉射撃モードへと入って

いた。しかも箒に照準を絞っている。まずは弱体化した箒を狙うようだ。

エネルギー切れのＩＳアーマーは恐ろしく脆い。それは第四世代型とはいえ変わりないはずだ。絶対防御分のエネルギーは確保していても、あの連射攻撃を一度に受けたらひとたまりもない。

（頼む！　頼む！　白式！　頼むっ！！）

スローモーションの世界で、俺は、光弾が放たれるのを確実に視界で捉え、そして次の瞬間に福音と箒の間に割って入った。

「ぐあああああっ！！」

箒をかばうように抱きしめた瞬間、あの爆発光弾が一斉に背中に降り注いだ。

エネルギーシールドで相殺し切れないほどの衝撃が何十発と続き、みしみしと骨があげる軋みが聞こえる。同様に悲鳴をあげる筋肉、アーマーが破壊され、熱波で肌が焼けていく。

気が狂いそうなほどの激痛が続く中で、俺は一度だけ箒を見た。

（ああ……無事か……。よかった……はは、何を泣きそうな顔をしてるんだよ……らしくねえよなあ。あ、リボン焼き切られちまってるな……。ふーん、髪を下ろしたのも悪くねえじゃん……）

「一夏っ、一夏っ、一夏ぁっ！！」

「ぅ……ぁ……」

ぐらりと世界が傾く。――ああ、違うのか。傾いているのは俺か。

海へと真っ逆さま。そんな中、俺は最後の力を振り絞って箒の頭を守るように抱きしめる。

大きな水音と全身を伝播する衝撃。俺は海面越しに福音と巨大ＩＳを見つめて気を失った。

★

「なぁフェイト」

「何？」

フェイトに手を引っ張られながら一夏たちのところへ飛んで行く道中、気になっていたことをきいた。

「ヴァルシオンはいつ盗まれたんだ？」

フェイトの表情が苦虫を潰したようになる。やっぱこの質問はやめ

とくべきだったか。

「悪い。嫌なこと思い出させた」

「ううん、大丈夫。ひろにはいつか話そうと思ってたんだ」

空を見つめながらフェイトは語り出す。

「ヴァルシオンが盗まれたのは私がＩＳ学園に入学する一週間前。そしてその日にヴァルシオーネは完成したんだ」

手を握る力が少し強くなる。

「幸い、コアはヴァルシオーネのだけだったから良かったけど、盗まれた機体を取り返そうとした私がヴァルシオーネの性能を引き出せなかったから……初陣でこの子は酷いダメージを負ってしまった」

それで最初は専用機がなかったのか。

「あ、でもひろがそれより前に盗まれたダブルＧを動かしてくれたからヴァルシオーネは前よりも動かしやすくなったんだ」

ちなみにダイゼンガーを盗んだのは束さんらしい。よく返品しろと要求されなかったな。

「ダブルGは誰にも動かせなかったからね。研究所のみんな喜んでたよ」

「そいつはよかった」

まるで死地に向かう兵士のような顔をしていたフェイトは、いつも通りの優しいものになっていた。

『西本』

そこへ千冬さんから通信が入る。

「一夏たちに何かあったんですか？」

『……ああ。ヴァルシオンが突如乱入、不幸にも密漁船がいたせいで一夏は船を庇いエネルギー切れを起こし、同じくエネルギー切れをした紅椿を福音の攻撃から庇って一夏は墜ちた』

今福音とヴァルシオンが戦ってるのをハイパーセンサーで捉えた。怒りで我を忘れそうになったが、何とか冷静さを保つ。

「今、福音とヴァルシオンを確認しました。これより二機と戦い一夏たちを助ける時間を稼ぐ」

『……死ぬなよ、ひろ』

通信を終わらせ獅子王をコール。
自然といつもより強く握っていた。

「フェイト、一夏と箒を頼んだぜ」

「任せて、すぐに助けるから。ひろこそ無茶しないでね？」

軽くうなずき繋いでいた手を離す。

脚部装甲が展開し、二機の下へ加速した。

忌むべき訪問者（後書き）

どうも宏明です

ひ「西本宏範だ」

やっと福音戦に突入。一夏が墜ちました。

ひ「そうだな。あいつらは必ずぶった斬る」

そしてひろの相手は究極ロボことヴァルシオン！　しかも赤なので強いよ。

ひ「斬艦刀でぶった斬るさ」

まあ、ひろも甘い男だからね。どうなるかはお楽しみに。

ひ「俺とダイゼンガーに斬れないものはない！」

さっきから斬るしか言ってないか？

ひ「大丈夫だ、問題ない」

駄目だこいつ早く何とかしないと……。

それでは次回また会いましょう。

武神墜ちる

福音がヴァルシオンに光弾を撃ち込む。しかし、紫色の歪曲フィールドが全てを防いだ。

「……新たな対象を確認……」

ヴァルシオンはゆっくりとした動作でこちらに向く。右手の剣を胸元まで上げて右薙に振るうと赤い衝撃波が刃状になって飛んできた。

上昇してかわし瞬時加速でヴァルシオンとの距離を詰める。

「電光石火ぁ！」

瞬時加速込みの刺突。だがこれも歪曲フィールドに阻まれ弾かれた。

「くそ、やはり硬いな」

「Ｌａ……♪」

後ろからは福音が光弾を撃ってくるので左へ急加速してかわす。

「まずはここから離すか」

獅子王をククリ刀に変えて福音へ投擲。ひらりと避けられた。

少し北方向へ移動する。ヴァルシオンと福音はうまく釣れたらしい。

「……クロスマッシャー……発射」

「敵の敵は味方ってわけか……」

螺旋を描きながら襲いくる赤と青のビーム『クロスマッシャー』を下へかわすとそこに福音が待ってましたと言わんばかりに光弾を撃ってきた。

絶対防御が発生してしまう場所に食らわないよう獅子王を斬艦刀モードにして防ぐ。防ぎきれなかったものは肩や脚に当たりエネルギーが減る。

ヴァルシオンが肉薄してきて右手の『ディバインアーム』を振り下ろす。獅子王で受け止めると、耳障りな金属音とともに空気が震えた。

「くっ……！」

パワーはあちらが上か。しかもつばぜり合いをしてると福音がヴァルシオンごと狙ってくるので悠長に張り合っている時間はない。わ

ざと押し負けて後退し、俺は獅子王を腰に添え、居合いの構えをとる。

「使わせてもらうぜ、千冬さん、一夏」

瞬時加速を使いヴァルシオンへ突っ込む。

「……迎撃」

それに対してヴァルシオンはミサイルを撃ってきた。

「はあっ！！」

迫りくるミサイルを獅子王の横一閃で斬り払う。

目の前にたどり着きすぐさま上段に構えて振り下ろすわけだが、ヴァルシオンの歪曲フィールドは強固だ。

おそらく今の俺では断つことはできないだろう。だから俺はヴァルシオンの数センチ前に獅子王を振り下ろした。

「――！？」

大きな水柱が上がり、俺はそれに紛れて空高く翔ぶ。

「……目標、ロスト」

一瞬で１０００メートルくらい上昇し、もう一度上段に構えながら福音に向かう。

「――！」

こちらに気付いた福音は左へ避けようとするが俺の方が速い。

――斬！

福音の急加速は予想以上に速く、右翼を両断するだけに終わる。それでも効果はあったらしく福音はバランスを崩して海へと墜落した。

急停止をかけて何とか海にダイブすることはなかったが、着水の音でヴァルシオンに見付かってしまう。

「……クロスマッシャー」

機械的な喋り声のあとにクロスマッシャーが迫る。

福音の光弾を避ける時やさっきの一撃で瞬時加速を多用したらしい。
エネルギーは半分を下回っていた。

「くっ……」

紙一重で避けたが、余波に焼かれてダメージを負う。

「捕獲対象を織斑一夏に変更……」

突然回れ右をしたヴァルシオン。その先には海から引き上げられた箒と一夏がいる。

二人を抱えるフェイトは重症を負った一夏を気遣って急加速はできない。

「やらせるかあぁぁぁぁっ！！」

残り少ないエネルギーを使い瞬時加速でヴァルシオンを追い抜く。

「クロスマッシャー……発射」

俺を倒すためにわざと一夏を狙う。

「うおおおおっ！！」

一夏たちの盾になるように立ち、斬艦刀でクロスマッシャーを受け止める。

もの凄い力に押されながらも必死に踏ん張った。

『フェイト！　はやく離脱しろ！』

『で、でも……』

『心配すんな。すぐに俺も逃げるから』

『……わかった。待ってるからね』

『ああ、一夏と箒を頼む……』

プライベート・チャネルを閉じてクロスマッシャーを受け止め続ける。

その間にフェイトは戦闘空域から離脱。クロスマッシャーの砲射もようやく終わった。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

エネルギーは雀の涙くらい、装甲はボロボロ、だけど斬艦刀だけは無傷だった。

さすが束さんお手製ってところか。

「俺がいる限り、あいつらはやらせん。この剣は全てを断つものであり、守るためのものだからな！」

と、言ったものの、斬艦刀を振るう力がもうないので刀モードに戻して正眼に構える。

「……攻撃……イヤ……捕、獲……タタカイタクナイ……破……壊。タスケテ、姉……様」

ん？　ヴァルシオンの様子がおかしい。機械的な声と弱々しい声が交互に出て、首をいやいやと振っていた。

まるで何かに抵抗するように。そして、助けを求める声。

逃げるという選択肢はすでに消えていた。

「あああああぁぁぁぁぁっ！！！」

ヴァルシオンの操縦者の悲痛な叫び。

「うおおおおっ」

俺はヴァルシオンに向かって飛んでいた。やっぱり俺は甘い男らしい。

「マモル。マモルマモルマモル！」

海面から俺を阻むように現れたのは福音。両手を大きく広げ、左翼の砲口を向ける。その姿はまるで、我が子を守る母親に見えた。

福音のその行動に俺は驚いて動きを止めてしまう。

そしてそれは致命的な隙となり、福音の『銀の鐘』が最大出力で放たれた。

「ぐわあああああっ！？」

直撃を受けて海へ墜ちてゆく。握っていた獅子王の感触を失い、そして冷たいものを全身に感じつつ俺の意識は闇へと沈んでいった。

☆

「……」

旅館の一室。壁の時計は四時前を指している。
ベッドで横たわる一夏は、もう三時間も目覚めないままだった。
その傍らに控えている箒は、もうずっとこうしてうなだれている。
リボンを失って垂れた髪が、まるで今の気持ちまでも表しているようだった。

（私のせいだ……）

不意に思い出した思い出の中でも、一夏は笑っていた。そして隣にはいつもひろがいる。けれど、その笑顔は今はない。ただ力なく横たわり、ひろは自分たちを守る背中を見たのが最後。そう、現在行方不明だ。

ＩＳの防御機能を貫通して人体に届いた熱波に焼かれ、一夏の体の至る所に包帯が巻かれており、見ているだけで胸がちくりと痛む。

（私が、しっかりとしないから、一夏がこんな目にあって、ひろも今頃――）

ぎゅうっとスカートを握りしめる。その拳が白く色を失うほどに強く、強く握りしめた。自らを戒めるかのように、強く。ただただ強く。

『作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば召集する。それまで各自現状待機しろ』

『織斑先生！　ひろは、ひろの捜索はしないんですか！』

『……まだあの海域に福音とヴァルシオンがいて捜索は無理だ。テスタロッサは休んでおけ』

海から引き上げられ、なんとか旅館に戻った箒を待っていたのは冷たい言葉だった。千冬は一夏の手当てを指示して、すぐにまた作戦室へと向かう。箒は、責められないことがまた一層辛かった。

隣にいるフェイトは拳を握りしめ、泣きそうなのを我慢して作り笑顔を浮かべる。

『箒、しっかり体を休ませてね。私はまだやることがあるから。またね』

そう言ってフェイトも旅館へと向かう。

何でお前は笑えるんだ？　私はこんなにも無力感で押し潰されそうなのにと箒は思い、うつむく。

（私は……どうして、いつも……）

いつも、力を手に入れるとそれに流されてしまう。

それを使いたくて仕方ない。
わき起こる暴力への衝動を、どうしてか抑えられない瞬間がある。

（なんのために修行をして……）

箒にとって剣術は己を鍛えるものではなく、律するものだった。

――枷（リミッター）

自らの暴力を押さえ込むための、抑止力。

ふと、箒は久しぶりに一夏と剣道の試合をした時を思い出す。一夏が弱くなっていたことに怒りが湧いた。
そして自分を見ていたひろはどこか悲しそうだった。

（そうか……ひろは私が非常に危うい状態だと気付いてたのか）

そんなものは薄い氷の膜のように、ほんのわずかな重みで壊れてしまうことを。

（私はもう……ＩＳには……）

一つの決心をつけようとしたときに、突然ドアが乱暴に開く。

バンッ！　という音に一瞬驚いた箒だったが、その方向に視線を向ける気力はない。

「あー、あー、わかりやすいわねぇ」

遠慮無く入ってきた女子は、うなだれたままの箒の隣までやってくる。その声は――鈴だった。

「……」

「あのさあ」

話しかけてくる鈴に、けれど箒は答えない。答え、られない。

「一夏がこうなったのって、あんたのせいなんでしょ？」

ＩＳの操縦者絶対防御、その致命領域対応によって一夏は昏睡状態になっている。

全てのエネルギーを防御に回すことで操縦者の命を守るこの状態は、同時にＩＳの補助を受けた状態になる。それ故に、ＩＳのエネルギーが回復するまで、操縦者は目を覚ませなくなってしまうのだった。

「……」

「で、落ち込んでますってポーズ？　――っざけんじゃないわよ！」

突然烈火の如く怒りをあらわにした鈴は、うなだれたままだった箒の胸ぐらを掴んで無理矢理立たせる。

「やるべきことがあるでしょうが！　今！　戦わなくて、どうすんのよ！」

「わ、私……は、もうＩＳは……使わない……」

「ッ――！！」

バシンッ！

頬を打たれ、支えを失った箒は床に倒れる。
そんな箒を再度鈴は締め上げるように振り向かせた。

「甘ったれてんじゃないわよ……。専用機持ちっつーのはね、そんなワガママが許されるような立場じゃないのよ。それともアンタは――」

鈴の瞳が、箒の瞳を直視する。
そこにあるのは真っ直ぐな闘志。怒りにも似た、赤い感情。

「戦うべきに戦えない、臆病者か」

その言葉で箒の瞳、その奥底の闘志に火がついた。

「――ど……」

口から漏れたか細い言葉は、すぐさま怒りを纏って強く大きく変わる。

「どうしろと言うんだ！　もう敵の居場所もわからない！　戦えるなら、私だって戦う！」

やっと自分の意志で立ち上がった箒を見て、鈴はふうっとため息をついた。

「やっとやる気になったわね。……あーあ、めんどくさかった」

「な、なに？」

「場所ならわかるわ。今ラウラが――」

言葉の途中でちょうどドアが開く。そこに立っていたのは、真っ黒な軍服に身を包んだラウラだった。

「出たぞ。ここから30キロ離れた沖合い上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ」

ブック型の端末を片手に部屋の中に入ってくるラウラを、鈴はにやりとした顔で迎える。

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん……。お前の方はどうなんだ。準備はできているのか」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアとフェイトの方こそどうなのよ」

「ああ、それなら――」

ラウラがドアの方へと視線をやる。そして、それはすぐに開かれた。

「たった今完了しましたわ」

「準備オッケーだよ。いつでもいける」

「はあ、ふう。何とかパーティーには間に合ったかな？」

セシリアとシャルロットに遅れてフェイトが走って来る。専用機持ちが揃うと、それぞれが箒へと視線を向けた。

「で、あんたはどうするの？」

「私……私は――」

ぎゅうっと拳を握りしめる箒。それはさっきまでの後悔とは違う、決意の表れだった。

「戦う……戦って、勝つ！　今度こそ、負けはしない！」

「決まりね」

ふふんと腕を組み、鈴は不敵に笑う。

「じゃあ、作戦会議よ。今度こそ確実にあいつらを墜とすわ」

「ああ！」

☆

ざぁ……。ざぁぁん……。

（ここは……）

波の音に誘われるまま、一夏は砂浜の上を一人歩いていた。

足を進めるたび、さく、さく、と足下の白砂が澄んだ音を立てる。

足の裏に直接感じる砂の感触と熱気。海から届く潮の匂いと波の音。

それに心地よい涼風と、じりじりと照りつける太陽。

（夏……なのか？　今は……）

ここがどこで、今がいつなのかわからない。
一夏はいつもの制服を着て、そのズボンの裾を折り返した状態で素足のまま砂浜を歩く。

「――。――♪　～♪」

ふと、歌声が聞こえた。
とてもきれいで、とても元気な、その歌声。
誘われるように一夏は声の方へと進む。

「ラ、ラ～♪　ラララ♪」

少女は、そこにいた。
波打ち際、わずかにつま先を濡らしながら、その少女は踊るように歌い、謡うように踊る。そのたびに揺れる白い髪。輝き、眩いほどの白色。それと同じワンピースが、風に撫でられて時折ふわりと膨らんでは舞った。

（ふむ……）

一夏は近くにあった流木へと腰を下ろす。その木はずいぶん前に打ち上げられたのか、樹皮は剥げ落ち、色も真っ白になっていた。
青い空と海以外真っ白な世界。

白いいびつなソファに座って、一夏はぼけーっと少女を見つめ、歌声に耳を澄ます。

ざあざあと波の音が聞こえる。

時折吹く風が心地よいのか、一夏はただただぼんやりと目の前の光景を眺めた。

☆

ざぁ……。ざざぁぁん……。

「よっしゃあ、泳ぐか」

「クスクス。流星くん元気いっぱいだね。溺れないよう気を付けてよ」

時刻は少し戻って午後一時。戦闘があった空域から少し離れた島に伊達流星と幼なじみの少女、水羽楠葉（みずはくすは）が訪れていた。

ひろたちＩＳ学園と同じく臨海学校で来ている。

「なんでさっきまで外出禁止だったんだろ？」

「うーん、先生の説明では自衛隊が海上訓練をするからって言ってたけど」

「実はＩＳ同士の戦いがあったからだったりしてな」

「それはさすがに夢見すぎじゃないかな」

せっかく海に来たのに遊ぶことを禁じられていた二人は今までの遅れを取り戻すため、誰よりも早くやって来た。

ちなみに二人とも水着で、楠葉は高校生にしてはあり得ない巨乳で男子生徒の視線を釘付けにしていたが、とある理由により男子たちから敬遠されている。

「一番乗りだぜって、砂浜に何か流れ着いてるな」

「ねえ、あれって人間に見えない？」

慌てて近寄ると、それは１５、６歳くらいの少年だった。

「だ、大丈夫ですか！」

看護士を目指している楠葉はすぐさま少年の呼吸と心臓音を確かめる。

「良かった。息してるし、心拍数も正常だよ」

安堵する楠葉。少年の顔を見た流星は表情を驚愕に染めた。

「お前は……ひろじゃないか！」

「流星くんの知り合い？」

「ああ、この前話したろ？　ゲーセンで知り合ったヤツ」

まじまじとひろの顔を見て楠葉はおや？　と首を傾げた。

「あれ？　この人、どこかで見たような……」

「そりゃそうだろ。ひろはＩＳを動かせる男なんだから」

「え……？　えええぇぇ！？」

武神墜ちる（後書き）

どうも宏明です

ラ「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

福音、ヴァルシオン戦の前半が終わり、ひろも墜ちました。

ラ「嫁ー！　どこだぁー！　無事なら返事をしろ！」

気を失ってるから返事は無理かと。そして再び流星登場。幼なじみの楠葉も出せたぜ。

ラ「くそ、こいつもきょにゅーとかいうヤツか。忌々しい。何を食ったらそんなに育つんだ」

鈴「そうよ！　ちょっとくらい寄越しなさい！」

いきなり出て来て無茶言うな。

ラ「打倒巨乳キャラ。我ら貧乳同盟に正義アリ！」

鈴「貧乳はステータス！　希少種だ！」

ラ、鈴「うおおおおっ！！！」

どこかに行っちゃった。あれ？　いつから胸の話になった。

ああ、それで、ヴァルシオンにはゲイムシステムが積まれています。何？　赤ヴァルシオンには変？　気にしないで下さい。これ用に設定を捏造してるだけです。パイロットはスパロボＯＧｓのシャイン王女（洗脳）と同じ状態。つまり無理矢理戦わせられてます。これ以上はネタばれなので次回をお楽しみに。

次回、戦場に黒き竜巻現る！

唸れ！　竜巻斬艦刀（前書き）

遂にアレが登場！

あのＢＧＭの脳内再生推奨（笑）

唸れ！　竜巻斬艦刀

「……う」

目を開けると知らない天井だった。まあ、ベタな始まりは置いといて、ずきずきと痛む体に鞭を打って体を起こす。

「ダイゼンガーは……」

枕元にダイゼンガーの待機状態である柄型のキーホルダーがあった。

「あっ、起きちゃダメだよ！」

襖を開けて入って来たのは青いショートカットの少女。あと胸が山田先生並みにでかい。

「君は？　それにここはどこだ」

「私は水羽楠葉。流星くんの幼なじみだよ。ここは私たちが三日間お世話になる旅館。キミが砂浜に流れ着いてたのを発見したんだけど、覚えてないかな？」

流星たちも臨海学校だったのか。しかも助けられるとはな。

「詳しいことは話せないけど、助かった、ありがとう」

骨は……問題ないな。あれだけ攻撃を受けて全身打撲程度とは、我ながら頑丈だ。
無理矢理立とうとするが、水羽に体を抑えられる。

「怪我してるんだよ。無理しちゃダメ！」

「だけどここにいたら水羽や流星たちに迷惑をかける。何よりも俺は行かなきゃいけない」

「もう、男の子ってすぐに無茶したがるんだから」

ため息をつく水羽。持っていた水筒の中身をお盆に伏せていたコップに注ぎ、俺に差し出す。

「はい、私が作った特製健康ドリンクを飲んでね。すぐ元気になるから」

コップに入っている謎の液体。健康ドリンクだと？　テニプリの乾

汁か！　って言いたくなるほどのヤバさを感じる。

「じ～……」

う、飲まないと行かせてはくれないみたいだ。

「ええいままよ！」

勇気を振り絞って健康ドリンクを一気に飲み干す。

「――！！」

この世のものとは思えない程の不味さ。俺の意識は一瞬でブラックアウトした。

☆

「楠葉、ひろの様子どうだ？」

先生たちにひろのことを秘密にしてくれと頼み込んでいた流星は部屋に入る。

「うん、気持ち良さそうに眠ってるよ」

死んだように眠るひろと楠葉が持っている水筒を見て流星は理解した。

ああ、また新しい犠牲者が出たか、と。

楠葉は健康マニアである。しょっちゅう健康器具を通販で購入し、口では言えない食材を使った健康ドリンクを作り、みんなを震えさせていた。

通称『クスハ汁』効果抜群なのだが、ものすごく不味いのだ。

「じゃあ流星くん、私はお風呂に入ってくるね」

「あ、ああ。ごゆっくり～」

手を振って送り出す流星。

「お前も災難だったな。ま、効果は抜群だから頑張れよ。俺には応援しかできねえからよ」

水の入ったペットボトルを置いて、流星は部屋から出て行った。

☆

「……」

海上で静止している『ヴァルシオン』と『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』

ヴァルシオンは直立不動で浮いており、福音はその頭を抱きしめるようにしていた。まるで怯え震える子供を安心させる母親のように。

――？

不意に、福音が顔を上げる。

次の瞬間、超音速で飛来した砲弾と重力エネルギーの本流が二機に直撃、大爆発を起こした。

「初弾命中。続けて砲撃を行う！」

五キロ離れた場所に浮かんでいるＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』を纏うラウラは、福音たちが反撃に移るよりも早く次弾を発射した。

その姿は通常装備と大きく異なり、８０口径レールカノン『ブリッツ』を二門左右それぞれの肩に装備している。さらに遠距離からの

砲撃・狙撃に対する備えとして、四枚の物理シールドが左右と正面を守っていた。

これが、砲撃パッケージ『パンツァー・カノニーア』を装備したシュヴァルツェア・レーゲン。

隣にいるフェイトは重力波を撃ち出すことが可能な大型ライフル『グラビトン・ランチャー』で福音を狙うが、片翼にもかかわらず素早い動きでかわされてしまう。

「フェイトはヴァルシオンの所へ向かえ！」

「わかった！」

グラビトン・ランチャーを収納し、フェイトはヴァルシオンに向かって行く。

福音は行かせまいとフェイトに向かうが、ラウラの砲撃がそれを阻む。

「お前の相手は私だ」

福音はまず、足が遅そうなのから狙うことにした。

（敵機接近まで……４０００……３０００――くっ！　予想よりも

速い！）

あっという間に距離が１０００メートルを切り、福音がラウラへと迫る。

「ちぃっ！」

砲戦仕様はその反動相殺のために機動との両立が難しい。

対して、機動力に特化した福音はさらに急加速を行い、ラウラへと右手を伸ばす。

――避けられない！

しかし、ラウラはにやりと口元を歪めた。

「――箒！」

突然上空から赤いレーザーが降り注ぎ腕を弾かれる。

真紅の機体――紅椿。

箒は続けて突きを何発も放つ。そのたびに赤い球体が機体の周りにいくつも形成され、レーザーとなって福音に迫る。その数２０。

『敵機Ｂを認識。排除行動へと移る』

「遅いよ」

箒の射撃を避ける福音を、真後ろから別の機体が襲う。

それは先刻の襲撃時に箒の背中に乗っていた、ステルスモードのシャルロットだった。

ショットガン二丁による接近射撃を背中に浴び、福音は姿勢を崩す。

けれどそれは一瞬のことで、すぐさま三機目の敵機に対して『銀の鐘』による反撃を行った。

「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』は、その程度じゃ落ちないよ」

リヴァイヴ専用防御パッケージは、実体シールドとエネルギーシールドの両方によって福音の弾雨を防ぐ。そのシルエットはノーマルのリヴァイヴに近く、二枚の実体シールドと、同じく二枚のエネルギーシールドがカーテンのように前面を遮っていた。

防御の間もシャルロットは得意の『高速切替（ラピッド・スイッチ）』によってアサルトカノンを呼び出し、タイミングを計って反撃を開始する。

加えて、刀からレーザーを撃ち、支援ユニットで攻撃する箒と距離を置いての砲撃を再開するラウラ。

三方向からの攻撃に片翼を失っている福音はそこから抜け出せず、じわじわと消耗されていく。

「……敵機接近。破壊する」

ヴァルシオンの４つあるカメラアイがヴンッと輝き左手首にある発射口からクロスマッシャーを撃つ。

フェイトは左に旋回してかわし、コールしたリープ・スラッシャーを発射。だがヴァルシオンはディバインアームで容易く切り裂いた。

「クロスマッシャー……発――」

発射する直前に上空からレーザーが左手に迫る。それはオートで展開された歪曲フィールドに阻まれ消える。

「わたくしもおりましてよ」

青一色の機体――ブルー・ティアーズによるステルスモードからの強襲。

六機のビットは通常とは異なり、その全てがスカート状の腰部に接続されている。しかも、砲口は塞がれており、スラスターとして用いられている。さらに手にしている大型ＢＴレーザーライフル『スターダスト・シューター』はその全長が二メートル以上もあり、ビットを機動に回している分の火力を補っていた。

強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備しているセシリアは、超高速でヴァルシオンの周りを飛んで撹乱。

時速５００キロを超える速度下での反応を補うため、バイザー状の超高感度ハイパーセンサー『ブリリアント・クリアランス』を頭部に装着している。そのおかげでセシリアにとって、ヴァルシオンの動きは遅過ぎた。

「敵機Ｂの攻撃力は低いと判断……ヴァルシオン二号機の排除に専念」

その言葉通り、セシリアのレーザーがヴァルシオンの装甲に当たってもダメージは蚊に刺された程度だった。それでもセシリアは狙い撃ち続ける。

「だったらこれはどうよ！」

海面が膨れあがり、中から甲龍が現れた。

鈴は瞬時に機能増幅パッケージ『山崩』を戦闘状態へ移行させる。

両肩の衝撃砲が開くのに合わせて、増設された二つの砲口がその姿を現す。計四門の衝撃砲が一斉に火を吹いた。

「！！」

放たれた衝撃砲はいつもの不可視の弾丸ではなく、赤い炎を纏っている。しかも、福音に勝るとも劣らない弾雨。増幅された衝撃砲――言うなれば、熱殻拡散衝撃砲と呼ぶべきものだった。

「やりましたの！？」

「――まだだよ！」

歪曲フィールドが発生するよりも速く拡散衝撃砲が直撃した。しかし、ヴァルシオンの装甲は核シェルター並みの堅牢さを誇っている。所々損傷していたが、戦闘続行には問題ない。

「戦闘レベルを修正……最大攻撃力で排除……する」

再び４つのカメラアイが鈍く輝き、背中にある大型スラスターの上部がバカッと開いた。

「まずい……！　鈴！　セシリア！　今すぐ離脱して！」

フェイトの叫びよりも速くヴァルシオンの周りの風が荒れる。

「なっ！？　吸い寄せられる！？」

離脱できなかった鈴は突如発生した大嵐に振り回され、どんどんヴァルシオンへ吸い寄せられていく。

「メガグラビトンウェーブ」

ヴァルシオンの胸元から放出されたエネルギーの本流に鈴は叩きつけられた。

☆

「お前だけに構っているわけにはいかないんだ！」

フェイトたちが戦っている方向で眩しいほどの光を見た箒は両手に持つ刀で福音へ斬りかかり、刃がその右肩へ食い込む。

（獲った――！）

そう思った刹那、福音は信じられないことに左右両方の刃を手のひ

らで握りしめる。

「なっ！？」

刀身から放出されるエネルギーに装甲が焼き切れるが、お構いなしに福音は両腕を最大にまで広げる。

刀に引っ張られ、箒が両手を広げた無防備な状態を晒す。そして残っているもう一つの翼が砲口を開放して待っていた。

「箒！　武器を捨てて離れろ！」

しかし、箒は武器を手放さない。

（……ここで引いて、何のための……）

エネルギー弾がチャージされ、光が溢れる。そして、それは一斉に放たれた。

（何のための力かっ！！）

エネルギー弾が触れる寸前に、ぐるんと紅椿は一回転をする。その瞬間、爪先の展開装甲が箒の意志に応えるように開き、エネルギー

刃を発生させる。

「たあああああっ！！」

かかと落としのような格好で、エネルギー刃の斬撃がもう片翼を斬り断ち福音は崩れるように海面へ墜ちていった。

「はっ、はぁっ、はぁっ……！」

「無事か！？」

珍しくラウラの慌てた声を聞きながら、箒は乱れた呼吸をゆっくりと落ち着けていく。

「私は……大丈夫だ。それよりフェイトたちは――」

ヴァルシオンの方へ視線を向けようとした瞬間、海面が強烈な光の球によって吹き飛ぶ。

「！？」

球状に蒸発した海は、まるでそこだけ時間が止まっているかのようにへこんだままだった。その中心、青い雷を纏った『銀の福音』が

自らを抱くようにうずくまっている。

「これは……！？　一体、何が起こっているんだ……？」

「！？　まずい！　これは――『第二形態移行（セカンド・シフト）』だ！」

ラウラが叫んだ瞬間、福音は顔を上げて切断された頭部から、ゆっくり、ゆっくりと、まるで蝶がサナギから孵るかのようにエネルギーの翼が生えた。

『マモル……』

福音はヴァルシオンの方へ一瞬視線を向けて呟き、エネルギーの翼をはばたかせてラウラに光弾を放つ。

「なに！？」

あまりの速さに反応できず、ラウラは両手で顔を庇って被弾し、海面へ墜ちる。

「ラウラ！　よくもっ……！」

シャルロットはすぐさま武装を替えて狙い撃とうとする。福音はエネルギー翼の中心にエネルギー球を作り出して砲撃を放った。

「!?」

物理シールドとエネルギーシールドで砲撃を防御したが、ぶち破られてシャルロットも海へと墜ちてゆく。

『マモル』

福音は箒を無視してヴァルシオンの方へ飛んで行ってしまう。

「どこへ行く気だ!」

箒は福音の後を追った。

☆

ヴァルシオンのメガグラビトンウェーブを食らった鈴は装甲の八割を破壊されて海へ墜ちた。

「りぃぃんっ！」

ディバインアームを呼び出してヴァルシオンに突撃するフェイト。しかし、同じものを持つヴァルシオンの斬撃にはかなわず斬り飛ばされてしまった。

「くっ……！」

ヴァルシオンに再び高機動による射撃を行おうとしていたセシリアの、その眼前に福音が迫る。何とか振り切ろうとするのだが、追い付かれて両翼に包まれ蒼海へと沈められる。

「私の仲間を――よくも！」

漸く追い付いた箒は怒りに任せて福音に接近。続けざまに斬撃を放ち続けた。

「うおおおっ！！」

互いに回避と攻撃を繰り返しながらの格闘戦。徐々に出力を上げていく紅椿に、わずかに福音が押されはじめる。

（いける！　これならっ――）

必殺の確信を持って、雨月の打突を放つ。しかし――

キュゥゥゥン……。

「なっ！　また、エネルギー切れだと!?　――ぐあっ！」

その隙を見逃さず、福音の右腕が箒の首を捕まえる。そして、ゆっくりとその翼が箒を包み込んでいった。

（すまない、一夏……！」

☆

ざぁ、ざぁん……。

さざ波の音を聞きながら、俺は飽きもせず女の子を眺めていた。

その歌は、その踊りは、なぜだか俺をひどく懐かしい気持ちにさせる。この感覚は初めて白式を装着した時と同じだった。

（……あれ？）

ふと、気がつくと少女の歌は終わっていた。

踊りもやめて、少女はじぃっと空を見つめている。
俺は不思議に思って、立ち上がり少女の隣へと向かう。
ざぁ、ざぁ、と。
波打ち際までやってきた俺を、涼しい水の調べが濡らす。
「どうかしたのか？」
声をかけるが、少女はまだじぃっと空を見つめたまま動かない。
俺も一緒に空を眺めていると、ふと少女の声が耳に届いた。
「呼んでる……行かなきゃ」
「え？」
隣に視線を戻すと、もうそこに少女の姿はなかった。
――あれ？
きょろきょろと左右を見るが、もう人影は見当たらない。歌も、聞こえない。

「力を欲しますか……？」

「え？」

急いで振り向くと、波の中――膝下までを海に沈めた女性が立っていた。

その姿は、白く輝く甲冑を纏った騎士さながらの格好だった。大きな剣を自らの前に立て、その上に両手を預けている。
その顔は目を覆うガードに隠されて下半分しか見えない。

★

「さっきまで旅館にいたはずだが……」

目を覚ますと天井どころか全く見知らぬ場所にいた。

空は灰色、辺りは瓦礫と武器の残骸が埋め尽くし、未だ燃え残っている炎だけが辺りを照らす。
まるで中世時代の戦場だ。

「！　誰だ」

後ろに気配を感じて振り向く。そこには金色の髪を結い上げ、赤と緑のオッドアイで俺を見る女性がいた。

騎士のような格好で、両腕は武骨な手甲に包まれている。

「あなたはなぜ戦うのですか？」

俺の質問には答えず、逆にきかれた。

「なぜ戦う……か。大切な人や理不尽な暴力で傷つけられる人たちを見たら体が勝手に動くから、かな」

いつも気がついたら目の前にいる人が傷つけられている。鈴と初めて会った時、一夏が誘拐された時、シュヴァルツェア・レーゲンに取り込まれたラウラ。ヴァルシオンの操縦者が助けを求めたあの弱々しい声。

ああ、見て見ぬ振りなんで出来ない。そして俺はあの日、悲しいことも辛くて怖いこと、理不尽な暴力……それら全てを斬り断つ剣になると誓った。

「俺は信念を貫く剣。それを折るつもりはない」

女性騎士は微笑む。両手を胸元に当てて、手のひらを俺に見せる。
するとそこには赤い結晶が浮かんでいた。

「これをあなたに」

女性騎士から差し出された強い力を秘める結晶体。

それを俺は――

☆

俺はうなずく。

「何のために……？」

「ん？　んー……難しいことをきくなぁ」

ざぁ、ざぁん、と。波だけが俺と女性の間にある。

「……そうだな。友達を――いや、仲間を守るためかな」

「仲間を……」

「仲間をな。なんていうか、世の中って結構色々戦わないといけないだろ？　単純な腕力だけじゃなくて、色んなことでさ」

俺は、いまいち自分の中でもまとまっていないことなのに、妙に饒舌に喋っていた。

頭の中に千冬姉、ひろ、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラそれに箒が浮かぶ。

「そういうときに、ほら、不条理なことってあるだろ。道理のない暴力って結構多いぜ。そういうのから、できるだけ仲間を助けたいと思う。この世界で一緒に戦う――仲間を。それにさ、俺の隣にいるアイツはいつも誰かのために戦ってる。俺もその一人、だから今度は俺がアイツを助けたいんだ」

「そう……」

女性は、静かに答えてうなずいた。

「だったら、行かなきゃね」

「えっ？」

また後ろから声をかけられる。
振り向くと、白いワンピースの女の子が立っていた。人懐っこい笑み。無邪気そうな顔でじぃっと見つめている。

「ほら、ね？」

手を取られて、にこりと微笑みかけられる。俺はひどく照れくさい気持ちになりながら、

「ああ」

とうなずいた。
すると、いきなり変化が訪れた。

「な、なんだ？」

――空が、世界が、眩いほどに輝きを放ちはじめる。
その真っ白な光に抱かれて、目の前の光景が徐々に遠くぼやけていく。夢の終わり、なんて言葉がふいに浮かんだ。

（ああ、そういえば……）

あの女性は、誰かに似ていた。

白い――騎士の女性。

★

「それはいらない」

首を横に振って断った。

「なぜ？　力がなければ守ることも救うことも出来ません。あなたは死ぬつもりですか」

表情を鋭くさせた女性騎士から目を逸らさずに俺は口を開く。

「死ぬつもりなんかねえよ。死んだら悲しむ人がいる。俺はあの日知った。でもさ、だからといって容易に力を求めるのも違うんじゃないか？　力っていうのはどんなに綺麗事を並べようが結局は誰かを傷つけるものだ。それに俺はもう十分過ぎるくらい力をもらった。あとは自分の中にある可能性と大切な仲間を俺は信じる」

それだけで、俺は今よりもっと強くなれると思う。

「……そう。私はずっとあなたを見守っているわ」

女性騎士はまたにこりと微笑み赤い結晶を元の場所へ戻す。そして、すうっと幻みたいに消えた。

「あれ？」

女性騎士が消えた瞬間、世界が変わった。

満月と星々が輝く夜の浜辺。

「――♪　～♪」

近くの岩場には黒い髪に紺色の着物を着た少女が座って笛を奏でている。

「――！」

俺に気付いた少女は演奏を止めて、こちらにトテトテと歩いてきた。

「みんな、待ってるよ」

人懐っこい笑みを浮かべてじぃっと俺を見つめている。

「ね？」

手を伸ばす少女。

「そうだな。まだあいつを助けてないしな」

その華奢な手を握った。

すると、海から朝日が昇っていく。夢の終わり、なんだろうな。

（そういえば……）

あの女性から、懐かしい匂いがした。

もしかして俺の――

☆

「ぐっ、うっ……！」

ぎりぎりと締め上げられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる。
福音の手は硬く箒の首を掴んで離さず、さらにはエネルギー状へと進化した『銀の鐘（シルバー・ベル）』が紅椿の全身を包んでいた。

（これまでか……。情けない……）

ぽうっと光の翼が輝きを増していく。一斉射撃への秒読みがはじまる中、箒の頭の中にはただ一つのことだけが浮かんでいた。

――会いたい。

――一夏に、会いたい。

――すぐに会いたい。今会いたい。

――ああ、ああ、会いたい。

「いち、か……」

知らず知らず、その口からは一夏の名前を呼ぶ声が出ていた。

「一夏……」

さらに輝きを増す翼に、箒は覚悟を決めてまぶたを閉じる。

イィィィンッ……！！

『！？』

突然、福音は箒を掴んでいた手を離す。
いきなりの出来事に混乱している箒が、瞳を開けた時に見たのは強力な荷電粒子砲による狙撃を受けて吹き飛ぶ福音の姿だった。

（な、何が起きて――）

戸惑う箒の耳に届いたのは、さっきからずっと願い思って止まない声だった。

「俺の仲間は、誰一人としてやらせねえ！」

箒の視線の先には、白く、輝きを放つその機体がある。

「あ……あ、あっ……」

じわりと目尻に涙が浮かぶ。
わずかに潤んだ視界に見えるのは、白式第二形態・雪羅（せつら）を纏った一

夏だった。

☆

先の戦いで命令系統に異常をきたし、ただ目の前にいるＩＳを破壊するだけの機体となったヴァルシオンはゆっくりと岩場に倒れていたフェイトに近づく。

「くっ……！」

フェイトは痛む体に鞭を打ち、膝が笑っていても立ち上がる。握っているディバインアームは刀身が折れてるので捨てて、ハイパービームキャノンを呼び出す。

「はぁっ……はぁっ……負け、られない……の。あなたは、地球を守るために、作られたもの」

ぼやける視界。だけど的が大きいからとにかく撃って戦う。

ヴァルシオンの進撃は止まらず、振り上げられたディバインアームにハイパービームキャノンは破壊された。

風圧で尻餅を着くフェイト。視界いっぱいに巨剣が迫る。

（また、負けちゃうのか……悔しいなぁ）

超高感度ハイパーセンサーを使っているわけでもないのに、フェイトにはゆっくりとしたものに見えた。

「……イ、ヤ。モウ、ダレ……モ……キズツケタク、ナイ！」

ヴァルシオンの動きが止まる。生体パーツのように乗せられた少女の最後の抵抗。

「！？」

だけどそれはほんの数秒間しか持たなかった。ゲイムシステムが少女の意志を無視して動き出す。

刹那、二本の荷電粒子砲がヴァルシオンの右腕を撃ち貫く。

「安心しろ、お前を覆うその闇、俺が必ず断ち斬る！」

「あ……」

漸く視界が回復し、フェイトの瞳には顔以外紺色の装甲に包まれたひろの姿があった。

★

こちらを警戒して後退するヴァルシオン。

「ひろ……遅いよ。待ちくたびれたんだから」

「悪い、今度ケーキでもご馳走する」

ヴァルシオンを睨み付けつつフェイトのそばに降り立つ。

「女の子は沢山食べるから覚悟、してね」

「ちょっとは手加減して欲しいなぁ。作るのも大変なんだぜ？」

戦場にいながらも軽口を言い合う。何だかおかしくなって笑った。
ハイパーセンサーで後ろの方を見ると、ほぼ同時に俺と一夏は駆け着けたようだ。

あ、一夏が箒にリボン渡してる。戦場でラブロマンスしてんじゃねえよ。

「「ひろっ！！」」

そこへボロボロになっているラウラとシャルが抱きついて来た。さすがにＩＳのパワーが合わさると結構ヤバイ。

「心配、したんだからね！」

「さすが私の嫁。ちゃんと帰って来たな。後でキスしてやろう」

「ラウラ！　抜け駆け禁止だよ」

こう、賑やかだと戻ってきたって実感するよ。

「でも、体は大丈夫なの？　福音の直撃食らったでしょ？」

「まあ、色々あってな……今は出撃前よりも元気だ」

さっき飲んだ水羽特製健康ドリンクのおかげらしい。二度と飲みたく無いがな。

「！　誰だ貴様！」

海から黒い装甲に赤い縁のロボットが現れてラウラが警戒する。そのロボットの両腕には、鈴とセシリアがいた。

「ああ、そんなに警戒しなくても大丈夫。こいつは俺とダイゼンガーの新しい仲間『アウセンザイター』だ」

ラウラやシャルはポカーンと口を開き、フェイトは驚く。

「う……ここは？」

鈴とセシリアも目覚めたようだ。

さて、そろそろヴァルシオンも動き出したし、終わらせるか。

「トロンベ、悪いがちょっと一夏の援護に行ってくれるか？」

トロンベ（アウセンザイター）はコクリとうなずき足のローラーを駆動させて一夏の方へ駆けて行く。空中をどうやって走ってるのか非常に気になる。

☆

「じゃあ、行ってくる。――まだ、終わってないからな」

箒にリボンを渡して俺はこちらに向かってきていた福音へと急加速、正面からぶつかった。

「再戦といくか！」

『雪片弐型』を右手だけで構え、斬りかかる。

のけぞってかわした福音を、左手の新兵器『雪羅』で追った。

第二形態に移行したことで現れたこの装備は、状況に応じていくつかのタイプへと切り替えられるらしい。俺のイメージに応えるように、その指先からはエネルギー刃のクローが出現する。

「逃がさねえ！」

一メートル以上に伸びたクローが福音の装甲を斬る。シールドエネルギーに阻まれたけど、その一撃は確実に福音を捉えていた。

『敵機の情報を更新。攻撃レベルＡで対処する』

エネルギー翼を大きく広げ、回避の後、福音の掃射がはじまった。

「そう何度も食らうかよ！」

俺は避けようとはせず、左手を構えて前へと飛ぶ。

――雪羅、シールドモードへ切り替え。相殺防御開始。

キンッ！　という甲高い音を鳴らして、左腕の雪羅が変形する。それから光の膜が広がって、福音の弾雨を消していく。

そう、これはつまり、エネルギーを無効化する零落白夜のシールド。

当然エネルギー消耗は激しいが、完全に攻撃を無効化できる以上、圧倒的にこちらが有利になった。福音に実弾兵器がないのは、スペックカタログで確認済みだ。

……と、余裕ぶっこいていた数分前の自分を殴り倒したい。

いくら福音の攻撃を無効化できたり、強化された大型ウイングスラスター四機で二段瞬時加速が可能になっても、

「ぜらあああっ！！」

零落白夜の光刃が当たらなければ意味がない。

「やばい、エネルギーが……」

強力無比な連続射撃を避け続けるが、エネルギー残量が１０％を下回った。

『マモル』

まただ。また福音はマモルとつぶやいて攻撃の手を強める。エネルギー翼を自身に巻き付け広げると、嵐のようなエネルギーの弾雨を降らせた。

（くそっ……一体俺は何やってんだよっ！）

せっかく白式が応えてくれたのに俺は、また無駄にしちまうのかよ！

諦めかけた時、別方向からの狙撃によって全ての光弾は撃ち落とされた。

「お前は一体……？」

現れたのは黒い装甲に赤い縁が所々にあり、頭にははてなマークみたいな白い毛、黒いマントを羽織ったロボット。その姿はまるで西

部劇のガンマン。両手に持つライフルであれだけの数を撃ち落としたのだろう。

福音の周りを駆け抜け、蜂の巣になるんじゃないかってくらいの射撃。

「すげっ……まるで竜巻みたいだ」

思わずそうつぶやいていた。

「一夏！」

「箒！？　お前、ダメージは――」

「大丈夫だ！　それよりも、これを受け取れ！」

箒の――紅椿の手が、俺の白式へと触れる。

その瞬間、全身に電流のような衝撃と炎のような熱が走り、一度視界が大きく揺れた。

「な、なんだ……？　エネルギーが――回復！？　箒、これは――」

「今は考えるな！　行くぞ、一夏！」

「お、おう！」

意識を集中させ、雪片弐型のエネルギー刃を最大出力まで高める。
巨大な光の刃を両手で支えて福音に突っ込んだ。

あの黒いロボットはいなくなってたけど、おかげで福音は虫の息。

「今度は逃がさねえ！」

胴体へと零落白夜の刃を突き立てる。

「おおおおっ！！」

エネルギー刃特有の手応えを感じながら、さらに俺は全ブースターを最大出力まで上げて、銀色のＩＳはやっと動きを停止した。

★

「破……壊する。全て、を」

もう、狙いなんて定まっていない。ヴァルシオンはただ近づく者と

その周囲に攻撃をしていた。

「これ以上長引けは操縦者が危ないな」

たが、まずはあのやっかいな歪曲フィールドを何とかしないいと。

一応第二形態に移行したことでダイゼンガーの内蔵武器が復活した。元々は第一形態移行で装備される予定だったが、なぜか装備されなかった。

獅子王が手元に戻ってきてないのが不安だがやるしかあるまい。

「ダイゼンガーの真の力を見せてやる」

腰を落とし左腕を後ろに引く。手甲部分にある小型ブースターが火を噴く。

「ダイナミック・ナックル！」

正拳突きの要領で突き出された左腕はヴァルシオンへ飛んでいく。いわゆるロケットパンチというやつだ。

ちなみに腕が本当に飛んでいるわけではなく、腕部装甲が飛んでいる。

残念ながら歪曲フィールドに阻まれてダメージはない。
クロスマッシャーを避けて自動的に戻ってきた左腕を装着した。

「敵機の戦闘レベル、上昇を確認。最大出力での排除を開始」

ヴァルシオンの大型スラスターがバカッと開く。これが鈴をズタボロにした攻撃か。

「ダイゼンガーにはこのような武器もある！」

しっかりと足を踏みしめ両肩にエネルギーをチャージ。この肩装甲はもう、ただの飾りではない。

「焼滅せよ！　ゼネラル・ブラスター！！」

二門の荷電粒子砲が火を吹きヴァルシオンの大型スラスターを撃ち貫く。

エネルギーを一番消費するが、それに見合うだけの威力はある。さっきヴァルシオンの右腕を破壊したのもこれだ。おかげでエネルギーは残り少ない。

腰部装甲から小太刀サイズの刀を抜く。これは『ガーディアン・ソード』刀身がG形状になっている。

瞬時加速で肉薄し、上段に構えたガーディアン・ソードを唐竹に振り下ろす。

もちろん歪曲フィールドに防がれてしまう。

一度で斬れないなら何度も斬ればいい。

「必滅斬斬！　ぬおおおおっ！！」

連続唐竹割りをぶつけ、五回くらい斬りつけたところでヴァルシオンの反撃がきたためにやむなく中断。くそ、防御力がチートだな。

「僕たちを忘れないでよね！」

シャル、セシリア、ラウラの射撃でヴァルシオンは後退した。

「お前ら、動いて大丈夫なのか」

「あたしらは腐っても代表候補生よ。これぐらいモーマンタイなんだからね」

鈴の強がりにみんなうなずく。たっく、頼りになる仲間だ。

「ほら嫁、忘れ物だ」

ラウラから行方不明だった獅子王を渡される。

「ありがとな。シャル、ラウラ、セシリア、鈴、フェイト、力を貸してくれ。一人じゃアイツを助けられそうもない」

みんな顔を赤らめながらもうなずく。風邪でも引いたか？

「私たちは夫婦だからな。協力するのは当然だ」

「僕はずっとひろの味方だよ」

「わたくしの力、思う存分お使い下さいな」

「ふ、ふん。やっぱ、あたしがいないと駄目な奴なんだからっ」

「言うまでもなくみんなと同じだよ」

よし、作戦は次の通りにいく。
ヴァルシオンの歪曲フィールドは確かに強固。だけど防御すればそれだけエネルギーを消耗する。

「セシリアとラウラは援護射撃。鈴の双天牙月とシャルの灰色の鱗（グレー・スケール）殻で歪曲フィールドに干渉、最後にフェイトが最大攻撃力でぶち貫け」

つまり、要は同時攻撃による一点集中。フィールドを突き破ったら俺が本体を叩いて終わりだ。

「きたぞ、散開！」

クロスマッシャーを四方に散って避ける。

「まずはわたくしたちから！」

セシリアとラウラのレーザーと砲弾が歪曲フィールドに弾かれた。
ヴァルシオンは歪曲フィールドを発生させている間は動けない。

「でりやあぁぁぁっ！！」

そこへ巨大な青龍刀『双天牙月』を力いっぱい振り下ろす鈴。

「やあああああっ！！」

いつの間にか瞬時加速を覚えたシャルが突撃。歪曲フィールド中心部分にパイルバンカーを打ち込む。

「フェイト！」

後方にいたフェイトは赤と青の球体を両手に集めてそれを融合させる。

「これで終わりだよっ！　クロスマッシャー！」

両手のひらをヴァルシオンに突き出し、そこから赤と青のビームが螺旋を描いて飛ぶ。

パイルバンカーが打ち込まれた場所にクロスマッシャーは突き刺さって、パリンッとガラスのように歪曲フィールドが割れた。

「！？」

「ゆくぞトロンベ！　今が共に駆け抜ける時！」

一夏の援護から帰ってきたトロンベと空へ飛び上がる。

人型無人機動兵器『アウセンザイター』通称トロンベ。砲撃戦を得意とし、超ＡＩによって学習・自己判断・単独戦闘を可能にしているらしい。さらにもう一つ機能が備わっていた。

それは……変形である。

隣にいるトロンベのマントが外れ、お尻辺りの装甲は後ろへスライドして二足から四足へと変化。大型ライフルが前脚パーツとなり、頭部は人から馬へ。後頭部に白い毛が生えて『黒馬』へと変形した。

ちなみに白い毛は本物の毛ではなく、湯気である。

「とおっ！」

マントを羽織った俺はトロンベの背に乗って、獅子王を斬艦刀モードに変えた。

「刃馬一体！　参るっ！」

手綱を引いてトロンベがヴァルシオンに向かって駆ける。

「駆け抜けろトロンベ！　その名の如く！」

その速さは紅椿の高速機動時と同等だ。

一瞬でヴァルシオンとの距離を詰め、斬艦刀を胴に叩きつける。

「奥義っ！　斬艦刀・逸騎刀閃！！」

そのまま斬艦刀を振り回して連続斬り。トロンベの頭から熱風が竜巻のように噴き出す。

３メートルはあるヴァルシオンが空高く舞った。

「我らに、断てぬものなしっ！」

――轟っ！！

大爆発したヴァルシオンは粉々になり、操縦者らしき少女が墜ちる。

少女を優しく受けとめ、その手にはＩＳのコアがあった。

「お～～いっ！」

一夏と箒が福音の操縦者を抱いてこちらへ来る。

空は青から夕闇の朱色になっていた。

唸れ！　竜巻斬艦刀（後書き）

どうも宏明です

鈴「凰・鈴音よ」

祝！　トロンベ登場。この話を書きたくて今まで頑張ってきたんだ。

鈴「さすがのあたしもヤバかったわ。それにしても驚いたわよ、新しい仲間が無人機で馬に変形？　世界中のＩＳ研究者が知ったら目ん玉飛び出るんじゃない？」

まあ、トロンベに関しては次回やオリＩＳ紹介コーナーで説明してくから。次回で原作３巻までの内容が終了。新キャラぞくぞく登場するかも。

鈴「また新しい敵を出すつもり？」

さぁ？　それは次回をお楽しみに。

鈴「今すぐあたしを一組にして！　帰りのバスで絶対何か起こるから！」

ユア・ネーム・イズ

☆

『……そう、ヴァルシオンは破壊されたのね？』

「ああ、機体だけ木っ端微塵になった」

ひろたちが戦った海域から少し離れた場所にＩＳを装着した美女がいた。

「で、あのガキとコアを回収しなくていいのか？　苦労して手に入れたのによ」

『ゲイムシステムの稼動データが得られたからいいわ。あの子には可哀想だけどいなくなればアウルム１のやる気が上がる』

「そうだな。あのガキに構ってろくにこっちのいうこと聞かないあいつにはいいお灸だ」

ククククッと笑う美女。その口が邪悪に歪む

『コアの方も大丈夫よ。今頃データは初期化されてるだろうし、さっきエムがイギリスの試験機を奪ったと報告があったから戦力も減

ってないわ』

ひろたちが見えなくなって日が落ちる。

『任務は終了よ。帰ってきたら一緒にお風呂入りましょ、オータム』

「ああ、最速で戻るよ。スコール」

通信を切ったオータムの頬が少し赤くなる。しだいにその表情がにへらと弛み、恋人との風呂に心を弾ませながら急いで帰っていった。

★

「作戦完了――と言いたいところだが、お前たちは独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「……はい」

戦士たちの帰還は、それはそれは冷たいものだった。

腕組みで待っていた千冬さんに俺たちはきつい説教を受ける。ちなみに俺は違反をしてないのにこの仕打ち、連帯責任だそうで……不

幸だ。

今は大広間で全員正座。この状態でもう３０分は過ぎた気がする。セシリアの顔色が真っ赤から真っ青になりはじめているのでそろそろ勘弁してください。

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで……。け、けが人もいますし、ね？」

「ふん……」

山田先生のおかげでようやく解放された。だけどまだ怒っているのか千冬さんはじーっとこっちを睨んでいる。

「……しかしまあ、よくやった。全員、よく無事に帰ってきたな」

「え？　あ……」

なんだか照れくさそうな顔をしていたように見えたが、すぐに背中を向けられて表情は見えない。

なんだかんだで俺たちの身を案じてくれている千冬さんに心の中で感謝を言う。直接言うと本人は嫌がるだろうからな。

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。ちゃんと服

を脱いで全身見せてくださいね」

女子の診断が始まるようなので俺と一夏は急いで部屋から出た。

襖に俺たちは背中を預けて深く息を吐く。

「なぁ、ひろ……」

「なんだ一夏？」

「仲間を、守れたよな？　俺たちは」

俺と――白式。

お前と――ダブルGは……。

と言いたげにきく一夏に俺はふっと笑いかける。

「みんなと一緒に帰還した。……それが答えだ」

一夏に拳を向けて、互いにこつんと軽く叩いた。

★

「「「「「はい、あーんっ！」」」」」

差し出される刺身×５。

現在夕飯時なのだが、左右前にいるフェイト、シャル、鈴、ラウラ、セシリアはいきなり俺の刺身を奪って、食え！　と命令してきたのである。

ちなみにこういう時に騒ぐ女子たちは専用機持ち共に睨まれそそくさと逃げた。

「あの……飯くらい自分で食べたいんですけど」

「ダメ。ひろは今日福音にやられたんだよ？」

「だからひろが元気になるまで私たちがお世話するの」

いや、もう元気いっぱいですよ？

「嘘おっしゃい。腕に包帯を巻いてますわ」

心の声を聞かれた!?　山田先生は大げさなんだよ。すり傷程度で半ミイラ男にされたし。

「いいから食え。夫婦であーんをするのは当たり前だろう」

「それともあんたはあたしのご飯が食べられないわけ?」

えー。なに、その俺の酒は飲めねえのかって台詞は。

「ああもう、わかったわかった。食えばいいんだろ、食えば」

さすがに俺もあーんは恥ずかしいんだけどな。とりあえず一番近い鈴のから食う。

「あーん……うん、うまい」

自分で食べたらもっとうまいんだろうけど、急かされてラウラ、セシリア、シャル、フェイトの順に食べていく。

「ホント、ここの料理はおいしいよねぇ」

うんうんと頷きながら自分のをパクパク食べる専用機持ち共。何故

かとっても幸せそうだ。

「……」

「……」

向こう側にいる一夏と箒は無言で食べている。時折箒がチラチラと一夏を見ては顔を赤くしているが、キング・オブ・朴念仁の一夏は黙々と食事を続けていた。

「はい、次は野菜だよ♪」

何でこんな時に地獄の教師は来ないんだ。ちくせう。

★

ざぁ……。ざあぁん……。

夕食の後、旅館を抜け出した俺は砂浜にビニールシートを敷いてごろんと仰向けに寝転がる。

夜空に煌めく星と満月がとても綺麗だ。

（そういやこの風景、夢で見た気がするな……）

起きた頃はまだ覚えていたような気もしたが、今はほとんど忘れてしまった。

届かないとわかりきっているのに星へと手を伸ばす。

「……あ、流れ星」

一瞬キラッと光り、消える。

「あ、ひろ……？」

突然名前を呼ばれて、俺は起き上がり振り向く。

月明かりに照らされて姿が浮かんだのは、浴衣姿のフェイト。

「どうしたフェイト？　旅館を抜け出したのがばれたら怒られるぜ？」

「クス、それはひろもだよ。隣、いいかな？」

こくりとうなずいて右側を座れるようにした。

「お邪魔します」

フェイトが座ると、シャンプーの香りが鼻を刺激して妙にドキドキする。

「綺麗な星空だね」

「ああ……」

それ以上の会話は続かず、波の音をＢＧＭに星空を眺めていた。

「あ、あのね、ひろ」

「ん？」

「実は、ダブルＧについてまだ話してないことがあるんだ」

ダイゼンガーと出会ったあの日の夜。フェイトにいくつかダイゼンガーについて聞いたことがある。

誰か（束さんだったが）に盗まれたこと、ファーストシフトで内蔵武器が追加される予定だったことなどいくつかな。

ちなみにセカンドシフトした際に生まれたトロンベにはロックがかかっているらしく、ほとんどがブラックボックス化していた。

「ヴァルシオンとヴァルシオーネもなんだけど、実はあれ……元々は１０メートル以上の『人型機動兵器』なんだ。いわゆるスーパーロボットってやつかな」

はい……？　スーパーロボット？　マジで！？

「テスラ・ライヒ研究所創設者、ビアン・ゾルダーク博士はいずれ異星人が来ると予言したけど……まあ、相手にされなくてね。しかもＩＳの登場で宇宙進出が後退しちゃったから設計図だけを残す形となった」

ビアン博士は束さんとは違った意味で天才だったらしい。

「私の姉さんがその設計図を元にサイズダウンさせて作ったのがヴァルシオンとダブルＧ」

フェイトはそこでふぅっと息を吐く。俺は次の言葉を待った。

「それで、ダブルGには二号機があるの。それがさっきひろが言ってた『アウセンザイター』と同じものなんだ」

「それで驚いてたのか」

「うん……」

偶然……なのかは知らないが、作られてない物がいればそりゃ驚くわな。

俺も起きてダイゼンガーを起動したらセカンドシフトしていて、隣にはトロンベがいたから驚いたさ。

「さてと、そろそろ戻るか。織斑先生にばれたら3時間は説教される」

「そ、そう、だね」

どこか残念そうな表情のフェイト。とくに気にはせずに立ち上がる。

「きゃっ！？」

フェイトも立ち上がったが、足を滑らす。

「っと、大丈夫か？」

「う、うん。平気。ありがとう」

後ろから抱きしめるように受け止めた。すぐに離そうとしたが、フェイトが俺の手を掴んで離さない。

「ふ、フェイト？」

「ひろ……。私、ね。あなたのことが――」

ゴニョゴニョとつぶやくフェイトの前に青い何かが浮いていた。

目を凝らして見ると、それはフィン状の浮遊物体のようで、その先端が四角いスリットになっている。

「……ブルー・ティアーズ……」

そのビット。

それが俺の額に砲口を向けていた。

キュィィィ……。

「なんとおぉっ！！」

ズバシュッ！！

無理矢理手を外し、のぞけって避けた。間一髪、ＢＴレーザーが俺の髪を焼き切る。

「ほぅ……」

「ひろ……居ないから心配して探してたのに、こんなところでフェイトと何してるのかな……？」

「ふふっ、うふふふふっ」

回避行動で振り向いた俺を待っていたのは、三人の突き刺さるような視線。ちなみに順番はラウラ、シャル、セシリア。

「無駄かもしれないけど言っておく、俺は何もやっていない！」

三十六計逃げるにしかず。縮地と呼ばれる歩法を使って俺は逃げ出した。

☆

「どこに行ったのよあのバカは……」

いなくなったひろを探して数分。岩場の方で人影を見つけた。

（こんな夜中に泳いでいたのかしら？）

見つからないよう隠れて甲龍のハイパーセンサーを起動。岩場に座る人影を見た。そこにいたのは水着を着た一夏。

ぼーっと海を眺めているとその背後に水着姿の箒が現れる。

箒にしては大胆なビキニ。ただでさえ大きい胸がより強調しており、一体何を食ったらあんなに大きくなるわけ？　やっぱり牛乳？　あれは駄目だ四年間毎日一リットルも飲んでるのに効果がない。そんなものは都市伝説だ。

――話が逸れた。

無粋とわかっていながらも二人を観察する。

もう一夏への恋愛感情は薄れたはずなのに良い雰囲気の今、胸の奥がちくりと痛む。

（ああ、そうなんだ……）

まだあたしは一夏のこと好きなんだ。だから悲しい。

始めっから一夏と箒の間に割り込む余地なんかなかったんだ。

――悔しい。あたしにもっと勇気があれば未来は変わってたかもしれないのに。

「……っう」

頬に生温かい何かが流れ落ちた。

今だけ。流し尽くしたらあたしはいつものあたしに戻る。

そういえばあたしが泣いてるといつもひろがすぐに来てくれたっけ。

両親が離婚した時や転入初日の夜。

今も、すぐに駆けつけてくれるのかな？

「――鈴！？　そこどいてくれ！」

ひろの声？　上を見ると――

――男の子が空から降ってきた。

「きゃあっ！？」

あたしの上にひろが落ちてきて、とっさに甲龍を展開、怪我はしなかった。

ちなみにヴァルシオン戦でボロボロになったけど、パッケージと一緒に予備パーツも送られてたので修理は終わっている。

（あれ……？　唇が温かい）

つぶっていた目を開けた。

（近い！？　っていうか今！？）

ひろの顔が超至近距離にあって、あ、あたしの、く、唇とひろの唇がっ、くっついていた！

「あ……」

ひろは顔を真っ赤にしてすぐに離れた。もう少し感じたかったなぁ。

「わ、悪い。事故だから今のは忘れてくれ！」

逃げた。その後をセシリアたちが追っていく。

……唇にはファーストキスの感触が残っている。しかもさっきまでの辛い思いと涙はキス一つで吹き飛ばされた。

「まったく、もう少し優しくしなさいよ」

ま、あいつにムードを期待しても無駄か。

ともかく、今はどこで何をしてたのか問い詰めてやるんだからね！

「行くわよ！　甲龍！」

あたしは空に上がり、ひろの後を追いかけはじめた。

「ギャー！　鈴とフェイトも参戦してきやがったー！？」

「今、鈴と何かあったよね？　何があったのか教えて欲しいなぁ」

フェイトのやつ、相変わらずそっち方面の勘は鋭いわね。

「浮気は許さん！」

「逃がさないから！」

「なんでわたくしとは何も起きないんですの！」

「不幸、だー！！」

☆

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めても４２％かぁ。まあ、こんなところかな？」

空中投影ディスプレイに浮かび上がった各種パラメータを眺めながら、その女性は無邪気に微笑む。

子供のように。天使のように。

月明かりが照らすその顔は、いつもと変わらない。

いつだってどこか退屈そうな顔の、篠ノ之束その人だった。

「んー……ん、ん～」

鼻歌を奏でながら、別のディスプレイを呼び出す。そこでは白式第二形態とダイゼンガー、アウセンザイターの戦闘映像が流れていた。

それを眺めながら、束は岬の柵に腰掛けた状態でぶらぶらと足を揺らす。

「は～。それにしても白式には驚くなぁ。まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて、まるで――」

「――まるで、『白騎士』のようだな。コアナンバー００１にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な」

森から音もなく千冬が姿を現す。漆黒のスーツに身を包んだその姿は、闇のすべてを引き連れているかのような静かな威厳に満ちていた。

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

ふたりは互いの方を向かない。背中を向けたまま、束はさっきまでと同じようにぶらぶらと足を揺らし、千冬はその身を木に預ける。

わざわざ顔を見せる必要はない。確かな信頼がふたりの間にあるからだ。

「ところでちーちゃん、問題です。白騎士はどこに行ったんでしょうか？」

「……白式を『しろきし』と呼べば、それが答えなんだろう？」

「ぴんぽーん。さすがはちーちゃん。白騎士を乗りこなしただけのことはあるね」

かつて『白騎士』と呼ばれた機体は、そのコアを残して解体され、第一世代作成に大きく貢献した。そしてそのコアは、とある研究所襲撃事件を境に行方がわからなくなり、いつしか『白式』と呼ばれる機体に組み込まれていた。

「それで、うふふ。たとえばの話、コア・ネットワークで情報のやりとりをしていたとするよね。ちーちゃんの一番最初の機体『白騎士』と二番目の機体『暮桜』が。そしたら、もしかしたら、同じワンオフ・アビリティーを開発したとしても、不思議じゃないよねぇ」

「……」

千冬は答えない。しかしそんな反応はお構いなしに、束は続ける。

「それにしても、不思議だよねえ。あの機体のコアは分解前に初期化したのに、なんでなんだろうねー。私がしたから、確実にあのコアは初期化されたはずなんだけどね」

「不思議なこともあるものだな」

束はくるりと回って千冬の方へ向く。

「でもねちーちゃん。もっと不思議なことがあるんだよ」

「……ダブルGの新しい武器『アウセンザイター』か？」

「その通り、いきなり第二問。ダイゼンガーのコアは何番目のものでしょうか？　ちなみにヒントはズバリ、あの日だよ！」

少し考え込む千冬。はっとして木から体を離す。

「まさか……『ひろが始めて動かした実験機、コアナンバー０００』なのか？」

「またまた大正解～！　ゼロちゃんが自分からパートナーになりたいって私に言ったんだよ？　しかもね、一個分じゃ動かないから二個分使ったんだ。ここまで言えばわかるよね？　アレは『無人型のＩＳ』なんだよ♪」

さすがの千冬も絶句した。あの日とは約１０年前、ＩＳを発表する前に束のラボに侵入したひろが実験機を動かして遊んでいた時のことである。

その日束が初めて他人に興味を示した。

もちろん当時もなぜ男が動かせたのか調べたがわからず、実験機だから故障してたかもしれないと結論付けた。

「すごいよねぇ。コアが二つに分かれてその一つがＩＳとして生まれたんだから。『ＩＳがＩＳを作った』んだよ」

ＩＳは進化する。一番わかりやすい例がセカンドシフトだ。ＩＳが自分で装甲を新しく増設し、武装も作る。だが、アレは異様だ。

「私はね、あれがダイゼンガーのワンオフ・アビリティーなんじゃないかなって推測してる」

「……そうか」

千冬は考えるのを止めた。わからないものをいくら考えたところで機械に精通してない自分が答えを導き出すのは無理なのだ。そういうのはもっぱら目の前の幼なじみの役目。

「そっちに関してはお前に任せるよ。ついでに私も一つたとえ話をしてやろう」

「へえ、ちーちゃんが。珍しいねぇ」

「とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、そしてどこかのＩＳの暴走事件だ」

束は再び背を向けて黙る。千冬は言葉を続けた。

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ」

「へえ、不思議なたとえだねぇ。すごい天才がいたものだね」

「ああ、すごい天才がいたものだ。かつて、１２ヵ国の軍事コンピ

ューターを同時にハッキングするという歴史的大事件を自作した、天才がな」

束は答えない。千冬も、もう言葉を続けない。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「そうなんだ」

岬に吹き上げる風が、一度強くうなりを上げた。

「――――――」

その風の中、何かをつぶやいて……束は消えた。

忽然と。突然と。

「……」

千冬は息を吐き出して、後頭部を押しつけるように木に寄りかかる。

その口元から漏れる声は、潮風に流れて消えた。

★

翌朝。朝食を終えて、すぐにＩＳ及び専用装備の撤収作業に当たる。
そうこうして１０時を過ぎたところで作業は終了。全員がクラス別のバスに乗り込む。

鈴が一組のバスに猫よろしく荷物台に隠れてたが、敢えなく千冬さんに見つかり猫掴みされて二組のバスへ連行されたのはご愛嬌ってことで。

「はぁ～……」

座席に座った今の俺の状況は、一言でいうとボロボロだ。

昨日は一時間くらい追い回されたあげく、旅館を抜けたのがばれて千冬さんに大目玉。睡眠時間は三時間ちょい。それにあの労働なのだから、もう死にそうだ。

一夏も同じようにお叱りを受けたが、俺よりも精神的に消耗してない分結構まし。

「あ……水がもうないな。誰か飲み物持ってないか……？」

しんどくてそう声をかけてみたが、

「……ツバでも飲んでいろ」とラウラ。

「知りませんわ」とセシリア。

「あるけどあげない」とシャル。

「ふんっ」と不機嫌そうに顔を逸らすフェイト。

一夏と箒は互いの顔を見ては逸らす、というのをしてるので昨日何かあったと推察。声をかけずらいので論外だ。

☆

（うーん、ちょっと可哀想だったかな……）

さっきはつい冷たく返したものの、シャルロットはひろのぐったりとした様子にちくちくと良心を痛めていた。

（まあ、昨夜は結局何もなかったんだし、そろそろ許してあげようかなぁ）

荷物からお茶のペットボトルを取り出す。乗り込む前に自販機で買っておいたのが役に立ちそうだった。

（みんなは動かないみたいだし……よしっ！）

☆

（さすがに冷たかったかしら……）

セシリアは、ひろがガックリと肩を落としたのを見ながら、少しそわそわとしていた。

せっかく優しくするチャンスだったのに、つい昨日のことを思い出してあんな態度を取ってしまった。

よくよく考えれば、他の女子が非好意的なのだから、千載一遇のチャンスである。

（そうと決れば――）

鞄の中で横になっているペットボトルへと手を伸ばす。元々自分用に用意していたものだが、思わぬところで使えそうだった。

（膳は急げですわね……コホン）

☆

（さっきは、何か別の言い方があったのではないか……？）

そんな自問自答を繰り返しているのは、今回のビーチで新しい一歩を踏み出したラウラだった。

昨夜のことで真っ先に冷たい反応をしてしまった自分が恨めしい。あそこで笑顔を見せてこそいい女というものではないか。そんなことを考えながら、ではどう巻き返すかと考えるラウラ。

（そう……だな。どうも喉が渇いているようだし、朝方に買ったお茶が使えるか）

さっき取り出しておいたペットボトルをもてあそびながら、どう渡したらいいかと考える。せっかく他の女子が引っ込んでいる今こそ、チャンスだと見据えながら。

（うむ。さりげなく隣に座って渡すか。……そ、それなら帰りはずっと隣にいられるな）

☆

（ううう……やっちゃった）

せっかく昨夜はいい雰囲気になったのに、はっきりと否定されたこ

とに内心ムッとして、ついさっきはつらく当たってしまった。

（さすがに独占欲が強過ぎると男の子は引いちゃうよね……？）

ただでさえ我が強い女子がひろのそばに沢山いる。しかもみんな魅力的なのだ。胸だけは一番大きいが、それだけで判断するような人でもない。

（みんなもきっと、今優しくしようとするだろうし、出遅れるわけにはいかない！）

バスに乗るまでに買ったペットボトルのお茶をぎゅっと握りしめて、フェイトは立ち上がった。

★

「はぁ……寝るか……」

どうせ酔う前に寝るんだ。そうしよう。

「「「「ひ、ひろっ」」」」

「ん？」

四人の声が同時に聞こえて、俺は振り向く。それと同じタイミングで、車内に見知らぬ女性と女の子が入ってきた。

「ねえ、織斑一夏くんと西本宏範くんはいるかしら？」

「織斑は俺ですけど」

「何かご用でも？」

一番前の席にいたことが幸いした。俺たちは素直に返事をする。その女性は、おそらく２０歳くらい。鮮やかな金髪が夏の日差しで輝いていた。

その後ろに隠れている女の子はたぶん１３、４歳くらい。紫色の髪が少し外側に跳ねており、じっと俺を見ている。

女性にほらと押し出された女の子はフリルがふんだんに使われたドレスを身に纏っていた。暑くはないのだろうか。

「えーと、キミは……？」

「わ、私はラトゥーニ・ファイルス。ヴァルシオンに乗せられていたの」

「そっか。怪我とか――」

ないか？　と言う前にいきなりラトゥーニの唇が俺の頬に触れた。

「ちゅっ……。おっ、お礼には……これが良いってナターシャが言ってたから……。あ、ありがとう……それじゃっ」

ラトゥーニは顔を真っ赤にさせながら逃げて行く。

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ」

俺にも聞こえるように言って一夏を興味深そうに眺めていたナターシャなる人は一夏の頬にキスをした。

「ちゅっ……。これはお礼。ありがとう、白いナイトさん。そちらのサムライもありがとね★」

俺にはウインクをする。大抵の男なら落とせそうな可愛らしいもの

だ。

「え、あ、う……？」

「じゃあ、またね。バーイ」

ひらひらと手を振ってバスから降りるナターシャさんを、俺たちはぼーっとしたまま手を振り返して見送る。

……。えーと。

「……」

なんとなく、なんとなーく、イヤな予感がして、俺たちは振り向いた。

「浮気者め」

「ひろってモテるよねぇ」

「本当に、行く先々で幸せいっぱいのようにですわね」

「……ロリコン」

「はっはっはっ」

すたすたと歩いてくる五人。ああ……なぜか箒以外の四人がペットボトルとフォークを順手に持っている。箒は木刀。

「「「「はい、どうぞ！」」」」

「この……軟弱者が！」

投げつけられるペットボトル×４。内容量５００ミリリットルは、正直死ねる。まあ、フォークで刺されるよりはましだけどさ……不幸だ。

☆

「……」

バスから降りたナターシャは、目的の人物を見つけてそちらへと向かう。

「おいおい、余計な火種を残してくれるなよ。ガキの相手は大変な

んだ」

そう言ってきたのは、千冬だった。ナターシャは、その言葉に少しだけはにかんで見せる。

「思っていたよりもずっと素敵な男性だったから、つい」

「やれやれ……。それより、あの子を自由にさせていいのか？」

柱に隠れているラトゥーニに千冬は視線を向けた。

「どうも精神操作を受けていたみたいで名前……かは知らないけどラトゥーニという呼び名とどこかの組織で実験動物にされていた、ということしかわからなかったわ。コアを手に入れたこととＩＳ適性がＡＡだから政府は一応戦力とするみたいよ」

ラトゥーニを見て、母親のように微笑むナターシャ。

「ラトゥーニは私が引き取ったの。すっごく可愛いわ。私のお古もぴったりだったし♪」

「そうか……お前も元気そうでよかった」

「ええ、それは問題なく。――私は、あの子に守られていましたから」

ここで言う『あの子』とは、つまり暴走によって今回の事件を引き起こした福音のことを指していた。

「――やはり、そうなのか？」

「ええ。あの子は私を守るために、望まぬ戦いへと身を投じた。強引なセカンドシフト、それにコア・ネットワークの切断……あの子は私のために、自分の世界を捨てた」

言葉を続けるナターシャは、さっきまでの陽気な雰囲気など微塵も残さず、その体に鋭い気配を纏っていく。

「だから、私は許さない。あの子の判断能力を奪い、全てのＩＳを敵に見せかけた元凶を――必ず追って、報いを受けさせる」

福音は、そのコアこそ無事であったが、暴走事故を招いたことから今日未明に凍結処理が決定された。ちなみに新しく手に入れたコアはなぜか初期化されていたらしい。

「……何よりも飛ぶことが好きだったあの子が、翼を奪われた。相手が何であろうと、私は許しはしない」

「あまり無茶なことはするなよ。この後も、査問委員会があるんだろ？　しばらくはおとなしくしておいたほうがいい」

「それは忠告ですか？　ブリュンヒルデ」

ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』その総合優勝者に授けられる称号・ブリュンヒルデ。

千冬はその第一回受賞者であるが、正直その名前で呼ばれることは好きではなかった。

「アドバイスさ。ただのな」

「そうですか。それではおとなしくラトゥーニと静かにしてます。……しばらくは、ね」

一度だけ鋭い視線を交わしあった二人は、それ以上の言葉はなく互いの帰路に就く。

――またいずれ。

そんな言葉が、ふたりの背中にはあった。

ユア・ネーム・イズ（後書き）

どうも宏明です

ナ「ナターシャ・ファイルスよ」

ようやく臨海学校編終了。アニメではハブられたナターシャさんもしっかり登場したぜ。

ナ「何で私はハブられたのかしら？　あれじゃあタイトル詐欺よ！」

まあ、大人の事情ってことで。

それで、ヴァルシオンの操縦者はラトゥーニでした。さらに亡国機業の人たちも原作より早めに登場。これから活躍……するか？

ナ「ラトゥーニ可愛いわラトゥーニ」

何かナターシャさんが壊れた！　ちなみに学園がラトゥーニを引き取らなかったのは単に厄介事を持ち帰りたくなかったから。学園酷いな。

さて、次回からは夏休み編なわけですが……全然プロットが出きてないです。原作４巻の内容をやるのも味気ないしなぁ。

ナ「なら、私の所に来てラトゥーニと三人でデートする話とかはどうかしら？」

いや、無理でしょ。ひろはナターシャさんの連絡先知らないんだから。

ナ「残念。もっと出番が欲しいわ」

それが本音！？

あ、忘れるところだったけど鈴の初恋物語はこれで決着です。

ナ「青春時代ってやつね。私は……枯れてたわ。ぐすん」

ま、出会いがなさそうだしね。次回もお楽しみに。

ナ「シーユー♪」

外伝・とある少年の決意と出会い（前書き）

今回のは本編より約二年前の中学生編です。

外伝・とある少年の決意と出会い

誰かを守る……。

それは敵を殺すことよりも難しい。そしてそれは自分にとって弱点でもある。だからある人は言った。

ならば誰よりも強くなればいい。そう……史上最強になれば、と。

まあ、これを教えてくれた人はもう故人だけどな。

俺は西本宏範。今は道場で大の字に寝転がり天井を見上げていた。

じいちゃんが死んで家は売り払ったが、道場だけは残してずっと使い続けている。

先月、とある事件に遭遇し、俺は傷を負った。

その時に痛感した。俺は弱い。

大事な親友を誘拐しようとした連中から守れず、自分の身を守ることすら出来なかった。そしてそのせいで親友の姉や幼なじみの女の子を泣かせた。

もう一度言おう……俺は弱い。

「ふぅうぅぅ……」

体を起こし深呼吸。余分なものを吐き出して木刀を握りしめ、素振りを始める。

（俺は悲しいことも、辛いことも、理不尽な暴力を振るうやつらから、俺の大切な人たちを守りたい。そしてそれらを全て斬り断つ剣となる）

これは俺が中学生の頃の話。

★

「しかし、どうすればいいのか……」

素振り二万回を終えて休憩。改めて考えてみるが、俺は行き詰まっていた。

うちの剣術は基本的なこと以外、独学もしくは誰かのを盗めという変わった所なのだ。

俺もそれに習って幼なじみの親が教えていた篠ノ之流剣術や古武術を盗んだり、漫画のやつを参考にしたが、それで負けたのだから今

まで通りでいくわけにもいかない。
どこかに弟子入りしようにも『実戦を想定した』ものなど今の世中々無いのだ。
兄弟子に当たる人は現在行方がわからないから連絡先を知らない。

「っと、もうこんな時間か」

時刻は昼の１２時。新たに増設したシャワーで汗を流し、道場を後にした。

★

「――！」

「なんだ？」

昼食を五反田食堂で取ろうと思った矢先、数人の高校生が小学生の女の子になにやら怒鳴り散らしていた。数人の野次馬が成り行きを見ていたが、奴らに睨まれると通報もせずにそそくさと去って行く。

「ごめんなさい……」

「おうおう、お嬢ちゃんよ。ごめんで済んだら警察は要らないんだよ」

「そうだぜ。よっちゃんの骨はか弱いんだ。治療費としてその百円玉の束を寄越せば許してやるからよ」

「でも、これはお店の」

「痛い目に遭いたいのか？」

「ひっ！」

……何だこれ。ひと昔前の撮影か？　どう見ても男の腕は元気そうだし、ナイフで脅してる。奴らだけ昭和からタイムワープでもしてきたのだろうか。

ＩＳの登場で女尊男卑の世界へとなったが、所詮虎の威を借りたなんとやら。見た目で不良に見える輩に世の女性達は相変わらず恐れているのだ。

何を言いたいのかというと、ようは女も立場や力が弱い弱者にたいして今女の子を怒鳴っている男どもと同じことをしてるのだ。

そして俺はこういうのを見たら素通り出来ない質なんだよな。

気配を消して不良たちに近づきナイフを持っていた奴の腕を掴み――

ゴキッ！

「があっ！？」

関節を外しナイフを奪う。

「て、てめえ。なにしやがる！」

「なにって、ガキ相手にナイフを使って脅してる屑の関節を外しただけだが？」

屑どもが俺から距離を取って睨む。俺は女の子の前に立つ。

「てめえ……今自分が何をやらかしたかわかってるのか？」

「あ？　二度も同じこと言わせんな。それとも……今度は腕といわず全身の関節を破壊してやろうか……？」

独学で得た殺気を飛ばす。ついでにナイフの刃をちらつかせる。

「ひぃっ！？」

「こ、こいつやべぇ！」

「覚えてろ！」

不良どもはこれまた昭和チックな捨てセリフを言いながら逃げて行った。

「やれやれ、覚悟も無いくせに人に刃物を向けるな」

折り畳み式ナイフを仕舞い、さっさと五反田食堂に向おうとしたが服の裾を何かに引っ張られる。

「あ、あの」

そういえば女の子が絡まれていたんだっけな。振り向いた先には栗色の髪をツインテールにした女の子がいた。服の上にエプロンをしてるところから料理、もしくは喫茶店などのお手伝い中かもしれない。

「助けてくれてありがとうございます！」

女の子がペコリとお辞儀。ツインテールがぴょこぴょこ動いて少し可愛いと思った。

「私、高町なのはっていいます。助けてくれたお礼をしたいんですけど」

「いや、当然のことをしたまでだからお礼とかは要らないよ」

「でも……」

この子は一度決めると曲げないタイプだな。どうやって話を逸らして逃げるか……。

ぐ～。

「……」

「……」

女の子が口元を押さえて笑いを堪えている。
なんて空気を読まない腹だ。

「ぷっ……えっと、うち喫茶店をやってるんでお昼をご馳走させてください」

「……そうさせてもらうよ」

完全に逃げ時を逃した俺は女の子を送るついでに昼飯をご馳走になることにした。

★

「ここが私の家族が経営してる喫茶店『翠屋』だよ！」

先ほど助けた少女高町なのは。俺はなのちゃんと呼ぶことにした。
歩きながら自己紹介をしてわかったことは、なのちゃんは俺の一つ下らしい。

で、その喫茶店に着いた。駅前にあり、今日は日曜なので昼を少し過ぎた今でも女子高生のお客さんがそれなりにいた。

「ただいまー」

「お帰りなのは。少し遅かったね？」

黒髪をみつあみにし、少し大きめな丸い眼鏡をかけた女性がなのちゃんを出迎える。

「ちょっと不良さんに絡まれて」

「ええっ！？　だ、大丈夫？　怪我してない！？」

「大丈夫だよひろ君が助けてくれたから」

「ひろ君？」

女性が俺に気付いた。いや、一見おとなしそうな人だがどこか俺に近いものを感じてつい、気配を消していたんだ。

「ほぅ……。君、何か武術をやってるのかい？」

「！？」

いつの間にか後ろに黒髪の青年がいた。

（この人……できる）

未熟者だが少しは気配を感じ取れるのに全く気付かなかった。

しかも何も持っていないのに喉元に刃物を突き付けられたような殺気。

「お兄ちゃん、ひろ君を恐がらせないでよ。ほら、こっちの席に座って」

なのちゃんが俺の手を取って席に座らせる。お姉さんはニヤニヤと笑っているが、お兄ちゃんとやらは更に視線を強めた。どうやら千冬さんと同類のようだ。

★

「……ふぅ。うまかった」

食後にオレンジジュースを飲んでると厨房から栗色のストレートロ

ングな女性がなのちゃん、お姉さん、お兄ちゃんとやらと一緒にこちらへ来た。

「お前に兄と言われる筋合いはない」

「言ってないですよね！？」

こっちの思考を読まないでください。

「まったく、ごめんなさいね。恭也ったらなのはのことになるといつもこうなの」

「いえ、知り合いに似た人が居ますから慣れてます」

なのちゃんが大人になったような女性が苦笑した。

「私はなのはの母、桃子よ。娘を助けてくれてありがとう」

「いえいえ、たまたま通りかかっただけですからって母！？　てっきり姉かと思ってました」

「うふふ、ありがとう」

歳の離れた兄妹だったからもっと歳を取ってるかと思ったらこんなに若いし、びっくりした。

「私は長女の美由希よ」

「……恭也だ」

人懐っこそうな笑顔を向ける美由希さんとは対照的に恭也さんは敵意剥き出しだ。まあ、可愛いなのちゃんに悪い虫を付けないようにするためだろう。

「お店はいいんですか？」

「ああ、それならもうひろ君だけだから大丈夫よ」

周りを見ると確かに客が俺以外いなかった。いつの間に。ま、それならちょうどいい。昔じいちゃんに聞いた古流剣術について少しきいてみるか。

「恭也さんと美由希さんにちょっと質問してもいいですか？」

二人は首を少し傾げたがこくりとうなずく。

「俺はこれでも武芸者の端くれ、お二人が相当な実力者だと思います。それで……」

何かを感じ取ったのか、二人の雰囲気が切り替わる。それでも口を開いた。

「……『御神流』をご存知ですか？」

「……君はそれをどこで知った？」

「昔、俺を育ててくれたじいちゃんが言ってました。御神流は中々の使い手だと」

じいちゃんは若い頃、全国を歩き回って強い奴と決闘をしまくっていたらしい。いわゆる武者修行ってやつだな。俺はその武勇伝を思い出し、とりあえず今目の前にいる二人にきいてみた。

「知ってどうするんだ？」

恭也さんの俺を見る目がお兄ちゃんからまったく別物になる。

「手合わせを願う」

弟子入りする気はない。戦って、俺に足りないものを盗む。それがうちのやり方だ。

そして御神流は銃弾よりも速く駆ける歩法があるらしい。これからはおそらく必要になる。

「俺たちが御神流の使い手だと知ってたのか？」

……え？

「お二人は御神流の使い手……なんですか？」

「え？」

「？」

空気が凍った気がする。俺は単に知ってれば儲けぐらいのつもりできいたのにまさかいきなり当たりだとは思わなかった。

「そ、それじゃあ私は仕事に戻るわね」

「わ、私、宿題しなきゃ。ひろ君、ゆっくりしていってね」

桃子さんとなのちゃんは逃げるように立ち去った。さすが親子というべきか挙動が同じだったな。

「えっと、ひろ君のおじいさんの名前はなんていうのかな?」

「竜真です。西本竜真」

「やっぱりあの人か。西本でもしやと思ったが」

小声で話し合う恭也さんと美由希さん。

どうやらじいちゃんとは知り合いのようで。

「じいちゃんとは知り合いなんですか?」

「うん。小さい頃に二、三回会ったことあるんだ。父さんと人間とは思えない動きで試合をしてたから今でも覚えてる」

美由希さんは当時を思い出してあははと苦笑。

ま、じいちゃんは色々と規格外な人だったからな。曰く、天狗と戦ったことがある。

曰く、戦闘機や戦艦を刀一本で断ち斬った。

裏世界では名前を聞くだけで一流の殺し屋は裸足で逃げ出すなどエトセトラ。

「試合に関しては竜真さんからもいつか孫と試合して欲しいとお願いされてたからいいよ。……それなら合法的にヤレルな」

……最後の部分は小さく聞こえたけど聞かなかったことにする。

「ねえ、ひろ君。何でそこまでして強くなりたいのかな？」

「……実は先月、とある事件に巻き込まれたんです。その時、俺は家族同然の親友を助けることが出来なかった。それに死にかけた」

病室で目を覚ましたら目の前には涙でぐしゃぐしゃになった鈴がいて、千冬さんは馬鹿者と言いながらも俺を抱き締めてくれた。

ああ、俺は独りじゃないってことに気付かせられた。

「だから俺は理不尽な暴力を振るう奴らから大事な人たちを守りたい。そして悲しいこと、辛いこと、怖いこと、それら全てを断つ剣になると決めた。だから俺は強くなりたいんです」

想いだけでは暴力に踏み躙られ、力だけで守れるほど世界は単純じゃない。

「そっか……ね、恭ちゃん」

「ふ、そうだな」

いや、何で笑ってるんですか二人とも。ここはそんな場面じゃないと思うんですけど。

「私たちと同じだから嬉しいだけだよ」

また地の文読まれたし。

「だがなのははやらんぞ」

しつこいシスコンだ。なのちゃんとは『友達』なんだから何でそんな話になるかイミフなんですけど!?

★

時は夕刻。俺は高町家の道場にいた。もちろん試合をするためだ。

「……」

「……」

相手は美由希さん。通常よりも少し短い小太刀サイズの木刀を構えている。『御神流』は小太刀二刀が主流らしい。

俺は普通の木刀を構えていたが、動けないでいた。

「来ないならこちらからいくよ！」

動き出す美由希さん。集中しろ、少しでも気を抜けばやられる。

「たあっ！」

右の木刀で鋭い突きを放ってきた。俺は受け止めずに時計回りに回って避け、美由希さんの背中に左薙の一撃を打ち込む。

飛天御剣流・龍巻閃

るろうに剣心の主人公が使う剣術。

二段構えというううちとは違う流派だが、意外と実戦で使えるから俺は好んで使う。

ぶぉんっ！

俺の一撃はあっさりとかわされ空を斬る。

美由希さんはこちらへ向くと踏み込み、逆手に持ち替えた左木刀を下から上に斬り上げた。

ガンッ！

袈裟に打ち下ろして左木刀を止め、すぐさまその場からバックステップ。右木刀の追撃を受けずにすんだ。

（速い。何とかヤマ勘が当たって一撃をもらってないが……）

袈裟、左薙、唐竹と連続斬りがくる。

（だが、守りは俺らしくない。こっちも攻めさせてもらう）

逆袈裟の一撃を弾き一歩踏み込む。

「はっ！！」

ガンッ！！！

唐竹割り。木刀二本で受け止めた美由希さんの表情が一瞬歪んだ。
ちっ、今のは防御ごと断ち斬るものなんだが受け流されてる。

「！！」

反射的に蹴りを放つ。美由希さんの蹴りを相殺。またバックステップで距離を取った。

（速さは向こうが上、力は俺が勝ってるな。だけどこちらの消耗が早い。そろそろ決めないとヤバイ……か）

居合いの構えを取る。この動作は次にどう動くかまるわかりだが、
そんなものは関係ない。相手よりも速く動いて斬ればいいのだから。

「はぁ……」

無駄な力を抜く。汗の一雫が頬を伝って床に落ちた。

「っ！！」

床を蹴り一瞬で美由希さんに肉薄し、下から上の縦一閃。今までで一番よく出来た一撃だったが――

「そこまで」

――俺の剣は空を斬り、背後へ回り込んだ美由希さんの木刀が首に当てられていた。

★

「さすが御神流、強いですね」

「ひろ君も中々だったよ」

美由希さんとの試合後に恭也さんとも試合して俺はボロ負けした。
今は道場に座って休憩中。

「もしかして最後に俺の背後を取ったあの動きが噂の歩法なんですか？」

「うん、『神速』っていうの」

たぶんただ速いだけじゃないんだろう。うん、やっぱり美由希さんと恭也さんに会えてよかった。行き詰まっていたのが嘘のように解消されて俺に必要なものがわかったしな。

「美由希さん、もう一回お願いします」

「クス、それじゃあ次は実戦形式でいくからね」

立ち上がった美由希さんは庭の方へ歩いていく。なるほど、実戦は必ずしも屋内でするわけじゃないしな。空がゆっくりと夕闇に染まっていく。

守りたいものがあるか？

俺はある。だけど俺は弱いからな。だから心も力も技も、全て鍛えて強くなるんだ。

外伝・とある少年の決意と出会い（後書き）

どうも宏明です

遅くなってすみませんでした。なんか燃え尽きたように書けなかったんです。まあ、いつも勢いだけで書いてるからよくあることなんですけどね（笑）

それで今回のは一夏誘拐事件後の話。

とらいあんぐるハート3とのクロスです。色々と設定や時系列をいじってますがそこは二次創作ということで納得してください。

次回もたぶん外伝になると思います。それでは次回もお楽しみに！

外伝2・武人とイギリスと黒い幽霊（ブラック・ファントム）（前書き）

中学生編は今回で終わりです。

展開の進み具合が早く、超展開ですがお付き合いください。

外伝2・武人とイギリスと黒い幽霊（ブラック・ファントム）

夜の神社。人気はなく視界が悪い。心を落ち着かせ必死に気配を探る。

ヒュッ！！

「ちっ！！」

後方から何かが飛来し、右にひねってかわす。俺の頬を擦ったそれは木の針。『飛針（とばり）』実戦では鋼鉄の針だ。

右側から殺気を感じて右手に持つ刀を横薙に振るう。

ガギィンっ！！

恭也さんの小太刀とぶつかって火花が散る。

「この」

負けじとこちらも飛針を投擲したが、あっさりとかわされてしかも右手の刀が金縛りにあったかのように動かない。どうやら鋼糸（こうし）に捕

らえられたようだ。

刀を手放し腰から仕込んでおいた小太刀を二刀抜く。目の前に恭也さんが迫り、逆手に持った右の小太刀を目視出来ない速さで振り抜かれた。

ガガギィィィン！！！

やや鈍い音とともに、俺の二刀は弾き飛ばされていた。

「くっ……！」

一瞬にして武器が手元から無くなったけど、まだ終わってはいない。

バックステップで下がりつつ追撃の刃を避け、両袖から錘付きの鋼糸を空中に浮かんでいる二刀へ飛ばす。

極細の鋼糸は柄に絡み付き手首をくいっとひねると、二刀は弧を描いて恭也さんへ迫る。

恭也さんは少し驚いたが、冷静にかわし鋼糸を斬った。

「！？」

恭也さんが消えた。例の高速移動術を使ったんだ。

飛針を手に持ったところで俺は動きを止める。

「俺の勝ちだな」

背後から首に冷たい刃を当てられていた。

「神速はやっぱチートですね。それ使われると大抵勝てません」

「ははっ、そういうお前は神速に反応してるじゃないか。それにさっきのは少し驚いたぞ。サーカスのピエロも真っ青だ」

高町家と出会って一年が過ぎた。俺は二年に上がり毎日とはいかないがこうやって夜に真剣を持った模擬戦をしている。

「はい、落とし物だよ」

「ありがとうございます。美由希さん」

無造作に落ちていた小太刀を拾い、先ほど手放した刀を美由希さんから受け取って鞘に納めた。

「次は美由希の番だ」

「うんっ」

数秒対峙して二人は消える。うん、本当に消えているんだよ。悟空たちがやってるように高速で動いて刃がぶつかり火花を散らす。

――御神流・奥義の歩法『神速』

何度も見ているが未だに俺はそれを扱える頂きには達しない。現在御神流で盗めたのは飛針や鋼糸の扱いと小太刀を使った戦法に暗器、そして『徹(とおし)』

ま、詳しいことは次の機会にしておこう。終わったようだしな。

「あう……」

「いい線だったが俺から一本取るにはまだまだだな」

こんな感じで今日も俺たちは強くなるために日々己を研磨する。

★

キーンコーンカーンコーン。

昔からずっと愛されたチャイムが鳴り響き、今日の授業は終わりを向かえた。

「ひろ、これからゲーセン行かねえか？」

「悪い弾。今日もちょっと用事があるんだ。また今度な」

去年知り合った赤毛混じりのロン毛男こと五反田弾の誘いを断り俺は急いで教室を出る。

平日の放課後に一夏や鈴、弾たちと遊ぶことが少なくなった。その分休日には必ず時間を割いているけどな。

「こんにちは～」

「あ、ひろ君。ちょうどよかった。すぐ入ってー」

「了解です」

翠屋へ来た俺は翠屋のロゴが入ったエプロンを纏いフロアに入る。

いつの間にかここのアルバイト店員になっていた。

「いらっしゃいませ」

少し前に鈴の中華料理店でもバイトをしてたから接客業には慣れている。

学校が終わればバイト、その後に恭也さんと美由希さんと模擬戦。
少しハードなスケジュールだが、結構充実した毎日だった。

★

「香港？」

「ああ、知り合いがそこの警備会社に勤めていてな。今度とある人たちと模擬戦をやるんだが、それに俺たちも参加するんだ。ひろはどうする？」

終業式を終え、明日から夏休み。恭也さんから香港へ一緒に行かないかと誘われた。
模擬戦の内容はとある武装隊との制圧戦。相手は銃を使うらしい。

「是非、お供させて頂きます」

もちろん即答だ。いずれ銃と戦ってみたいと思っていたからな。

「ならパスポートは準備しとけよ？」

「わ、わかりました」

パスポートかぁ……千冬さんに言わないとな。

★

「……と、いう訳でパスポートを発行するための保護者になって下さい」

『……まあ、犯罪を犯すためではないのならかまわん。本当に旅行なのだな？』

「ええ。あ、お土産にチャイナ服を買ってきましょうか？　千冬さんなら絶対に似合いますよ」

『大人をからかうな。本場のキムチとかでいい』

「了解です」

夜、仕事で家に中々帰って来ない千冬さんに電話をかけて許可をもらう。さすがに無許可でパスポートを発行するわけにもいかないしね。

香港には知り合いの旅行に同伴することになったと説明した。銃相手に戦ってきますなんて言えるか。

「ひろ、千冬姉元気そうだったか？」

受話器を置いたところで一夏が聞いてきた。さっきも千冬さんが一夏は元気かと聞いてきたし、相変わらずのシスコン、ブラコンなようで。

「元気そうだよ。あ、それと1週間後には一度帰ってくるってさ」

千冬さんの帰還を聞いて一夏は嬉しそうにシュークリームを食べた。あ、そのシュークリームは翠屋特製だぜ。

☆

ひろが香港へ行ってから三日後、俺は弾の家で格ゲーをしていた。
ちなみにこれは『Ｐｏｗｅｒｄ　Ｈｅａｒｔｓ』……パワードハーツっていうんだ。俺は筋骨隆々の格闘家を使い、弾は女剣士。

「ふーん、ひろのやつ香港に行ってるのか。っていうか去年の夏辺りから付き合い悪くなったよな。いったいなにをやってるのやら」

「聞いてもはぐらかして全然教えてくれねぇし、たまに傷だらけで帰ってくるからたぶん修行でもしてるんじゃねえか？」

「かもな。案外旅行じゃなくてめちゃくちゃ強い奴と戦ってたりして」

ぬわっ、弾のやつ超必殺技使ってきやがった。

「よしっ俺の勝ち。一夏は弱いな」

「うっせ、弾はひろに勝てねぇだろうが」

ひろはテレビゲーム関係はかなり強い。俺たちがあいつに勝てるのは運任せのやつだけだ。

『～♪』

ん？　携帯電話に着信だ。相手は……ひろか。わざわざ国際電話でかけてくるとは。

「悪い、ちょっとひろから電話だ」

「おう」

少し離れてから通話ボタンを押す。

「もしもし」

『一夏、急にかけて悪い。旅行は三日程度のつもりだったけどちょっと別の用ができてな。帰りはたぶん夏休みの終わりになる』

「そっか、寂しくなるな。ずっと香港にいるのか？」

『いや、――に行ってくる』

「ふーん、硬水には気をつけろよ」

『おう。土産は宅配で送っておくからまたな』

プツンと通話が終わった。

「ひろがなんだって？」

「もう少し帰りが遅くなるってさ。それで今度は香港からイギリスに行くんだと」

「な、なにぃー！　あいつ、英語喋れるのか？」

さぁ？　学校の成績では結構良かったと思うけど。

「そんなことより次はポ○モンで勝負だ。俺のル○アで負かしてやる」

「上等だ。俺のグ○ードンでボロクソにしてやんよ！」

「お兄！　友達来てんだからもう少し静かに――って一夏さん！？」

ドアを蹴り破って現れたのは弾の妹蘭。相変わらず仲が良くて羨ましい兄妹だ。

★

香港にある警備組織『香港国際警防隊』通称『警防』で俺は銃を持った相手と戦った。

まあ、銃を持った相手とは一年間前の一夏誘拐事件で少しやったから恐怖で動けなくなることはない。

あの時は向けられる前に攻撃して対処した。

銃っていうのは銃口を相手に向けて引き金を引くもの。相手の動きを読めば避けることも可能だ。

そんなこんなで模擬戦は俺たちの完勝。今はお土産を買って屋台で夕食さ。

「あ、きたきた。いっただきまーす」

運ばれてきたチャーハンと豚の角煮を食べる。

美味い。鈴の家の中華料理店でも食べられるけど本場だとまた格別だなぁ。

「ひろ君はもうお土産買ったんだっけ？」

「ええ、一夏や千冬さんにはキムチとかうまそうなのを五つ。鈴にはチャイナ服、弾、蘭ちゃんにもいくつか」

「ふふ、私もチャイナ服買うんだよ。自分のと、忍さんにノエルさん、那美さん……あ、フィアッセにも買ってあげようかな」

思わずチャイナ服を着た美由希さん、忍さん、ノエルさん、那美さんを想像してしまった。

ちなみに忍さんとは恭也さんの恋人である。ノエルさんは忍さんのメイドで、那美さんは美由希さんの親友であり翠屋の先輩にあたる。忍さんもアルバイトの先輩になるな。しかもフロアチーフだし。

「ところで美由希さん。フィアッセって誰です？」

「フィアッセはね――」

「はい、もしもし？」

恭也さんの携帯電話に着信が入り話しが中断した。

「誰からだったの？」

通話を終えたところで美由希さんが聞く。

「美紗斗さんからだ。フィアッセから依頼があったらしい」

「何かあったんだ」

「そうらしい。俺たちの力が役に立つ時がきたのかもな」

俺を忘れて話を進めないで欲しい。

「ごめんね、話しの途中で。フィアッセは私たちの幼なじみのお姉さんなんだ。前に翠屋のフロアチーフもしてたんだよ」

大先輩になるな。ん？　どこかで名前を聞いたような気が……。

「それで、フィアッセはね、世界一の歌手なんだ」

そうだ！　前にテレビで見た『チャリティーコンサート』に出てた人じゃないか。まさかそんな大物と知り合いとはね。なんか俺の周りには世界的に有名な人が多いな。

じいちゃんとか、千冬さんとか、束さんとか。

「帰れ……と言いたいが付いてくるつもりだろう？」

恭也さんの言葉に俺はうなずく。やっぱり実戦が一番早く力を付けられるし、何よりもあんなに素敵な歌を唄う人たちが狙われたのを知ってしまった。ホント……俺って早死にするタイプだな。

★

今度はイギリスへとやって来た。

お城みたいな『クリステラ・ソング・スクール』には本物のフィアッセ・クリステラさんがいた。綺麗だったねぇ。

挨拶もそこそこに恭也さんたちはフィアッセさんの母親の墓参りに行った。

俺は部外者に近いから一緒に行くのは断り、中庭の方でくつろぐ。

「うーん……。こんなにのんびりとしたのは久しぶりだな」

じいちゃんが死んでから今日まで色々と急いでいた気がする。ただひたすら強くなるために足掻き、自分を苛めていた。

ざわざわと木の枝が風で揺れ、心地よい陽光が俺に眠気を誘う。

（ちょっとだけ寝よ）

バリンッ！！

目を閉じかける前に空が割れた。

「なっ、なんだ！？」

飛び起きた俺は刀を持って空を見る。

その場所はまるで漫画やゲームでよくある光景みたいにそこの部分だけ窓のように割れている。その先には緑色の世界があった。

「ぐっ、うぅっ……」

近くの木には黒いコートを羽織り、右目が前髪で隠れた紫色の髪をした男がいた。怪我をしているらしく血を流している。

「大丈夫ですか！　一体なにが」

とりあえず男に呼びかけ、持っていた小型救急箱で応急処置。これで出血死はしないだろう。

「すまない。だがすぐにここから離れろ。もうすぐ奴が来る」

「奴って――」

誰？　と聞こうとしたら後ろに気配を感じて振り向く。

「ガアアアァァッ！！！」

ちょっ、なんだよこのモンハンに出てきそうな怪物は。

体長は約４メートル。鋭い目付きに鋭い牙、頭と背中に翼が生えており、その腕の爪は獲物を引き裂き、しっぽは全てを粉砕しそうなほど太い。体の至る所にステンドガラスみたいな模様がある。

いくら何でも怪物と戦うなんて想定してないよ。震える脚を無視し、居合いの構えを取った。

「少年！　何をしている！　早く逃げるんだ！」

男が叫ぶけど無視。俺は逃げない。後ろには夢を持った沢山の生徒がいる。

理不尽な暴力や怖いこと、悲しいこと、それら全てを断つ剣になると誓ったんだ。ここで逃げたら俺は一生後悔する……。

「だから、俺は逃げない！」

脚の震えは自然と治まっていた。怪物が俺を獲物と認識し、喉を鳴らす。

「ガアアァァァッ！！」

怪物が反時計回りに回転する。
俺は後ろにいる男を抱えて跳んだ。

轟音が響き怪物のしっぽが木や花壇を粉砕。破片が飛び散る。
飛針を投擲したが、やっぱり厚い皮膚にはまったく効果ない。

「……次元隔離フィールドは展開完了。パーソナルトルーパーは使用可能だが、怪我をし過ぎたか……」

男は何やらぶつぶつと言って左腕の端末機を弄っていた。

キュイィィンッ！

怪物の口からレーザーが放たれスクールは破壊される。

「しまった!?　スクールが」

「大丈夫だ少年。次元隔離フィールドで今この場にいる人間は俺たちだけ。それにこの中なら物が壊れても被害はない」

つまりガオガイガーのディバイディングドライバーで作ったフィールドと同じものか。なら安心だ。

「少年、何故戦おうとする？　例え逃げても誰も責めはしない」

男が真っ直ぐに俺を見て聞く。

「自分が弱いことは俺が一番知ってる。あんな化け物と戦うなんて怖いさ。だけど……何もしないで死ぬのはもっと怖い」

今度はこちらにレーザーがくる。死にものぐるいで避けた。たった数分でこの辺りは焼け野原に変わる。本当に外は平気なのか？

「俺は怖いこと、悲しいこと、理不尽な暴力を振るう奴らから大切

な人たちを守り、それら全てを断つ剣になると誓った。それにさ、こんな俺でも死んだら悲しむ人がいる。だから俺はここでくたばる気はないよ」

大切なことだから何度でも言う。

まずはあの怪物をぶった斬ることだけ考えようか。

安全そうな場所に男を置いて行こうとするが男は俺の肩を掴む。

「なんですか？　俺は――」

「まあまて、もうキミを止める気はないさ。だが生身で奴と戦うのは無謀だ。これを持っていけ」

男は懐から黒い腕時計のような物を出す。

「これはパーソナルトルーパーの転送装置。パーソナルトルーパーっていうのは、まあ、キミの世界でいうパワードスーツみたいな物だ。これを使えばとりあえず死にはしないだろう」

ＩＳと同じような物？　そんな物が作られたなんて聞いたことも無いな。ＩＳっていうのは面倒だからぐぐれ。

いつもの俺なら人から力を貰うことに抵抗を感じるが、今はそんなことを言ってる場合じゃない。

俺たちが隠れたために怪物は辺りを無差別に破壊している。迷っている時間は無いようだ。

黒い腕時計を受け取り左腕に装着。怪物の前に俺は出る。

『少年。パーソナルトルーパーを装着するには音声入力で機体の名前を呼ぶ必要がある。そいつの名前は――』

男から腕時計に通信がきた。爆音の中、しっかりとその名前を聞く。

口元へ持っていき相棒となる者を呼ぶ。

「ＣＡＬＬ　ゲシュペンスト！」

一瞬光が俺を包み眩しさから目を瞑る。

次に目を開けた時、俺は全身を黒い装甲に包まれていた。

左腕には三本の棒が付いている。意外と邪魔なものは付いてなかった。

「これが……パーソナルトルーパー・ゲシュペンスト」

アニメとかゲームで見たパワードスーツを使えるなんて最高だ。だけどこれは夢でも幻でもない。そしてここは戦場。感激してる場合じゃない。

「ガアァァッ！」

怪物がまたしっぽを振り回す。
巨体なため動きが大振りで、しかも狙いが甘い。しゃがんでかわす。

「武器は？」

視界の端に左腕の棒が映る。『プラズマカッター』どうやらこれは引き抜けるらしい。意識すると真ん中の一本が少し前に出た。
抜くと筒状の先からピンク色のエネルギー刃が形成される。ビームサーベルだな。

「ぐおおぉっ！？」

しっぽに突き刺し走る。
怪物のしっぽはプラズマカッターの熱に焼かれながらあっさりと斬れた。
うわぁ……モンハンがなんでZ指定か良くわかるよ。

「ガアァァッ！！」

いくら怪物でも知性をまったく持たない奴の動きは単純。今までの訓練が役立ち問題なくかわした。

「プラズマカッターじゃ力不足だ。他は？」

不思議なことにゲシュペンストの扱い方が頭に流れ込んでくる。おかげでスムーズに状況を把握できるぜ。

表示されたのは左腕の棒にプラズマを集中させたパンチ『ジェットマグナム』

これは効きそうだな。

「ぐおおぉっ！」

レーザーをかわしてプラズマカッターを左腕に戻し、背中に搭載されていた小型のコンテナを放つ。

小型のコンテナは途中で中から小型ミサイルが出て怪物の口と目に命中する。

「そこだ！」

痛みで動きを止めた怪物の懐へ向かって跳ぶ。

「うおおおおっ！！」

背中のスラスターが火を吹きさらに加速。渾身の一撃を加えようとした。

ザシュザシュッ！

「ぐあぁぁっ！？」

怪物の肩から太い束が伸びて俺に突き刺さる。装甲が厚かったのか生身には少し刺さった程度だが、空中に固定されてしまう。

怪物がニタリと笑い、口にレーザー用のエネルギーを集め始める。

「ふっ、獲物を前に舌舐めずりは三流だぜ？」

右腕は自由だったので銃を呼び出し怪物の口に向けた。ゲシュペンストが自動でターゲットを定める。

「ターゲットロック、食らえ化け物！　ニュートロンビーム！」

銃なんて初めて撃つけどこんだけ固定されてしかも相手は巨体。外しようがないさ。

口のエネルギーにニュートロンビームは当たり爆発。怪物の顔が焦げて奴は白目になっていた。

「ぐう……」

ニュートロンビームの発射衝撃で束から抜け出し地面を転がる。

「ぐぎゃあぁぁっ！！」

ちっ、まだ息があるか、しぶとい。こちらの消耗が酷いな。おそらくあと一撃が限界だと思う。

怪物は背中の翼をはばたかせ空を飛ぶ。

「逃げる気か」

はばたきの風に吹き飛ばされないよう踏ん張り走る。助走を付け、怪物の背中に向けて跳び蹴りを放つ。

「究極！！　ゲシュペンストキィィィィック！！！」

ゲシュペンストが気をきかせてくれたのか右足にはプラズマが収束しており、怪物の体を俺は貫いた。

「ぐぎゃあぁぁぁぁぁぁっ！！！」

貫いた場所が奴の心臓部分だったらしく怪物は七色の閃光を放ちながら大爆発する。

「ぐはっ！？」

頭から着地して痛い。締まらないなぁ。

「少年。キミのおかげでこの世界は救われた。ありがとう」

エネルギー切れでゲシュペンストが元の黒い腕時計に戻り、男が優しい笑みを浮かべてこちらへ来た。

「いえ、ゲシュペンストのおかげです。これがなかったらとっくに俺はあの世行きでしたよ」

名残惜しいけど黒い腕時計を外して返そうとしたら男は首を横に振る。

「それはキミに託そう。もし、また奴らが来た時やキミの身に危険が迫った時、使ってくれてかまわない」

くれるんならありがたく使わせてもらおう。つい、頬が弛む。

「ただし、それは本来この世界には不要の用物。くれぐれも扱いには気を付けてくれ」

「……はいっ」

男が左腕の端末を操作すると、男の前の空間に穴が空く。どうやら本当に別世界から来たらしい。

「あのっ、俺は西本宏範っていいます。あなたの名前は？」

「俺の名はギリアム・イエーガー。過去に罪を犯し、永遠に平行世界を彷徨う宿命を背負った者さ」

ギリアムさんは縁があればまた会おうと言って緑色の空間へと消えた。

割れた空が元通りになった瞬間、世界は真っ白に輝き目を開けると元の綺麗なクリステラ・ソング・スクールの庭に俺は立っていた。

「……夢、じゃない……よな」

左腕には黒い腕時計がしっかりとある。誰も居ないことを確認して小さくゲシュペンストを呼ぶ。

俺は再び全身を黒い装甲に包まれすぐに解除。戻したのはゲシュペンストが傷だらけだったからだ。

「ひろく～ん！」

フィアッセさんや美由希さんが戻ってきたようだ。時間を確認したらあれからたった数分しか経ってない。

「それよりも何で怒ったような顔をしてるんですか？　笑った方が素敵ですよ？」

なんかめちゃくちゃ怖いよ。俺、何かしました？

「まったく、キミは自分の姿を見た方がいい」

訳がわからないと首を傾げる俺に金髪ポニーテールのお姉さん、エ

リス・マクガーレンさんが呆れ顔で言う。

「……うわぁ」

噴水の水で自分を見たら所々に擦り傷ができていた。おそらく束に刺された時のだろう。

「これは……そう！　転びそうになったところでウサギが下敷きになりそうだったので無理矢理避けてこうなりました」

我ながら無理過ぎた言い訳だったが、何とか誤魔化せた。

★

その後、フィアッセさんを狙った襲撃があったものの、恭也さんと美由希さんの活躍で大した被害もなくチャリティーコンサート当日を向かえる。

ツアーの最初は日本だ。

俺は大した活躍がなかったのでその時起こったことをダイジェストで語ろう。

俺と恭也さんは地下駐車場で変な仮面を付けた連中と戦い、美由希さんはバトルジャンキーと死闘をしたらしい。そのせいで三つ編み

が綺麗さっぱりなくなっていた。

フィアッセさんを狙っていたのはちょっとどころかかなり危ないファンだった。結婚をフィアッセさんに申し込んで断られてたな。

ファンは爆弾で脅してきたが、恭也さんの御神流・奥義の極みであっという間に鎮圧された。

中2の夏に起こった出来事はこれで終わりだ。

あれから怪物は現れることもなく平穏な日常を過ごす。たまにゲシュペンストで訓練してたおかげでのちに役立つとは人生何が起こるかわからねぇなぁ。

夏休みの後、鈴の両親が離婚して鈴が中国へ帰ったり、中3の冬はISを動かして世界中大騒ぎしたり。

……お祓いしてこようかな（泣）

外伝2・武人とイギリスと黒い幽霊（ブラック・ファントム）（後書き）

どうも宏明です

とらハ３ＯＶＡが元ネタで、他の小説でも書いたのでだいぶ端折ってます。

そしてスパロボクロスらしくギリアムさん登場！　どちらかというとヒーロー戦記の方ですがね。

ゲシュペンストは今のところ本編に出る予定はありません。ひろが世に広まらないよう細心の注意を心がけてますから。

少しだけゲシュペンストについての設定を書いておきます。

パーソナルトルーパー・ゲシュペンスト

ギリアムが使うゲシュペンストの後継機。つまりＭｋ２

タイプＳを基準としているが、メガブラスターキャノンは付いておらず、その代わりにニュートロンビームを装備している。

武装

プラズマカッター×３

スプリットミサイル

ニュートロンビーム

ジェットマグナム

究極！ゲシュペンストキック

備考

空は飛べない。ＩＳと同じように操縦者を補佐する機能がある。

こんなところですかね。次回からは本編に戻ります。お楽しみに！

テスラ・ライヒ研究所（前書き）

ちょっとしたネタ集

もしも白式にシャイニングガンダムのスーパーモードが搭載されていたら。

ひろ「甘いぞ一夏！　未熟、未熟、未熟ぅ！」

ひろは竜巻のように高速回転する。

ひろ「シュツルム・ウント・ドランクゥウ！！」

一夏「ぐわあぁぁっ！？」

健闘虚しく一夏は膝を着く。

ひろ「さぁ一夏、心静かに死ぬがいい……」

一夏「死ぬ……俺が……？　何だ？　この気持ち、怒りも焦りもどうでもいい……千冬姉、箒……」

ぴちょーん……。

一夏「見えた！　水の一雫！」

白式が黄金に輝く。

シャル「白式が金色に！」

セシリア「ちょっと！　雫はわたくしの専売特許ですわよ！」

ラウラ（物陰から覗いている）「まさか、西本がゲルマン忍法の使い手だったとは！？」

白式の雪片弐型が最大出力で零落白夜を発動させる。

一夏「これは……！？」

ひろ「それが白式の真のスーパーモード、明鏡止水」

一夏「これが……。いくぞ！　ひろ、零落白夜最大出力モード！メン、ツキ、ドオォォォッ！！」

ラウラ、驚くところ違う（笑）

テスラ・ライヒ研究所

☆

八月、ＩＳ学園は遅めの夏休みに入って、世界中からやってきた学園生のほぼ半分が帰省する。

私、フェイト・テスタロッサもその一人。

だけど今の私はニコニコ笑う。だって、隣には初めて好きになった人――西本宏範がいるからだ。

何故ひろと飛行機に乗っているかというと、期末試験が終わった後、突然姉さんから電話がかかってきて『フェイトちゃーん。夏休みにボーイフレンドの彼を連れてきてねー。手回しはしてあるから夜露死九ぅ！』てな感じで昨日飛行機のチケットが二枚届いたのだ。

ひろは一緒に来るのを快く承諾してくれた。ロボットが好きって言ってたからテスラ研に行くのをすごく楽しみにしてた。子供みたいで可愛いな。

本来ならどこの国にも属してないひろがアメリカの研究所に行くのはダメなんだけど、姉さんが根回しをしたおかげで問題ないらしい。

「ふふ、今年の夏休みはすごく楽しみ」

アメリカに着くのは明日の朝なので私はひろの手を握って眠る。
せっかくのチャンスが巡ってきたんだ。頑張ってみんなよりリードするよ！

★

「くあ～……やっと着いたか」

アメリカの空港に着いて飛行機から降りた俺とフェイトは空港の入り口まで行って迎えを待つ。
テスラ研の人が車で迎えにくるらしい。

パッパー！

数分後、近未来的な外装に改造された車が俺たちの前に止まる。

「あ、迎えがきたみたいだね。あの改造車はロブかな」

フェイトが近づくと窓が開いて金髪に小さめの眼鏡をかけた男が顔を出す。

「遅れてすまない。ちょっと向こうで事故があってな」

何やらパトカーのサイレンが聴こえると思ったらそういう訳かい。

フェイトがこっちに来てと手招きしたので向かうと、男はニッコリと笑う。

「キミが噂のＩＳを動かせる男か。俺はロバート・Ｈ・オオミヤ。テスラ研の副所長をしている」

「西本宏範です」

「熱い中よく来たな。さ、車に乗ってくれ。話は向かいながらしよう」

車の後部座席に俺とフェイトは座り、テスラ研へと走り始めた。

ちなみに英語じゃなくて日本語なのは、束さんが面倒くさいとＩＳの資料を日本語で掲示したのでいつの間にか日本語が世界共通語になったのだ。

ロバートさんがＭＤプレイヤーを起動させると、バーンブレイドのＯＰ曲が流れる。

「ロバートさん、日本のロボットアニメ好きなんですか？」

「ああ、昔日本に住んでた時もあってね」

テスラ研へと向かう数分間、スーパーロボット談議に火が付いて色々と話込んでしまった。その間フェイトの存在を忘れていたのでテスラ研に着いた頃には彼女の機嫌は不満度ＭＡＸだった。

★

「それじゃあ俺はここで失礼するよ。これから仕事があるからね」

テスラ研に着いてロブとは別れる。さっきのスーパーロボット談議で俺とロブは愛称で呼び合うほど仲良くなったんだ。ウンウン、ドリルは良いよねぇ。

「じゃ、姉さんがいる所長室に案内するよ」

何かフェイトから不機嫌ですっていうオーラが出ている。なにかした覚えはないんだが。

数分で所長室とプレートが貼られた部屋の前に着いてフェイトはノ

ックをする。

「姉さん、私フェイトだよ」

「開いてるから入って～」

部屋の中に入るとフェイトと同じ金髪をストレートにし、白衣を着た女性が書類と格闘をしていた。

「フェイトお帰り～！」

「うん。ただいま」

フェイトを見た瞬間女性の顔に生気が戻ってフェイトにハグをする。外国流の挨拶だな。

「ふー、妹充電したから後１０時間は戦えるよ。さて、キミが男でＩＳを扱えるフェイトのボーイフレンドだね。私は自称天才のアリシア・テスタロッサだよ！」

自称かい！　ってツッコミ入れるのは負けなんだろう。何か束さんと似たものを感じつつ自己紹介する。

「西本宏範です。今日はお招きありがとうございます」

「あはは、堅苦しい挨拶は不要だよー。いずれは私がお姉ちゃんになー――」

「ねっ、姉さん！」

途中でフェイトがアリシアさんの口を押さえたから最後まで聞こえなかった。

「もう、フェイトの照れ屋さん。それでヒロをここに呼んだのは直接ダブルGのデータを取りたいんだ。いい？」

「かまいません。どうぞ」

元はここの物だからな。アリシアさんにダイゼンガーの待機状態である柄型のキーホルダーを渡す。

「ありがとー。ついでに整備もばっちりして明日には返すよ。研究所内は見学自由だから、まったねー」

落ち着きのないアリシアさんは嬉しそうに走って行った。

束さんと箒姉妹と違って仲が良いなぁ。あの二人もこうなって欲しいものだ。

☆

さっそく私はひろにテスラ研の中を案内する。ロブにいくつか聞いていたのかここに保管してあるロボットが見たいとひろが言うので第六格納庫へ行く。

「明かり点けるよー」

少し暗い第六格納庫に着いて明かりを点けると、私とひろの前に巨大な青い人型ロボットが姿を現す。

「おお！　これがロブの言っていた最初のスーパーロボット！」

ひろは首にかけていたデジカメでロボットを撮る。子供みたいにはしゃいでいるなぁ。

「これに乗ったら駄目なのか？」

「さすがに乗るのはダメだね」

「そうか……あ、フェイトはこれの名前知ってる？」

「うん、知ってるよ。これはグルンガスト。飛行形態のウイングガストや戦車型のガストランダーにも変形出来るんだ」

ビアン博士と姉さんが作り上げたロボット。ＩＳが出たせいで日の出を見ることはなかったけど、実際に動いたところを見た時は感動したよ。

何で発表されなかったかというと、これが世に出たらＩＳと戦争をしてしまうとビアン博士が危惧したから。

「おっ、こっちのやつもかっこいいな！」

グルンガストの隣りには白い戦闘機みたいなロボットがある。

「これはアステリオン。外宇宙を航行するために作られた物だよ」

これもＩＳが出たおかげで倉庫行きになった。でも、いつか人類が再び宇宙へと歩み始める時のためにちゃんと整備してあるんだ。

☆

夜。食堂でひろの歓迎会を開いてお酒で酔いつぶれたみんなを介抱し、今ひろは研究所の居住区にある風呂にいる。

バスタオルで身を包み風呂へ突撃した。

「お、お邪魔します」

「ふ、フェイト！　ここは男風呂だぞ！？」

ひろは慌てて体を反転させてあさっての方向へ向く。

「大丈夫。水着を着てるから」

「だからといって――」

「私と一緒はイヤ？」

うっ、と黙ったひろは観念したのか勝手にすればと言う。

湯船に入りひろの背中に私の背中をくっ付ける。風呂の中なのに背中の体温が伝わってきて、ものすごくドキドキした。

「……」

「……」

特に会話もなくじっとしていると、突然扉が開く。

「フェイトちゃーん！　久しぶりに体洗いっこしよー！」

一糸纏わぬ姿の姉さんが風呂に飛び込んできた。

どぽーんっ！！

「ちょっ、アリシアさん！？　何でなにも着てないんですか！」

「日本人なのに変なこと言うねー？　風呂でタオル付けたままはマナー違反だよ」

「そうだけ――ぎゃあぁぁぁっ！！　目がぁーっ」

姉さんの裸を見て鼻の下伸ばしていたひろの目を塞ぐ。なかなか潰れないね。

「フェイトちゃんもダメだよ。そんなえっちい水着を着てちゃ、さぁ脱ぎたまえ！」

スリもビックリな手際で水着の上が姉さんに奪われる。

「ヒロ、フェイトちゃんがこーんなえっちい水着を着てたんだよ」

「ぶっ！？」

きゃー！？　胸を隠すために手を離したらひろに面積の少ない水着を見られた。もう、姉さんのＫＹ！

でも……ひろの背中を洗えたのは役得かな。エヘヘ！

☆

カタカタ……。

「なかなか興味深いデータだねぇ」

夜中。丑三つ時を差す頃、未だ起きて作業をしている者がいた。

篠ノ之束に次ぐ天才、アリシア・テスタロッサだ。

彼女は１０歳でマサチューセッツ工科大学を卒業し、いくつもの博士号を取得。他人とコミュニケーションをちゃんと取れるので同い年の篠ノ之束よりも大人かもしれない。

そんな彼女でもＩＳのコアは解析出来なかったので本人は自称を名乗っている。

目の前の空間モニターに映っているのはダイゼンガーとアウセンザイター。

「ふんふん。第二世代程度だったダブルＧに展開装甲を付けてさらに私が作ったダイレクト・モーション・リンクシステムを改良したのかー。流石だね」

ＩＳはイメージをすることで動かす『イメージ・フィードバック・システム』が主流だが、彼女は脳の反応速度を超える『反射神経』をトレースするとどうなるか興味を抱き、ダイゼンガーを作った。

結局、完成当時は技量を持つ者に恵まれず、お蔵入りとなったが。

「セカンド・シフトした時に出来たこの人型ビットも篠ノ之博士が作ったのかな？」

アリシアは篠ノ之束に恨みとか妬みを持たず、素直にその技術に感服する。

「でも、私のを盗んで改造するのはちょーっとお怒りなのだよ。だから少し手を加えちゃお♪」

束に劣らない速さでキーボードを叩き、ケーブルに繋がれた待機状態のダイゼンガーにあるプログラムをインストールした。

「ダイレクト・モーション・リンクシステムを使いこなすヒロなら……あれのデータ取りに最適かな」

アリシアは後ろにあるハンガーを見る。そこには3メートル程のパワードスーツがあった。

テスラ・ライヒ研究所（後書き）

どうも宏明です

フ「フェイト・テスタロッサです。全く、姉さんはもう少し恥じらいを持った方がいいよ」

始まりました夏休み編。最初は前に感想でいただいたテスラ研に行って～を参考にしました。

さすがにアリシアがひろＬｏｖｅにはなりません。

フ「と、当然だよ！　たとえ姉さんでも負けられない！」

そしてグルンガストやアステリオンを通常サイズで登場。まあ、ただのネタですね。後悔はしてない（きり）

フ「最後に出てたアレは何？」

ふふふ、それは秘密。

フ「……」

ちょ、無表情で顔を殴っ、ぐはっ!?

フ「それで？　アレは何なのかな？」

ゴニョゴニョ……。

フ「ふーん」

読者諸君には次回のお楽しみだが、まあ、バレバレだよね。

ＩＳとして出すのは難しいけど、それ以外なら大丈夫なので満を時して登場です。

フ「次回も読まないと、プラズマビュートで捕まえちゃうよ♪」

ちょ、ネタバレになるじゃないか。

とりあえず……ひろは　爆　発　し　ろ！

（何でだよ！！）

雷鳳見参！（前書き）

遅れてすみません。

それでは今回のネタ集は

～もしもひろのＩＳがビルバインだったら～

ラウラ「ははははは！　力がみなぎる！　私は最強だ！」

ひろ「シュヴァルツェア・レーゲンが巨大化した。ラウラのオーラエネルギーが暴走したのか！」

巨大になったシュヴァルツェア・レーゲンの腕がひろに迫る。ひろは紙一重でかわす。

チャム『正面当たっちゃう！』

ひろ「耳元で怒鳴るな！」

構えたオーラソードの刃身に不可視のエネルギーが包み、ひろはラウラの真上へ飛び上がった。

ひろ「俺はお前を殺さない。その怨念を殺す！」

チャム『いっけぇー！　必殺のハイパーオーラ斬りだぁ！　やっつけろぉぉぉっ！』

誰もやらないのでやってみた。
チャムはＡＩという設定。なんかウザイｗｗｗ

雷鳳見参！

テスラ研二日目。アリシアさんに呼ばれた俺は第三格納庫にいた。

「よく来たね。実はヒロにある物のテストをお願いしたいんだ」

格納庫にある机にゲンドウスタイルで座っているアリシアさん。彼女の後ろの明かりが点けられる。

そこに白を基調とした3メートル程のパワードスーツがあった。

「これは私が開発したダブルGの量産試作機『雷鳳（ライオウ）』まあ、三号機だね」

見た目は忍者に近いかな？　首元には赤いマフラーがあるので仮面ライダー一号に見えなくもない。

「テストパイロットをするのはかまわないですけどＩＳのコアはヴァルシオーネだけでは？」

ＩＳのコアには限りがあるので企業や研究所には基本的に一つしかないのだ。

「ああ、これはＩＳじゃないよ？　ＩＳの技術を応用したパワードスーツだから」

思わず左腕にある黒い腕時計をちらりと見る。

情報漏れはしてないはず、ということは自力で作り出したのか。まあ、巨大ロボットを作れる訳だし束さんと同じ天才なアリシアさんなら可能だろう。

「さあさあ、早く乗って乗って」

「ちょ、押さないで下さい」

急かされて俺は雷鳳に体を通す。

腕や脚、胴の装甲がＩＳと同じようにプシュッと空気が抜ける音とともに閉じていく。仮面ライダーＧ３の装着時にかなり似ていた。

最後にトロンベの顔に似たフルフェイスヘルメットを被り装着は完了。

「気分はどうかな？　気持ち悪くない？」

右手を閉じたり開いたりしたがとくに不快感はない。ゲシュペンス

トを装着している時に酷似している。これなら大丈夫だ。

「大丈夫です。思ってたよりも動きやすいな」

「それじゃあ、外で演習しようか」

雷鳳の武装や扱う上での注意点を聞きながら演習場へと向かう。

★

『ひろ、今からターゲットドローンを出すから全部倒してね。中には攻撃してくるのもいるから気を付けて』

「おう」

フェイトからの通信に応え息を整える。首元の赤いマフラーが風でなびく。

空中に四角い物が現れカウントを始めた。

5……4……3……2……1

『始め！』

スタートと同時に駆ける。
目の前に丸いターゲットドローンが現れた。

「はあっ！　せい！」

まずは一体目を正拳突きで中心をぶち抜き、続けてもう一体はミドルキックで蹴り飛ばす。

（ダイレクト・モーション・リンクシステムじゃないのに俺の動きを見事に反映してるな）

雷鳳には素人でもエースパイロットみたいに操縦が可能となる『システムＬＩＯＨ』というマン・マシーン・インターフェースが搭載されており、ＩＳのコアの代わりをさせているらしい。

新たに現れたターゲットドローンのレーザーを二回バク転してかわす。

量産試作機なので武器は無いが両手両足にプラズマコンバータと呼ばれるプラズマ発生装置があって、そこから発生したプラズマを纏った拳や蹴り、もしくはプラズマを飛ばすことで攻撃は可能だ。

「インパルスシュート！」

回し蹴りの要領で左足を振るい、そこからプラズマを弾丸のように飛ばす。

直撃したターゲットドローンは爆散した。

「こいつで決める！」

まだ動いているターゲットドローンのレーザーを上空に飛んでかわし、飛び蹴りの体勢をとる。

両足の装甲が開き小型のブースターが点火。俺はプラズマに包まれ、まとまっているターゲットドローンへ突っ込んだ。

「ライトニングフォール！　ぶち抜けー！」

ターゲットドローンはレーザーを集中させるが、俺を包むプラズマがバリアとなりダメージはない。

ドガアァァンッ！！

落雷のような一撃は大きなクレーターを作り、膨大なプラズマの奔流がターゲットドローンを全て破壊した。

☆

「あれがアリスの作ったＩＳに次ぐ新兵器か……」

「そうだよイーリ。なかなかでしょ？」

テスラ研の管制室で雷鳳の動きを見ていたアリシアとフェイト。そこへアメリカの代表選手イーリス・コーリングが訪れていた。

ちなみにイーリスは三文字以上の名前を覚えるのが面倒らしく仲の良い友達は愛称で呼ぶ。ナターシャは『ナタル』アリシアは『アリス』フェイトは『フェイ』

今回イーリスがここに来たのは雷鳳がどれ程の物か見定めるためと、世界に二人しかいない男性ＩＳ操縦者であるひろ自身のデータ収集だ。

「結構いい動きしてんじゃねーか」

いくらＩＳを使えても半年そこら訓練しただけのガキだと思っていたイーリス。

「こいつは楽しめそうだ」

それが間違った認識だと知り、イーリスの闘志が熱く燃え上がりニヤリと笑う。

『ターゲットドローン全滅。タイムは三分です』

「無傷でターゲットドローンを撃破。ウンウンなかなか良い感じ。じゃあイーリ、最終テストお願い」

「任せろ」

暑苦しい軍服を脱いでＩＳスーツ姿になったイーリスはカタパルトデッキに向かい、虎の顔が彫られたペンダントを掲げる。

「さぁ、行こうぜ。『ファング・クエイク』！」

光に一瞬包まれ、虎模様（タイガー・ストライプ）のＩＳを纏ったイーリスは戦場へ飛ぶ。

★

『お疲れさま。どこか異常はない？』

「ああ、少し疲れてる以外は問題ない」

『無理はしないでね。これからＩＳと模擬戦があるから』

「……？　フェイトが相手じゃないのか？」

さっきも言ったが、テスラ研のＩＳはヴァルシオーネだけのはず。

「今度は私が相手だ」

声が上から聞こえ、俺の前に虎模様のＩＳを纏った女性が降り立つ。

「私はイーリス・コーリングだ。この前はうちのナタルが世話になったな」

「ナタル？　誰ですか？」

外人の知り合いは……多いなあ。でも、ナタルという名前の知り合いはいない。

「おっと悪い、ついいつも通りに言っちまった。ナターシャだよ。『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』の操縦者」

ああ、臨海学校の時に一夏の頬っぺたにキスをしたあの美人か。

「俺は知ってると思いますけど西本宏範です」

「よーっく知ってる。私のことはイーリって呼んでくれ。そのかわりお前のことはひろと呼ぶ」

「かまいませんよ。ところでラトゥーニは元気にしてます？」

「元気だぜ。最近はナタルの着せ替え人形にされて大変そうだったけどな」

苦笑したイーリさんは顔を引き締め拳を握る。

「挨拶はここまでにしてそろそろ始めようか。言っとくが私はアメリカ代表だからつえーぞ」

「代表が相手とは光栄だな。そっちこそ俺をただの学生だと思って侮ると痛い目みるよ」

「はっ、上等！」

イーリさんはナイフを出して投擲する。

俺はナイフを左手で掴む。

もちろんそれは自分から意識を逸らすためのフェイク。

「うらあっ！」

瞬時加速によって間合いを詰めたイーリさんが普通のＩＳよりも大きい拳を俺に叩き込もうとしていた。

俺はイーリさんの拳を右手で逸らし、がら空きになった胸に掌底を叩き込む。

「やるじゃねえか。ちっとばかしびっくりしたぞ」

だが、必殺のカウンターは腕に防がれダメージは無い。

「はあああああっ！」

今度はこちらが攻める。正拳突き、回し蹴りと連続攻撃をするが全

て防ぐか避けられてしまう。

「にゃろっ」

逆手に持ったナイフを横薙に振るってきたのでしゃがんでかわし、もう一度顎を狙って掌底。

「あぶねっ！？」

半歩下がってかわされた。
イーリさんは後退しながらまたナイフを投擲。
それを両手のプラズマコンバータから発生させたプラズマで弾き左手を地面に叩きつける。

「逃がさん！　プラズマビュート！」

地面に叩きつけられたプラズマはイーリさんに向かって伸びていき、彼女をプラズマの檻に閉じ込めた。

「何だこれ！？　くそっ」

そのままイーリさんをこちらへ引き寄せ蹴りを叩き込もうとしたら

彼女は俺に向かって加速する。

すでにプラズマの檻は消えかかってたので簡単に抜けられ、俺の目の前にイーリさんの頭が避けられない所まできていた。

「くらえぇぇっ」

ガアァァンッ！

「！？」

ロケットのように加速したイーリさんのずっつきをくらい俺は吹っ飛ばされる。

「くうぅぅっ、ど、どうだ、私のずっつきは。自慢じゃないが石頭なんでな」

少し頭がくらくらしたが起き上がるとイーリさんはちょっと涙目になっていた。いくらシールドバリアが操縦者を外傷から守ろうと、衝撃までは防ぎきれないので痛がるのは当然だ。

次で決めようと思い両手両足のプラズマコンバータを解放し、エネルギーを上昇させる。

イーリさんも何かをするようで意識をさらに集中させ、俺達は同時

に加速。

「「うおぉぉぉっ！！」」

互いの拳がぶつかり合おうとした瞬間――演習場に衝撃が響いた。

この展開、前にもあったような気がするんですけど。

☆

「何かが演習場のバリアを突き抜けた！？」

演習場に粉塵が舞って乱入者の姿は見えない。

この展開に覚えがある私はすぐさま扉へ向かうが、やっぱりロックされていた。

「姉さん！　すぐに解除は」

「無理だねえ。あっちを倒した方が早いよ」

画面には5月の始めにあった特別戦に乱入してきた正体不明のＩＳに酷似している。

「せっかくあの時とは違って力があるのに……私はまた何も出来ない」

無力な自分に苛立ちながらも私はひろが勝つと信じて画面に映る乱入者を睨んだ。

★

演習場の中心部に何かがバリアを突き破ってきた。

「てめえ、私らの邪魔をするとはいい度胸だな。撲殺決定だ」

粉塵の中から現れたのは黒い全身装甲なＩＳ。

頭部と胴体は繋がっており、腕が長い所は前回と同じだが、今回は少し違う。右腕の肘から先がロングソードになっている。おそらく改良型だろうな。

「イーリさん、奴の左腕から出るビームには気を付けて下さい。バリアを簡単に突き破りますから」

「おう。って、何でそんなこと知って――」

敵が左腕の砲口をこちらに向けて撃つ。
俺たちは左右に分かれて避ける。

「チッ、詳しい事は後で聞く。ここは私に任せてひろは下がれ。こういうのは私らの領分だ」

俺の返事を聞く前にイーリさんは敵へ突撃するのだった。

☆

黒いＩＳ……面倒だから『ゴーレム』と呼ぶか。
ゴーレムのビームを避けながら呼び出したアサルトライフルを撃つ。
だけど奴は相当硬いようで直撃したのに弾がはじかれた。

「やっぱ殴るか」

アサルトライフルを捨てて意識を集中。ゴーレムが左腕からビームを発射した瞬間に私は紙一重でかわし、瞬時加速。

しかもただの瞬時加速じゃねえ、スラスター四基による『個別連続瞬時加速（リボルバー・イグニッション・ブースト）』で通常より三倍の速さでゴーレムに肉薄。

（もらった！）

ゴーレムの顔面に拳を振るうが――

――かわされた。

「があっ！？」

一瞬ゴーレムが消えて次の瞬間には背中を右腕のロングソードで斬られていた。

（くそったれ）

ゴーレムが左腕をこちらに向けているが、スラスターを二基やられて避けられそうもない。

死を覚悟した矢先、ゴーレムは体をくねらせ何かを避けた。

（何だ？　あんな機動人間にできるのか）

私を庇うように立つひろは両手のプラズマを地面に放ち、粉塵を撒き散らした。

★

「大丈夫ですか！？」

奴にロックオンされる前にイーリさんを抱えて戦略的撤退。近くのコンテナに隠れた。

「サンキュ、ひろ。しかし、何なんだあいつは。本当に人間か？」

物陰から奴を見るイーリさんが睨みながらつぶやく。

先程落ちていたナイフを即席レールガンにして撃ったのを避けた奴は間違いなく無人機。

「……イーリさん。これから話すことは他言無用でお願いします」

「なんだよ急に？」

「絶対に上司に報告しないで下さい」

有無を言わせないよう睨むとイーリさんは頷く。

「俺はあれと似たものと前に戦いました。その時のあれは無人機だった。たぶんあれも無人機でしょうね」

「何言ってんだ。ＩＳは人が乗らないと動かないはずだろ！？」

イーリさんの疑問はもっともだな。鈴も同じこと言ったし。

「この世に一人だけその常識を覆せる人がいる」

「……まさか、いや、あれなら可能か」

イーリさんも気付いたようだ。何が目的かは知らないが、あの人の仕業だろう。

ズドォォォンッ！！

コンテナに大きな穴が空く。見付かったか。

「俺が囮になります。イーリさんは奴の動きを止めて下さい」

「チッ、わーったよ。学生のお前にやらせるのは気が引けるが仕方ねえ。必ずぶちのめせよ」

「了解。木っ端微塵にしてやるさ」

ビームの弾幕に俺は突っ込んだ。

☆

「うおぉぉぉっ！」

ひろがビームの嵐を潜り抜けゴーレムへ肉薄。
ロングソードの突きをかわし、腕を掴んで投げる。

ゴーレムは逆さまのままビームを連射。さらに体勢を直してチャージし、少し太いビームを撃つ。

ひろはビームを全て紙一重でかわし、反撃するが当たらない。

（なんて戦いだよ。こんなのモンド・グロッソでもほとんど見ねえぞ）

とにかく私はゴーレムの隙ができるまでひたすら待つ。

普段邪魔にならないよう上に向けているクローを下へおろす。公式戦では使えねえけど間違いなく日本の暮桜や白式に次ぐ強さを持っている。

「はあああああっ！」

おっと、説明してる時間は無いな。ひろがプラズマを纏わせた拳を大振りに放つ。

ゴーレムが一瞬消えた瞬間、私は連続瞬時加速でひろの後ろへ突っ込む。

「人形ごときが調子にのってんじゃねぇ！」

一瞬でひろの背後に回り込んだゴーレムの背中に私のクローを突き刺す。

シールドバリアをぶち貫いて背中のスラスターを破壊。

バランスを崩したゴーレムの腹をひろが蹴り上げ、私の連続パンチでゴーレムの装甲がぼろぼろになっていく。

これがファング・クエイクの最強武器『シールド・ブレイカー』シールドバリアだろうがどんなに厚い装甲でも超振動を触れた場所から送り粉砕する。

ひしゃげたゴーレムの腕からオイルが吹き出て配線ケーブルが露出し、改めて人間じゃないことがわかった。

「後は俺がとどめをさす！」

雷鳳の両腕両足から大量のプラズマが発生し、ひろは雷のように駆ける。

「うおぉぉぉっ！！」

動けないゴーレムに連続蹴りを当てて上に飛ばす。
さらに三角跳びするように跳んでゴーレムを蹴り上げ、どんどん空へ昇っていく。

「ライジング・メテオォォォッ！！！」

最後に露出したコアをかかと落としで完全に破壊してゴーレムは爆発。宣言通り木っ端微塵にしやがった。

「やったなひろ！　だけどちょっとくらい残しとけよ。これじゃあ調べられねえ」

着地したひろの背中をバシバシ叩く。

「……」

「おい？　どうした？」

いくら声をかけてもひろは返事をしない。

――バタンッ！

突然ひろが倒れた。

「だ、大丈夫か！？　しっかりしろ！」

私はくそ重たいのを担いで医務室を目指した。

★

「……ん」

目を開けると見知らぬ天井が見えた。体を起こし周りを見回す。

「うにゅ……」

フェイトが椅子に座って寝ている。ここは医務室みたいだな。

ああ、思い出した。俺は雷鳳を装着してイーリさんと戦い、その途中で乱入してきた無人機を破壊して気を失ったんだ。

「……ひろ。無茶……しないで……」

「心配させてごめん。それと、ありがとな」

そのまま寝かしとくのも悪いし、フェイトをベッドに運んで俺は医務室を出る。

「やあヒロ。起きたんだね」

扉の前にアリシアさんがいた。ちょっとびっくりしたぞ。

「これを返してくおくね」

渡されたのは柄型のキーホルダー。ダイゼンガーの待機形態だ。

「ありがとうございます。それで、ダメージをほとんど受けなかったはずなのに何で俺は気を失ったんですか？」

「立ち話もなんだし、私の部屋で話そうか」

人には聞かれたくないらしい。頷くとアリシアさんが歩き出したので付いていく。

★

所長室のソファーに座る。ニコニコ笑っている印象が強いアリシアさんが真剣な表情のまま口を開いた。

「雷鳳には操縦者の操作を補助するＯＳがあることは説明したよね？」

「はい。たしか『システムＬＩＯＨ』ってやつですよね。素人でも熟練者並みに操縦できるとか」

「そう、今の世の中じゃＩＳの操縦者以外をしっかりと訓練させる時間が無いって政府に言われて作ったんだけど……」

アリシアさんが顔を伏せて拳を強く握る。

「ごめんね。システムＬＩＯＨには重大な欠陥があったんだ」

大粒の涙を流しながらもアリシアさんは続けた。

「バグなのかは知らないけど、あれには常に操縦者へ負荷をかけて無理矢理力を引き出す能力があったの。もし、あのまま使っていたらヒロは……廃人になっていたよ」

どうりでいつもよりも感覚が冴えていたわけだ。

かける言葉が見つからず、アリシアさんにハンカチを渡して泣き止むのを待った。

「ふう、スッキリした」

約１５分後にアリシアさんは泣き止んだ。返されたハンカチは鼻水でべちょべちょになっている。

「ところで、イーリからあの乱入者についてヒロから聞いてくれって頼まれたんだだけど良い？」

「本当は箝口令出てるのでまずいんですけど……まあ、ばれなきゃいいか」

イーリさん以外に言わないことを条件に5月の特別戦での戦いを話した。

★

「IS学園よ、私は帰って来た！」

とまあ大佐ネタは置いといて。

旅行最終日はフェイトと買い物をして帰って来たんだ。フェイトはまだやることがあるらしく俺だけ先に日本へ帰国。

千冬さんと一夏にお土産を渡して寮にある自分の部屋の扉を開こうとして止めた。

（部屋の中に人の気配がする）

前にあんなこと（入学初日のこと）が二度と起きないように必ず誰も居ないことを確認してから入るのだが、気配がするのだ。

神経を研ぎ澄まし、警戒しながら俺は扉をゆっくりと開く。

「お帰りなさい。お風呂にする？　ご飯にする？　それとも、わ・た・し♪」

侵入者はフリルの付いたピンク色のエプロンだけを纏った美少女だった。

雷鳳見参！（後書き）

どうも宏明です

イーリ「イーリス・コーリングだ。でよ、作者。何でこんなに遅れたんだ？」

なかなか書けなくって。やっぱりオリジナル話は大変なのですよ。夏休み編はオリジナルで行こうと決めたのでまた遅れます。

イーリ「ま、原作よりも早く出れたし私は別に良いけどよ、いいのか？　勝手な設定を追加してよ」

仕方ないじゃないか。原作って意外と描写が少ないんだから。イーリスなんて女性っていう事以外わからないんだよ？　容姿不明だよ！　のほほんさんだって五巻でようやく本名と容姿が明らかになったんだから。

イーリ「わかったわかった。興奮するなよ。それにしてもファング・クエイクの武装すげえな。私好みだ」

イーリスの性格でもっとも好むのが殴ることだと思ってこうなった。元々甲龍を参考に作られているので衝撃を推進力に変えて殴るのもいいかなと思ったけど、なんかシェルブリットっぽいのでやめた。

イーリ「衝撃のぉ、ファーストブリットォォォッ！！」

ギャアァァッ！

キラーン☆

イーリ「おー、すごく飛んだなー。んじゃ、次回も読んでくれよ。遂に学園最強の奴が出るらしいからな」

再会は突然に（前書き）

お久しぶりです。言い訳はあとがきで。

再会は突然に

裸エプロン……それは男のロマン。

俺も男だ。そういうのに興味はある。ちなみに弾の部屋に眼鏡をかけた巨乳お姉さんと新婚エッチというＡＶがある。どうでもいいね。

「お帰りなさい。ご飯にする？　お風呂にする？　それともわ・た・し♪」

――バタン。ドアを閉じて部屋を確認。表札は西本と書かれてあるので間違ってないな。

約５日ぶりの我が部屋に何故裸エプロンの美少女がいるのだろう？

いや、きっと夏の暑さで幻覚を見たんだ。

このドアを開けたら誰も居ない俺の部屋なんだ！

ガチャ。

「お帰り。私にする？　私にした方がいいよ？　ていうか私にしなさい♪」

「命令になってる！　てかあんた誰！？」

とりあえず携帯でとある人に繋ぐ。

「もしもし千冬さ――」

「えい！」

ぬあっ！？　謎の裸エプロン美少女は俺からあっさりと携帯を奪い通話を切る。

「もう、目の前にこんな美少女がいるのに他の女に電話するなんてダメよ」

謎の裸エプロン美少女は奪った携帯を豊満な胸の谷間に挟んでニヤリと笑う。

「人の携帯をどこに入れてんだよ！」

「返して欲しかったら奪い返してね♪　ひろ君になら少し触られても平気だから」

こいつ、ただ者じゃないな。ふざけてるように見えて隙がない。お

かげでイタズラが成功した子供のように笑う少女を睨むしかできなかった。

「いったい何が目的だ？」

「目的？　もちろんキミと劇的な再会を演出しただけよ。出遅れたからには派手にしなくちゃ」

バッと広げた扇子には『参戦』と書かれている。

「ね、ねえ。私が誰かわからないの？」

ん？　急に謎の裸エプロン美少女の表情が曇り、懇願するような瞳で俺を見ていた。

「だからさっきか――」

覚え無いと言おうとして、何かが引っ掛かる。

改めて謎の裸エプロン美少女の顔を見た。外側に少し跳ねた青い髪、ラウラやフェイトと同じ赤い瞳。人を惹き付けるような笑顔。

俺は……こいつと会ったことがある？

「そんなにじっと見つめられると流石のお姉さんでも少し恥ずかしいわ」

ぽっと頬を赤らめ扇子で顔を隠す。いつの間に替えたのか、扇子には『簪（かんざし）』の絵が描かれてあった。

ある記憶が頭に浮き出る。まだじいちゃんが生きてた頃に一度だけ青い髪の姉妹に俺は出会った。

そしてあの扇子は俺があげた物。

「……たっちゃん？」

ポツリと昔呼んだ名が出る。まあ、あだ名なんだがな。

確か本名は更識楯無（さらしきたてなし）

「ひろくーんっ！！」

うわぁぁぁっ！？　楯無さんが嬉しそうに抱きついてきた。胸が当たって、エプロンがずり落ち――

「えへ、下は水着でした♪」

舌をチロっと出して笑う楯無さんは白いビキニを纏っている。飾り気のない普通のビキニなのに彼女の発育したボディが大人の色香をかもしだしていた。

「～～～っ！！」

「あはっ。真っ赤にして、可愛い～」

ええい、頬に指をツンツンするな。こんな所を誰かに見られたら――

「貴様ら何をしている？」

ドアの方から地獄の使者と間違えそうなほど低い声が聞こえた。

俺と楯無さんは壊れたロボットみたいにギギギっと後ろを見て、恐怖により動けなくなる。

「西本、部屋に女を連れ込んでそんな格好をさせるとはな」

阿修羅すらも凌駕する織斑千冬さんがいました。髪が重力に反してゆらゆらと逆巻き、闇魔大王すら裸足で逃げ出すに違いない。

「いえ、彼女は勝手に部屋へ侵入してこんな格好をしてたんです」

「ひろ君！　私を売るの！？」

いや、事実だろうが。

「ほう……更識、いくらお前でも寮の特別規則を破るのは寮長として見過ごす訳にはいかんなぁ」

「私とひろ君はとっても深い仲でして……」

ガシッ！！

千冬さんの『必殺アイアンクロー』が楯無さんの顔をがっしりと掴んで離さない。

「――っ！？」

「詳しい事は懲罰部屋でみっちりと聞いてやる」

今のうちに……。

「どこへ行く気だ。お前も来い」

ぎゃあぁぁぁっ！！！

痛い痛い痛いっ！　頭が、割ーれーるー！

「まったく、こんな暑い日に面倒をかけるな。馬鹿共が」

（俺は被害者なのに……。不幸、だぁ～～っ！！）

懲罰部屋、語るのも恐ろしい所だと言っておこう。

☆

「えと……いったい何があったのかな？」

ひろと楯無の顔を掴んだまま懲罰部屋へと入って行く千冬を見てどん引きした更識簪（さらしきかんざし）はしばし呆然と地獄の扉を眺めていた。

（やっぱり楯無……姉さんもひろのことが……）

当時の楯無を知っている簪は胸がズキズキと痛んだ気がして表情を歪めた。

（今の私に打鉄弐式以外のことを考えている余裕なんてない）

頭を振って逃げるように早足でその場を離れた簪は立ち止まり、ポケットからデフォルメされた仮面ライダー1号のキーホルダーを取出して優しく握りしめる。

「大丈夫。大丈夫……」

呪文のように繰り返し呟いた。

「お～い！　かーんちゃーん～」

パタパタと足音が聞こえて簪はキーホルダーを仕舞い自分を呼んだ者の方へ向く。

「本音……」

眠たそうにした顔に袖が長い制服を着た少女、布仏本音はノロノロと遅い足取りで簪の所まで走って来る。

「どうしたの？」

「あのね、明日かなりん達とプールに行くんだけどかんちゃんも一緒に行かない？」

「ごめん。明日も打鉄弐式の調整で忙しいから」

申し訳なさそうに言う簪。本音は特に気にすることなくいつも通りニコニコ笑う。

「そっかー。それじゃ仕方ないねー。また今度一緒に行こ～」

「う、うん」

「じゃ、またね～。かんちゃん」

手を振って見送る。本音に罪悪感を感じつつ、簪は自分の部屋に向かう。

「プール……か」

そういえばさっき見た姉は水着を着てたなぁと思い出す。

……ボッ！

ひろとプールに行って、彼が自分を可愛いよって言う場面を妄想してしまった簪は顔を真っ赤にさせて忘れようと頭を激しく振るのだった。

★

「やっと解放された……」

千冬さんの説教を二時間ほど受けてため息を吐く。

しかも「ついでにこの書類を生徒会室に持って行ってくれ」と渡された。

「ここが生徒会室か」

さっさと用事を終わらせようと思い扉をノックした。

「一年一組の西本です。織斑先生の使いで書類を届けに来ました」

「どうぞ、開いているのでお入り下さい」

扉を開けた瞬間書類を落としそうになる。予想外の人物がそこにいたからだ。

「いらっしゃ～い。あ、書類は虚(うつほ)ちゃんに渡してね」

青い髪に赤い瞳の美少女、更識楯無が二年生用のリボンが付いた制服を着て、優雅に座っていた。

「何でお前がここにいる!?」

「それは私がこの学園の長、生徒会長だからよ」

なん……だと。

大丈夫なのか？　生徒会。いろんな意味で。

「ひろ君、今失礼なこと思わなかった?」

ぎゃあ。エスパーなのか？

「ところで西本君。書類の方を」

「ああ、すみません。これです」

いつの間にか隣に来ていた三年生の女子に書類を渡す。

「……はい、確かに受け取りました」

眼鏡に三つ編み、いかにも『堅いが仕事はできる』風の人はパラパラと数枚の書類を見て微笑む。弾の好みにジャストミートな人だな。今度弾に紹介してやろう。

「それじゃ用事も済んだので帰ります」

「あ、西本君。ちょうどお茶にしようとしてたのでご一緒にどうですか？」

なんとなくこれ以上いると面倒なことに巻き込まれる気がしたので早々に去ろうとしたが、三年生の女子に呼び止められ断る前に座らせられた。

「ひろ君、これを返しとくね」

ポイっと投げ渡されたのは先ほど盗られた携帯電話。何か生暖かいんですけど。

「胸で温めておきました」

組んだ腕で胸を上げて強調する楯無さん。よし、後で訴えよう。

「どうぞ」

「あ、どうも」

三年生の女子がお茶をカップに注ぎ渡してくれた。その仕草は非常に様になっていて、なんだか知り合いのメイドを思い出す。

「申し遅れました。私は布仏虚（のほとけうつほ）といいます。よろしくね」

「こちらこそよろしくお願いします。あれ？　布仏ってのほ、本音と同じ姓？」

「本音も一年一組でしたね。私は姉なの」

へえ。そういえば似てる気がする。

「ずず……。このお茶おいしいですね」

虚先輩と話していると、視線を感じた。ちらりとその方向を見ると楯無さんが俺を睨んでいる。何かしたか？

「ところでひろ君。部活に入る気はない？」

「部活？　ないですね。俺も一夏もＩＳに乗り始めてまだ半年。一分一秒でも早く使いこなせるように訓練しないといけませんから」

機嫌を直した楯無さんは「そうよねぇ」と言ってお茶を飲む。

「だけど生徒会長として生徒たちの苦情をなんとかしないといけないの。この書類の束、何かわかる？　これぜーんぶ貴方たちを自分たちの部に入れさせろっていう苦情よ」

楯無さんの机にタワーが２つある。まるで署名書のように今朝届け

られたらしい。

「いっそのこと一夏を生徒会に入れて各部にレンタルとかどうです？　それならみんなも文句は言わないだろ？」

「それは良いアイディアね。さすが孔明」

バッと広げられた扇子に『天下統一』と書かれている。いったいどういう仕掛けなんだろう？

「そろそろ帰りますね。邪魔しちゃ悪いですし」

「えー。手伝ってよー。手伝ってくれたらおねーさんがご褒美あげるから……ね？」

立ち上がった俺に楯無さんは上目遣いで懇願する。

一瞬ぐらっときたが、それこそ孔明の罠だ。

「だが断る！」

「鬼！　天然ジゴロ！」

何か不名誉なことを言われた気がしたけどかまわず逃げた。

☆

あーあ、逃げられちゃった。

やっと再会できたのに。まあ、あと一年は一緒にいられるし、私は結構諦め悪いから覚悟してね。

「ふふ、焦りは禁物ですよ。お嬢様」

「わかってる。これね。先日テスラ・ライヒ研究所に現れた無人機の報告書は」

虚から渡された書類に目を通す。

―テスラ・ライヒ研究所襲撃についての調査結果

機体の破片及びコアの回収は西本宏範が完全に消滅させたので不可能。

映像から学園を襲撃した無人機の改良型だと思われる。犯人の特定は調査中。

「これだけなの？」

あまりの少なさに呆れてしまう。たった2行の報告書なんて初めてだわ。

「すみません。あまりにも情報が少なさ過ぎて」

「無いなら仕方ないわ」

おそらくひろ君と一夏君は事件の中心になる人物たち。向こうからやって来るからその時に調べればいい。

「それで会長。生徒たちからの苦情はどうします？」

「ふふ、さっきひろ君がくれた提案を採用よ。来月の文化祭で二人ともゲットするわ」

今思いついた案を虚に説明する。

「会長も悪い人ですね」

「いえいえ、虚ちゃんほどではないわよ」

越後屋と悪代官っぽく笑う私たち。

さて、次はどんな手でひろ君にアピールしようか。

ここはやっぱり女の子らしくお弁当かな？

★

今日は厄日だ。千冬さんにはアイアンクロー＋二時間も説教され、楯無さんから精神攻撃。

「本当に何もなかったんでしょうね？」

「……あ、当たり前だろ」

「今の間はなんなのかな？」

「浮気は極刑だとクラリッサが言っていたぞ」

夕食を共にした鈴、シャル、ラウラに今尋問されていた。

『メールだぞ♪　おねーさんからメールだぞ♪』

その時、一通のメールが届き、何故か楯無さんの声が携帯電話からした。

もしかして盗られた時に！

「ねえ……ひろ、今の声誰よ」

「たしか携帯電話の着信音だよね？　僕の声も入れていいかな？」

「浮気は粛正せねばな」

こ、怖い。三人の目が笑ってない。

メールの内容を見る。

『もしかして今、修羅場？』

あんたのせいで悪化したけどな！

「「「そいつを寄越せー！！」」」

「うわあああああっ！！！」

騒ぎを聞きつけた千冬さんが来るまで専用機持ち＋この場にいた女子たちに追いかけられた。

再会は突然に（後書き）

どうも宏明です。

楯無「更識楯無よ」

遅れてすみませんでした。なかなか執筆が進まなかったんです。

楯無「次回はなるべく早く更新してね？（展開したランスを突きつける）」

い、イエスマム！

楯無「私と簪ちゃんは既にフラグ建てられてるのね」

原作のような展開ではフラグ建てられませんからね。お二人には純情路線で。

楯無「今、私に純情は似合わないって思ったでしょ？」

そんなことは……どちらかというと、エロ担当くらい

楯無「ラスティーネイル！」

ぎゃあああああっ！

楯無「うふふ、次回もよろしくね」

お、お楽しみ……ガクッ。

とある夏休みの朝（前書き）

サブタイトルは気にするな！

とある夏休みの朝

☆

私は更識簪。代々対暗部用暗部を務める家の次女として生まれ、当主である『楯無』を継ぐために小さい頃から鍛えられた。

姉さんは私よりも綺麗で、私よりも頭が良くて、私よりも強くて、私に無いものばかり持っている。

だから姉さんに憧れ、追い付きたくてもがく。

頑張れば頑張る程親やみんなに姉さんと比べられ失望される。

勝手に期待しては裏切られたと言う。それはこちらのセリフだ。私は姉さんじゃない。

いつしか私は姉さんの背中を追うのをやめた。敵わないことを思い知らされたから。

そう思ったのはいつ頃だっただろうか。

――その顔を見つめられなくなったのは。

――同じ名前を背負うことを、苦痛に感じ始めたのは。

『簪』

姉さんの幻が現れて私の名前を耳元でささやく。

耳を塞いでも、瞳を閉じても、消えてくれないその声。

『あなたは何もしなくていいの。私が全部してあげるから』

甘い、甘い、猛毒の言葉。

周りは闇に覆われている。それはまるで今の私の心を映しているみたいで、私自身にもじわりじわりと侵食してくる。

「い、や……」

『だから、あなたは――』

聞きたくない。無我夢中で走る。

漆黒の腕が逃がさないと言わんばかりに追ってきた。

『無能なままで、いなさいな』

漆黒の腕が私の腕を掴む。

「っ――――――！」

急に辺りが真っ白になって、見慣れた天井が見える。ここはＩＳ学園の一年生寮。

「っ……、はっ……、はあ……」

どうやらさっきのは夢らしい。全身汗だくで気持ち悪かった。

「う……」

涙が一滴床に落ちる。

「シャワー浴びよ」

ごしごしと目をこすり、重たく感じる体を起こしてシャワー室に向かった。

★

小学４年の夏頃だったかな。その日は知らない人たちが家に来た。いつもはじいちゃんの弟子、千冬さんや一夏、箒くらいなんだけど。

一人はおばあさん。コロコロと表情が変わるのが印象的だったな。

もう一人は女の子。青い髪に赤い瞳、どこか無理やり笑っているような気がした。

三人目も女の子。赤い瞳に青い髪が内側に向いている。人見知りなのかおばあさんの後ろから俺を見ていた。

「大きくなったわねぇ。前に会った時は赤ちゃんだったのに」

どうやらおばあさんとは前に会ったことがあるらしい。

「この子たちは私の孫よ。よろしくねひろ君」

「うん。俺は西本宏範。よろしくな」

「更識楯無です」

「……簪」

ニッコリ笑い礼儀正しく自己紹介する楯無と無表情でぼそりとつぶやく簪。

この時、俺の胸が少しドキドキ高鳴ったのは内緒だ。

★

「ん……」

急に視界が変わったと思ったら天井が見える。

「夢……か。懐かしいのを見たな」

あれは楯無さんと簪に出会った時のもの。最近昔の夢を見ることが多い。前は鈴との出会いだったし、次は一夏や千冬さんあたりかもな。

「……はぁ」

それで現実逃避をしていたが、向き合うことにする。何者かが俺のベッドに潜りこんでいるのだ。

「またラウラか？　ばれると俺の命が危ないから止めろって言ったのに――」

無造作に布団を捲ったことを俺は後悔することになる。

そこには少し外側に跳ねた青い髪の少女が薄紫色の下着にワイシャツ姿で寝ていた。

「むにゃ……ひろ君。私は教会派よ」

なんのこっちゃ……じゃなくて！　楯無さんが俺の胸に抱きついているために柔らかい胸がぷにゅぷにゅと押し付けられ、非常にヤバイ体勢だった。

「キャーーーっ!?」

★

「もう、女の子みたいな悲鳴を上げて、おねーさんの耳はデリケートなのよ？」

「自業自得でしょ。千冬さんにばれなくて助かりましたね」

寮の食堂で朝ごはんを食べる俺と楯無さん。夏休み中なので生徒は少ない。一夏は多分まだ寝てる。

「ていうか一年生寮なのに楯無さんはここで食べて大丈夫なんですか？」

「私は生徒会長だからもーまんたい。あむ……おいしい♪」

ちなみに今日の朝食はA定食だ。楯無さんはパンとベーコンエッグにサラダ。

「そういえば何で一夏とは別室のままなんです？」

今は男子が二人しか居ないし、まとまっている方が学園も監視しやすいはず。

食べ終わりコーヒーを半分飲んだ楯無さんはじとーと俺を見る。

「ひろ君はそっちの趣味があるの？　おねーさんとしてそれは見過ごせないわ」

「俺はノーマルだ」

「冗談よ、冗談。一夏君が一緒だと気持ちいいこと出来ないじゃない？」

いや、同意を求められても。っていうか何をするつもり！？

「お嬢様、やはりここにいましたか」

虚さんが現れ楯無さんの耳をぎゅううっと引っ張る。

「う、虚ちゃん痛い！？　さっきひろ君にやられて敏感なのよ！」

「はぁ……。また何かやらかしたんですか？　あなたは生徒会長なのですからそういうのは控えて下さい。品格を疑われます」

深いため息をつき、説教を始める虚さん。お嬢様とメイドじゃなくてしっかり者の姉とお調子者の妹みたいだ。

まぁ、虚さんは本当にしっかり者の姉だけど。

「それじゃあおねーさんは仕事に向かうわ。またね、ひろ君」

「生徒会室にまた来て下さいね。お待ちしてます」

楯無さんのトレーを虚さんが片付けて二人は食堂から出て行く。

「さて、今日は何をしようか？」

夏休みの宿題は無いし、ＩＳの特訓をしようにも今日はアリーナの点検らしく使用は出来ない。

★★★★★★★★

―部屋に戻るか

―学園内を散歩する

―久しぶりに翠屋に行くか

★★★★★★★★

「……ちょっとまて、今の選択肢は何！？　ギャルゲーか！」

突然の電波につっこむと（選択肢は気にするな）って電波がさらに

きた。

長いようで短い1日が始まりを告げる。

どれを選んでも大変な気がするのは気のせいか？

とある夏休みの朝（後書き）

どうも宏明です

ひろ「西本宏範だ」

簪ちゃん回だと思った方、すみませんでした。でも私は簪ちゃんも好きなので優遇されてます。

ひろ「俺と更識姉妹の出会いが書かれてたな」

設定としては約六年前に出会って、ひろは二人にフラグを立てた訳です。たった1日の出会いなのにフラグ立てるとかどんだけ鬼畜だよ（笑）

ひろ「そんな風にしたのはてめえだろうが」

そしてスパロボに必ずあるルート選択を取り入れてみました。ちゃんと全部書きますよ？　順番はバラバラですけど。

内容としては――部屋に戻るが鈴、セシリアルート。原作4巻にあったプールに行く話。

――学園内を散歩するが簪、楯無ルート。完全オリジナル話。

――久しぶりに翠屋に行くかがシャル、ラウラルートになります。なのちゃんも出るよ。

良かったらどのルートから読みたいか言って下さい。最も多かったやつから優先して書きますから。

ひろ「ハードル上げたなあ。でも何でこんな形にしたんだ？」

オリ主がヒロインたちとデートするのは既に誰かがやったからね。あえてルート分岐にしてみた。ちなみに簪、楯無ルート以外では後日に簪との絡みイベが発生した事になる。

ひろ「今後簪が出ても大丈夫になる処置か。セコい」

ま、ＩＦ話と思って気楽にいきます。

ひろ「次回もよろしく！　宇宙キター！」

何故にフォーゼ！？

執事とメイドと忍者男（前書き）

翠屋へ行くルートです。

★★★★★★★★
――久しぶりに翠屋に行くか↑
★★★★★★★★

「久しぶりに翠屋に行くか」

前に行ったのはシャルとラウラが転校してくる前日だし顔出しておこ。

予定を決めたら即行動。部屋に戻り着替えを済まして俺はモノレールに乗り込み街へと向かう。

☆

「買い物？」

「うん、そう」

ひろが部屋に戻った頃、食堂で朝食をとりながらラウラとシャルロットは話していた。

ふたりのメニューはといえば、マカロニサラダにトースト、そして

ヨーグルトである。
だが、ラウラのメニューにはもう一品だけ多い。

「あ、朝からステーキって……胃がもたれない？」

「何を言う。朝に一番食べる方が体の稼働率はいいのだぞ。科学的にも証明されている。そもそもだな、後は寝るだけの状態――つまり夕食だが、そこで一番食べるという方がおかしいのだ。消化されないエネルギーはすべて脂肪だぞ？　太りたいのなら止めはしないが」

「――。ラウラ、それ誰から聞いたの？」

「一夏からだ。ひろ（わたしのよめ）の夫として常に健康的でなくてはな」

「はぁ……。そうだろうね、ラウラっぽくなかったもん。今のしゃべり」

存外、感化されやすい性格なのかなぁ。なんてことを考えながら、シャルロットはマカロニを食べる。

「それで、買い物には何時に行くんだ？」

「あ、うん。十時くらいに出ようかなって思うんだけど、どうかな？　一時間くらい街を見て、どこか良さそうなお店でランチにしようよ」

「そうか。せっかくだし嫁も誘っていこう。うむ、私はいい亭主になるな」

「あ、あはは……。そうだね……」

★

駅から徒歩１０分で目的の喫茶店に着く。

『翠屋』は駅前に存在し、スイーツが美味しい事で有名なので女性や女子高生が多い。

カランカラ～ン。

扉を開くと小気味よい音色が響き、スイーツの甘い香りが鼻をくすぐる。

「いらっしゃいませ～ってあら？　ひろ君じゃない。久しぶりね」

開店直後なので客は少なく、栗色のロングヘアーの女性がグラスを磨いていた。

「お久しぶりです桃子さん」

彼女は『高町桃子（たかまちももこ）』翠屋の店長であり、なのちゃんの母親だ。年齢に合わない若さでたまに姉妹と間違えられてしまうらしい。

「ニュースで見たわよ。ＩＳを動かして今は女の子ばっかりの学園にいるらしいわね」

あと、人をからかうのも好きな人である。

「今でも客寄せパンダ状態ですよ。一夏と一緒じゃなければどうなってたか」

「そういえば彼も一緒だったわねぇ。元気にしてる？」

「元気ですよ。六年ぶりに再会した幼なじみによく叩かれてますけど」

カウンターに座り談笑する俺と桃子さん。桃子さんは少し厨房へ引

っ込むとシュークリームと珈琲を運んで来た。

「これを食べるのも久しぶりだな～。いただきます。はむはむ」

うむ、さすが桃子さん特製のシュークリーム。とっても美味い。俺の好物さ。

「お母さ～ん！　ちょっと味見して――」

シュークリームを堪能してる途中に厨房から栗色の髪をサイドテールにした少女『高町なのは』がひょこりと姿を現す。

「ひ、ひろ君!?　来てたの！」

やあって手を挙げて挨拶をする。前に行った時は家族旅行に行っていたので、会うのは実に半年ぶりだった。

「色々とごたごたしててね、来るのが遅れたんだ」

「そうなんだ。元気そうで良かった。それよりもお母さん、知ってたのなら教えてよ」

「うふふ、びっくりさせようと思ってね。それに一番食べさせたい人に味見してもらえるでしょ？」

なのちゃんと桃子さんが内緒話をしてる間にシュークリームをたらいあげ、珈琲を飲む。

「ひろ君。ケーキ作ったんだけど味見をお願いしてもいいかな？」

「それくらいお安い御用さ」

「じゃあすぐ持って来るね！」

パアっと顔を輝かせたなのちゃんは厨房に向かう。

「はい、どうぞ」

数秒で戻って来たなのちゃんの手にはショートケーキがあった。

「うまそうだな。いただきます」

ふんわりとしたスポンジをフォークで切り分け口に運ぶ。クリームはしつこくなく、さっぱりとしてるのでかなりうまかった。

「前よりも美味しくなってたよ。腕をあげたな」

「えへへ、やった」

素直な感想を言うとなのちゃんは小さくガッツポーズ。これで翠屋も安泰だろう。

「それでねひろ君。私来年ＩＳ学園を受験するの」

「えええええっ！？」

びっくりした。運動が苦手ななのちゃんがＩＳ学園へ行こうとするとは。まぁ、基本はイメージだから大丈夫か。

「この前適性検査を受けたらＡ判定出たんだよ」

「そりゃすごいな」

たしか蘭ちゃんもＡ判定が出たらしい。彼女も一夏を追っかけてＩＳ学園に来るし来年は豊作だな。ちなみに蘭ちゃんの事は弾が俺に

愚痴ってきた時に知った。

その後、なのちゃんに学園での生活を話して今日はアルバイトの人が全員休みらしく俺は翠屋の助っ人として昼過ぎまで働いた。

☆

「ふう、疲れたな」

「まさか最初のお店であんなに時間を使うとは思わなかったね」

『サード・サーフィス』という洋服店で服を買ったラウラとシャルロット。その時にちょっとしたハプニングがあったが、割愛する。時間は12時を過ぎたところで、ふたりはオープンテラスのカフェでランチをとっていた。

「しかしまあ、いい買い物はできたな」

「せっかくだからそのまま着てればよかったのに」

「い、いや、その、なんだ。汚れては困る」

「ふうん？　あ、もしかして、お披露目はひろに取っておきたいとか？」

「なっ！？　ち、違う！　だ、だだ、断じて違うぞ！」

顔を赤らめて取り乱すラウラの姿に、シャルロットは的を射たことを確信しながらもあえて知らないフリをする。

「そっか。変なこと言ってごめんね」

「ま、ま、まったくだ」

「ラウラ」

「な、なんだ？」

「フォークとスプーンが逆」

「っ～～～！！」

シャルロットの指摘によって気がついたラウラは、それこそ耳まで真っ赤になって口に運んでいたスプーンを離した。

「ご、午後はどうする？」

「生活雑貨を見て回ろうよ。僕は腕時計見に行きたいなぁ。日本製の時計って、ちょっと憧れだったし」

「腕時計が欲しいのか？」

「うん、せっかくだからね。ラウラはそういうのってないの？　日本製の欲しいもの」

少し考えてから、ラウラはきっぱりと言う。

「日本刀だな。嫁も小太刀を制服の中に隠し持っている」

「そ、そう……」

即答。わかっていたとはいえ、にべもない返事にシャルロットはがくっと首を落とした。ふと、シャルロットが隣のテーブルの女性に気がつく。

「どうすればいいのよ、まったく……」

年の頃は２０代後半で、かっちりとしたスーツを着ている。
何か悩み事があるらしく、注文したであろうペペロンチーノは冷め切ってしまっている。

「はぁ……」

深々と漏らすため息には、深淵の色が見て取れた。

「ねえ、ラウラ」

「お節介はほどほどにな」

今度は逆にラウラがシャルロットの言葉を先回りする。
そんな反応にびっくりするシャルロットだったが、すぐに嬉しそうな顔をして続けた。

「僕のこと、ちゃんとわかってくれてるんだね」

「た、たまたまだ。……で、どうしたいんだ？」

「うーん、とりあえず話だけでも聞いてみようかな」

そう言って、シャルロットは席を立つなり女性に声をかけた。

「あの、どうかされましたか？」

「え？　――！？」

ふたりを見るなり、ガタンッ！　とイスを倒す勢いで女性が立ち上がる。そしてそのまま、シャルロットの手を握った。

「あ、あなたたち！」

「は、はい？」

「バイトしない！？」

「「え？」」

☆

「ふたりともとっても似合うわ！」

深刻な表情をしていた女性に喫茶店の更衣室へ連れてこられた僕とラウラはお店の制服を着ていた。

「あの……なぜ僕は執事の格好なんでしょうか……？」

「だって、ほら！　似合うもの！　そこいらの男なんかより、ずっとキレイで格好いいもの！」

褒められたけど僕は苦笑いをしながらため息を漏らす。

この喫茶店は普通のとは違って、女は使用人の格好、男は執事の格好で接客をするという――いわゆるメイド（＆ａｍｐ；執事）喫茶だったのだ。

なんでもいきなりふたりが辞めて、しかも今日は本社からの視察も来るとかで今日だけアルバイトをすることになった。

（僕もメイド服がよかったなぁ……。そっちを着てるラウラ、すっごく可愛いし……）

隣のラウラはフリルが付いたメイド服を着ており、しゅっと伸びた銀髪に眼帯のおかげでミステリアスな雰囲気をさらに醸し出している。

女の僕でもその魅力を感じてしまう。

（それに比べて僕は……）

自分の着ている執事服を見下ろすと自然にため息が漏れた。

☆

（これがメイド服というものか。意外と武器を携帯しやすい構造をしているな）

シャルロットのお節介に付き合ってメイド（＆ａｍｐ；執事）喫茶でアルバイトをすることになり、メイド服を着た私は鏡でその姿を確認する。

そ、その……可愛い服、だな。クラリッサが『男はメイド服を着た女子に萌えるものです！』と力説をしていた。今度嫁に見せてやるか。

隣のシャルロットは自分の姿を見てため息を漏らす。男装経験がある為かその格好は様になっている。

「店長～、早くお店手伝って～」

フロア働くでリーダーらしき人物が声をかけてくる。私のとは違うメイド服を着た店長が身だしなみを整え出口へと向かう。

「あ、あのっ、もう一つだけ」

「ん？」

「このお店、なんていう名前なんですか？」

シャルロットが店長を呼び止めると、彼女は笑みを浮かべてスカートをつまみ上げ、大人びた容姿に似合わない可愛らしいお辞儀をした。

「お客様、@クルーズへようこそ」

★

「なんで俺は野郎と一緒に歩いているんだろうな？」

「いいじゃねえか。お互い独り身なんだしよ」

翠屋を出てすぐに俺は赤髪ロンゲバンダナシスコン野郎こと五反田弾と遭遇した。

そして現在、俺たちは@クルーズへ向かっている。
弾が「一人だと入りづらい」とかいう理由でだ。

「ところでひろ。鈴と一夏は進展したのか？」

「いや全然。むしろ最近はアタックすらしてないみたいだ。いったいどうしたんだろうな？」

「やっぱりそうなってたか」

弾は納得したのかうんうんと頷く。

「鈴の奴も大変だな。鈍感を狙うなんて」

「まったくだ。鈴は可愛いし、料理も中華だけなら申し分ないからすぐに彼氏出来そうなのになぁ」

「……」

なぜか弾が「お前にそれを言う資格はねえ！」って言いたそうな表情で俺を睨んでいる。

「どけっ！」

後ろから走ってきた三人組の男たちが弾を押し退け@クルーズに駆け込んだ。

「いって～な、一言くらい謝れよな」

ぶつかった肩を擦りながらぶつくさと文句を言う弾。俺は今の三人組の格好と背負っていたバッグからはみ出た紙幣を見て、嫌な予感を感じながらも@クルーズの扉を開けた。

☆

@クルーズは今まで以上の売り上げを叩き出していた。これも金髪の執事と銀髪メイドのおかげである。

女性客はシャルロットの奉仕に目をハートマークに輝かせ、一部の男性客はラウラの冷水のような態度と罵声に魂が打ち震える。

「あ、あのっ、追加の注文いいですか!?　できればさっきの金髪の執事さんで！」

「コーヒー下さい！　銀髪メイドさんで！」

「こっちにも美少年執事さんを一つ！」

「美少女メイドさんをぜひ！」

どう反応していいか困るシャルロットにラウラだったが、店長が間に入って上手くふたりを滞りなくテーブルに向かうように声をかけて調整していった。

そこはさすが本業、店長の指示は的確で、いつの間にか通常の五割増しの客数を見事にさばいていく。

そんな混雑が二時間ほど続いて、さすがにシャルロットとラウラにも精神的な疲れが見え始めた頃、その事件は起こった。

「全員、動くんじゃねえ！」

ドアを破らんばかりの勢いで雪崩れ込んできた男が三人、怒号を発する。

一瞬、何が起こったのか理解できなかった店内の全員だったが、次の瞬間に発せられた銃声で絹を裂くような悲鳴が上がった。

「きゃあああっ！？」

「騒ぐんじゃねえ！　静かにしろ！」

男たちの格好といえばジャンパーにジーパン、そして顔には覆面、手には銃。背中のバッグからは何枚か紙幣が飛び出していた。

見るからに、強盗である。それもおそらくは銀行を襲撃した後の逃走犯。

まるで二十世紀のマンガのような格好に全員がぽかんとしたが、そこはそれ。銃を持った凶悪犯なのだ。言うことを聞かないわけにはいかない。

（一人はショットガン、一人はサブマシンガン、そしてリーダーがハンドガン。他にも予備で何か持っている可能性もあるけど、とりあえずは――）

目立たないようにしゃがみつつ、シャルロットは現状を冷静に分析していく。もう一度店内の状況を確認しようと視線を動かして、そこでぎょっとした。

カランカラ～ン。

突然店の扉が開いたのだ。

何も知らない客が銃に撃たれる様を思い浮かべてしまったシャルロットはＩＳを起動させて盾になろうとしたが、動きを止めてしまう。

何故なら――

グレーのTシャツにアーミーパンツをはき、編み上げの軍用ブーツを履いた体格からして男がいたからだ。

「な……なんだ、てめえは!?」

強盗のリーダーから出た台詞が『誰だ』ではなく『なんだ』なのには事情があった。謎の男は、縁日の屋台でよく売っているマンガのキャラクターを模したセルロイド製のお面を被っていたからである。

「山越え谷越えやってきた……嬉しい味方、忍者でござるよ。ニンニン！」

ドングリ眼にへの字口、頬に渦巻きのある無表情なお面の下で男は不敵に笑った。

「ただし貴様らにとっては嬉しくないだろうがな……でござるよ。ニンニン」

「……ブ、ブッ殺せ！」

手下の一人がサブマシンガンを撃とうと構えた瞬間、忍者男の腕がブオンッと高速に動き何かを手下へ放つ。

「ぎいやあぁぁぁっ！？」

何かとは鋼鉄製の針だった。針は手下の手の甲に突き刺さり、痛みでサブマシンガンを落とす。

「ひぎっ！？」

痛みに耐えられず膝を着いた手下に忍者男は容赦なく膝蹴りを顔に打ち込んで意識を刈り取る。

「あ、兄貴っ！？　こ、こいつッ――」

「うろたえるな！　ガキ一人、すぐに片付けて――」

「――一人じゃないんだよねぇ、残念ながら」

ハンドガンを構えたリーダーの、その背後に迫っていたのは見目麗しい執事服の美少年――もとい、美少女のシャルロットだった。

その言葉にはやれやれといったため息が含まれていたが、どうもそ

れは強盗事件に巻き込まれたことにではなく、忍者男の正体に声で気付き、なおかつそれをサポートしなければいけないということに対してのものらしい。

「なっ！？　このっ――」

「あ、執事服でよかったかな。うん。思いっきり足上げても平気だし」

そんなことを口にしながら、シャルロットはリーダーの拳銃を手ごと蹴り上げる。

そしてそのままの勢いでショットガンの男の肩に、今度はかかと落としを叩き込んで無力化する。ゴキッという嫌な音がして、ショットガンを構えていた腕はだらりと垂れた。

「あとは拙者に任せるでござるよ。ニンニン」

忍者男はショットガンを持っていた手下を掴み空中に跳んだ。

「忍法、イズナ落とし！」

そして手下を上下逆さまに変えて忍者男は床に叩きつけた。いわゆるパイルドライバーである。

「ちょっ、やり過ぎじゃないかな!?」

一応痙攣してるので生きてると思うが、お人好しシャルロットは手下を気遣う。

「生きてれば問題はないでござるよ。ニンニン」

まったく表情を変えず（お面だし）涼しげに言った忍者男に店内の人間たちは「悪魔だ」と以心伝心した。

「ふっ、ふざけるなぁっ！　お、俺がっ、こんなガキどもにっ……！」

最後に残ったリーダーの男が蹴られて折れた指とは逆の左手に、予測通り予備のハンドガンを握って立ち上がる。

その引き金が引かれる刹那、ラウラはちょうど持っていた@クルーズの特製トレーをフリスビーのように投擲し、ハンドガンを弾き飛ばす。

「遅い。死ね」

そして弾丸のように接近したラウラはブーツの爪先をリーダーの額

に叩き込み、男は糸の切れた人形のように倒れた。

「制圧完了」

「やるではないか、銀髪のおなご殿」

「ふん、貴様もな……ＮＩＮＪＡ」

忍者男と銀髪眼帯メイドが不敵に笑い合う。何、このカオス。

――っていうか『ひろ』だよね？

と、言おうしたシャルロットは押し黙る。

しばらくの間、しーんと静まりかえる店内。ジェットコースター展開に呆然としていた店内の『民間人』ことスタッフは、のろのろと頭を上げ始める。

「お、終わった……？」

「助かったの、私たち……」

「い、一体何が……」

危機を脱したことはわかるものの、まだ状況を正しく把握できていない人々は、何度もまばたきを繰り返して忍者男とラウラとシャルロットの姿を呆然と眺めている。

同じくまだはっきりとした意識が戻らない店長は、『忍者のお面をつけた男と銀髪のメイドと金髪の美少年（女）執事が銀行強盗を撃退しました』って本社に報告したら信じるかしら……？　と変にずれたことを考えていた。

「お、俺たち助かったんだ！」

「やった！　あ、ありがとう！　メイドさんに執事さん、そして忍者さん。ありがとう！」

助かった実感が今になってはっきりと自覚できたのか、突然店内はわっと騒がしくなる。

ようやく日本の警察が到着したのか警官隊が詰めかけてきた。

「後は警察に任せて拙者はおいとましよう」

「ラウラ、僕たちも代表候補生で専用機持ちだし公になるのは避け

ないと」

「そうだな。このあたりで失敬するとしよう」

案の定、警官隊の後ろには交通規制を乗り越えたマスコミ関係者が大勢見えた。

――しかし、事態は再び一変する。

「捕まってムショ暮らしになるくらいなら、いっそ全部吹き飛ばしてやらあっ！」

完全に意識を失っていたと思っていたリーダーは、決まりが浅かったのかそう叫んで立ち上がるなり、革ジャンを左右に広げる。

そこにあったのは、軽く４０平方メートルは吹き飛ばせそうな、プラスチック爆弾の腹巻きだった。起爆装置は、もちろん手の中にある。

すぐさま店内は先刻以上のパニックに飲み込まれた。しかし――

「忍法、つむじ風！」

神風の如く駆けた忍者男は一瞬で男から起爆装置を奪い、足下にあった拳銃をシャルロットとラウラに向けて蹴る。

受け取ったふたりは男に銃を向け――

ダダダダンッ！

「「チェック・メイト」」

高速五連射×２の弾丸は、的確に爆薬の信管と導線『だけ』を撃ちぬいていた。

「まだやる？」

「次はその腕を吹き飛ばす」

「田舎の母上殿が泣いているでござるよ。ニンニン」

ジャキッ！　グシャ！　と二丁の拳銃を突きつけられながら起爆装置が握り潰され、さっきまでの威厳も高圧もなく男は震える声で謝った。

「す、すみっ、すみませんっ！　つい出来心でっ！　もうしませんからい、命ばかりはお助けをっ……」

そんな敗北宣言を最後まで聞くことなくラウラとシャルロットと忍者男は颯爽と立ち去った。

数日後、ネット上で『忍者はまだ生きていた!?』と話題でもちきりになったそうな。

★

コンコン。

「はーい、どうぞ～」

シャルとラウラの部屋に来た俺が中に入ると、猫の着ぐるみパジャマを着たふたりは石のように固まる。

その顔は真っ赤に染まり、やっぱり女の子の部屋に来るのはまずかったかなと思ってしまう。

「今日は電話に出れなくてごめんな。電源切ったままになってたんだよ。夕方にかけ直しても繋がらなかったし、それで様子を見に来たんだ」

「そ、そうか。うむ。嫁として殊勝な心がけだな、褒めてやろう」

シャルが「あ、え、う……」としどろもどろしてる間にラウラはシャルの腕から抜け出し、腕組み仁王立ちでそう言う。

残念ながらねこみみ・にくきゅうの黒猫パジャマ姿なので凄みよりもむしろ可愛らしさでいっぱいだ。

シャルも白猫パジャマを着ており、カバンから携帯電話を取り出している姿はなんともシュールな光景だった。

「ふたりとも可愛いな」

「「か、可愛い……」」

俺の呟きにラウラとシャルの声がぴったりと重なり、ふたりは頬を赤らめながらちょこんとベッドに座る。

「あ、そうそう、今日知り合いの喫茶店でクッキーもらったから一緒に食べようぜ」

クッキーの入った袋を見せながら俺は部屋の簡易キッチンへと向かう。

「あ、いいよ！　僕が用意するから、ひろは座っててよ」

「ん？　いや、その手じゃ無理だろ」

立ち上がったシャルは肉球ハンドだったことに気付いたようでまた座る。

「これ、ココアクッキーだ。ちょうど子猫が二匹いるし、ホットミルクにするか？」

「え、あ、うん」

「ま、任せる」

自分で言っておいてなんだが、キザったらしくてなんか照れくさいな。

「あ、あのさ、ひろ。この服、可愛い？」

シャルは落ち着かなそうに指をいじりながらきいてきた。

「可愛いと思うぞ。黒猫と白猫ってチョイスもいいし、ふたりとも似合ってる」

「そ、そっかぁ。えへへ、似合ってる、かぁ。うふふ」

「お、お前がそう言うなら……わ、悪くはないな。時々は着ることにしよう」

ふたりは照れくさそうに喜んでいる間にホットミルクは完成。クッキーと一緒に持っていく。

「嫁よ、この手では食べにくいからお、お前が食べさせてくれないか？」

い、いきなり何を言ってくるんだ！　さすがの俺でも『はい、あーん』は恥ずかしいぞ。

「ラウラ、抜け駆けはずるいよ！　僕にも食べさせて、ひろ」

シャルまでぇ！？

「あ、あの～お二人さん？　そういうのは……」

「「だめ？」」

子猫ルック＋上目遣いのコンボで俺はふたりに『はい、あーん』を

することになった。

これを何ともなく出来る一夏は凄いと思う。

執事とメイドと忍者男（後書き）

どうも宏明です

弾「五反田弾だぜ！」

また時間がかかってすみません。最近リアルが大変で。

弾「それよりさ、あの忍者男ってひろだよな？」

何を言っているんだい？　彼は無敵のヒーロー忍者だよ。断じてひろというヘタレ旗野郎ではない。

弾「そ、そう」

お面男の元ネタがわかる人は相当の通だね。

弾「もう完結してるけど面白いよなー」

次回は散策ルートの予定です。ひろまじもげろ。

弾「次回も読んでくれ。リア充爆発しろ！」

ひろ「お前ら俺に恨みでもあるのか！？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7245q/

武神装甲インフィニット・ストラトス

2011年11月4日13時21分発行